

# 砂子田遺跡

## 第2・3次発掘調査報告書

2003

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

すな ご だ  
砂 子 田 遺 跡

第2・3次発掘調査報告書

平成15年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、砂子田遺跡の調査結果をまとめたものです。

砂子田遺跡は、天童市の南部の大字高巒にあります。立谷川扇状地の扇端部にあたるこの地は、水量も豊富で、水田の広がる農業地帯です。

この度、日本道路公団の東北中央自動車道相馬～尾花沢線工事にともない、高速道路予定地にかかる砂子田遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、立谷川の旧河道と思われる長大な河川跡沿いに縄文時代後期中葉から後葉の竪穴住居跡7棟、土器捨て場が3箇所、埋設構造が23基と、縄文時代最終末期の土器集中域と土器捨て場が1箇所見つかっています。山形県内では発掘事例の少ない時代であり、出土遺物の一括性および数量から見て貴重な資料といえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成15年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木 村 宰

## 例　　言

1 本書は、日本道路公団東北中央自動車道相馬～尾花沢線にかかる「砂子田遺跡」の第2次・第3次発掘調査報告書である。

2 調査は日本道路公団の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺　　跡　名	砂子田遺跡　遺跡番号　平成9年度登録
所　　在　地	山形県天童市大字高崎字砂子田
調　　査　主　体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受　　託　期　間	平成10年4月1日～平成11年3月31日
現　　地　調　査	平成10年8月18日～平成10年12月9日
調　　査　担　当　者	調査第一課長　佐藤　庄一（当時） 主任調査研究員　佐藤　正俊（当時） 調査研究員　森谷　昌央（調査主任） 調査研究員　押切　智紀 調　　査　員　高柳　健一 調　　査　員　稻村　圭一
受　　託　期　間	平成11年4月1日～平成12年3月1日
現　　地　調　査	平成11年4月19日～平成11年7月16日
調　　査　担　当　者	調査第三課長　佐藤　正俊（当時） 調査研究員　森谷　昌央（調査主任） 調　　査　員　稻村　圭一 調　　査　員　藤野　周助
整　理　期　間	平成12年4月1日～平成15年3月31日
整　理　担　当　者	調査第三課長　阿部　明彦 調　　査　員　森谷　昌央 調　　査　員　佐竹　圭一 調　　査　員　黒坂　広美

4 発掘調査および本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県教育庁文化財課、天童市教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関に協力をいただいた。また報告書の作成に当たり、以下の方々に指導・助言を得た。記して謝辞する次第である。安孫子昭二、荒川隆、石川日出志、稲野裕介、大塚達朗、金子昭彦、木下哲夫、工藤竹久、小林克、設楽博巳、佐藤由紀夫、須藤隆、鈴木正博、関根達人、高橋龍三郎、滝沢規朗、田中耕作、中沢道彦、中村五郎、武藤康弘、渡邊裕之、渡邊朋和（五十音順・敬称略）

5 本書の作成・執筆は、森谷昌央、黒坂弘美が担当した。編集は水戸部秀樹、須賀井新人が担当し、全体については、阿部明彦が監修した。

6 委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測（株式会社パスク）・理化学資料分析（株式会社古環境研究所）

石器実測・観察表作成・石器使用痕分析（株式会社アルカ）

7 出土遺物、調査記録類等は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

S T…竪穴住居跡 S K…土壤 S X…性格不明遺構 E P…遺構内ピット

E K…遺構内土壤 E L…遺構内炉跡 R P…登録土器・土製品 R Q…登録石器・石製品

P…土器 S…石

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。整理作業中に新に遺構と認識されたものについては、新に遺構番号を付した。

3 報告書執筆基準は下記のとおりである。

(1) 遺構概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は、N-15°-Eを測る。

(3) 遺構実測図は基本的には1/40・1/60・1/80の縮尺で採録したが、それ以外の縮尺については各々スケールを付した。なお、実測図中の●は土器・土製品の出土地点を表す。△は礫・石器・石製品の出土地点を表す。

(4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/3で示した。それ以外の縮尺で掲載したものは、各々縮尺比を付した。

(5) 遺物出土状況図中の遺物実測図・拓影図は任意の縮尺とした。

(6) 遺物図版については、任意の縮尺で採録した。

(7) 遺物番号は、縄文時代中期・後期の土器・晩期の土器・弥生時代の土器・土製品・石器について、それぞれ1から番号を付した。砂子田遺跡の出土状況の特性から敢えて別個に番号を付した。但し、複数の時期の遺物が同一地点から出土する場合もあり、その場合には縄文時代中期の土器はI、縄文時代後期の土器はII、縄文土器晩期の土器はIII、弥生時代の土器はIVを遺物番号の前に付した。石器・土製品については時期区分せずそのまま番号を付したが、混乱はないと判断した。

(8) 遺物実測図中の番号右側の( )について、S T \*\*は出土した遺構を示し、出土遺構が判明しているが具体的な地点の不明なものは遺構番号とグリッド番号を付した。また出土遺構の不明なものについてはグリッドを記載している。出土地点の右側には掲載されている遺物ドット図の番号を「\*\*図」と表記した。また晩期の土器で赤彩されるものは「赤」、胎土に海綿骨針を含むものに「海」を記した。

(9) 遺構覆土の色調の記載については、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

# 目 次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 遺跡の概要	7
1 遺跡の層序	7
2 遺構・遺物の分布	7
IV 検出された遺構	11
V 出土した遺物	63
1 土器	63
1 砂子田 1 群土器（縄文時代中期）	63
2 砂子田 2 群土器（縄文時代後期）	66
3 砂子田 3 群土器（縄文時代晚期）	178
4 砂子田 4 群土器（弥生時代）	248
2 土製品	250
3 石器・石製品	253
VI まとめ	274
報告書抄録	275

## 付編

### 表

第1表 砂子田 2 群土器深鉢分類表	69
第2表 砂子田 3 群土器分類表	182
第3表 石器・石製品観察表（1）	270
第4表 石器・石製品観察表（2）	271
第5表 石器・石製品観察表（3）	272
第6表 石器・石製品観察表（4）	273

## 挿 図

第1図 遺跡概要図	2	第35図 B区東遺物出土状況	40
第2図 遺跡位置図	4	第36図 G7土器捨場遺物出土状況	41
第3図 地形概要図	5	第37図 A区北遺物包含層遺物出土状況	42
第4図 グリッド概要図	7	第38図 A区北土器捨場遺物出土状況(1)	44
第5図 基本層序	9	第39図 A区北土器捨場遺物出土状況(2)	45
第6図 遺構配置図	9	第40図 A区北土器捨場遺物出土状況(3)	46
第7図 S T 3 遺構平面図	12	第41図 A区C12グリッド遺物出土状況	47
第8図 S T 3 遺物出土状況	13	第42図 A区北縄文後期土器出土状況	48
第9図 S T 85 遺物出土状況	13	第43図 A区南西包含層遺物出土状況	49
第10図 S T 85 遺構平面図	14	第44図 A区南西包含層土層断面図	50
第11図 S T 86・S X 676 遺構平面図	15	第45図 B区H f グリッド遺物出土状況	51
第12図 S T 86・S X 676 遺物出土状況	16	第46図 B区F c グリッド遺物出土状況	51
第13図 S T 87・S K 100 遺構平面図	17	第47図 S B 1420 遺構平面図	52
第14図 S T 87・S K 100 遺物出土状況	18	第48図 S P 142・173 遺構平面図	52
第15図 S T 731 遺構平面図	19	第49図 S K 101・244・184 遺構平面図	54
第16図 S T 1359 遺構平面図	20	第50図 S K 遺構平面図	55
第17図 S T 1276 遺構平面図	21	第51図 埋設遺構平面図(1)	56
第18図 S T 1276 遺物出土状況	21	第52図 埋設遺構平面図(2)	57
第19図 S X 1379 遺構平面図	22	第53図 旧河川跡平面図	59
第20図 S X 1380 遺構平面図	24	第54図 B区西旧河川跡遺構平面図	60
第21図 S X 1380 遺物出土状況	25	第55図 B区西旧河川跡遺物出土状況(1)	61
第22図 S X 1386・1392 遺構平面図	26	第56図 B区西旧河川跡遺物出土状況(2)	62
第23図 S X 1386・1392 遺物出土状況	27	第57図 中期土器実測図(1)	64
第24図 S X 1400・1403 遺構平面図	28	第58図 中期土器実測図(2)	65
第25図 S X 1400・1403 遺物出土状況	29	第59図 2群土器深鉢口縁形態模式図	67
第26図 S X 1405 遺構平面図	30	第60図 2群土器深鉢部位名称模式図	67
第27図 S X 1406 遺構平面図	31	第61図 後期土器分類図	70
第28図 S X 1406 遺物出土状況	32	第62図 後期土器編年試案	101
第29図 S X 1418 遺構平面図	33	第63図 後期土器実測図(1)	102
第30図 S X 1423 遺構平面図	34	第64図 後期土器実測図(2)	103
第31図 S X 1423 遺物出土状況	35	第65図 後期土器実測図(3)	104
第32図 B区D d グリッド平面図	37	第66図 後期土器実測図(4)	105
第33図 B区D d グリッド遺物出土状況	38	第67図 後期土器実測図(5)	106
第34図 B区L c グリッド平面図	39	第68図 後期土器実測図(6)	107

第69図	後期土器実測図(7).....	108	第105図	後期土器実測図(43) .....	144
第70図	後期土器実測図(8).....	109	第106図	後期土器実測図(44) .....	145
第71図	後期土器実測図(9).....	110	第107図	後期土器実測図(45) .....	146
第72図	後期土器実測図(10).....	111	第108図	後期土器実測図(46) .....	147
第73図	後期土器実測図(11).....	112	第109図	後期土器実測図(47) .....	148
第74図	後期土器実測図(12).....	113	第110図	後期土器実測図(48) .....	149
第75図	後期土器実測図(13).....	114	第111図	後期土器実測図(49) .....	150
第76図	後期土器実測図(14).....	115	第112図	後期土器実測図(50) .....	151
第77図	後期土器実測図(15).....	116	第113図	後期土器実測図(51) .....	152
第78図	後期土器実測図(16).....	117	第114図	後期土器実測図(52) .....	153
第79図	後期土器実測図(17).....	118	第115図	後期土器実測図(53) .....	154
第80図	後期土器実測図(18).....	119	第116図	後期土器実測図(54) .....	155
第81図	後期土器実測図(19).....	120	第117図	後期土器実測図(55) .....	156
第82図	後期土器実測図(20).....	121	第118図	後期土器実測図(56) .....	157
第83図	後期土器実測図(21).....	122	第119図	後期土器実測図(57) .....	158
第84図	後期土器実測図(22).....	123	第120図	後期土器実測図(58) .....	159
第85図	後期土器実測図(23).....	124	第121図	後期土器実測図(59) .....	160
第86図	後期土器実測図(24).....	125	第122図	後期土器実測図(60) .....	161
第87図	後期土器実測図(25).....	126	第123図	後期土器実測図(61) .....	162
第88図	後期土器実測図(26).....	127	第124図	後期土器実測図(62) .....	163
第89図	後期土器実測図(27).....	128	第125図	後期土器実測図(63) .....	164
第90図	後期土器実測図(28).....	129	第126図	後期土器実測図(64) .....	165
第91図	後期土器実測図(29).....	130	第127図	後期土器実測図(65) .....	166
第92図	後期土器実測図(30).....	131	第128図	後期土器実測図(66) .....	167
第93図	後期土器実測図(31).....	132	第129図	後期土器実測図(67) .....	168
第94図	後期土器実測図(32).....	133	第130図	後期土器実測図(68) .....	169
第95図	後期土器実測図(33).....	134	第131図	後期土器実測図(69) .....	170
第96図	後期土器実測図(34).....	135	第132図	後期土器実測図(70) .....	171
第97図	後期土器実測図(35).....	136	第133図	後期土器実測図(71) .....	172
第98図	後期土器実測図(36).....	137	第134図	後期土器実測図(72) .....	173
第99図	後期土器実測図(37).....	138	第135図	後期土器実測図(73) .....	174
第100図	後期土器実測図(38) .....	139	第136図	後期土器実測図(74) .....	175
第101図	後期土器実測図(39) .....	140	第137図	後期土器実測図(75) .....	176
第102図	後期土器実測図(40) .....	141	第138図	後期土器実測図(76) .....	177
第103図	後期土器実測図(41) .....	142	第139図	3群土器文様模式図 .....	179
第104図	後期土器実測図(42) .....	143	第140図	3群土器口縁形態模式図 .....	180

第141図	晩期土器分類図	183	第171図	晩期土器実測図(30)	236
第142図	晩期土器実測図(1)	207	第172図	晩期土器実測図(31)	237
第143図	晩期土器実測図(2)	208	第173図	晩期土器実測図(32)	238
第144図	晩期土器実測図(3)	209	第174図	晩期土器実測図(33)	239
第145図	晩期土器実測図(4)	210	第175図	晩期土器実測図(34)	240
第146図	晩期土器実測図(5)	211	第176図	晩期土器実測図(35)	241
第147図	晩期土器実測図(6)	212	第177図	晩期土器実測図(36)	242
第148図	晩期土器実測図(7)	213	第178図	晩期土器実測図(37)	243
第149図	晩期土器実測図(8)	214	第179図	晩期土器実測図(38)	244
第150図	晩期土器実測図(9)	215	第180図	晩期土器実測図(39)	245
第151図	晩期土器実測図(10)	216	第181図	晩期土器実測図(40)	246
第152図	晩期土器実測図(11)	217	第182図	晩期土器実測図(41)	247
第153図	晩期土器実測図(12)	218	第183図	弥生土器実測図	249
第154図	晩期土器実測図(13)	219	第184図	土製品実測図(1)	251
第155図	晩期土器実測図(14)	220	第185図	土製品実測図(2)	252
第156図	晩期土器実測図(15)	221	第186図	石器実測図(1)	255
第157図	晩期土器実測図(16)	222	第187図	石器実測図(2)	256
第158図	晩期土器実測図(17)	223	第188図	石器実測図(3)	257
第159図	晩期土器実測図(18)	224	第189図	石器実測図(4)	258
第160図	晩期土器実測図(19)	225	第190図	石器実測図(5)	259
第161図	晩期土器実測図(20)	226	第191図	石器実測図(6)	260
第162図	晩期土器実測図(21)	227	第192図	石器実測図(7)	261
第163図	晩期土器実測図(22)	228	第193図	石器実測図(8)	262
第164図	晩期土器実測図(23)	229	第194図	石器実測図(9)	263
第165図	晩期土器実測図(24)	230	第195図	石器実測図(10)	264
第166図	晩期土器実測図(25)	231	第196図	石器実測図(11)	265
第167図	晩期土器実測図(26)	232	第197図	石製品実測図(1)	266
第168図	晩期土器実測図(27)	233	第198図	石製品実測図(2)	267
第169図	晩期土器実測図(28)	234	第199図	石製品実測図(3)	268
第170図	晩期土器実測図(29)	235	第200図	石製品実測図(4)	269

## 図 版

- |                                |               |
|--------------------------------|---------------|
| 図版 1 遺跡全景                      | 図版32 繩文土器(17) |
| 図版 2 A区、中洲状微高地全景               | 図版33 繩文土器(18) |
| 図版 3 遺跡空中写真(1)                 | 図版34 繩文土器(19) |
| 図版 4 遺跡空中写真(2)                 | 図版35 繩文土器(20) |
| 図版 5 遺構(1)、竪穴住居                | 図版36 繩文土器(21) |
| 図版 6 遺構(2)、竪穴住居他               | 図版37 繩文土器(22) |
| 図版 7 遺構(3)、遺物包含層、土器捨て場<br>(晚期) | 図版38 繩文土器(23) |
| 図版 8 遺構(4)、遺物包含層               | 図版39 繩文土器(24) |
| 図版 9 遺構(5)、遺物包含層               | 図版40 繩文土器(25) |
| 図版10 遺構(6)、遺物包含層、B区東           | 図版41 繩文土器(26) |
| 図版11 遺構(7)、土壤                  | 図版42 繩文土器(27) |
| 図版12 遺構(8)、B区S G他              | 図版43 繩文土器(28) |
| 図版13 遺構(9)、埋設遺構                | 図版44 繩文土器(29) |
| 図版14 遺構(10)、埋設遺構               | 図版45 繩文土器(30) |
| 図版15 遺構(11)、埋設遺構他              | 図版46 繩文土器(31) |
| 図版16 繩文土器(1)                   | 図版47 繩文土器(32) |
| 図版17 繩文土器(2)                   | 図版48 繩文土器(33) |
| 図版18 繩文土器(3)                   | 図版49 繩文土器(34) |
| 図版19 繩文土器(4)                   | 図版50 繩文土器(35) |
| 図版20 繩文土器(5)                   | 図版51 繩文土器(36) |
| 図版21 繩文土器(6)                   | 図版52 石器(1)    |
| 図版22 繩文土器(7)                   | 図版53 石器(2)    |
| 図版23 繩文土器(8)                   | 図版54 石器(3)    |
| 図版24 繩文土器(9)                   | 図版55 石器(4)    |
| 図版25 繩文土器(10)                  | 図版56 石器(5)    |
| 図版26 繩文土器(11)                  | 図版57 石器(6)    |
| 図版27 繩文土器(12)                  | 図版58 石器(7)    |
| 図版28 繩文土器(13)                  | 図版59 石器(8)    |
| 図版29 繩文土器(14)                  | 図版60 石器(9)    |
| 図版30 繩文土器(15)                  | 図版61 石器(10)   |
| 図版31 繩文土器(16)                  | 図版62 石器(11)   |

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経緯

この度の砂子田遺跡の発掘は、日本道路公団による東北中央自動車道相馬～尾花沢線（上山～東根間）の建設事業に伴うものである。

山形県教育委員会は、この事業に伴って平成2年度から計画路線周辺の遺跡の分布調査を行ってきた。その調査結果に基づいて埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団と協議を行い、（財）山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて、平成9年度に予備調査（第1次調査）を実施した。これにより当該地区が縄文時代の集落跡であることが確認されました。平成10年度は遺跡範囲のうち4,400m<sup>2</sup>を、平成11年度は3,000m<sup>2</sup>をそれぞれ調査し、記録保存を行った。

### 2 調査の経過

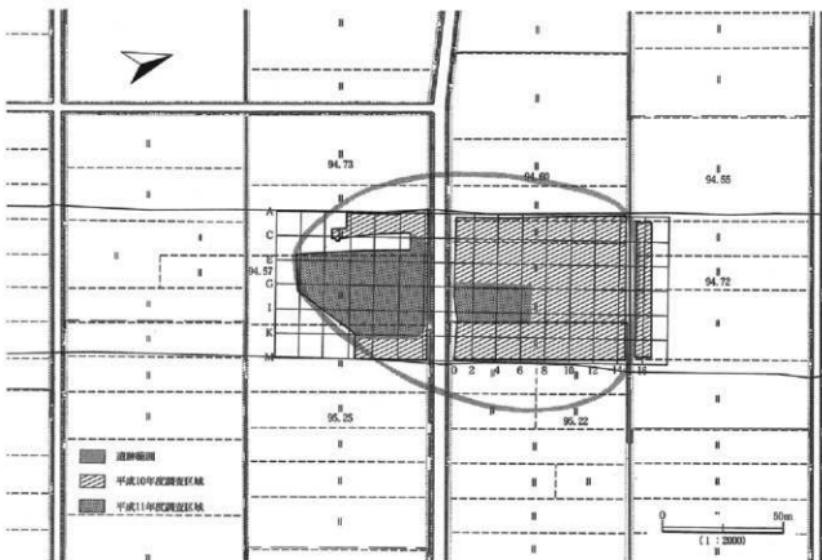
発掘調査は、平成10年度は平成10年8月18日から12月9日までの実働日数102日間、平成11年度は平成11年4月9日から7月16日までの実働日数65日間で行った。調査面積は平成10年度が4,400m<sup>2</sup>、平成11年度が3,000m<sup>2</sup>の合計7,400m<sup>2</sup>である。

遺跡は、当初3,900m<sup>2</sup>が対象面積で、発掘調査は8月からの1ヶ月間で終了し、平成10年度限りの予定であった。8月18日に機材を搬入し、現地事務所の開設を行った。さらに布掘りにより調査区を設定した後、重機による表土除去を行った。表土除去時には既に黒色の包含層に多量の遺物が含まれていることが確認された。また表土除去後の遺構検出においては竪穴住居跡が当初予想より多く存在することが明らかになった。さらに包含層を追っていくと、旧河道に縄文時代晩期の土器捨て場が見つかり、同様に調査区南西にも縄文時代後期の土器捨て場もしくは墓域と考えられる地点が見つかった。これにより調査区自体の範囲にも疑いが持たれ、10月上旬に調査区の南側にあたる市道高擧中野目線を挟む地点をさらに予備的に精査した。この結果、遺跡範囲が南に50m程伸びることが明らかになり、発掘面積の増加と調査日数の延期が不可避になった。これ以後、市道高擧中野目線の北側をA区、南側をB区と呼称することとした。これを受けて日本道路公団と協議を行った結果、A区の本線部分については、平成10年度の調査を打ち切り、次年度に繰り越すこと。さらに市道南側のB区については本線の東西両側に作られる側道部分を優先して平成10年度に終了させることが決定された。これを受けて、10月末に再び重機を導入してB区の側道部分の表土除去を行った。この結果旧河道にもう1箇所縄文後期の土器捨て場が確認された。その後A区の精査・記録作業を11月中旬まで終了し、B区についても遺構の検出・精査、記録作業を行い、12月9日に最終的な作業を終了した。なお平成10年度は、11月25日に現地説明会を行い、関係機関並びに地元の方々が多数参加された。また11月26日には空中撮影を行っている。

平成11年度は、前年度に工期の都合から一時中止にしたA区の一部と、B区の本線部分の合計3,000m<sup>2</sup>を対象とした。当初4月19日に現場開設の予定であったが、プレハブ敷地の移動等

## 調査の経緯

により実際には4月26日からの開始となった。調査区の設定を行った後、重機を導入して表土を除去した。その後遺構確認面まで掘り下げた部分は面整理して遺構の検出を行った。遺物包含層はグリッドに沿ってトレンチを入れ、土層を確認した後層毎に遺物の出土位置、出土レベルを記録した。また検出された遺構については掘り下げ、記録、写真撮影などを行った。7月9日には現地説明会を行い、さらに7月14日には遺構の空中撮影を行い、最終的な記録作業を行った。7月16日に機材を撤収し、現地調査を終了した。



第1図 遺構概要図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

砂子田遺跡は、天童市街から南西約4kmの天童市高擣に位置し、標高は94~95mを測る。ほぼ天童市の南端に位置し、山形市との境界に位置する。天童市と山形市の間には、出羽山脈の面白山に源を發して西流する立谷川が存し、砂子田遺跡はこの立谷川の扇状地の扇端部に立地している。周辺では高擣の集落の西に自然堤防が見て取れ、ほ場整備の行われる前の昭和25年の空中写真には黒い帯状の筋が何本も見て取れる。このことから高擣の周辺には暴れ川である立谷川が何度も流路を変えながら西流していたことが分かる。また立谷川がしばしば氾濫を繰り返していたのは近世の古文書にも見え、洪水の記録が何回か現われる。砂子田遺跡の調査区内にも長大な河川跡が何回か流路を変えて走っており、この川跡も立谷川の本流もしくは支流の可能性が考えられる。また、立谷川は豊富な水量を周辺の地域にもたらしており、立谷川扇状地の扇端部に位置する高擣の周辺は水田地帯が広がっている。昔から水田には適した地帯だったと考えられる。

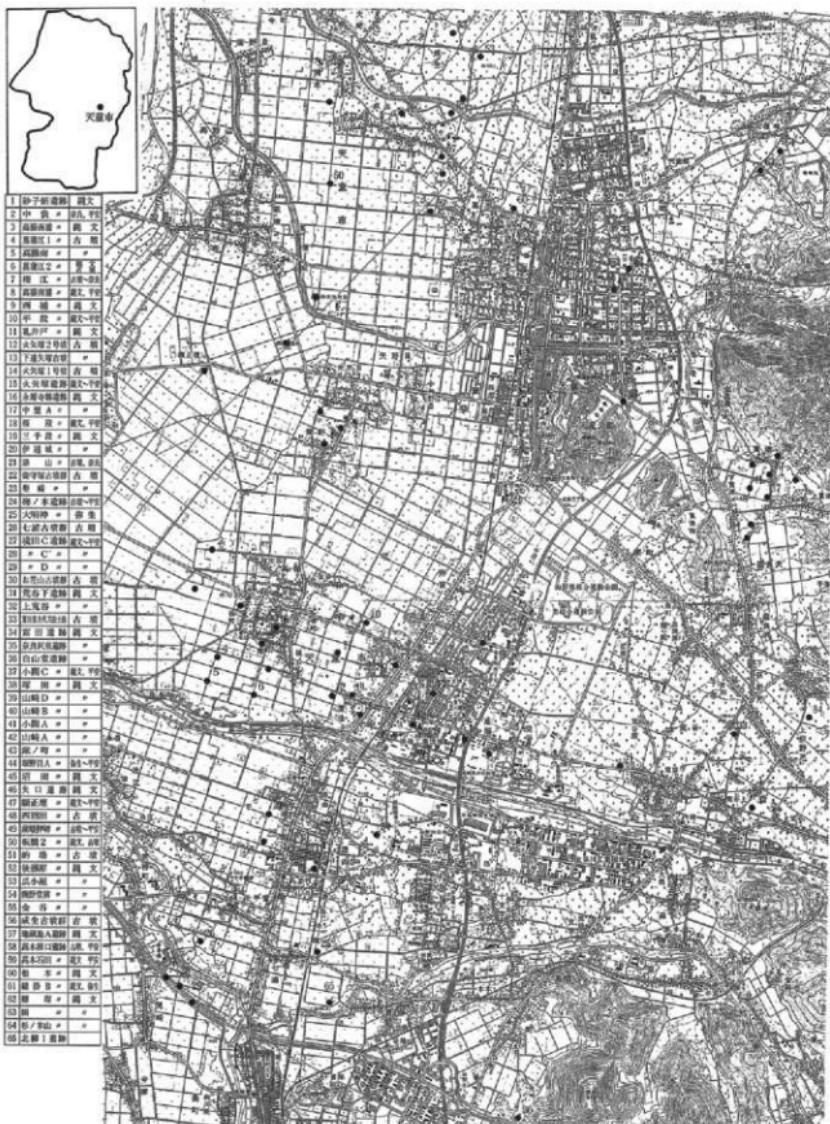
「砂子田」という小字名は、「砂田」・「砂沢」などの地名と同様、河川とそれによって運搬される砂礫と関係があると思われる。事実、砂子田遺跡を東西に横切る川跡には最深部で1mを超える砂礫層が見て取れ、昔から田を掘り返すと砂が出てくる、そのような意味で使われたことが推測される。砂子田遺跡の河川跡は、土層の堆積状況から、水の流れていた時期と水の流れが一時的に止まり湿地化した時期があることが分かっている。縄文時代にはこうした水没と湿地化を繰り返しながら次第に埋没して行き、晩期以降にはほぼ砂礫で埋め尽くされ、現在のような地形が成立したと考えられる。

### 2 歴史的環境

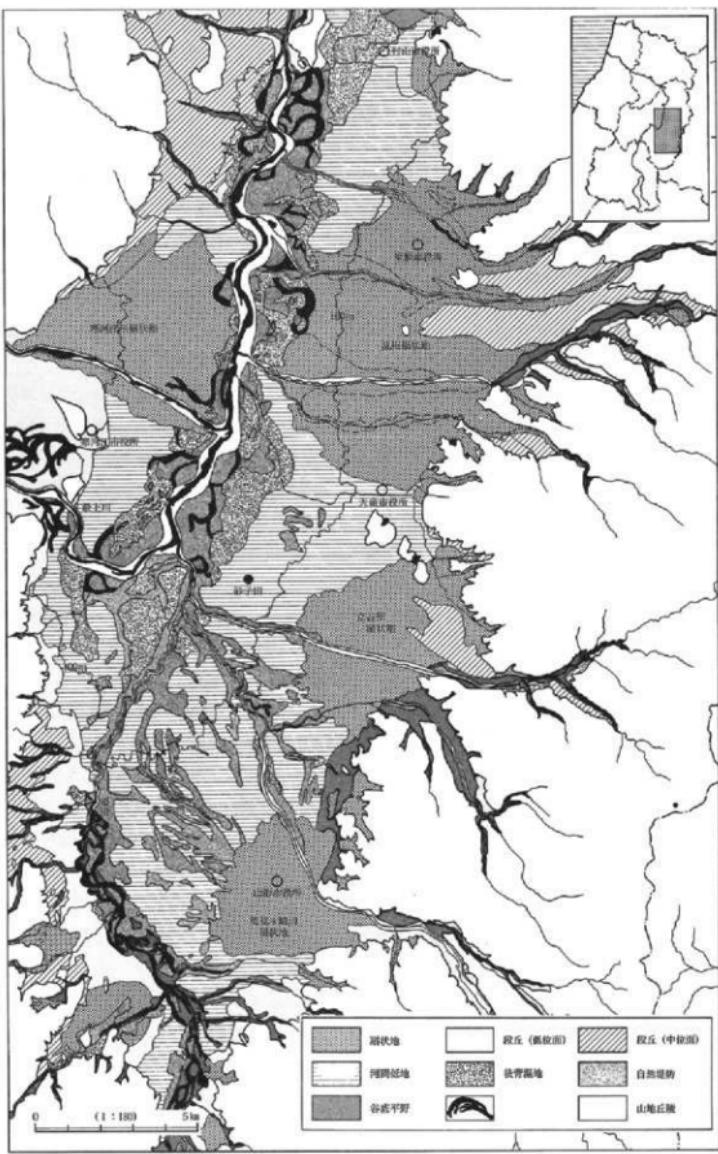
本遺跡は立谷川の北岸に位置する。周辺は立谷川とその南を流れる村山高瀬川による複合扇状地の扇端部にあたり、2kmほど西には最上川が南北流れている。本遺跡の周りには自然湧水の豊富な扇端部付近に遺跡が集中して分布する。

時代毎の遺跡数をみると縄文時代後期から晩期の遺跡が多い。立谷川北岸の天童市側では縄文時代後期の遺跡として石田遺跡・白山堂遺跡・宮田遺跡・渡戸遺跡・高擣南浦遺跡が知られる。多くは河川沿いの低湿地に集落が営まれているが、傾向としては山際に多い。砂子田遺跡ほど扇状地の扇端部に位置する遺跡は周辺はない。渡戸遺跡は平成7年に当センターにより発掘調査が行われ、縄文時代後期前葉から後葉にかけての土器捨て場が見つかった。高擣南浦遺跡は、砂子田遺跡と同様縄文時代後期中葉から後葉の土器が出土し、近くの集落として何らかの関係のあったと思われる。本遺跡の位置する高擣の周辺は、湧水の関係からか縄文時代後期の遺跡が良く見られる。早くから進出された地域のようである。縄文時代晩期では、矢口遺跡・沼田遺跡・宮田遺跡が知られる。宮田遺跡からは砂子田遺跡と近い時期の遺物も出土している。小林圭一氏は本遺跡は矢口遺跡のあとを受けて成立した村落ではないかと推測している。

遺跡の立地と環境



第2図 遺跡位置図（国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形北部」「寒河江」を1/2縮尺して使用）



第3図 地形分類図（小林圭一氏作成）

弥生時代の遺跡としては、山形県内の磨消繩文を伴う土器の基準資料となっている地蔵池遺跡が有名である。砂子田遺跡から北に7kmほど離れている。他に塚野目A遺跡が知られる。

こうした天童市側の遺跡分布に対して、立谷川の南から村山高瀬川にかけての地域には弥生時代の遺跡が多い。磨消繩文主体の土器が出土し中期折形団式併行として「漆山式」が提唱されている漆山遺跡、桜井式併行の土器が多数出土して「七浦式」が提唱される七浦遺跡、稻殻圧痕をもつ土器と石包丁が出土した江俣遺跡が知られる。発掘調査の行われた遺跡では、繩文時代晚期から弥生時代前期にかけての土器変遷の窺える良好な一括資料が出土した北柳I遺跡がある。北柳I遺跡では繩文時代最終末期の竪穴住居跡が多数検出され、ここから出土した土器群は砂子田遺跡の晚期の土器と同時期であり、比較検討すべき資料である。

弥生時代中期以降になると本格的な水耕農業が行われるようになり、伏流水に富む立谷川・村山高瀬川の扇状地に位置するこの地域には大規模な集落が営まれるようになった。特に古墳時代の遺跡は数多い。天童市側では、木製品が大量に出土し国の指定史跡となった古墳中期後半の西沼田遺跡をはじめ、古墳時代前期の集落跡と中期の河川跡から多量の土器と木製品が出土した板橋2遺跡、古墳時代中期の集落跡から搬入品の古式須恵器が多数出土した的場遺跡がある。他に高擣南遺跡・桜江遺跡などが知られる。近年東北中央自動車道の建設とともに山形市北部から天童市北部にかけての扇状地前縁部の調査が進み、古墳時代前期から中期にかけてこの地域への進出が活発に行われたことが明らかになってきた。古墳としては砂子田遺跡の西約2kmに位置する火矢塚古墳群がある。立谷川以南の山形市側では数基の古墳が検出された梅ノ木遺跡、古墳時代中期の竪穴住居が多数検出された村山高瀬川南岸の下柳A遺跡がある。更に村山高瀬側・須川の扇端部では、内行花文鏡の日本最北端の出土例となった馬洗場B遺跡がある。ここからは古墳時代前期前葉の古手の古式土師器が竪穴住居や旧河川跡から出土するとともに、木製品も多数出土している。同じく馬洗場B遺跡と近接する服部遺跡からも同時期と見られる木製品が多数出土している。またこの地域は古墳が集中していることでも知られる。昭和57~58年に山形県教育委員会によって調査され、24基の古墳が検出されたお花山古墳群が有名である。お花山古墳群から出土した銅鏡撰文鏡は山形県の重要文化財に指定されている。他に古墳時代後期を中心とする七浦古墳群・衛守塚古墳群・柴崎古墳群などの平地に作られた古墳が、旧羽州街道沿いに点在している。

奈良・平安時代になると遺跡数は飛躍的に増加する。砂子田遺跡に近接する中袋遺跡や影沢北遺跡などで発掘調査が行われているが、未調査の遺跡が大部分である。中袋遺跡では風字硯・石帶・耳皿が出土しており10世紀前後の官衙関連の遺跡として注目される。

中世以降では、本遺跡の東側に位置する高擣の村落が南北朝時代から江戸時代にかけての高擣城跡になっており、周辺には「楯の内」・「西楯」・「堀端」等の小字名が今も残っている。

このように、当地域は繩文時代から近世にかけて多くの集落跡が営まれた。これは立谷川・村山高瀬川など奥羽山脈から流れる豊富な水量によってもたらされたものである。特に水耕農業が発達した弥生時代中期以降は、稲作の生産地帯として積極的に開拓が行われてきたことが推測される。本遺跡でも繩文時代最終末期の土器が出土しており、弥生時代前後の低湿地帯への進出の意味を考えるうえでも興味深い。

### III 遺跡の概要

#### 1 遺跡の層序

砂子田遺跡は、扇状地の扇端部に立地し、調査区内も東西南北を縦横に河川跡が走っているため土層の堆積が不均一であった。結果、遺構の検出が極めて困難で、本来遺構であったものも検出できなかつた可能性がある。

本遺跡の基本層序は、大きくは第5図に示したとおりである。但し、地点によっては河川跡により攪乱され、大きく異なるところもある。以下、基本層序について概述する。第I層は暗褐色シルト層で、表土である。第II層はにぶい黄褐色粘土質シルトで、耕作土である。第III層は黒褐色粘土質シルトで遺物包含層である。ただし層全体に遺物が満遍なく含まれるわけではなく、第III層の中位以上に限られる。おそらく生活面が第III層上位にあると思われる。第IV層が灰色砂質シルトで、第III層と第V層の漸移層である。第V層が灰白色シルト質粘土で地山である。この面が確認面となるが、多くの地点でここまで掘り下げる掘りすぎである。しかし第III層の黒ボク層の上からは遺構は全く確認できなかつた。なお、第V層はグライ化して灰白色を呈しているが、縄文時代中期の遺物が出土することがある。

#### 2 遺構・遺物の分布

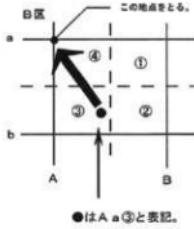
調査区の中央を市道が走っているが、この市道から北をA区、南をB区と呼称する。また調査区内でも時代は大きく異なり、A区北側は縄文時代晚期最終末期、A区中洲状微高地は縄文時代後期後葉の竪穴住居が、B区は縄文時代後期中葉から後葉の遺構が存在する。遺構はA区北側に少ない。おそらく存在するのだろうが、検出できなかつた。A区の中洲状微高地及びB区では多くの遺構が確認できた。

調査区内は長大な旧河川跡が東西南北に蛇行している。この旧河川跡沿いに3箇所ほどの土器捨て場が確認できた。遺構配置図中のスクリーントーンで示した場所である。A区北側が縄文時代晚期、A区中洲状微高地の北側が縄文時代後期後葉、B区南西角が縄文時代後期中葉から後葉の土器捨て場である。また土器捨て場とは異なるが、A区の南西角には遺物包含層が広い範囲で確認でき、多量の遺物が出土している。墓域の可能性がある。またB区西側からは埋設土器が20基余検出できた。

最後にグリッドの表記であるが、第4図のように遺構や遺物の場所の北西角にあるグリッドで呼称する。またグリッド内は時計回りに①～④に分割される。

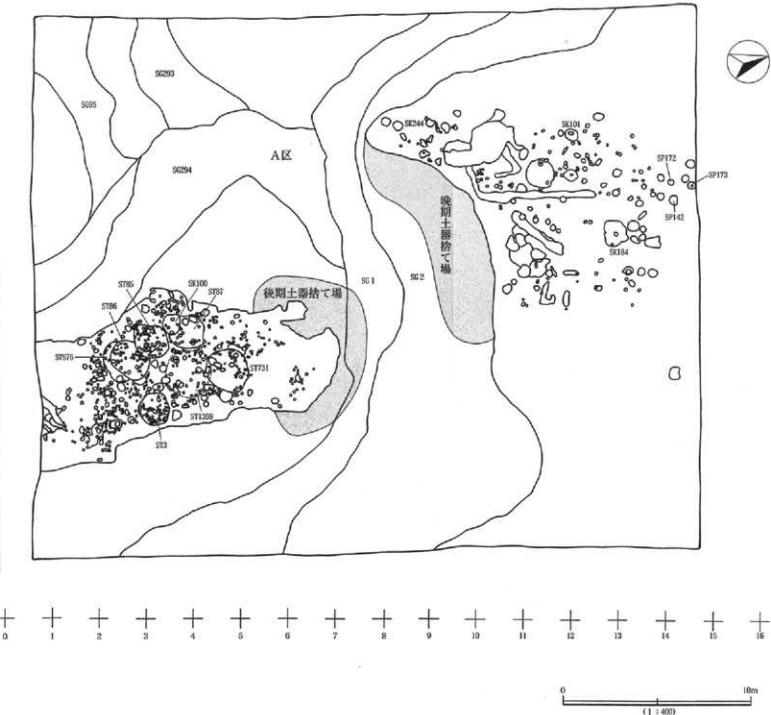
なお調査区がグリッド設定後に広がったため、グリッドの南北軸がA区は1～15、B区はa～mとなる。

グリッドは北西角の数値で表記する。



第4図 グリッド概要図





第6図 遺構配図図

## IV 検出された遺構

### 1 竪穴住居跡

竪穴住居は確実なものでは7棟を数える。最も集中するのがA区南側の中洲状の微高地で、6棟が存在する。B区北西端に1棟存在する。他にも疑わしいものや検出できなかつたものもあるがこれらはSXとして別に述べることとする。

#### S T 3 : 第7図遺構図、第8図遺物出土状況

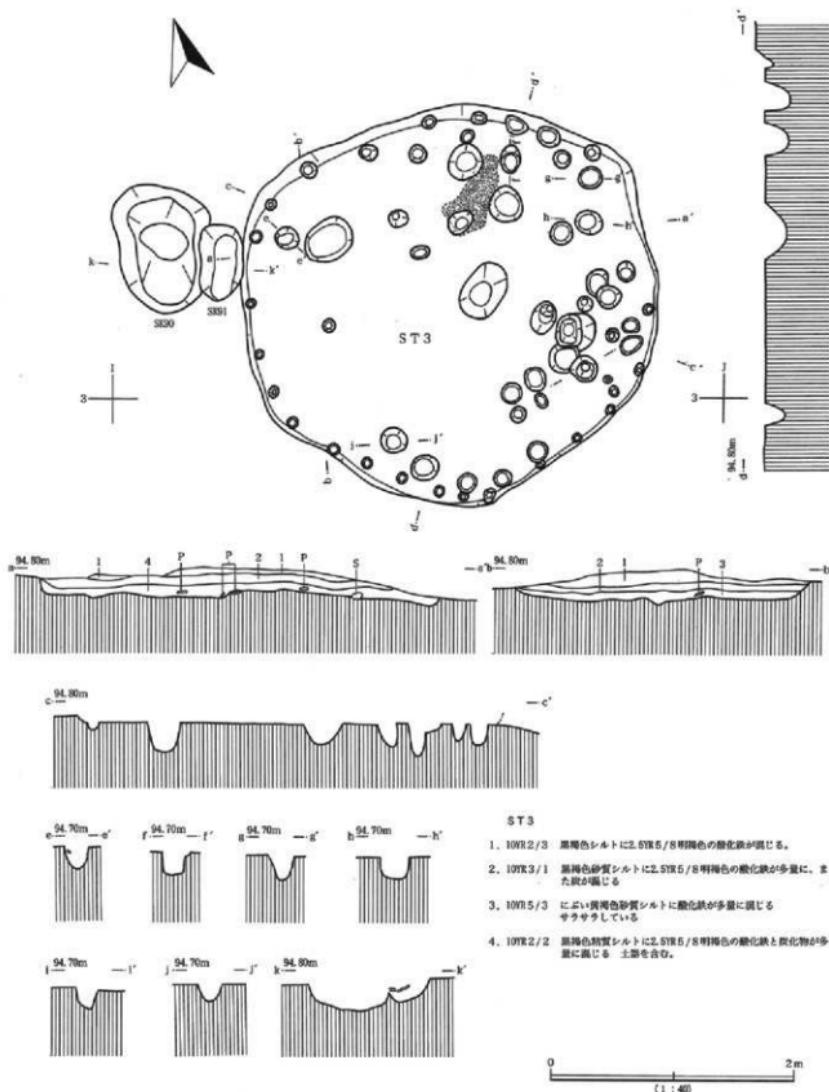
A区南側の中洲状微高地の南東端に位置する。I 4 グリッドである。平面プランは南北3.3m、東西3.4mの円形を呈する。東側が旧河川跡に接しており、東側に行くほど傾斜している。重複関係はSK91に西端を切られている。床面の掘り込みは極めて浅く、最も低い所ではほとんど掘り下げられない部分もあった。主柱穴と思われるものにはエレベーションを付したが、規則性は認められない。円形プランの壁際には直径10cm程の極小さな側柱穴が巡っている。床面は粘土などによる貼床は認められない。炉跡は存在しないが、住居の北端には長さ60cmにわたり焼土がみられた。遺物の出土状況は床面から多量の遺物が出土している。遺物の特徴などについては遺物編で述べるが、簡略に記すと口縁形態が平縁のものを主体とし、大波状を呈するものは出土していない。また口縁部文様帶は1条の縄文帯を沈線で2分するものが多いが、中には1条の縄文帯のみのものも散見する。時期的には縄文時代後期後葉の瘤付土器第2段階に属するであろう。

#### S T 85 : 第10図遺構図、第9図遺物出土状況

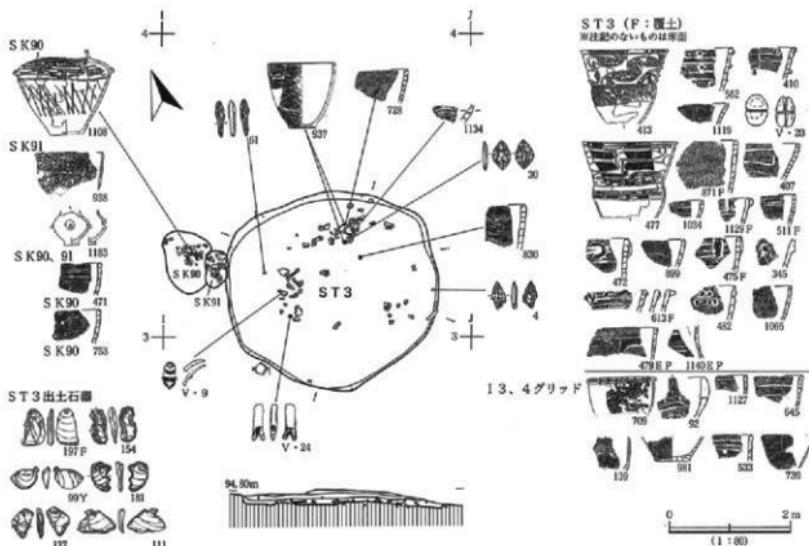
A区南側の中洲状微高地の西端に位置する。H 3 グリッドである。平面プランは直径が3.4mの不整円形を呈する。重複関係はS T 86を切る。床面の掘り込みは比較的深く、約20cmを呈する。主柱穴と思われるものにはエレベーションを付したが、規則性は認められない。円形プランの壁際には直径10cm程の極小さな側柱穴が巡るが、全てを検出できなかつたものか点在している。床面は針床されない。図上ではE Lと記したが炉跡かどうか疑問なものが存在する。住居跡の中央やや南側に土壤状の掘り込みがあり、そこには石組みがされている。一見石組にもみえるが、半蔵しても焼土などはみられなかった。その他の床面にも焼土はみられなかつた。遺物はほとんどが小破片のみで、全形が窺えるものは712の1個体のみである。口縁部文様帶が2条の縄文帯とその間の無文帯からなる。縄文時代後期後葉の瘤付土器第2段階に属すると考えられる。

#### S T 86 : 第11図遺構図、第12図遺物出土状況

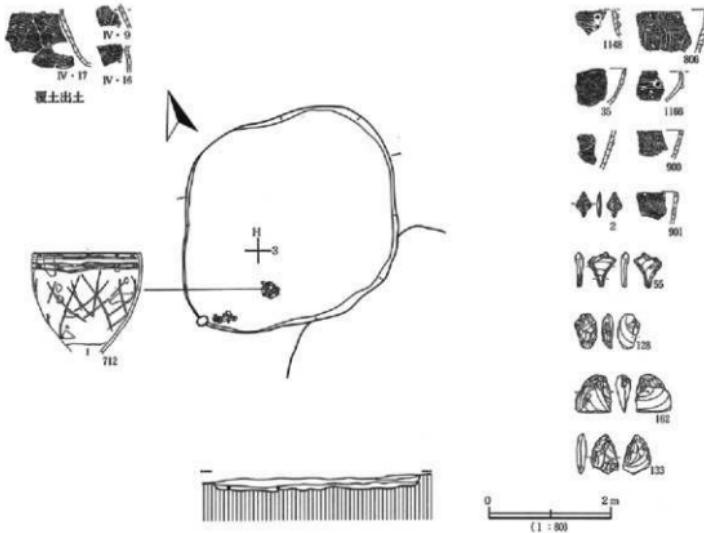
A区南側の中洲状微高地の南に位置する。H 3 グリッドである。平面プランは長軸が4.3m、短軸が3.4mの不整橢円形を呈する。S T 85に北西角を切られ、S X 676と大部分重複する。掘り込みの深い主柱穴は確認できなつた。また側柱穴も壁際を巡らないようである。確認面からの掘り込みは深いところで約20cmを測る。貼床はない。炉跡は不明であるが、床面に数箇所焼土がみられた。遺物は床面から973と1106が出土している。覆土から小破片が出土しているが時期的にばらつきがあり、参考にならない。周辺の状況と1106の瘤の付く無文の小壺から判断して、縄文時代後期後葉の瘤付土器第2段階としておく。



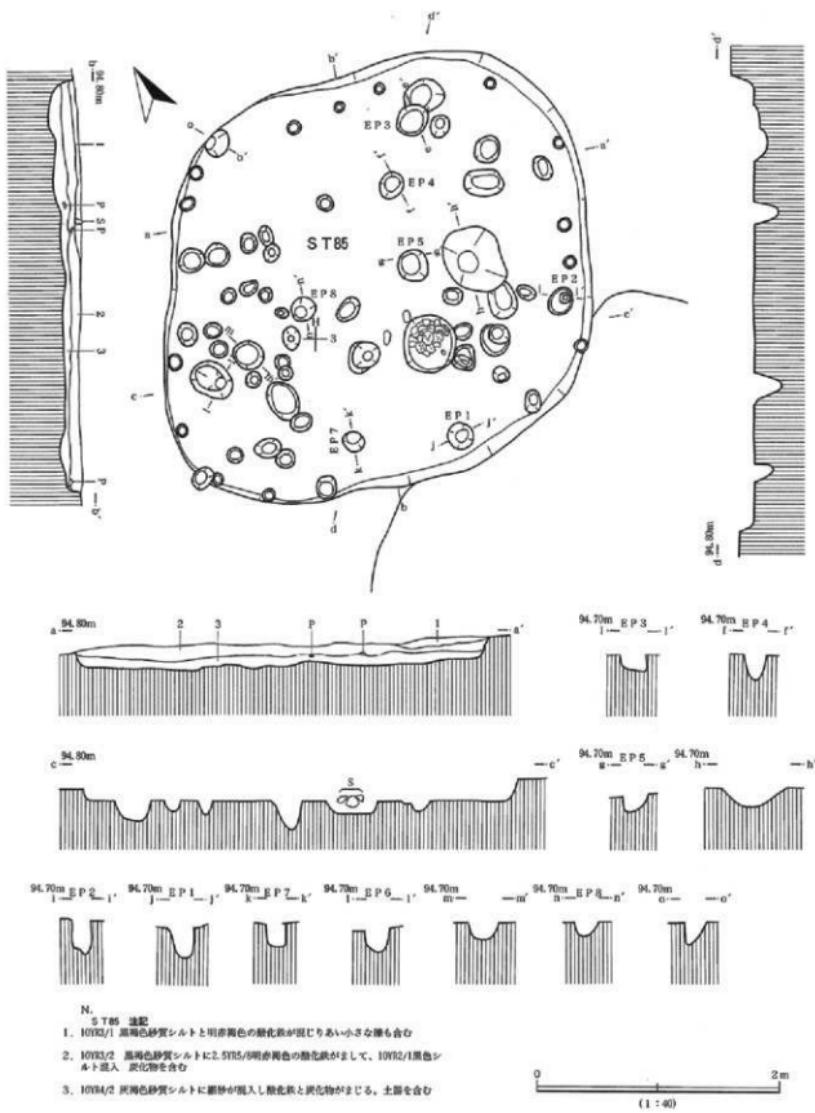
第7図 ST 3 遺構平面図



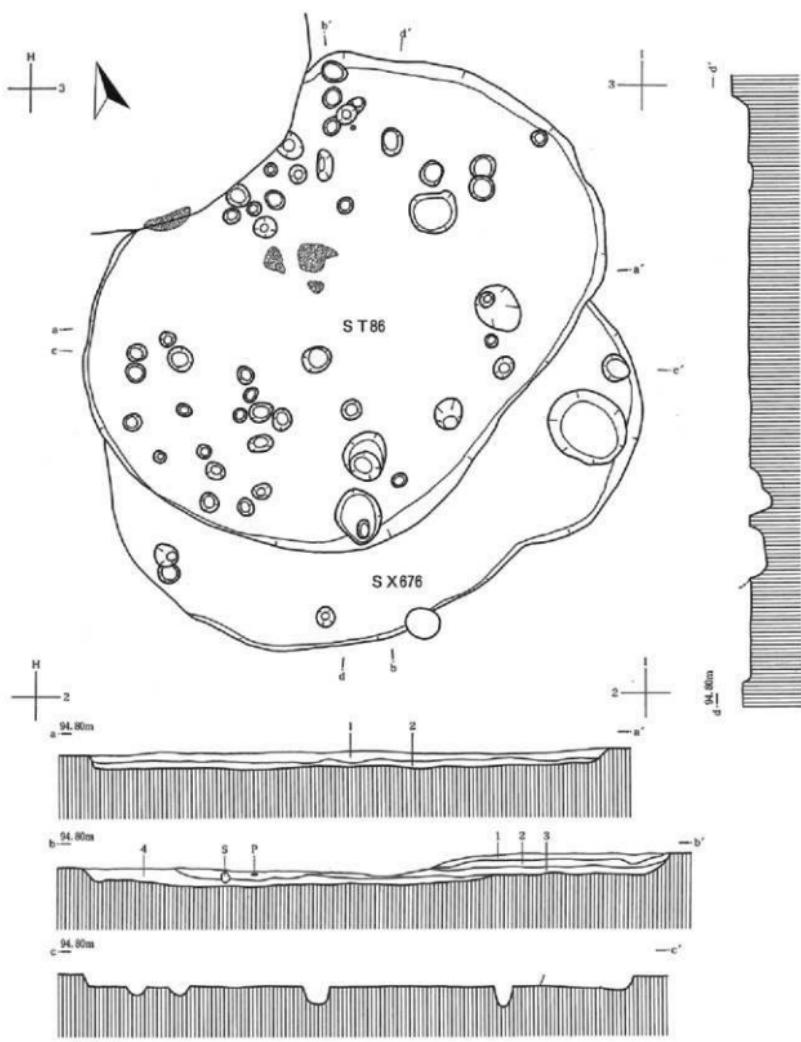
第8図 ST 3遺物出土状況



第9図 ST 85遺物出土状況



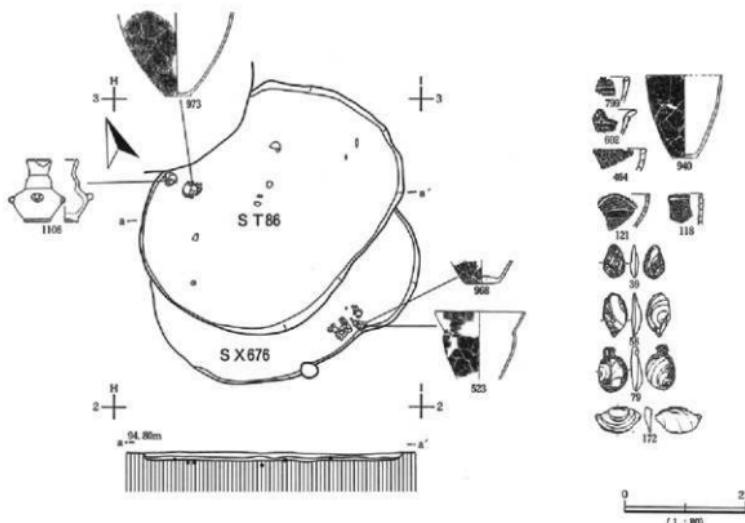
第10図 ST85遺構平面図



## ST 86断面

- 1 10B3/2 黒褐色砂質シルトに鉄化鉄と鉄化物が少量まじり小さな礁を含む
- 2 10B4/2 灰褐色砂質シルトに3/2褐色砂質シルトがまじり鉄化鉄を含む小さな礁を含む ところどころに鉄化物を含む
- 3 10B4/3 にまじい黄褐色に粘質シルトに小さな礁を含む
- 4 10B5/3 にまじい黄褐色粘質シルトに小さな礁を含む

第11図 ST 86・SX 676遺構平面図



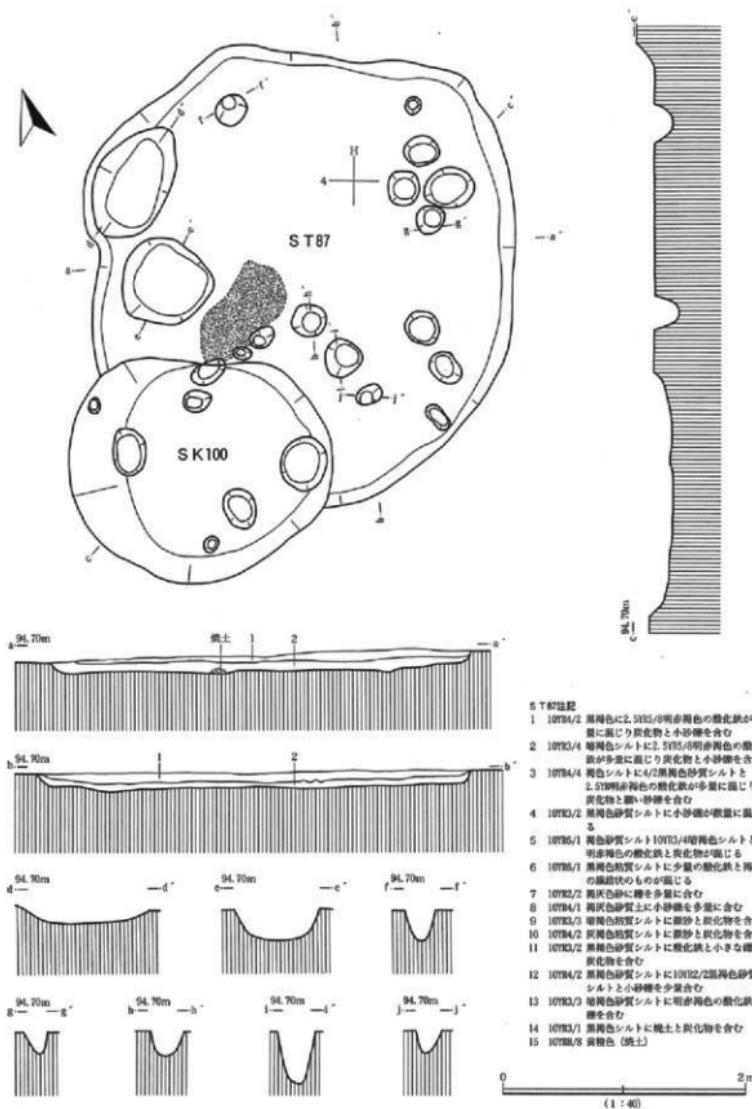
第12図 S T86・SX676遺物出土状況

## S T87 : 第13図遺構図、第14図遺物出土状況

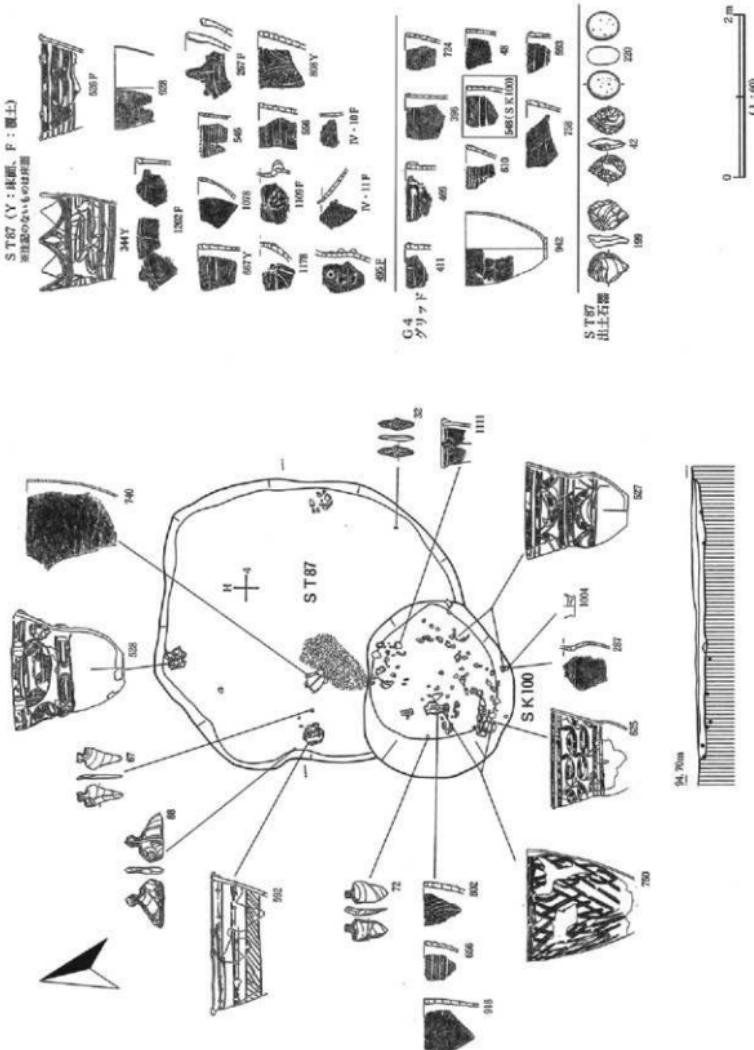
A区南側の中州状微高地の中央に位置する。S T86の北隣で、H 4グリッドに位置する。平面プランは直径が3.4~3.8mの不整圓形を呈する。重複関係は南西端をSK100に切られている。床面の掘り込みは確認面から約10~20cmである。掘り込みの深い主柱穴はエレベーションを示したが、規則性はない。壁際の側柱穴も確認できなかった。床面は灰白色の粘土を貼床している。炉跡は不明であるが、住居跡中央南側に幅90cm程の焼土の広がりが認められた。床面から多量の遺物が出土している。共通項を抽出すると、口縁形態が平縁で、大波状を呈するものは1個体のみである。また口縁部文様帶は2条の縄文帯とその間の無文帯からなる。縄文時代後期後葉の瘤付土器第2段階に属する。

## SK100 : 第13図遺構図、第14図遺物出土状況

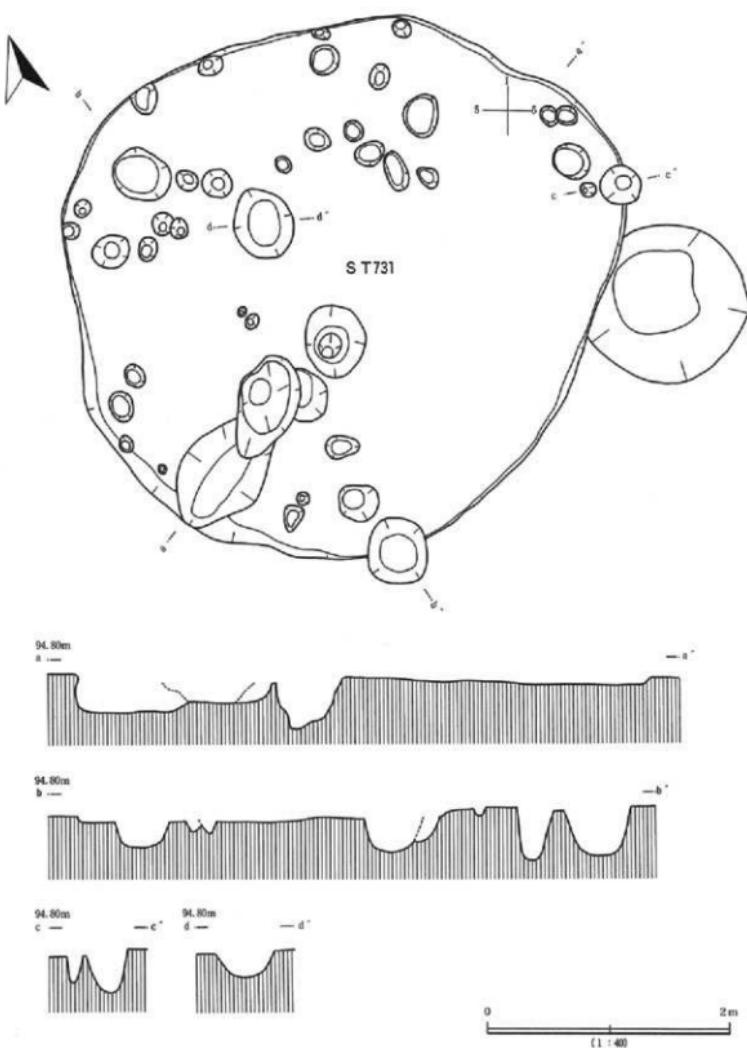
本来は土壤の部分で説明すべきだが、S T87と重複関係にあり、遺構図も一つにしてあるためここで説明する。検出位置はS T87の南西角で、S T87を切っている。直径1.8~2.2mの不整圓形を呈する。検出面からの深さは最深部で約20cmである。遺物も多量に出土しており、共通項を抽出すると、口縁形態が平縁で、大波状を呈するものはない。口縁部文様帶は2条の縄文帯とその間の無文帯からなり、器面に瘤がつく。縄文時代後期後葉の瘤付土器第2段階に属する。S T87を切っていながら出土土器の特徴は全く同じである。あまり時間差のない遺構と考えるべきか。



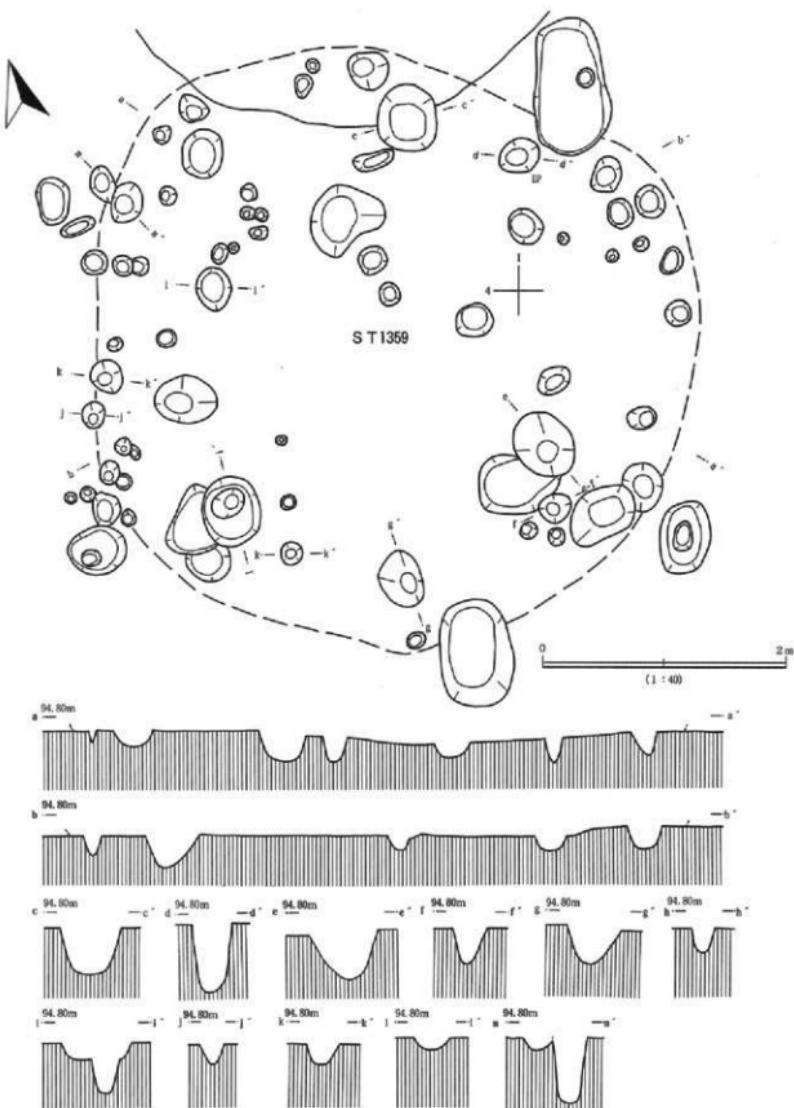
第13図 S T87・SK100遺構平面図



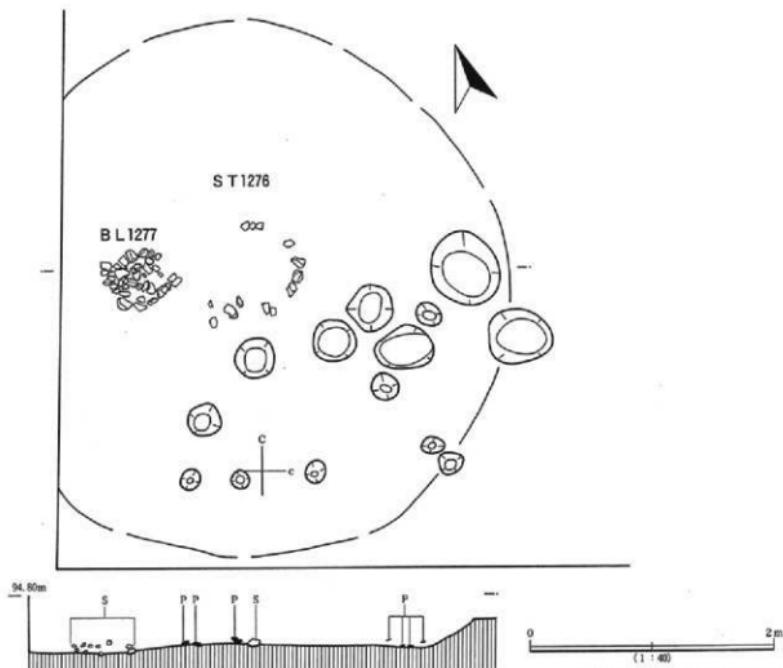
第14図 ST87・SK100遺物出土状況



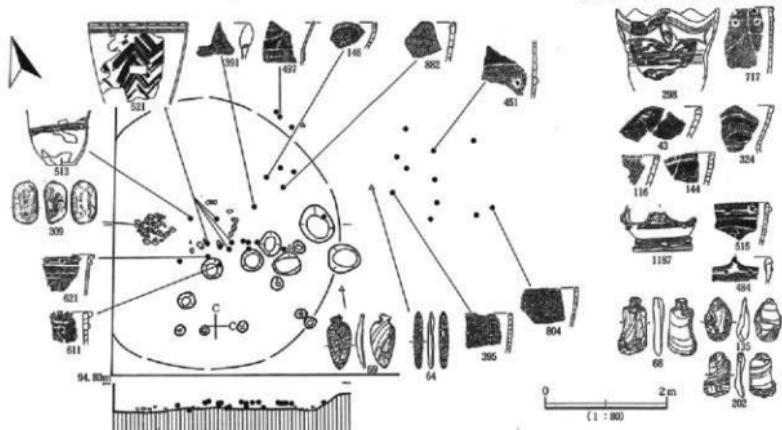
第15図 S T731遺構平面図



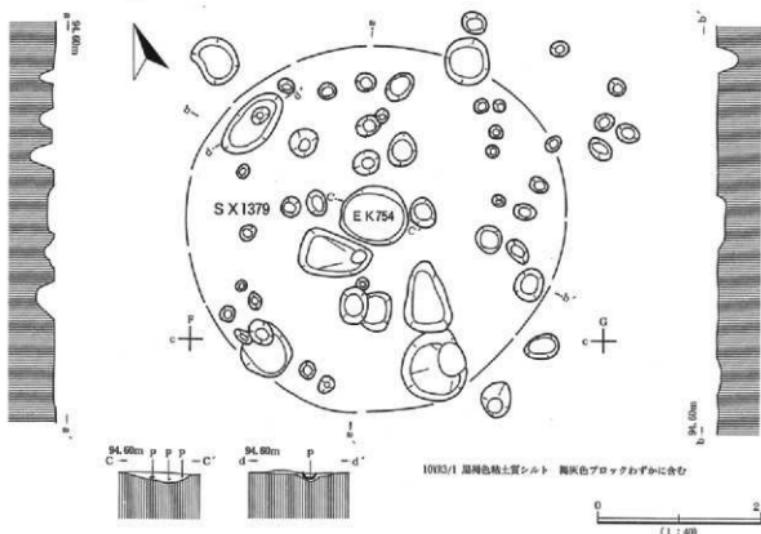
第16図 ST1359遺構平面図



第17図 S T1276遺構平面図



第18図 S T1276遺物出土状況



第19図 S X 1379遺構平面図

## S T 731 : 第15図遺構図

A区南側の中洲状微高地の中央に位置する。S T 87の北隣である。I 5グリッドである。平面プランは直径4.4mの円形プランを呈する。検出面からの深さは10cm未満である。良好な主柱穴もあるが、南西に偏る。側柱穴がやや広い間隔で巡るが、東側では検出できなかった。炉跡や焼土はみられない。遺物は全て小破片のみで図示しなかった。

## S T 1359 : 第16図遺構図

遺構検出時および掘り下げ時にも発見することができなかった遺構である。空撮後に主柱穴が巡ることからこれをS Tとした。A区南側の中洲状微高地の中央東端に位置する。I 4グリッドである。周囲をS T 3、87、731に囲まれた狭隘な地点に位置し、地山が大きく起伏している。もともとこうした場所に住居を築いたのか、検出時に掘り下げすぎたものか、竪穴住居ではなく掘立状の建物跡なのか疑問も多い。ただし周辺は竪穴住居跡のみであり、ここでは竪穴住居の可能性が高いとしておく。遺物はグリッドで取り上げたもののみで、良好な資料はなかった。周辺の竪穴住居の様相から、縄文時代後期後葉の瘤付土器第2段階としておく。

## S T 1276 : 第17図遺構図、第18図遺物出土状況

S T 1276はB区の北西端に位置する。C cグリッドである。おそらく生活面が確認面よりもかなり上にあり、床面を飛ばしてしまったと思われる。よって平面プランは確認できなかった。破線は便宜的に推定線を引いたまでである。良好な柱穴は確認できなかった。炉跡は石組炉が確認できた。遺物の出土状況は周辺の遺物も記載しているが、推定プランないに限定すれば、

瘤付土器で口縁部文様帯が2条の縄文帯とその間の無文帯である。あまり良好な出土状況とはいえないが、時期的には縄文時代後期後葉の瘤付土器第2段階としておく。

## 2 性格不明遺構

性格不明遺構としたが、実際には竪穴住居と思われるものをここで取り上げる。初めから竪穴住居を意識してプランを引いたことから間違いや思い込みなどもある。なお遺構の平面プランは黒ボク層の上からは全く確認できなかった。確認面まで掘り下げた結果、おそらく床面を飛ばしたものと思われる。遺物出土状況の断面図をみてもらえばわかるが、土器の出土レベルは確認面から約10cm以上上にあり、遺物の集中するレベルが床面なのではないかと推測している。本来はこうした推測の記述をすべきではないのかもしれないが、消極的にならず可能性のあるものは図示している。

### S X 1379：第19図遺構平面図

F b グリッドに位置する。柱穴の並びと緩やかな窪みとなっていたことから竪穴住居の可能性がある。破線は推定されるプランである。エレベーションにあらわしているが、深い柱穴がいくつか存在する。他に小柱穴が点在するが側柱穴の可能性もある。良好な遺物は確認できなかった。時期は遺物の小破片などから縄文時代後期に属する。それ以上の特定はできなかった。

### S X 1380：第20図平面図、第21図遺物出土状況

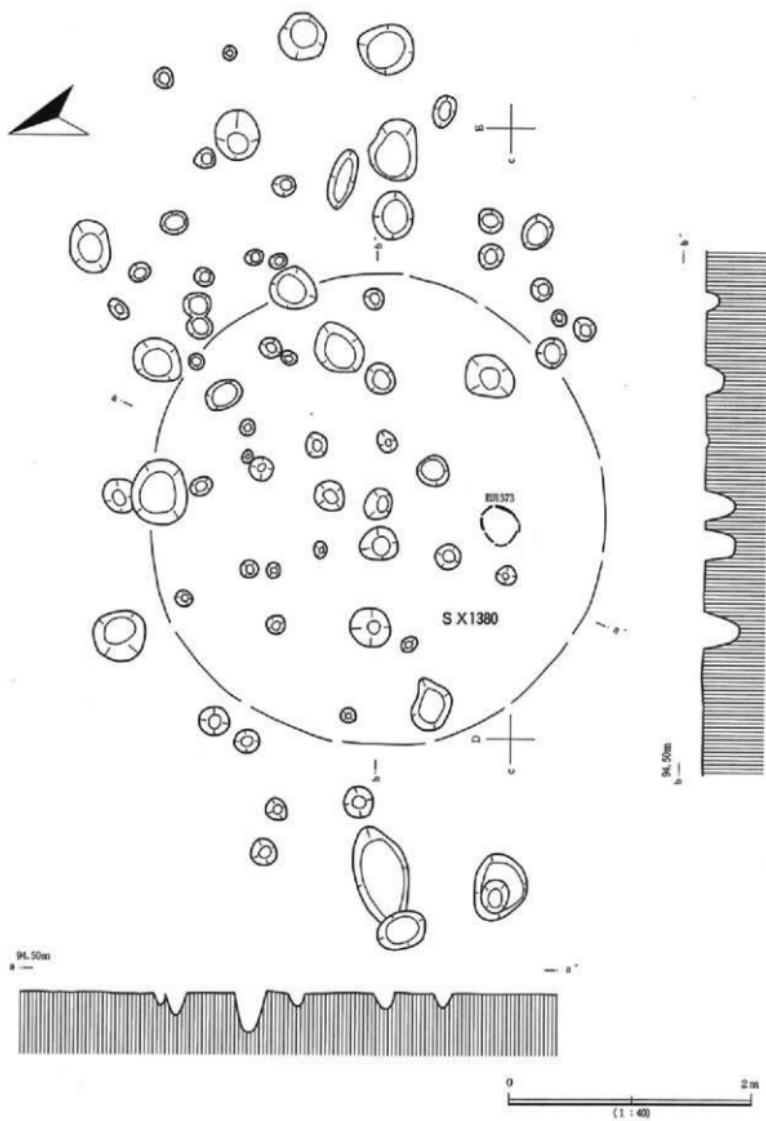
D b グリッドに位置する。柱穴の並びから竪穴住居の可能性がある。破線は推定されるプランである。ただし推定プランの東隣に柱穴群が存在し、推定プランが誤っている可能性もある。エレベーションにあらわしているが、深い柱穴がいくつか存在する。他に小柱穴が点在するが側柱穴の可能性もある。遺物の出土状況をみると古いものでは刻み目を持つものから新しいものでは平縁で瘤の付くものまでかなり幅がある。D b グリッドの北側には旧河川跡が存在している。極僅かしか調査区範囲に入らないため不明だが、ここが土器捨て場になっている可能性も否定できない。その結果時期幅のある遺物の出土状況となったと推測している。時期は縄文時代後期としておく。

### S X 1386・1392：第22図平面図、第23図遺物出土状況

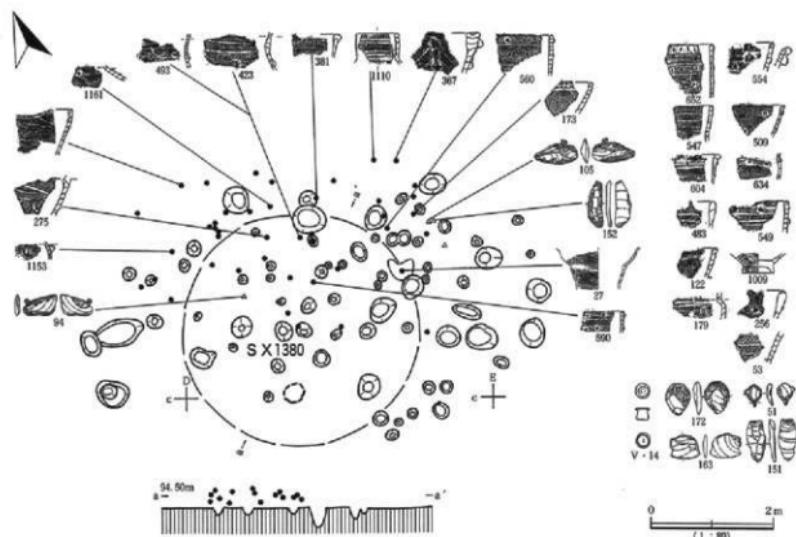
E c グリッドに位置する。深い柱穴が並び竪穴住居の可能性がある。破線は推定されるプランであるが、2つの遺構が切りあつてあるとして図示した。ただしあくまで推定線であるため新旧関係などは参考にならない。S X 1386内のE K 944は焼土が多量に含まれている。炉跡かとも考えたが明確な証左は得られなかった。炉からでた焼土や灰を土壤に捨てたとも考えられる。遺物の出土状況はS X 1386が瘤付土器第2段階を主とし、S X 1392があまり良好な遺物の出土状況を示していない。ただし周囲からは刻み目を持つものなども出土しており、全体に遺構単位での土器の分別は難しい。

### S X 1400・1403：第24図平面図、第25図遺物出土状況

E d グリッドに位置する。かなり深い柱穴や土壤が存在している。遺物の出土状況や柱穴の並びなどから推定プランを破線で引いた。土層のエレベーションを示したものは良好な柱穴や



第20図 S X1380遺構平面図



第21図 S X1380遺物出土状況

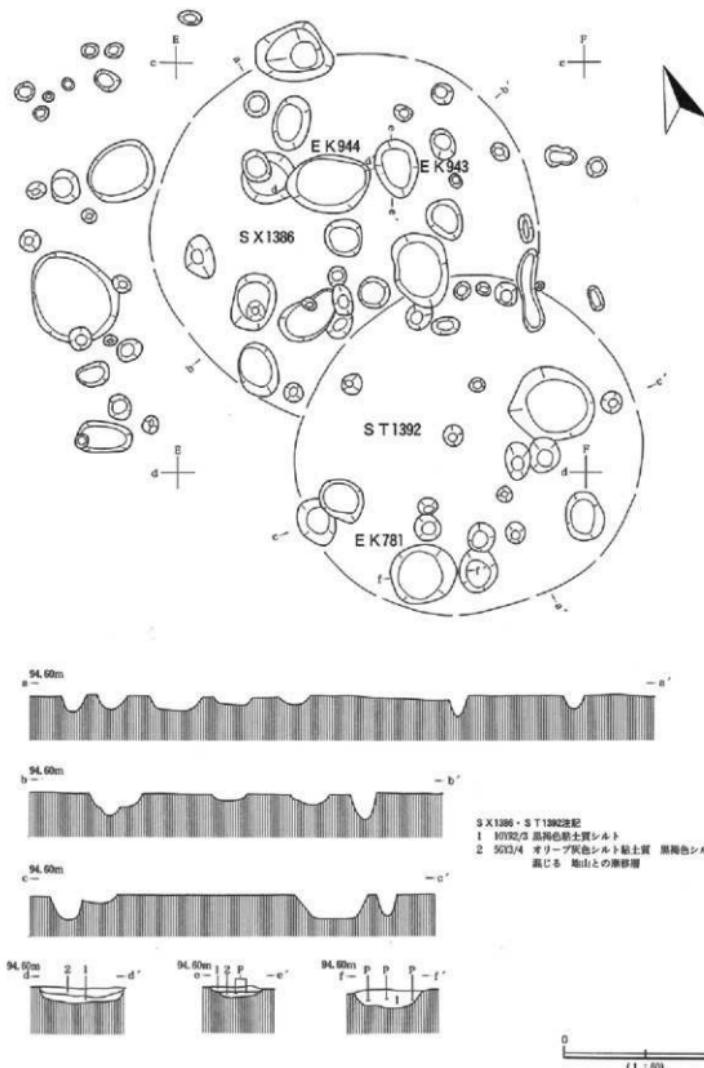
土壇である。側柱穴と思われる小さな柱穴は点在するものの明確なプランを推測させない。遺物の出土状況は瘤付土器第2段階を主としながらも西ノ浜式段階の遺物も出土している。また刻み目をもつものも存在する。時期は縄文時代後期としておくが、遺構単位ではとらえられなかつた。

#### S X1405：第26図平面図

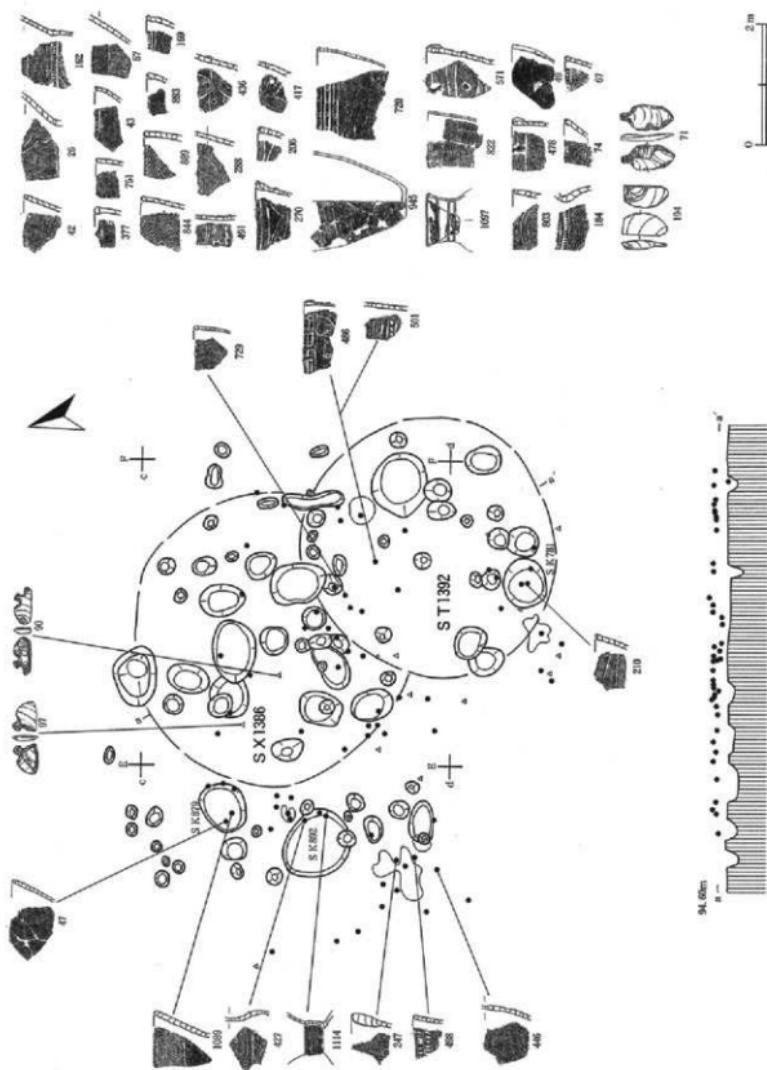
F eグリッドに位置する。前記のS X1400・1403と接する。竪穴住居としての推定プランを破線で表記している。4本の主柱穴と思われるものが存在する深さは約45～60cmを測り、しっかりとした柱穴である。側柱穴は確認できなかつた。時期を判断できる資料は極めて少なかつたが、刻み目帯を持つ土器片が1点出土している。また947のような特殊な土器も出土している。ただし良好な出土状況とはいはず、共伴関係などは明確に主張できない。時期は縄文時代後期としておく。

#### S X1406：第27図平面図、第28図遺物出土状況

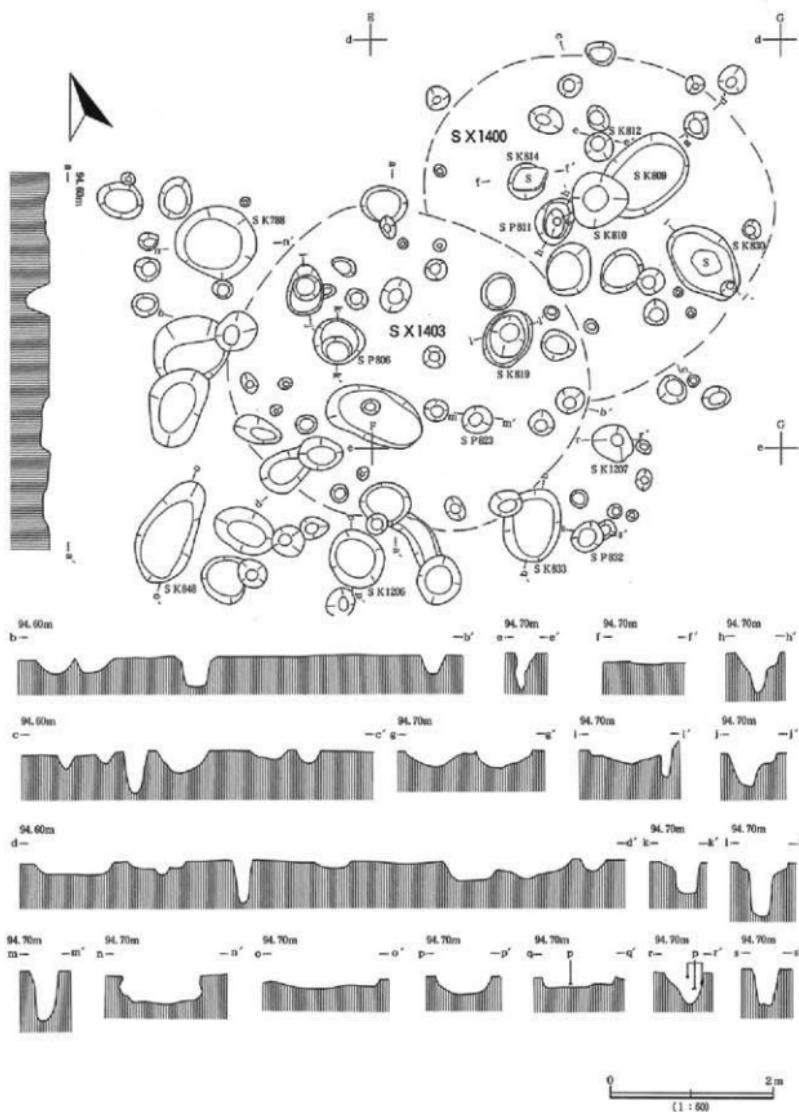
F fグリッドに位置する。遺物の集中と良好な柱穴の並びから竪穴住居として推定プランを引いた。主柱穴と思われるものが中央に四角状に並ぶ。深さは約30～45cmを測る。側柱穴は壁際に巡るようには見えない。遺物出土状況をみると周囲からは刻み目帯を持つ加曾利B3式段階の遺物が集中している。なかには数点瘤付土器第2段階のものが存在するが出土位置がやや離れているので、ほぼ加曾利B3式的単純地点と考えてよいだろう。



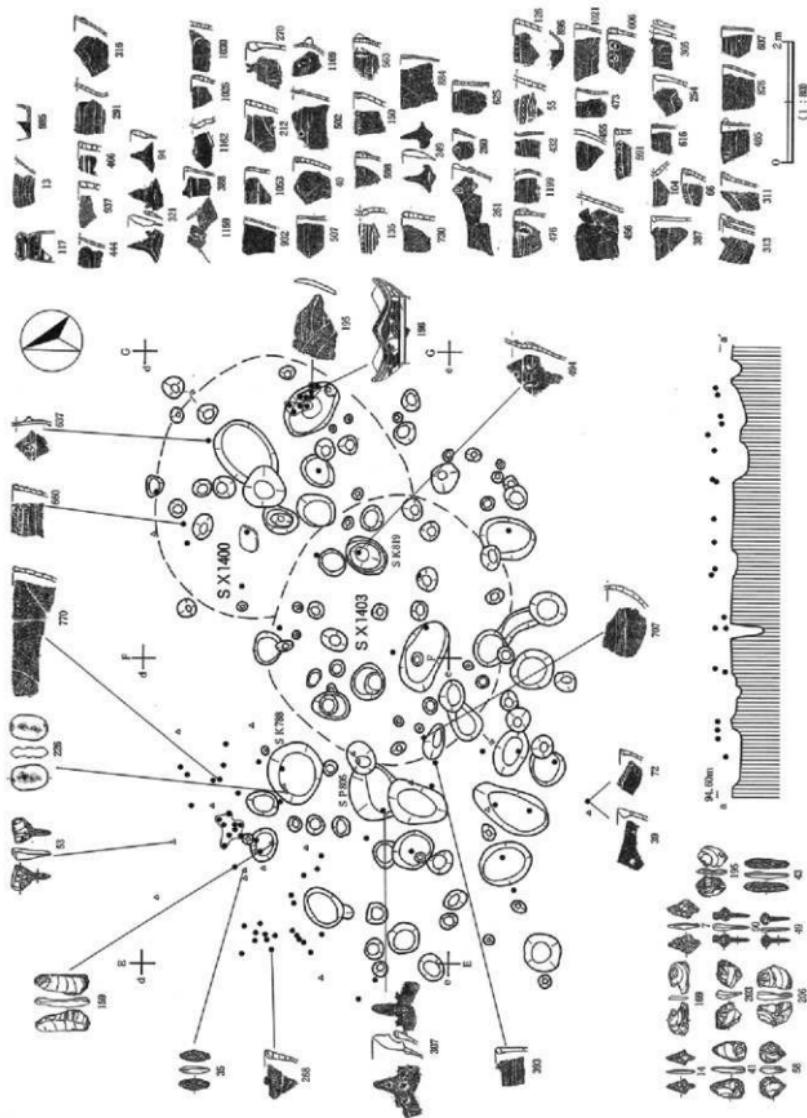
第22図 SX1386・1392遺構平面図

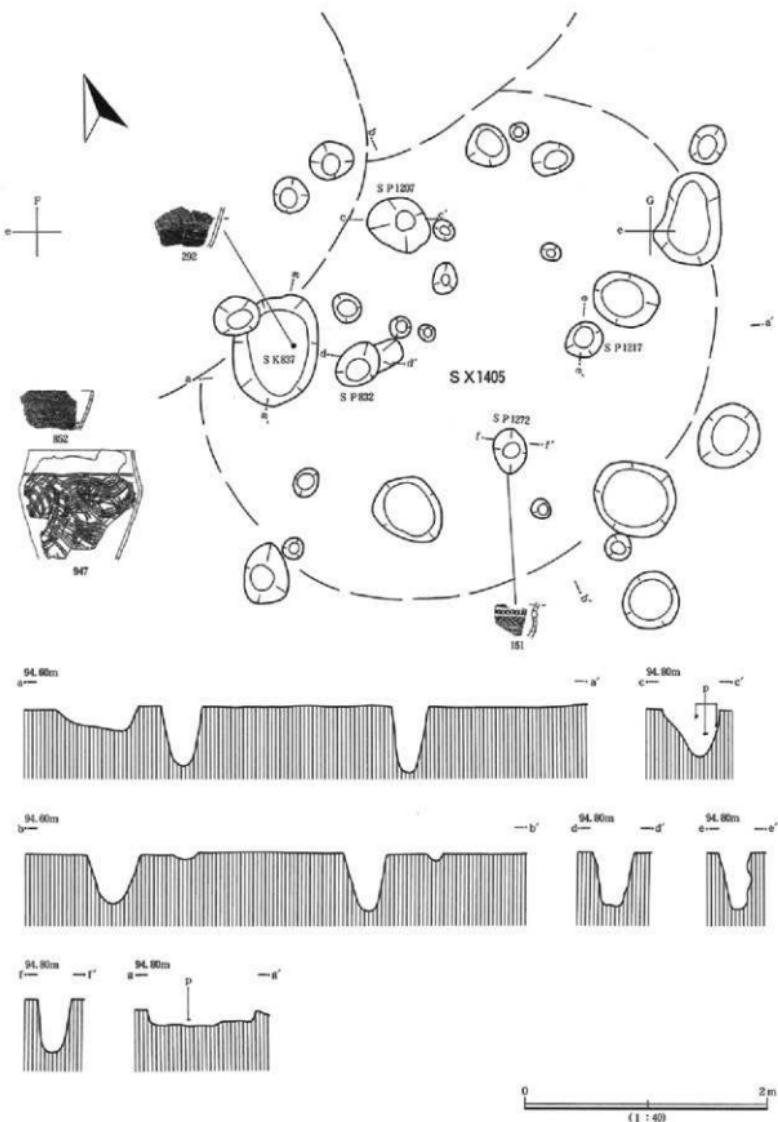


第23圖 S X 1386・1392遺物出土狀況

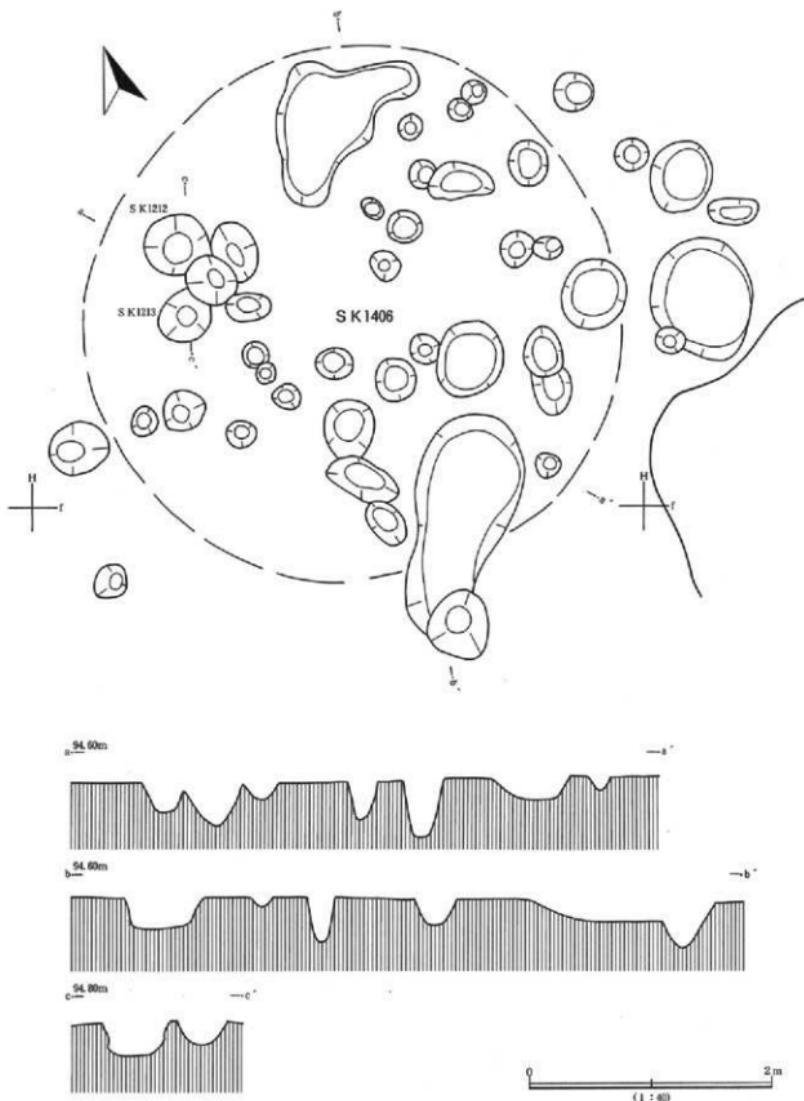


第24図 S X 1400・1403遺構平面図

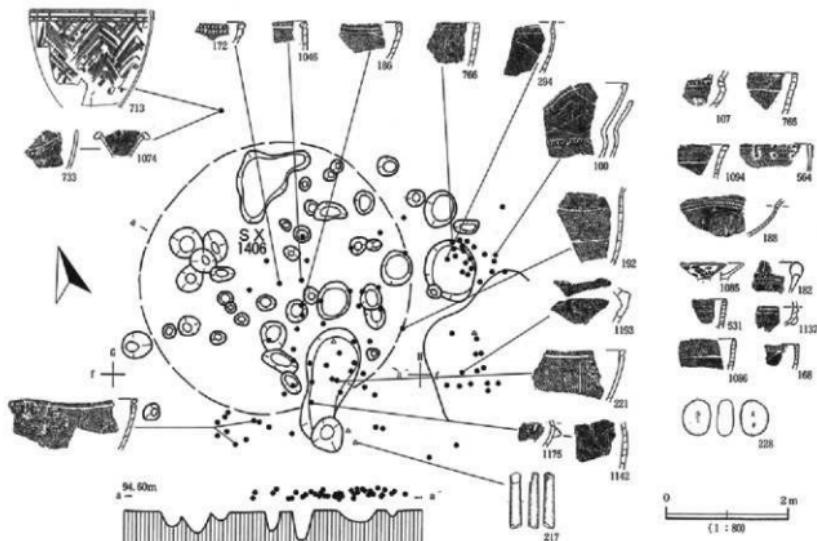




第26図 S X1405遺構平面図



第27図 S X1406遺構平面図



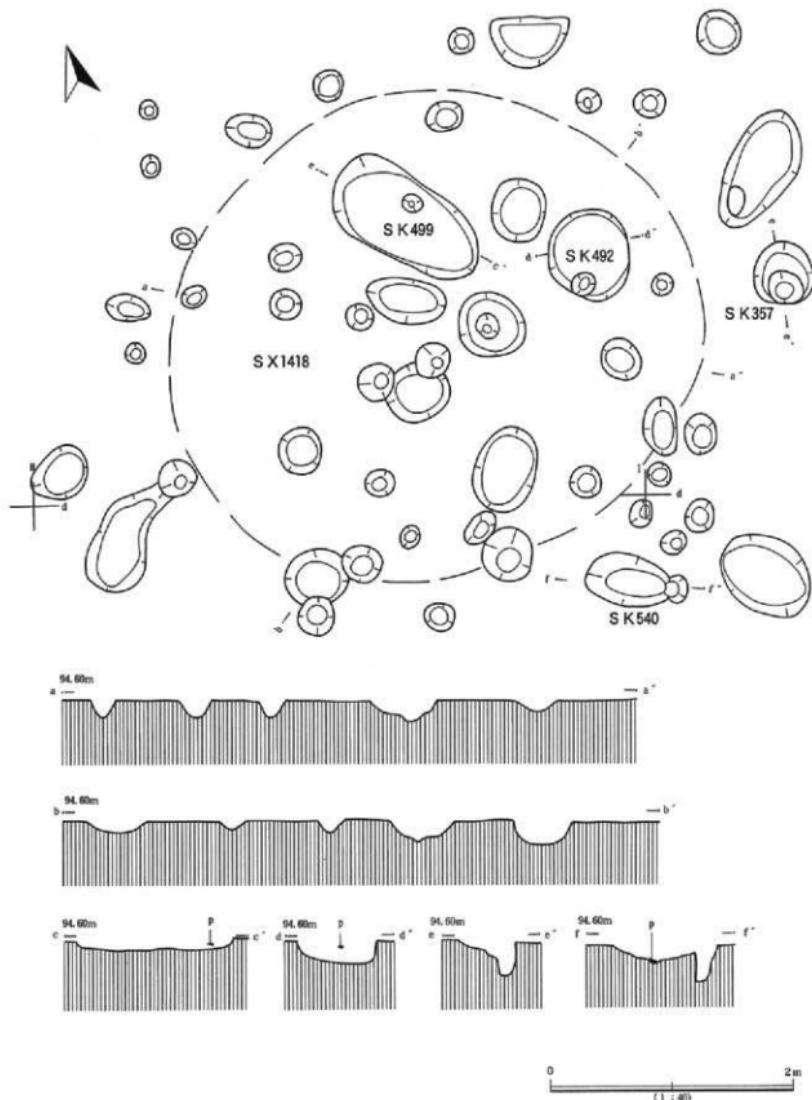
第28図 S X1406遺物出土状況

## S X1418：第29図平面図

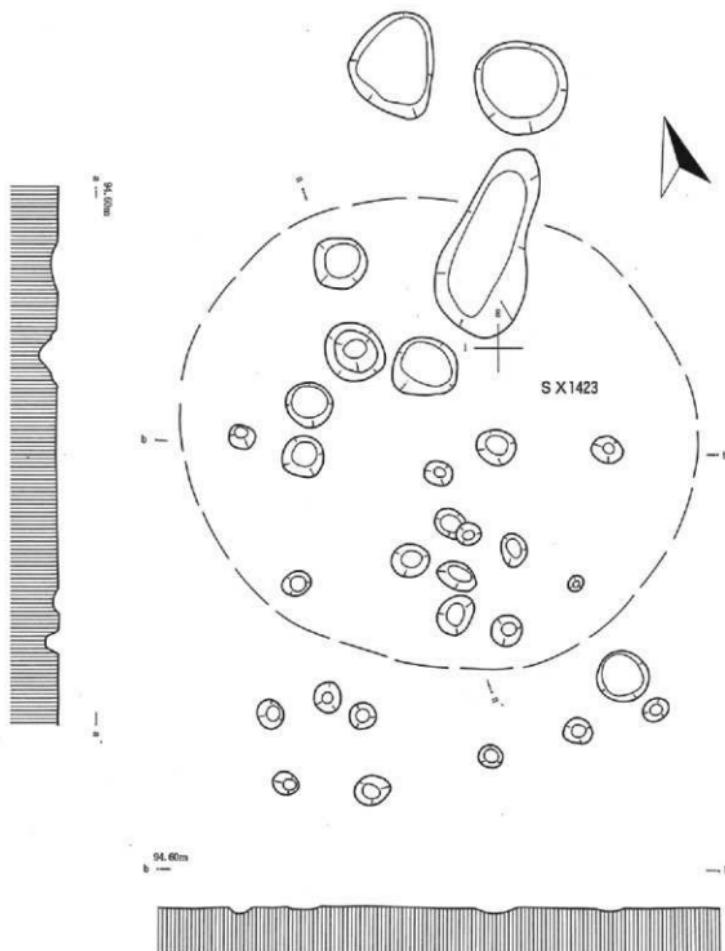
H c グリッドに位置する。柱穴や土壙の掘り込みは浅い。側柱穴のような小さな柱穴が集中することから竪穴住居の可能性もあると考えた。推定プランを破線で引いたが、小柱穴がその外側に円形に巡ることから、もう少し外側に広がる可能性がある。また遺物の出土がほとんどない。あるいは竪穴住居とするのは事実誤認の可能性もある。推測の域をでない。

## S X1423：第30図平面図、第31図遺物出土状況

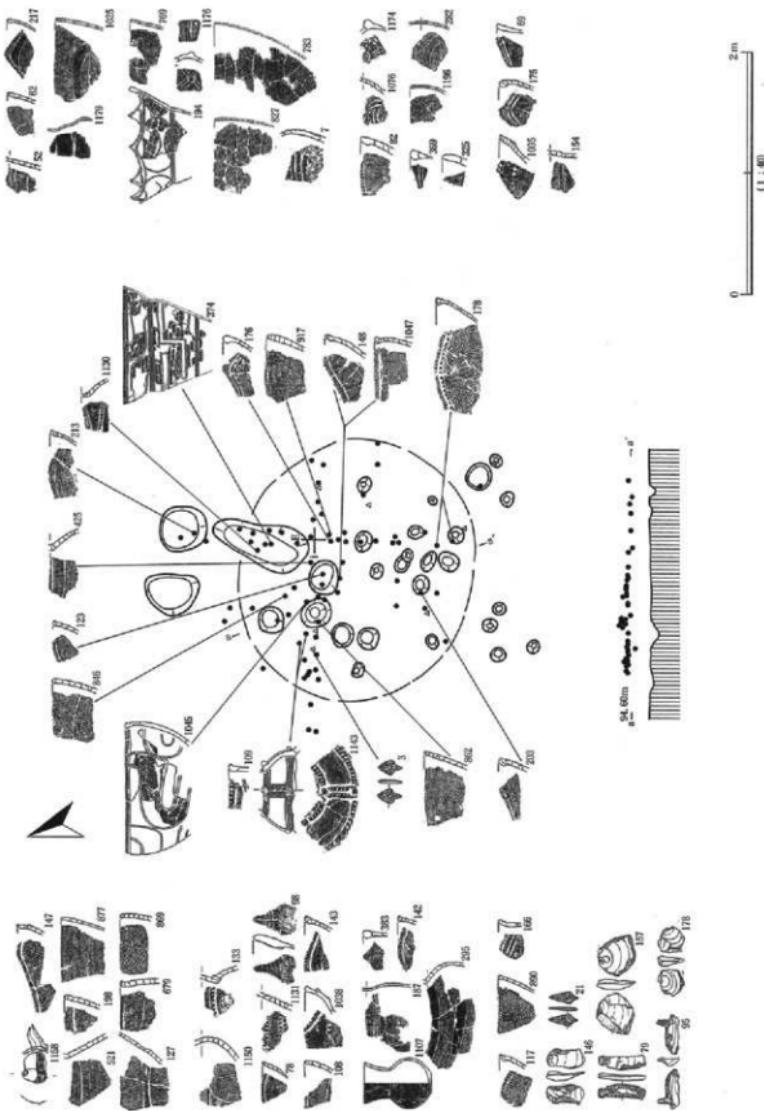
E i グリッドに位置する。柱穴や土壙の掘り込みは浅い。確認面までの掘り込みが深く、その分柱穴などが浅くなってしまった可能性もある。推定プランを破線で示したが、遺物の出土状況などからほぼ竪穴住居で間違いないと推測している。側柱穴などは不明である。遺物出土状況の断面図をみると遺物の出土レベルが確認面から約20cm高く、おそらくその位置に床面があったのではないかと推測している。遺物の出土状況をみると刻み目を持つものが多い。加曾利B 3式段階の遺物である。ほとんど混入と思われる土器はなく、加曾利B 3式の単純地点と考えている。



第29図 S X1418遺構平面図



第30図 S X1423遺構平面図



第31図 S X1243遺物出土状況

### 3 遺物集中域

遺構が伴っていないものや検出できなかった地点で遺物の集中する地点を遺物集中域とした。

#### B区D d リッド：第32図平面図、第33図遺物出土状況

D d周辺の遺物集中域である。大きな風倒木が2基存在しており、遺構が壊されている。土壇や小柱穴があり、竪穴住居の可能性も否定できないが推定プランは引かなかった。遺物出土状況をみると西ノ浜式段階から瘤付土器第2段階までの土器が出土している。明確に時期を特定し得ない。

#### B区東L d グリッド：第34図平面図、第35図遺物出土状況

B区東側の風倒木の北側に位置する。おそらく竪穴住居と推定している。2棟あるのかどうかは懐疑的だが、風倒木北側には1棟は存在すると推測している。主柱穴は明瞭ではないが側柱穴のような小柱穴が巡っており、これを根拠とした。遺物出土状況をみるとほぼ瘤付土器第2段階に限定される。

#### A区中洲状微高地G 7～17グリッド：第36図遺物出土状況

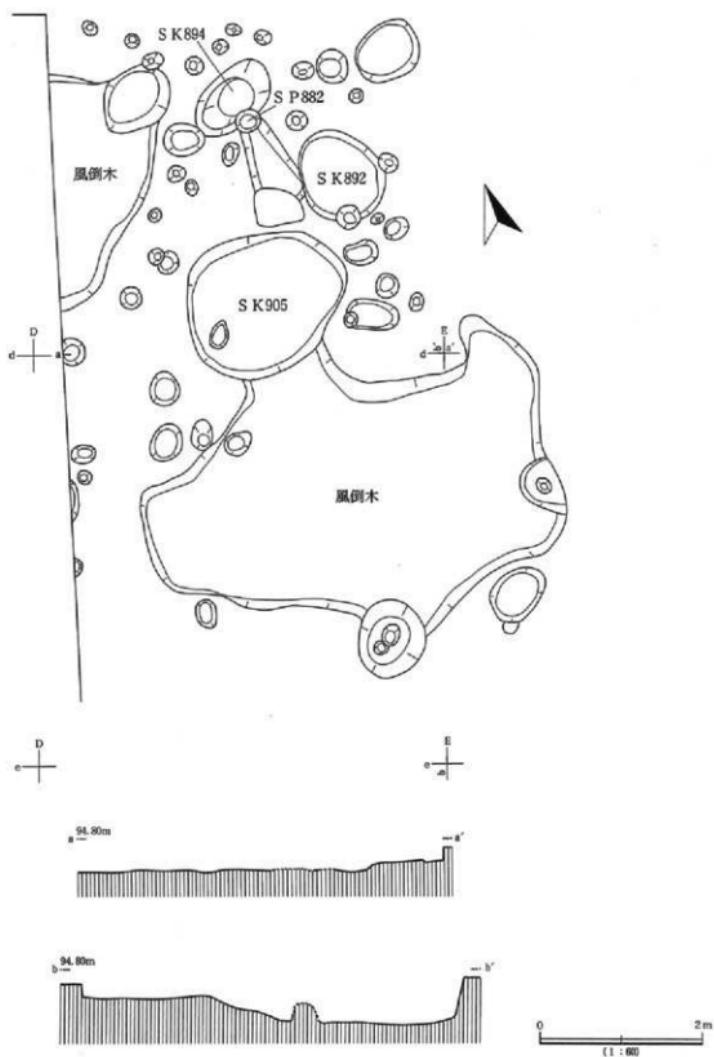
A区南側の中洲状微高地の北端に位置する。かなり遺物が集中していたが地点によって様相が異なる。もっとも遺物が集中しているがG 7・G 6グリッドである。中洲状微高地の北西角にあたる。ここからはほぼ瘤付土器第2段階の土器が集中している。中洲状微高地自体は瘤付土器第2段階の竪穴住居が多く存在しており、それに伴う土器捨て場と考えられる。これ以外の地点からは縄文時代後期中期の土器や対岸の捨て場に多量に存在する縄文時代晚期最終末期の土器が混在している。旧河川の流路の変化に伴い周辺の土器が流れ込んでいる可能性が高い。あまり良好な遺物集中域とはいえない。

#### A区北遺物包含層A15～B12グリッド：第37図遺物出土状況

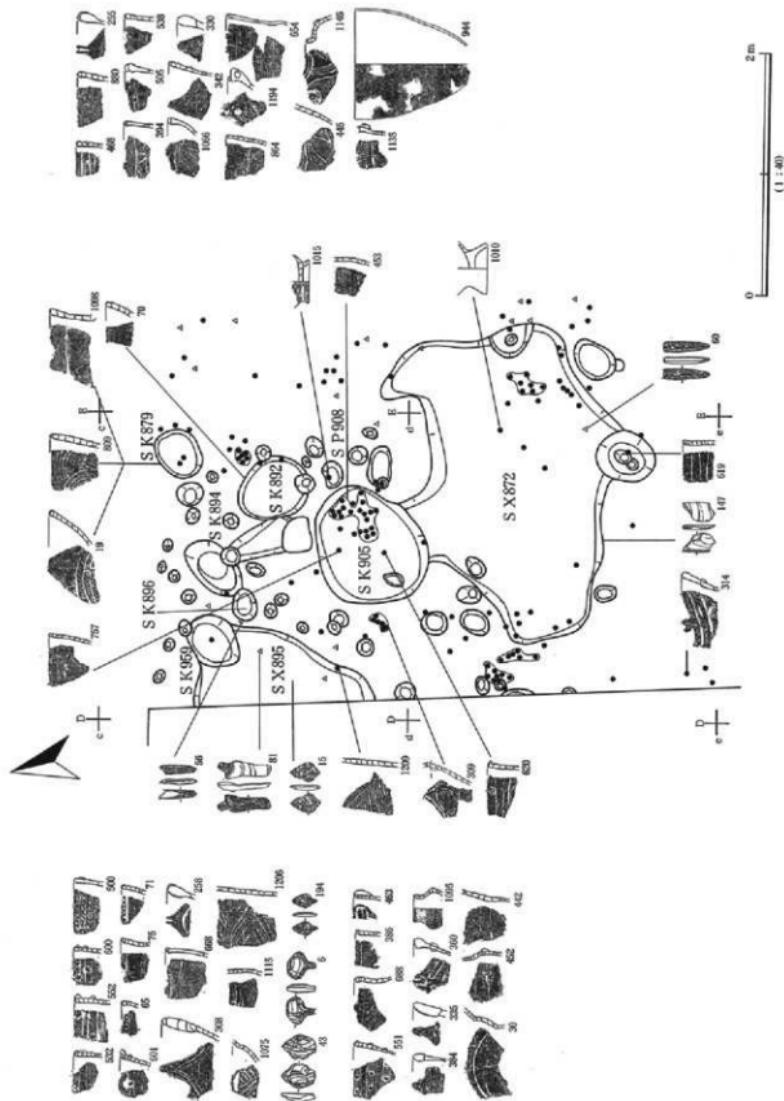
A北側の遺物包含層である。この地点は旧河川跡に近いものの河道そのものではなく、陸地から河道に向けて緩やかに傾斜している部分である。この地点は黒ボク層が厚く、この上から遺構を検出することはできなかった。このため遺物を確認しながら確認面まで掘り下げたが遺構は確認できなかった。遺物の出土レベルをみると確認面から20cm程浮いた状態で出土している。第37図の縮尺が小さいため判別が難しいが、およそ3箇所の遺物集中域に分けることができる。一つがこの地点の北端にあたるA15グリッドである。調査区の北限に接するためごく一部のみしかわからないが、その南隣のA14グリッドとはやや離れている。おそらく一旦切れるものと考えられる。次がA14グリッドである。約5mの円形の集中域となっている。最後がB13グリッドである。ここにはあまり遺物が集中していない。この3箇所のうち特にA14グリッドは遺構の可能性が高い。断面図のb-b'、c-c'をみると地山が西へ行くほど緩やかに傾斜しているが、遺物の出土レベルはほぼ一定している。おそらくここが生活面であり、地山の傾斜との違いはここに遺構があったためではないかと推測している。時期は縄文時代晚期最終末期である。

#### A区北旧河川跡土器捨て場① (D 9グリッド)：第38図遺物出土状況

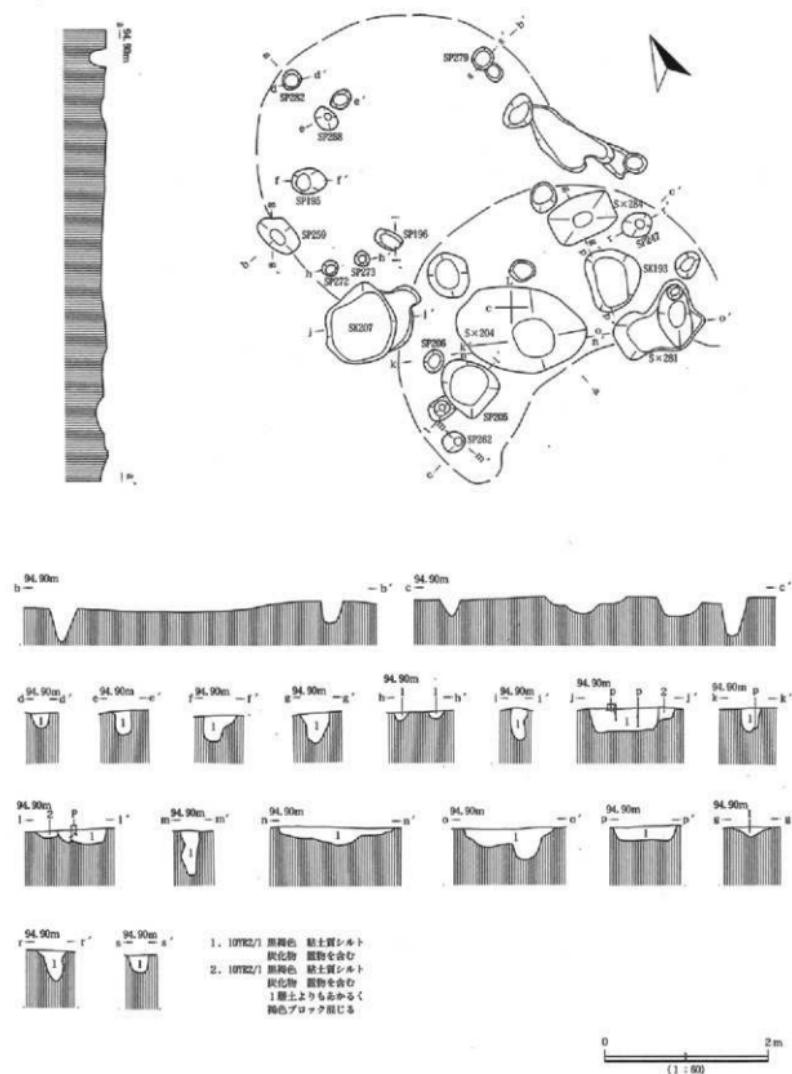
#### A区北旧河川跡土器捨て場② (E 10～G 9グリッド)：第39図遺物出土状況



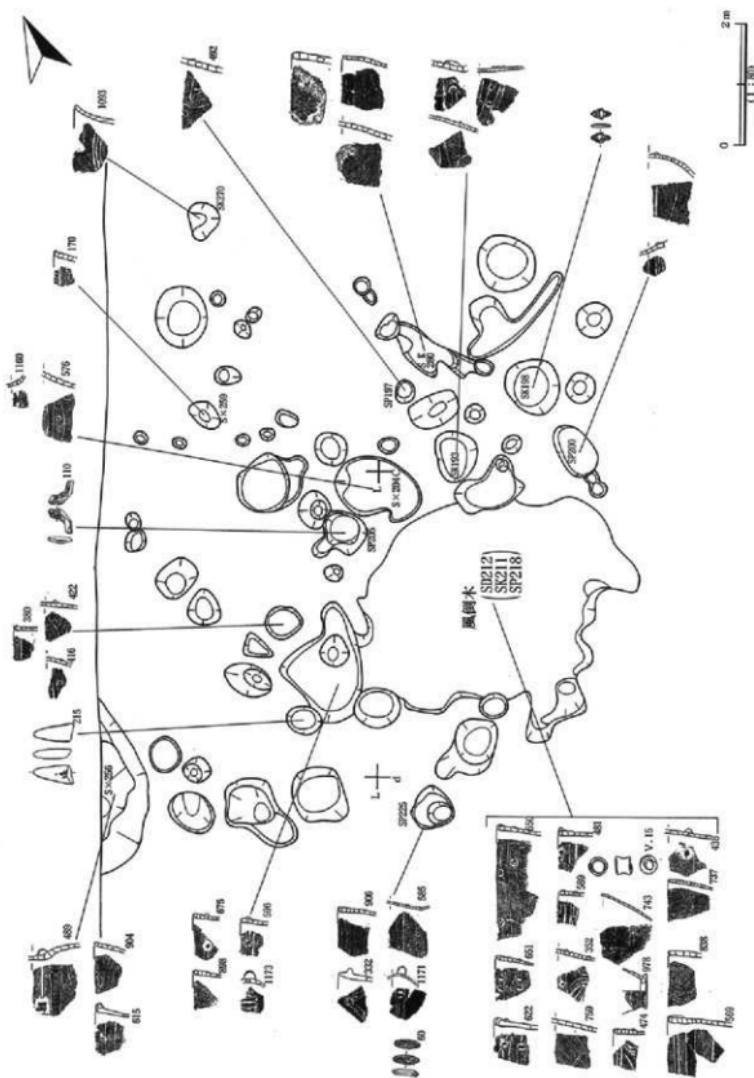
第32図 B区 D d グリッド平面図



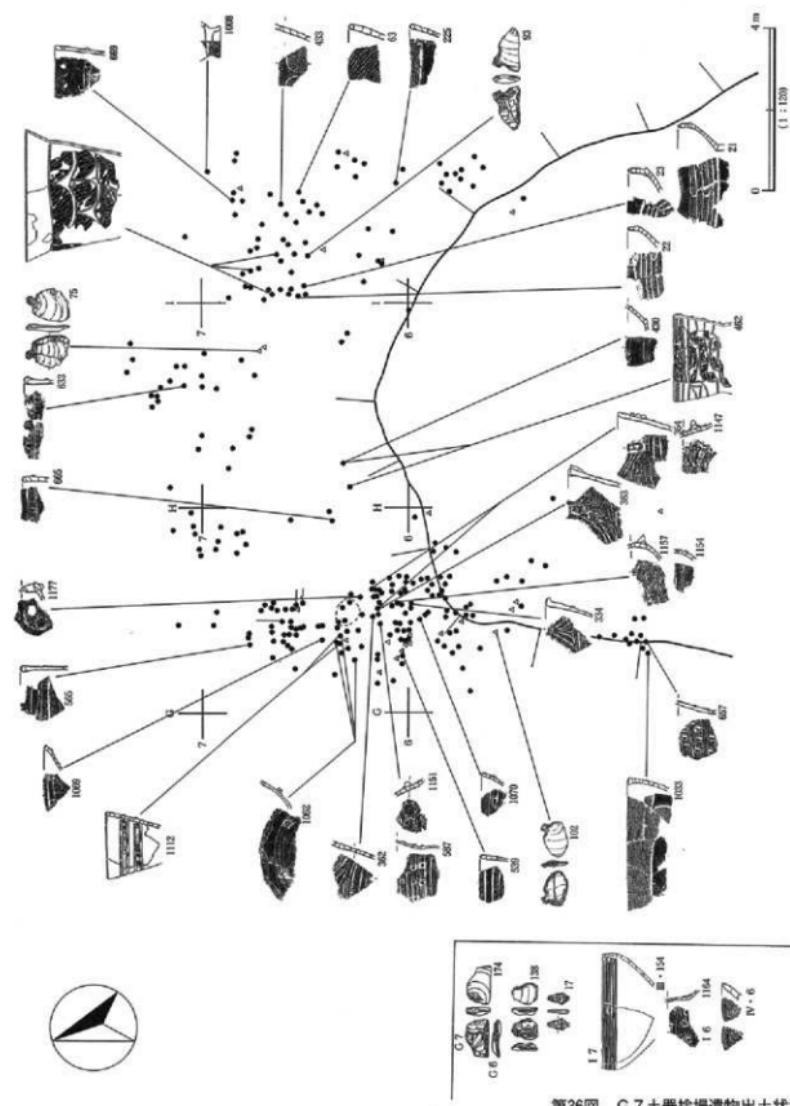
第33図 B区Ddグリッド遺物出土状況



第34図 B区 L c グリッド平面図

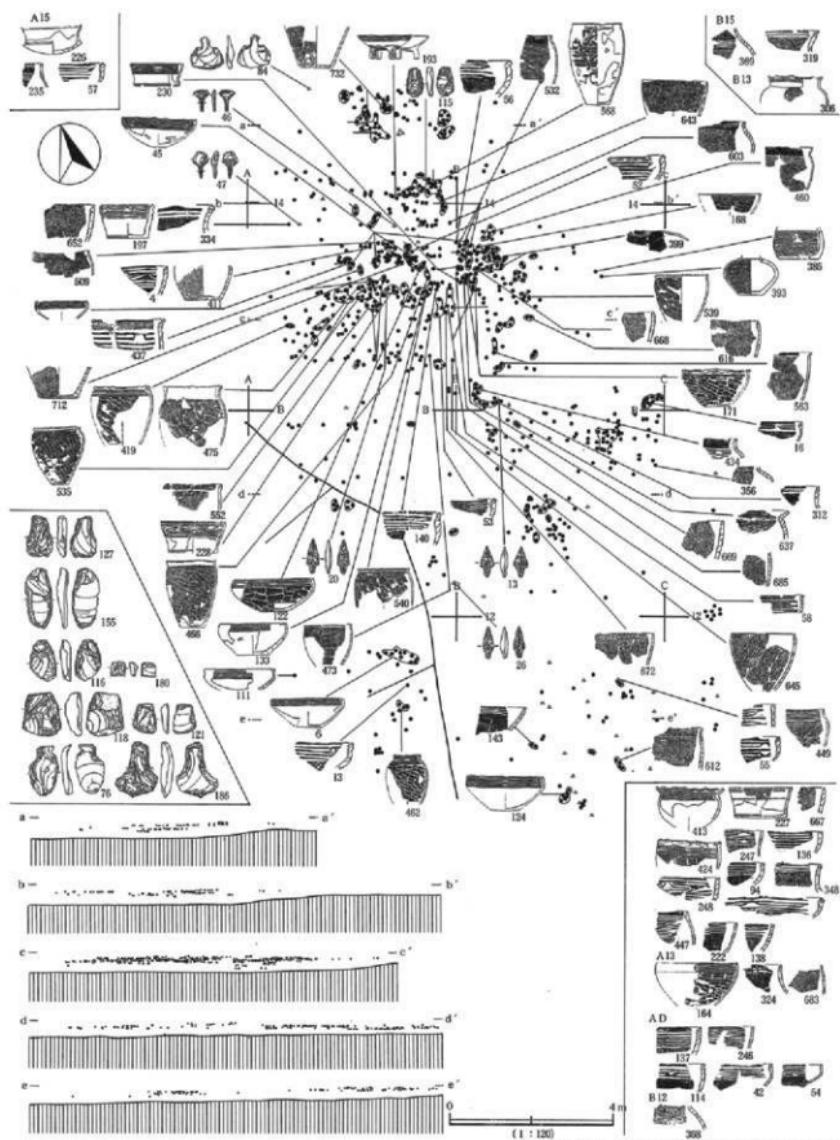


第35図 B区東遺物出土状況



第36図 G7土器捨場遺物出土状況

検出された遺構



第37図 A区北遺物包含層遺物出土状況

**A区北旧河川跡土器捨て場③ (G10～I9 グリッド)：第40図遺物出土状況**

第38図～第40図は旧河川 (SG2) 沿いの土器捨て場である。SG2で遺物が多量に出土した地点はD9からI9の地点で、それ以外の地点からは極少量もしくは全く遺物が出土していない。これはSG2の流路との関係が大きい。SG2の流路を確認すると、A区東側からA区北側に強くえぐり込む。この部分は断面図が後述の第58図にあるが、陸地から河底にかけて急激に落ち込む。おそらくこのために土器が捨てられなかつたのではないかと推測している。旧河道はその後緩やかに南下する。その後D9付近で再び流れを北にかえる。このためD9は岬状の張り出しとなっている。D9より西側はほとんど遺物が出土していない。こうしてみると土器捨て場となっている部分は陸地からの傾斜が緩やかで、D9付近で流れが弱くなる部分であることがわかる。集落で必要とする水の供給地であると同時に土器捨て場・祭祀の場としても利用しやすい場所であったと思われる。遺物の個別の出土状況は後述するが、遺物は全て地山の直上である6層から出土している。時期は縄文時代晚期最終末期である。

**A区北包含層C12～E11グリッド：第41図遺物出土状況**

A区北側の後期の土器の出土状況を参考のため示した。晚期の土器と分別可能である。

**A区南西包含層 (A6～D2グリッド)：第43図遺物出土状況、第44図土層断面図**

A区の南西角にあたるA6～D2グリッドまでの遺物包含層である。ここは非常に軟弱地盤で、遺物包含層もかなり冠水していた。土層断面図の第7層が遺物包含層にあたる。ここからは多量の土器片が出土しており、油脂箱で20箱以上に及ぶ。特に粗製深鉢の破片が多量に出土した。遺物の出土状況は深鉢が上から土圧によって押しつぶされたような状態で出土しており、底部が直立したまま出土しているのがかなりみられた。こうした出土状況からこれらの土器は埋設土器なのではないのかと推測している。つまりこの地点は墓域の可能性が高い。第43図に遺物の出土状況を示したが、ほとんど復元できず、主なものを掲載した。なお記載されていないが、この地点から晚期510の粗製深鉢が逆位で出土している。後述するがこの地点が墓域の可能性が高いこと、新潟県青田遺跡でも縄文時代晚期最終末期の埋設土器が逆位で検出されていることから、これも埋設土器ではないかと考えている。

**4 挖立柱建物跡****S B1420：第47図**

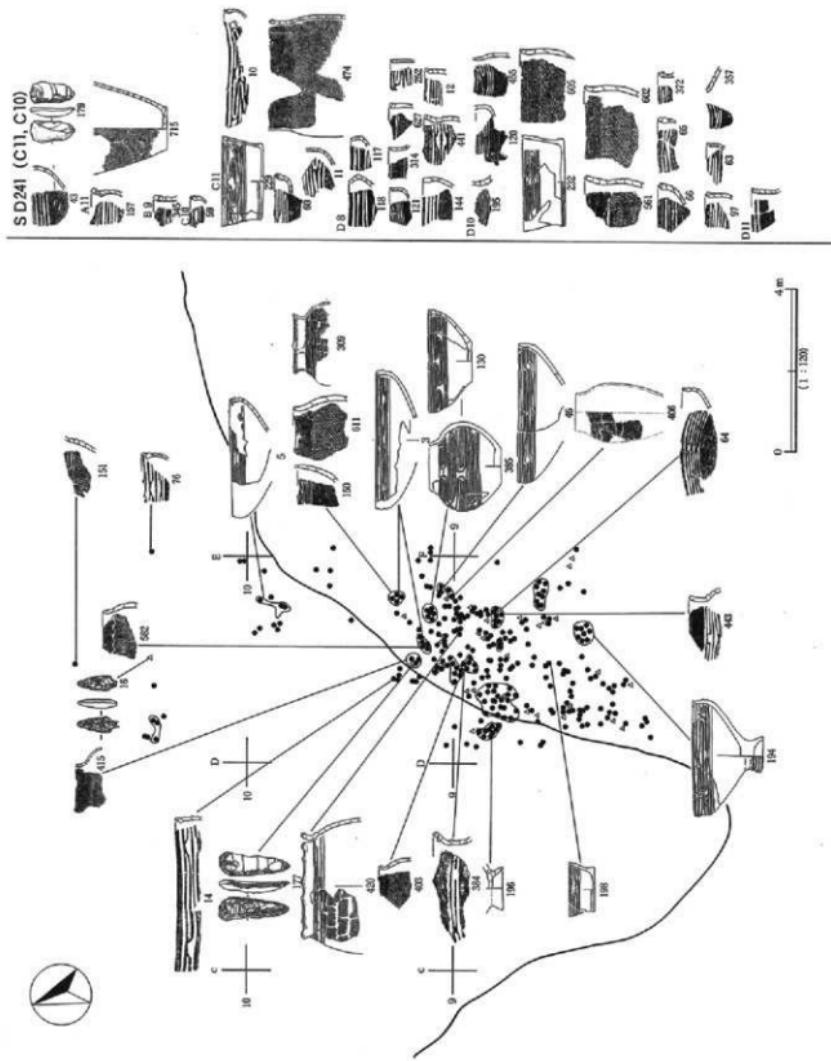
遺構完掘後の空撮写真によって確認された。本当に挖立柱建物跡となるかは不明だが、可能性のあるものとして掲載した。一辺が2～3mの6本柱の亀甲形を呈する。柱穴の深さは約40cmと深い。確認できたものはこの1棟のみで、本遺跡の主体をなすものではない。

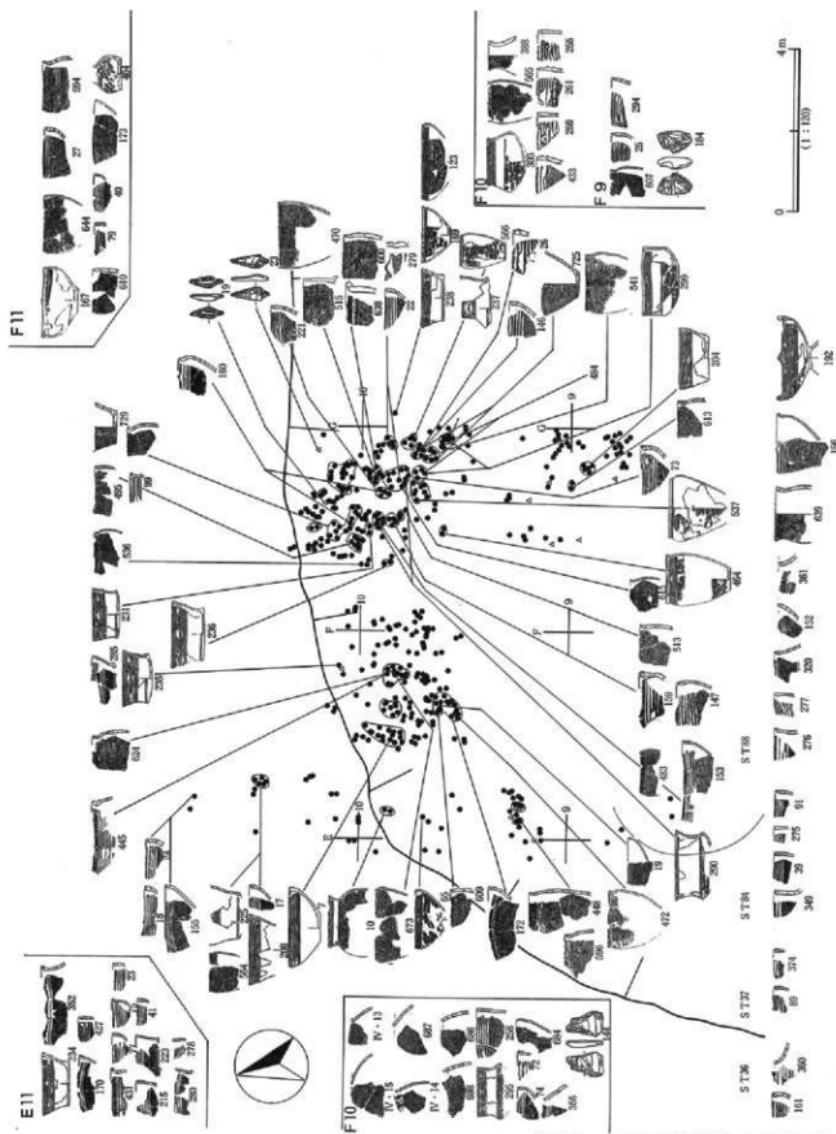
**5 土壌**

遺物の多い土壤を図示した。紙数の都合から代表的なものを説明し、その他は遺構配置図で位置を、遺構平面図で大きさ、深さ、遺物の出土状況を確認されたい。

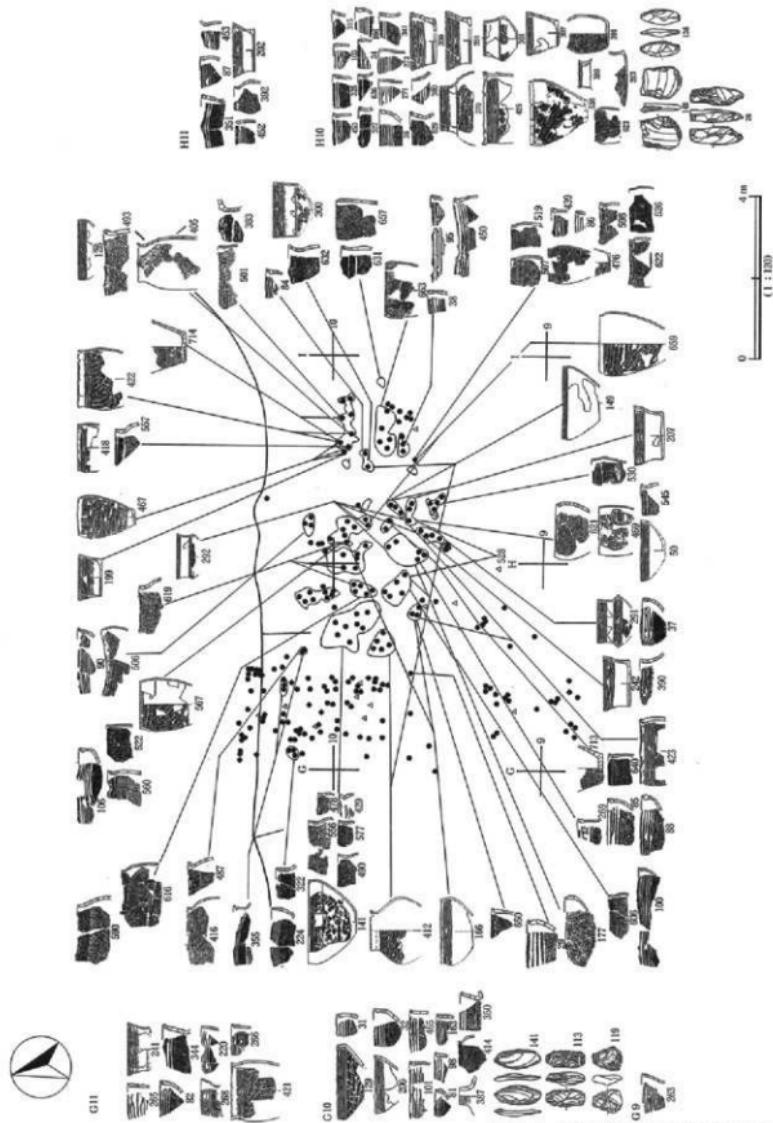
**S K142・S P173：第48図**

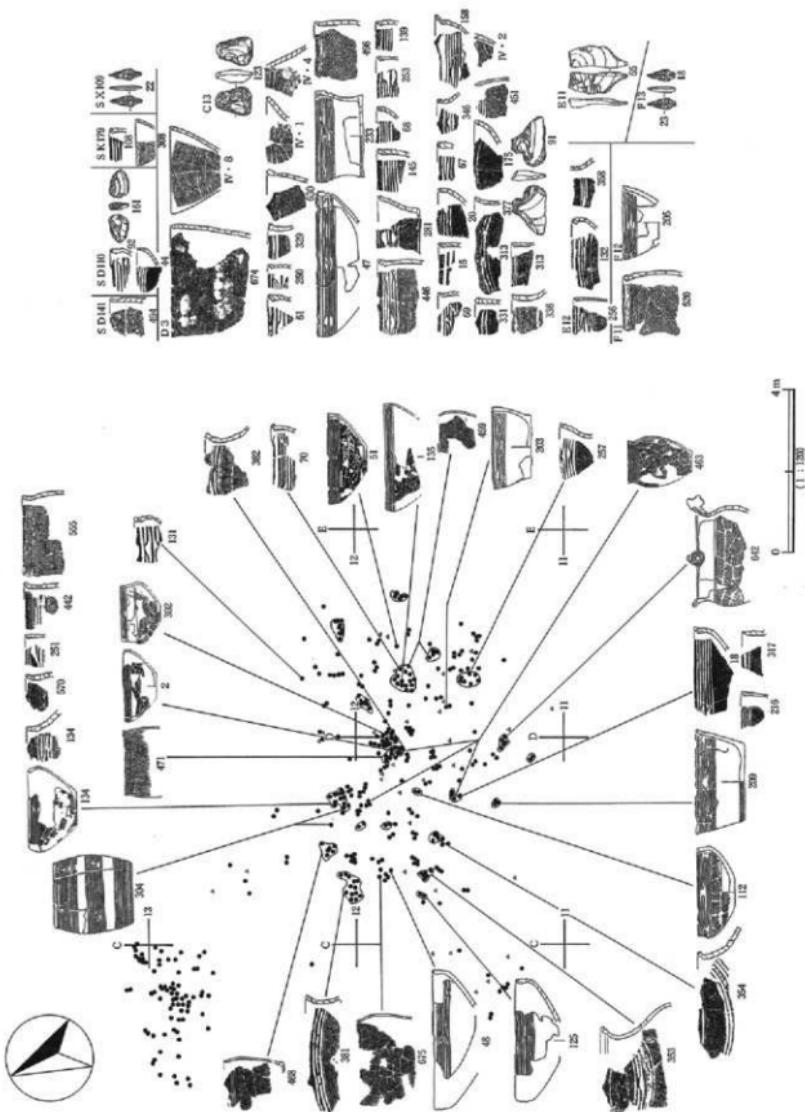
A区北側D14グリッドに位置する。SK142は直径約1mの不整円形を呈する。柱穴の可能性もある。SP173はSK142の北西約2mの地点に位置する。ともに内部から弥生時代中期の



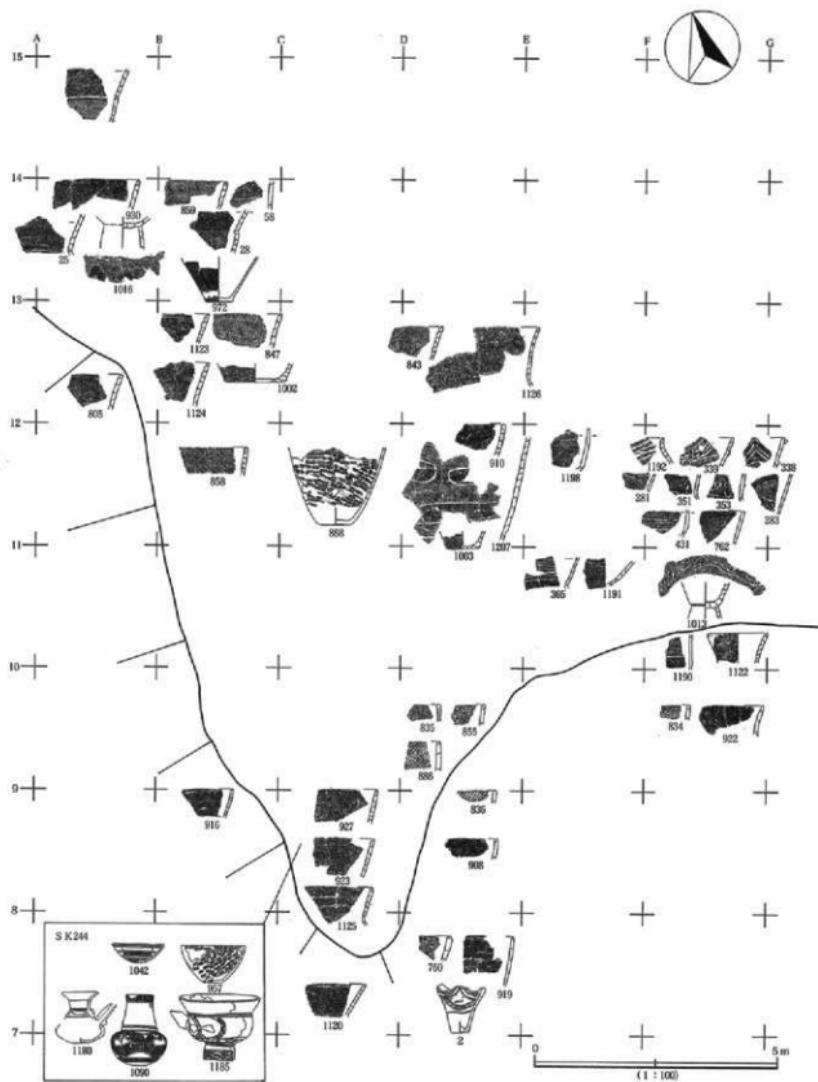


検出された遺構

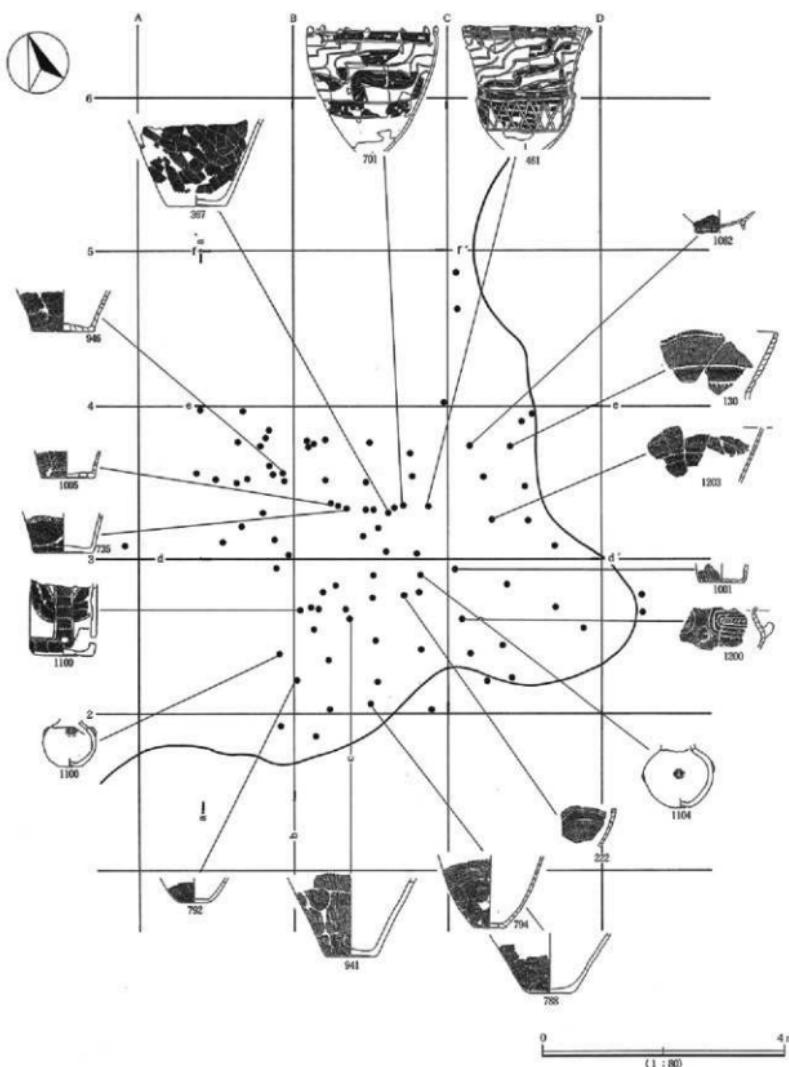




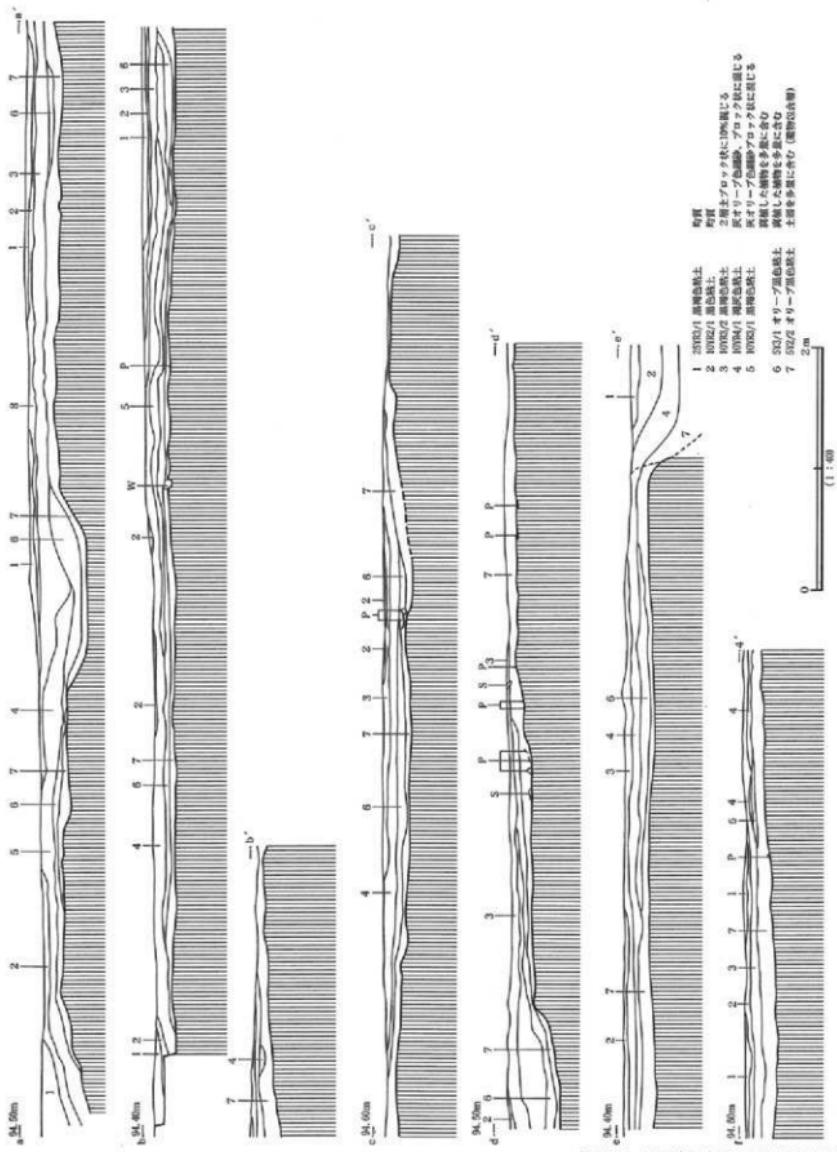
第41図 A区C12グリッド遺物出土状況



第42図 A区北櫛文後期土器出土状況



第43図 A区南西包含層遺物出土状況

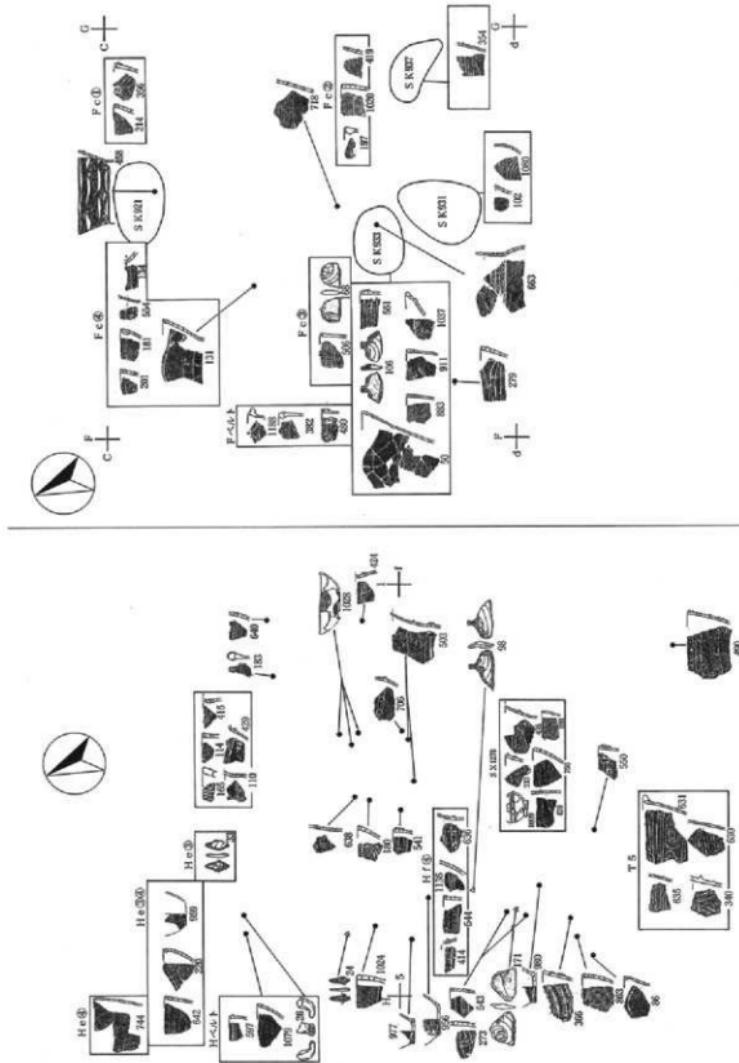


第44図 A区南西包含層断面図

### 検出された遺構

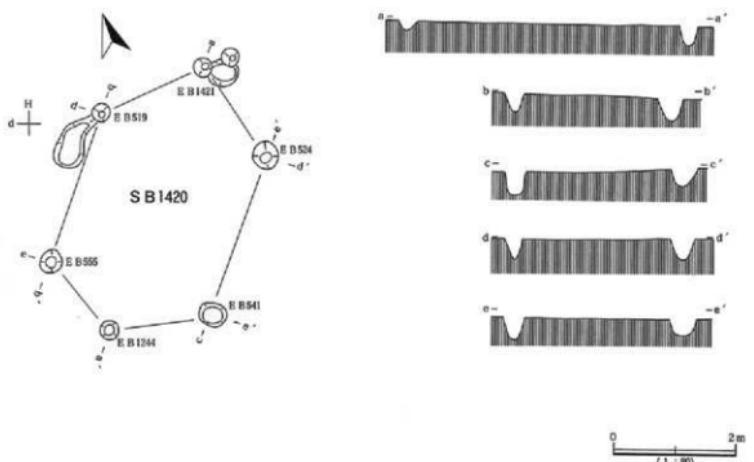


第46図 B区Fcグリッド遺物出土状況

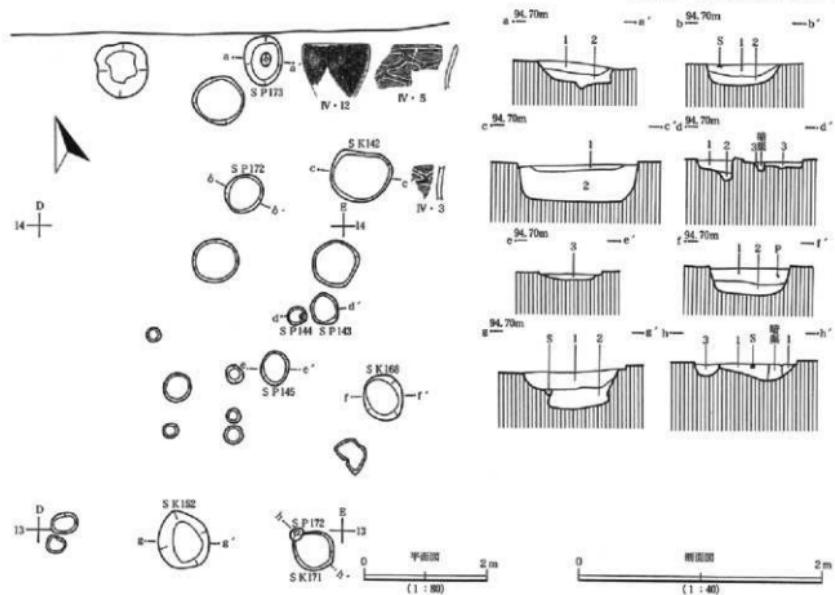


第45図 B区H f グリッド遺物出土状況

検出された遺構



第47図 S B 1420遺構平面図



第48図 S P 142・173遺構平面図

遺物が出土しており、弥生時代の建物跡を構成するかもしれない。ただし組むことのできる柱穴は不明であり、調査区外に存在する可能性もある。遺物は精製土器片1つと粗製土器片1つが共伴している。

#### S K 101 : 第49図

A区北側のC13グリッドに位置する。土壌ではあるが周辺の遺構と関係して別の遺構を構成する可能性もある。南北90cm、東西7.5cmの不整楕円形を呈する。確認面からの深さはもっとも深い部分で26cmを測る。縄文時代晚期最終末期の土器が多量に出土している。

#### S K 244 : 第49図

A区北側のD 9グリッドに位置する。直径約70cmの不整円形を呈する。確認面からの深さは5cmである。断面図中の第2層は掘りすぎである。遺物は縄文時代後期中葉の遺物がほぼ完形で5個体出土している。これらは分離できないような形で出土しており一括遺物である。5個体とも特色のある土器で、赤彩されるものや丁寧に製作されているものもある。また土器の様相が本遺跡周辺ではあまりみられないものもあり、特殊な由来のある土器と思われる。墓壙の可能性が高いと考えている。

#### S K 184 : 第49図

A区北側のE 14グリッドに位置する。一边が13~15mの不整方形を呈する。検出面からの深さは約20cmである。晚期の遺物を主体とするが、後期の土器も出土している。

#### S K 280 : 第50図

B区東のL bグリッドに位置する。溝に切られて不整形を呈するが、本来は円形を呈したものと思われる。内部から瘤付土器第2段階の小型深鉢529の完形品が出土している。

#### S K 1162 : 第50図

B区南のE hグリッドに位置する。不整形を呈するが3基の遺構が切りあっている。中心の小土壙から遺物が出土している。特に縄文時代後期の深鉢156と土偶の脚部が出土している。

#### S K 1218 : 第50図

B区中央のE bグリッドに位置する。直径約60~70cmの楕円形を呈する。縄文時代後期の单孔壺1121がほぼ完形で出土した。

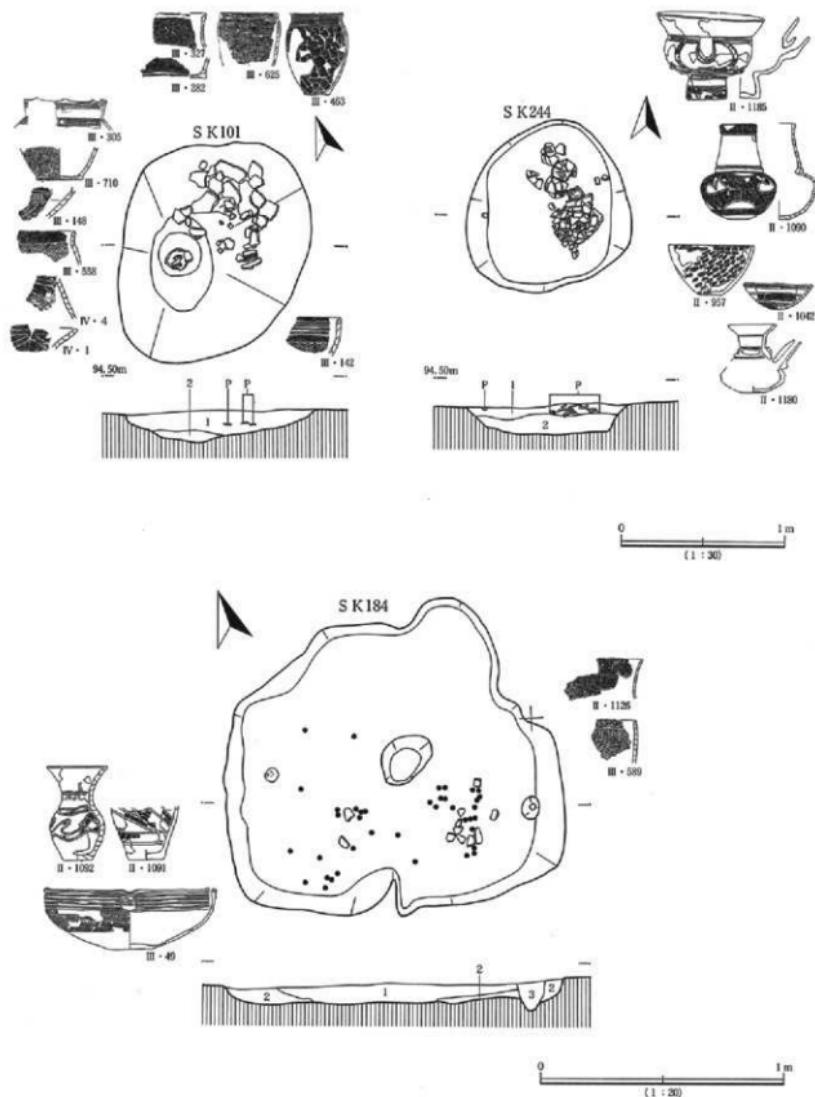
#### S K 236 : 第50図

B区東のL dグリッドに位置する。直径約60cmの円形を呈する。縄文時代後期の溝を切る。内部から縄文時代晚期の浅鉢84が出土している。周辺は縄文時代後期後葉の土器が主体的に出土しているが、縄文時代晚期の遺構もいくつか検出されている。

### 6 埋設遺構

23基確認できたが、良好な状態の19基について図示した。出土位置は第52図に示したので確認されたい。B区西側に偏って位置することが理解できるであろう。基本的には基本層序の第3層から掘り込んでいる。ほとんど全てが正位で直立しているが、土圧などにより潰れているものや、斜位にえらされているものがある。埋設される遺物は粗製の深鉢が多いが精製深鉢を用いるものもある。底部は欠損しているものと残存しているものがある。リン・カルシウム分析

検出された遺構

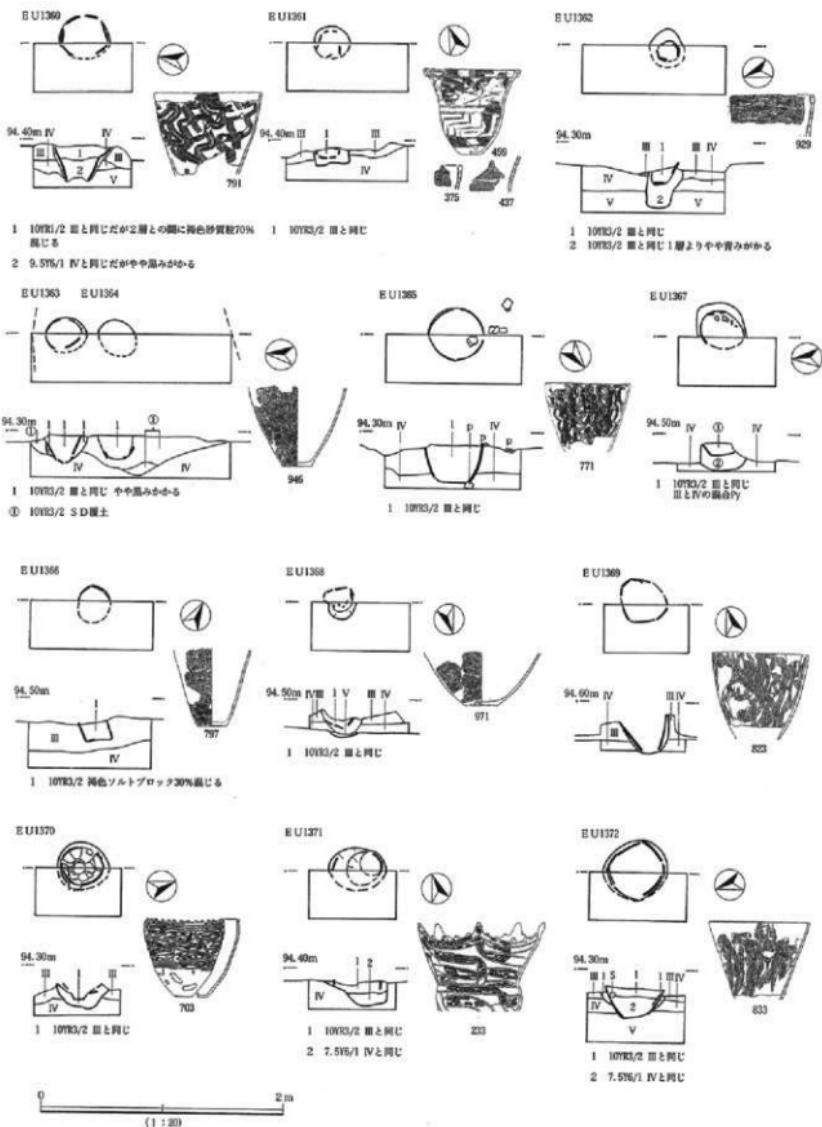


第49図 SK101・244・184遺構平面図

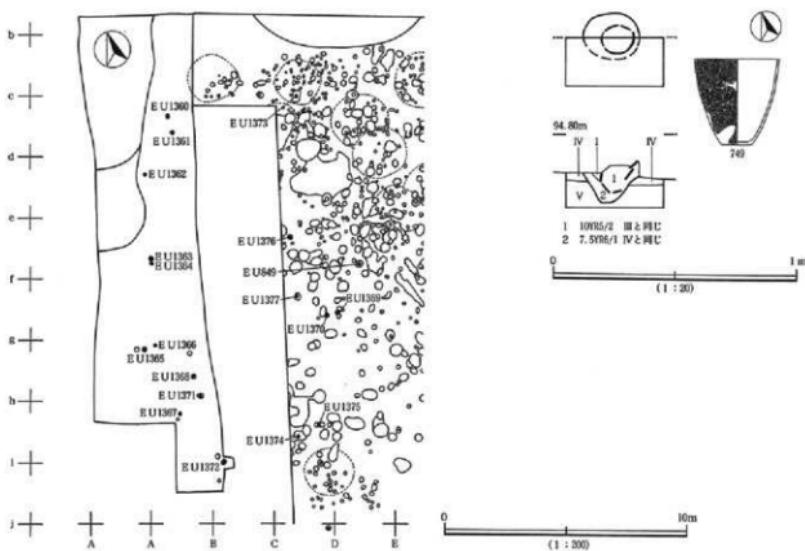
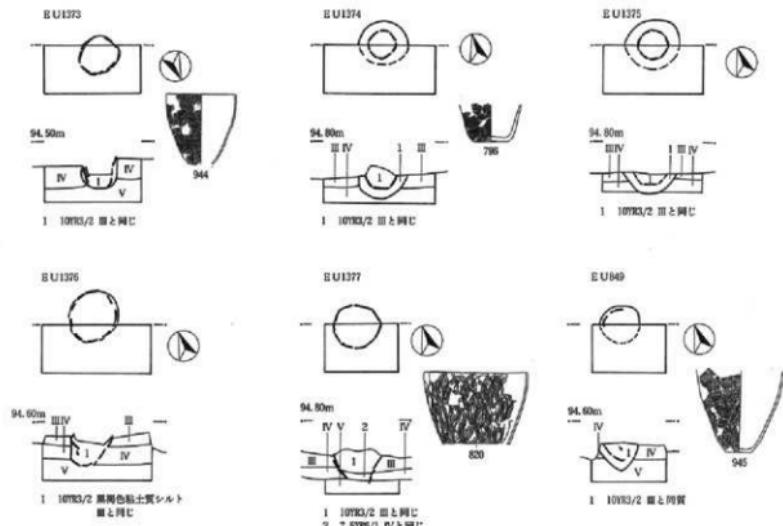


第50図 SK遺構平面図

検出された遺構



第51図 埋設遺構平面図 (1)



第52図 埋設遺構平面図（2）

の結果、これらの成分が検出されたものもあったが、ほとんどは検出されなかつた。時期は全て縄文時代後期のもので、縄文時代晚期の埋設遺構は確認できなかつた。

#### 7 旧河川跡：第53図遺構平面図、第55・56図遺物出土状況

調査区全体を長大な旧河道が東西・南北に調査区を分断している。もっとも幅の広い部分で20mを超える。流路が大きく変化しており、断面図により切り合いを確認した。

S G 1は最も新しい河跡である。幅は狭く約4～5mを測る。覆土は1層でオリーブ黒色を呈し、検出面からの深さは約30cmである。河跡としては浅い。A区東から西に調査区を横断する。覆土には流木などを含むが、おそらく他の河跡に属するものと考えられる。また覆土からは古墳時代の土器高杯の底部が出土しており、時期は古墳時代頃まで下る可能性がある。S G 2が埋没する中で最後に残った部分であろう。

S G 2はもっとも長大な河跡である。幅はかなり広く、約20～22mを測る。確認面からの深さは約1mである。覆土は4層からなるがほとんどグライ化している。第4層は1層にまとめたがその中には何層か葦などの植物遺体を多量に含む層が存在する。おそらく水量が減って葦などが植生する湿地帯となることが数度かあったと推測される。S G 2は当初A区東側から中洲状微高地を回り込むような形で蛇行し、B区の北西へ抜けていく。その後何度か流路の変化があつたが、最終的にはA区北西へ流路を変えたようである。また覆土の第1層は最深部で40cmほどの砂礫層である。おそらく洪水などにより押し出されたものと推測される。こうした砂礫層は本遺跡の旧河道の各所で確認できる。なお旧河道のA区南の中洲状微高地の周辺からはトチの実が多量に出土しているが、灰汁抜きのための晒し場などの施設は確認できなかつた。本河川跡から出土した木は流木で、加工した痕跡は認められなかつた。これまでの発掘事例では晒し場の位置は集落から離れた場所にあることが多く、本遺跡でもやや離れた場所に設置された可能性が高い。周辺は推量が豊富で晒し場の設置には困らないであろう。

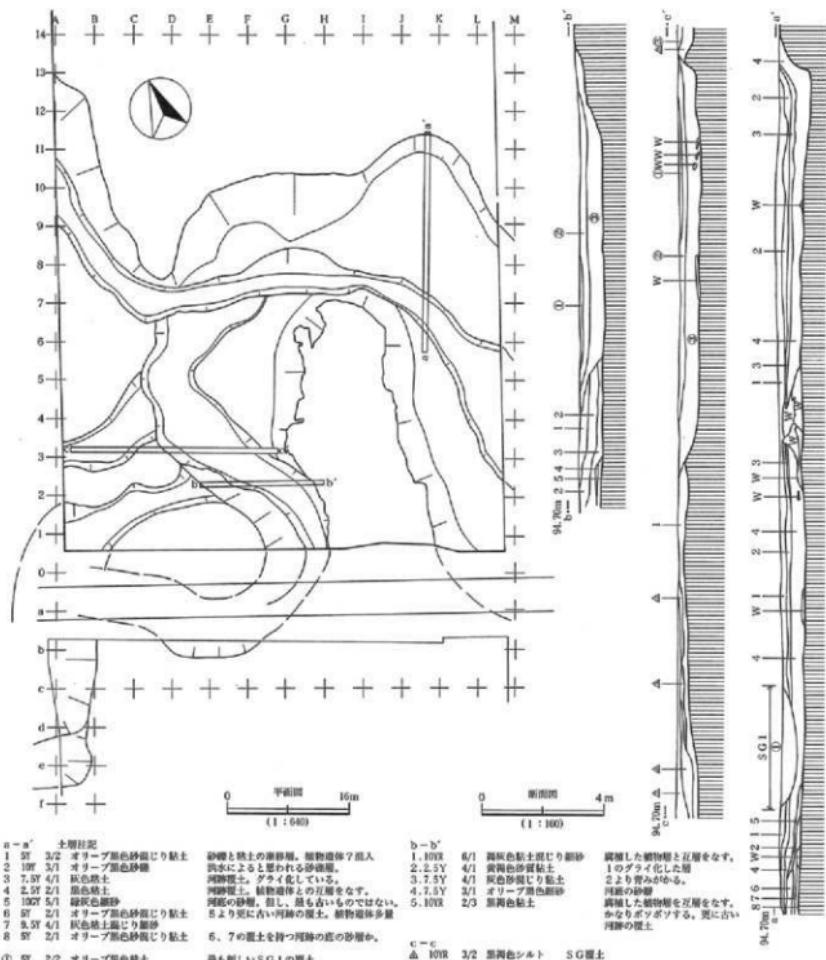
S G 294は、S G 2の流路の変化の一つである。断面からしか把握できなかつたが、S G 2が埋没する中でのこつた部分であろう。川幅は約10mを測る。検出面からの深さは約90cmである。S G 1と接する部分から確認できた。その後A区中央を南下してB区北西角に抜ける。

S G 293は、A区南西包含層の部分を抜ける河川跡である。断面でのみ確認できた。すぐにA区西に抜けてゆき、詳細は不明である。極浅くほとんど窪みにも見える。

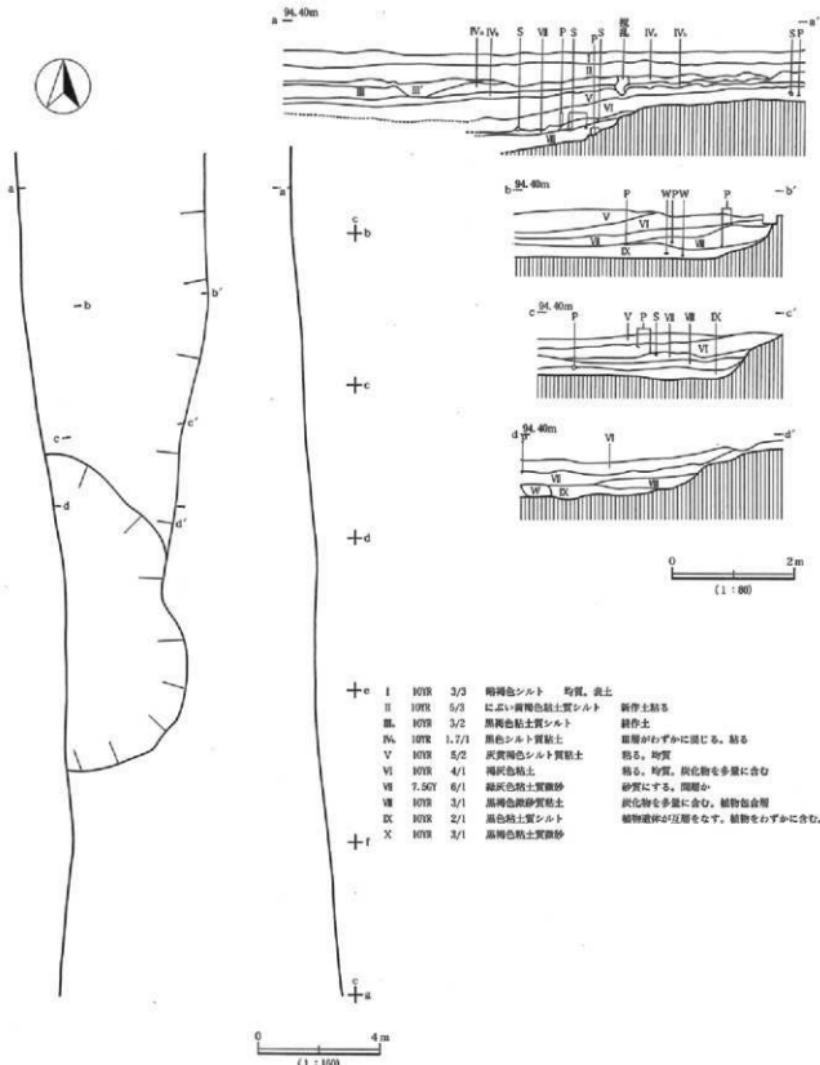
S G 295は、S G 2の一部と思われるが、流路を含め推測の域をでない。

#### B区北西角旧河川跡：第54図

S G 2の一部と思われるが、市道によって調査区が切られ詳細は不明である。川幅は西側の立ち上がりが調査区外のため不明である。検出面からの深さは80cmである。河の立ち上がりは比較的緩やかである。ここからは多量の縄文時代後期の土器が出土している。ただしこの河道は調査終了1週間前に検出され、調査日数の制限から、遺物の取り上げはグリッドと層位のみで出土地点を1点毎に記録することはできなかつた。ここからの土器の出土状況を示したのが第55・56図である。グリッド毎・層位毎に図示してある。これをみると大まかな変遷は辿れるかもしれないが、細やかな変遷を知るには限界がある。参考としてみていただきたい。



検出された遺構

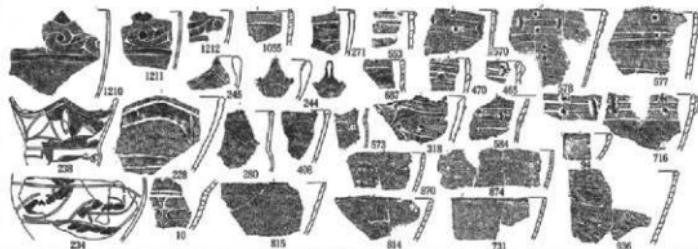


第54図 B区画旧河川跡遺構平面図

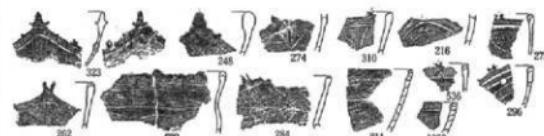
A-a 6層



A-b 6層



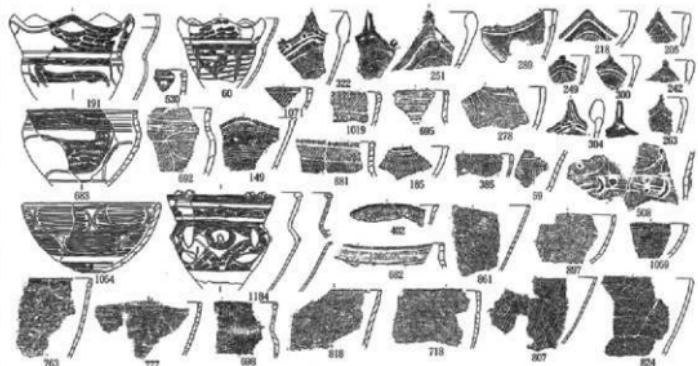
A-b 7層



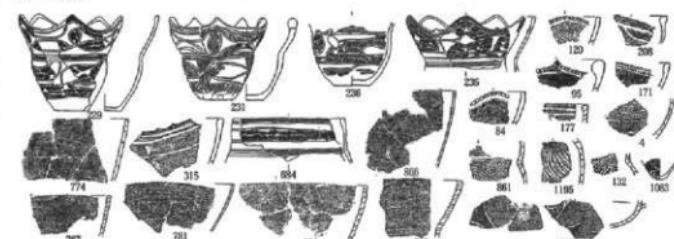
A-a 8層



A-b 8層



A-b 9層



第55図 B区画旧河川跡遺物出土状況(1)

検出された遺構

A-c 5層



A-c 6層



A-d



A-c 7層



A-d 7層



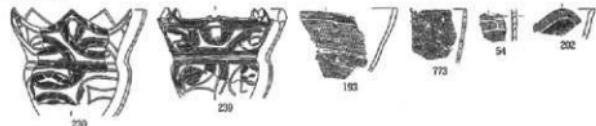
A-c 8層



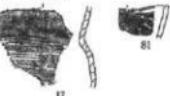
A-d 8層



A-c 9層



A-d 9層



第56図 B区旧河川跡遺物出土状況 (2)

## V 出土した遺物

砂子田遺跡から出土した遺物は2年度にわたる発掘調査で整理用のコンテナに約300箱を数える。出土した遺物は縄文時代を主体とするが、弥生時代・古墳時代・奈良平安時代・中世・近世の遺物も僅少だが出土している。ここでは古墳時代以降の遺物については客観的な出土状況（例えば旧河川跡の流れ込みなどを示す）のみであるため、あえて報告書には記載していない。更に、本遺跡の主体は縄文時代後期中葉から後期後葉前半、縄文時代晚期最終末期に限定されるため記載はその時期を中心に行う。

挿図の記載は、土器について時期毎に記載した後、土製品・石器・石製品について時期毎ではなく一括して記載することとする。なお、本遺跡では縄文時代中期の遺物ならびに弥生時代の遺物・遺構もあるため、記載については古い時代から行うこととする。以下出土遺物の大分類について説明する。

**砂子田第1群：縄文時代中期の土器。**時期は大木8式a・bに比定。大木9・10式は未出土。

**砂子田第2群：縄文時代後期の土器。**時期は関東の加曾利B3式から安行1式に並行する時期に比定。若干加曾利B2式並行の土器を含む可能性がある。複数の型式に分類可能。

**砂子田第3群：縄文時代晚期最終末の土器。**ほぼ大洞A式新段階若しくは大洞A'式古段階に比定。幅を持たせた記述をしているが、時期はほぼ1型式に限定される。幅を持たせたのは学説により同一土器の編年上の位置づけが異なるためである。時期決定については考察において行う。これ以上の型式の細分是不可能であり、必要もないと考えている。

**砂子田第4群：弥生時代の土器。**磨消縄文を施す時期（舟形団式）から平行沈線文を施す桜井式（弥生時代中期）まで幅がある。但し出土数は僅少である。

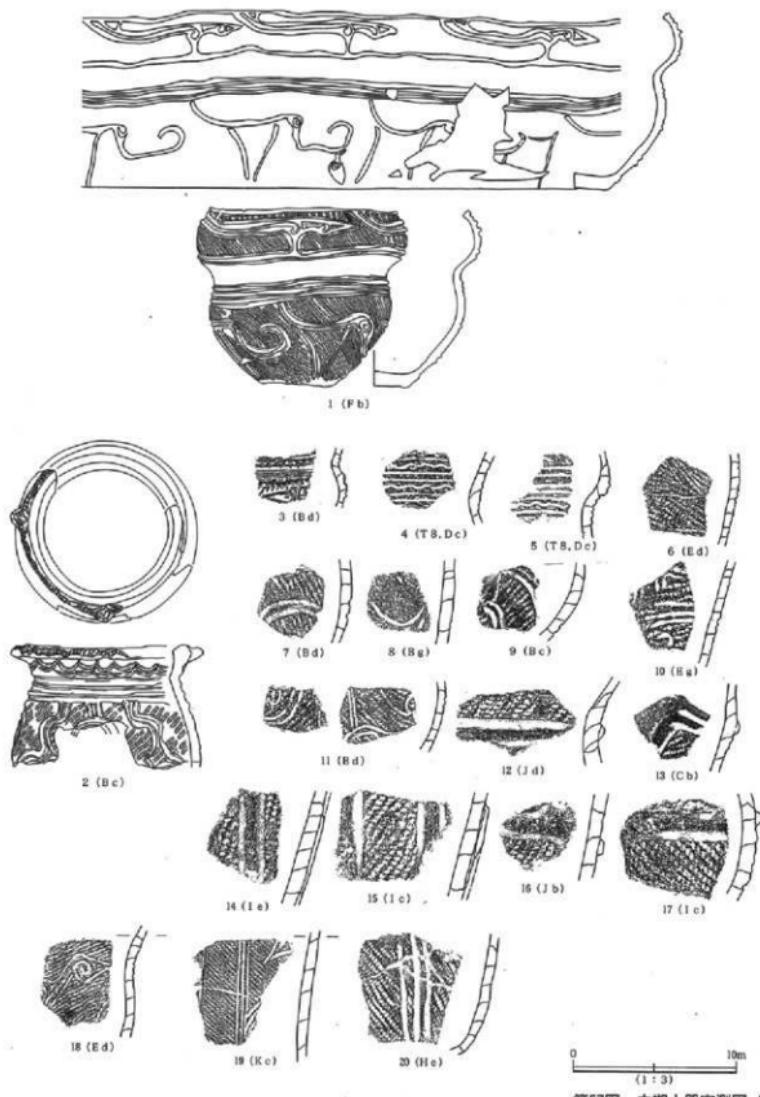
以下に、群毎に説明する。

### 1 砂子田第1群土器：第57図1～第58図34

砂子田第1群土器は、縄文時代中期の土器である。出土量は僅少で、34点の図示となった。

1群土器の出土位置は、ほとんどがB区からの出土である。遺構からの出土はほとんどなく、大部分が地山からの出土である。おそらく砂子田遺跡の縄文時代後期の生活面の下に、旧河道があり、流れ込みではないかと推測している。ただし1のように完形品もあり、再考の余地もある。出土した縄文時代中期の土器の時期は、大木8b式を主とするが、若干大木8a式の土器片も確認できる。

1は、ほぼ完形のキャリバー型の小型の深鉢である。出土地点はB区の地山からで、遺構は確認できなかった。大木8b式に典型的な隆起した渦巻文が見られる。2は、大木8a式の深鉢の上半である。26は、拓影図が適切に表現できなかったが、大型の有孔鍔付土器の鍔部分である。



第57図 中期土器実測図 (1)



第58図 中期土器実測図(2)

## 2 砂子田第2群土器：第63図1～第138図1213

砂子田2群土器は縄文時代後期中葉から縄文時代後期後葉にかけての土器である。

### 2-1 用語の定義及び土器分類の方法

先ず、土器の説明する上で統一しておきたい用語を定義する。

#### 〈土器の選択基準〉

砂子田2群土器に含まれる土器は、収納用のコンテナで約200箱出土した。このうちほぼ全形がわかる完形土器が約150点あった。完形品についてはなるべく実測図を掲載するよう努めた。また破片については出土位置による集中域の検討のため、なるべく小破片でも拓影図として掲載した。この破片の拓影図が約1050点ある。よって砂子田2群土器で掲載された遺物は約1200点となる。

土器の選択基準であるが、小破片については基本的に口縁部を選んだ。ただし一括性の検討のため刻目があるものや瘤の付く土器片については小破片でもなるべく掲載するよう努めた。

#### 〈文様帯の名称〉

口縁部文様帯：口縁部直下に施される文様帯。無文帯・刻み目帯・縄文帯・櫛歯状条線帯などが施される。山内清男の定義するⅠ文様帯である。

頸部文様帯：括れる器形の場合、括れより上部の文様帯を指す。山内定義するⅡa文様帯である。無文若しくは縄文帯の場合、頸部文様帯は「無」と表記する。

括れ部文様帯：括れる器形の場合、頸部と体部の境界に付される文様帯。基本的には口縁部文様帯と同じ文様が施される。少数だが口縁部文様帯と括れ部文様帯が異なるものも若干見受けられるが、過渡的な現象と理解した。

体部文様帯：括れる器形の場合、括れより下部の文様帯を指す。山内定義のⅡ文様帯である。無文及び地文のみの場合、体部文様帯は「無」と表記する。中には地文に格子目状の沈線が惹かれる場合があるが、磨消手法や充填手法による文様とは区別して体部文様帯は「無」と表記する。

#### 〈突起と瘤〉

突起：口端に垂直につくものを突起と呼称する。突起には大突起や小突起があり、形状も中心部を刻みや沈線などにより2分するものがある。

瘤：器面に対して垂直につくものを瘤（コブ）と呼称する。形状では大きさによる大瘤・小瘤があり、また円錐形を呈するもの以外に、縦長瘤・三日月瘤がある。瘤の先端に刻みや沈線などにより2分するものがある。更に瘤の形成技法から見ると単に粘土で作った瘤を器面に張り付けるだけではなく、棒状工具などで器面を刺突後に粘土を削り取りそれを瘤状に盛り上げる掘り起こし瘤や、単に半載竹管を左右から刺突し残った部分を瘤に見立てるものなどがある。

#### 〈本報告における型式名の使用〉

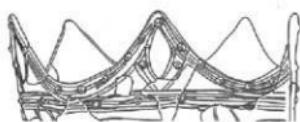
関東の型式名を使用すれば加曾利B3式から曾谷式を経て安行1式に至る時期にあたる。東



ゆるやかな大波状

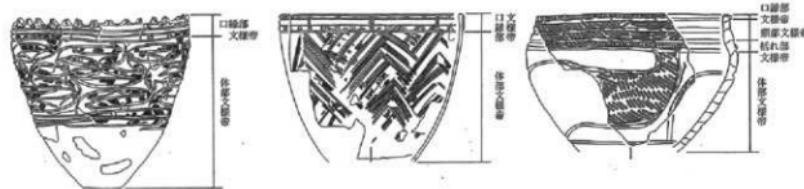
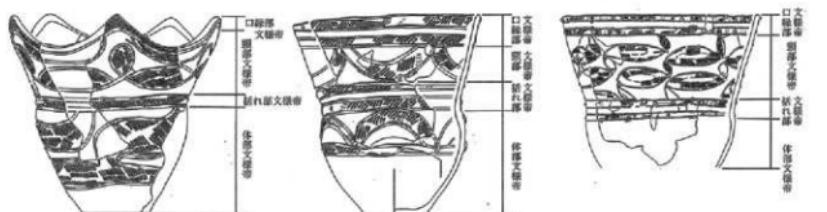


三角状の大波状



弧内な大波状

第59図 後期深鉢口縁形態模式図



第60図 後期深鉢部位名称模式図

北においては型式名が明確には規定されておらず研究史も複雑である。研究史を回顧する紙幅はないので研究史については小林圭一氏の論考を参照されたい。

本報告においては、土器の時期的変遷と組成内容を最後に考察するが、それまで取り敢えず次のような型式名を使用しておく。縄文後期中葉の土器については、これまで東北地方において適切かどうかは別にして、一般に加曾利B式並行という呼び方が多く使われてきた。ここでも「加曾利B 3式並行」と呼称する。曾谷式並行の縄文後期中葉から後葉の時期については小林圭一氏の「瘤付土器第1段階」若しくは後藤勝彦氏定義の「西ノ浜式」を使用する。両者の内容を特に区別はしていないが、瘤付土器の中に田柄貝塚例のような宮城県北例と仙台湾周辺の西ノ浜貝塚例の地域差があることは考慮すべきであろう。縄文後期後葉の瘤付土器の盛行期は前型式同様小林氏の「瘤付土器第2段階」を使用する。型式名としては適切でないものもあり、更に型式名とはいえない小林氏の段階区分と既存の型式名を混在させるという問題点もあるが、行論上での仮称なので許容願いたい。

#### 〈分類基準〉

当該時期の土器は一括資料・遺跡数が少なく土器形式の内容が甚だ曖昧である。また後期中葉の加曾利B 3式並行の土器と曾谷式並行の土器についてはその分離が難しい。よって先ずこれまでの研究で指摘してきた加曾利B 3式並行の土器と瘤付土器の分離のための属性を検討した上で本報告における視座を決定したい。以下にその属性を列挙する。

- ① 器形：深鉢では、当該期を通じて、頸体境で括れる器形が主体となる。
  - ② 口縁形態：加曾利B 3式並行から西ノ浜式までは大波状口縁がほとんどであるが、瘤付土器第2段階からは大波状口縁よりも平縁が主体となる。
  - ③ 口縁部文様帶：加曾利B 3式並行では刻目帯、西ノ浜式から縄文帶が主体となる。
  - ④ 頸部・体部文様帶：加曾利B 3式並行古段階においてはII a文様帶がなくII文様帶を持つ。加曾利B 3式並行新段階から西ノ浜式においてはII a、II文様帶共に持つ。瘤付土器第2段階までこの傾向が続くが、これ以後はII文様帶を欠くものが現れる。
  - ⑤ 瘤状突起の貼付：突起自体は加曾利B 3式に見られ、瘤も壺や注口土器に出現する。西ノ浜式になると大波状口縁の波頂部や波底部に突起が付けられ器面にも瘤の貼付が見られるようになる。瘤付土器第2段階になるとほぼ全てに瘤が貼り付けられるようなる。
  - ⑥ 文様：加曾利B 3式並行においては磨り消し部を主文様とするS字状文やP字状文、更に太目の入組帶状文などが見られるが、西ノ浜式では入組帶状文の幅が細くなり、更にタスキ掛け状文などが主体的となる。瘤付土器第2段階では入組帶状文の多段化が進行し、更に弧線連結文などが現れる。
  - ⑦ 縄文原体：加曾利B 3式並行においては、単節斜縄文や同一原体を異方向に転がす羽状縄文などが見られる。西ノ浜式では単節斜縄文や異種原体による羽状縄文が見られる。瘤付土器第2段階では羽状縄文が廃れ、ほぼ全て単節斜縄文が施される。
- これまで当該期の土器を扱った報告書や論文においては、上記の諸属性を全て満足させようとするあまり複雑な分類となることが多かった。また属性の変化の画期がそれぞれ微妙に異なる

表1 砂子田2群土器深鉢分類表

出土した遺物



第61図 後期土器分類図

り、整合性に欠けていた。もう一点挙げれば遺構の一括土器が少ないと同時に、完形土器が少なく土器全体の文様構成が不明であった。こうした点から当該期の土器群については型式学的な研究も少なくならざるをえなかった。本報告書では、上記のような問題を克服するため分類基準を大きく見直すこととした。よってこれまでの当該期の報告書の分類方法とは異なることとなる。

先ず分類基準となる属性を削減する必要がある。①から⑦までの属性のうち属性変化の画期が明確につかめない④から⑦までを分類基準から外す。特に⑤の瘤の貼付の有無はかなり問題のある属性と考えている。これまでの土器分類では、「瘤付土器」という名称が示すとおり、瘤が付くのが特徴と考えられてきた。しかし瘤が付いても加曾利B3式並行、瘤が付かなくても瘤付土器というように必ずしもその通りでなく、逆に瘤の貼付を第1の分類基準とするとその他の属性に齟齬が生じることとなる。このように⑤の属性を外してしまうとかなり自由な思考が可能となる。更に付け加えれば、後藤勝彦氏設定の西ノ浜式自体が加曾利B3式並行と安行1式並行の土器をつなぐ過渡的性格を持つわけで、瘤の有無にも幅があつて良いのではないかだろうか。

次に具体的な本書における分類基準を述べる。先ず器形で分類する。深鉢・浅鉢・壺・注口土器・香炉型土器に分けられる。深鉢に限って見ると頸部と体部の境で屈曲する器形とそのまま立ち上がる砲弾型のものに分けられる。これに口縁部形態（平線・大波状など）を加えることで大きく分類される。

次の重要な属性として口縁部文様帯と「括れ部」文様帯を設定する。括れる深鉢形を観察すると文様帯構成で次のことが指摘できる。つまり頸部文様帯と体部文様帯は変化に富み、時間の推移と共に変化し、同じ時期の土器でも多様である。これに対して口縁部文様帯と「括れ部」文様帯は時間差による変化以外ほとんど認められない。また基本的に口縁部文様帯と「括れ部」文様帯には同じ文様が描かれる。しかもこの文様は非常にシンプルで変化が少ないため、当該期の土器群を分類する上で非常に安定した属性といえる。なお数は少ないが両者が異なる場合がある。この場合は口縁部文様帯を分類の基準とした。括れ部文様帯の方が口縁部文様帯より変化が少なく、安定している。どちらをとるかで分類基準が異なることになるが、変化の大きい口縁部文様帯をとればより変化を重視した分類となり、「括れ部」をとればより前形式とのつながりを重視した分類となろう。

よって、本報告書における分類の基準は①器形、②口縁形態、③口縁部文様帯とする。

## 2-2 土器分類

ここでは、具体的な土器分類と特記事項の必要な土器について詳述する。本群土器は大きく深鉢・浅鉢・壺・注口土器・香炉形土器からなる。第1表に土器分類表を、第61図に土器分類図を掲載している。

### (1) 深鉢：第63図1～第125図1017

口径よりも器高の大きいものを深鉢とした。本土器群で主体を占めるのが深鉢である。大き

く精製の深鉢と粗製の深鉢に分けられる。精製深鉢は、胴部で括れるものと括れない砲弾型のものに分けられ、それぞれ口縁形態である大波状のものと平縁に分類した。その後、口縁部文様帯と括れ部文様帯により細分している。粗製の深鉢は、地文により細分してある。なお、本土器群の主体から外れるものでも土器分類として一項目おこしているものもある。

深鉢A類：第63図1

底部から直線的に立ち上がり体部上位で「く」の字に外反し口縁部にいたるもの。平縁で、頸部は幅広の無文帯が作り出される。体部には文様帯が配される。1個体のみの出土で、本土器群の主体からは外れる。

1は、頸部と体部の境界に1条の沈線が引かれ、ここで「く」字に外反する。頸部は無文で、よく磨かれる。体部に曲線モチーフの文様が施され、単節斜縄文L Rが縦位に充填される。沈線は太い。A区東部の河川跡の中洲の縁から出土した。流れ込みの可能性も高い。同一地点からは瘤付土器第2段階の資料が主体的に出土している。わずかに3群土器が出土しているが、対岸の縄文時代晩期の捨て場からの流れ込みである。1は、両者とは異質なため同一時期とは考えられない。また、他に同時期と思われる遺物も出土しておらず、現時点では時期の特定はできない。土器の器形・文様から考えると加曾利B式並行の東北地方北部の十腰内2～3式に近いと思われる。

深鉢B類：第63図2

2は底部からやや外反しながら括れずに、直線的に口縁部にいたる。3単位の大波状を呈する。体部中位に1条の沈線が引かれ、上半に文様帯が形成され、下半は無文でよく磨かれる。体部上半の文様は、口縁部沿いに1条の縄文帯が見られ、それをつなぐように同様の縄文帯による円弧文が施される。縄文帯はR Lが充填される。底部はやや上げ底である。

深鉢C1類：第63図3～第66図59

体部上位で膨らみ、一旦括れたのち、花弁状に外に開きながら口縁部にいたる。頸部及び筒状の体部は無文で良く磨かれる。筒状の体部を持つ。文様は体部上位の膨らみの部分に施文される。頸部は無文でよく磨かれ、口縁直下に文様は持たない。口縁形態は緩やかな大波状を呈するが、口縁部の全周する資料がなく、単位数は不明である。3単位若しくは5単位と考えられるが、判然としない。5単位の可能性が高いものと考えておく。体部上位の膨らみ部（文様帯）の上下に区画沈線を施し、刻み目帯を持つものもある。

3は、体部が筒状で体部上位の膨らみに文様帯を持つ。頸部を欠損しており判然としないが、無文で緩やかな大波状を呈すると判断した。文様は磨消部を強調したP字文で、文様部にはL R 単節斜行縄文が施される。膨らみ部文様帯の上下には区画沈線が1条施される。上部の沈線の直下に刻み目が施される。深鉢C1類では、唯一文様が異なるため、同一の分類とするのに抵抗もあるが、現時点はここに分類しておく。

4～24・50は、ある程度文様構成のわかる破片資料である。膨らみ部に文様を持つと思われるものを集めたが、中には膨らみの緩やかなものも存在する。すべて膨らみ部文様に、縄文帯若しくは無文帯を横に切る平行沈線が数条見られる。18・24以外は、更に平行沈線を縦に区

画する沈線が引かれる。文様帶の上下に2条の区画沈線を引き、形成された隆線部に刻み目を施すものも存在する（4・5・9・10・13・18）。文様帶の地文は、単節斜行縄文（4・9・10・13・15・16・20・21～23・50）と羽状縄文（8・11・12・14・17）、無文（7・18）のものがある。

20は、口端に大型の装飾が付くものであるが、欠損により全体は不明である。21～23は同一個体である。頸部無文帶が短く、体部も不明である。しかも23のように何箇所か屈曲する角をもち、全体の形状がうまく想像できなかった。

25～49は、小型の破片で文様構成などが判然としないものである。

51～59は、小型の破片で、文様に縄文を横に切る平行沈線が認められるものであるが、深鉢C1・C2類の分類が困難であったものである。

#### 深鉢C2類：第66図60～64

基本的には深鉢B1に近いが、体部下半が丸みを持って底部に至り、深鉢B1のような筒状にはならない。頸体境で弱くくびれる。口縁形態は緩やかな大波状で、5単位で構成される。頸体境屈曲の直上に狭い無文帶を持ち、頸部は地文のみで文様を持たない。丸みを帯びる体部には文様帶が認められる。文様は縄文を横に切る平行沈線と、更にそれを縦に切る沈線によって構成される。

60は、比較的小型であるが、ほぼ全体の文様構成をうかがえる。口縁形態は5単位の緩やかな大波状を呈す。口端は丁寧にミガキ調整され平坦となる。また口内にかけて肥厚する。口縁部文様帶は存在しない。頸部には文様帶はなく、RL単節縄文が横位に施される。頸体境で弱く屈曲し、頸体境の直上には、狭い無文帶が区画として配置される。体部はRL単節縄文が横位に施され、それを7条の平行沈線が横に切る。更にその平行沈線を2条一対の沈線が縦に切る。この縦位の区画沈線は大波状の波底部に位置しており、大波状の単位数と同様5単位となると推測される。

61は、かなり大型の深鉢である。口縁形態は5単位の緩やかな大波状を呈す。口端はミガキ調整され、口内にかけて強く肥厚する。口縁部文様帶・頸部文様帶ではなく、LR単節縄文が横位に施される。頸体境で弱く屈曲し、頸体境の直上に狭い無文帶が区画される。体部もLR単節縄文が横位に施され、6条の平行沈線がそれを切る。平行沈線はその始まり若しくは終端で上下に屈曲し、平行沈線を切るような文様を描く。

62～64は深鉢C2の破片と考えられる。

#### 深鉢D1a：第67図65～第69図141

器形的には深鉢C2とほぼ同じであるが、口縁部文様帶を持つもの。底部から丸みを持って立ち上がり、頸体境で一旦括れ、その後外傾しながら口縁部にいたる。口縁形態は5単位の緩やかな大波状を呈す。口端はミガキ調整され、口内にかけて強く肥厚する。口縁直下に一条の沈線を引くことによってできた隆線部に、1条の刻み目を施す。頸体境にも口縁部文様帶同様に、1条の刻み目帶が作り出される。頸部文様帶は、地文若しくは無文帶となり、存在しない。体部には文様帶が施されると推測される。

65~89・93・97・100は、深鉢D 1 aのうち頸部文様帯が無文のものである。

90~92・94~96・98・99は、深鉢D 1 aのうち頸部文様帯が無文で、口端に突起を持つものである。95・96のように口縁部文様帯が重なり、突起がねじれるようなものもある。またこれらは突起にも刻み目が施されている。98は、刻み目というより沈線といいたい口縁部文様帯を持つ。また、98・99のように突起の口内側を沈線で2分するものもある。

102~107・109~112は、深鉢D 1 a類の小破片で、文様構成などの推測できないものである。

113~131は、深鉢D 1 a類のうち、頸部文様帯が地文のものである。単節繩文を横位回転させるもの（113~116・118~123・125~127・129~131）、同一原体を異方向に回転させることによって異なる文様効果を狙ったもの（117・128・130）、異原体を横位回転させることにより横位の羽状繩文を施したもの（124）に細分される。

132~141は、深鉢D 1 a類の体部破片である。頸体境に1条の刻み目を確認できることから、ここに分類した。ただし頸部文様帯が判然としないため、深鉢D 3・D 4の破片の可能性を否定できない。

#### 深鉢D 1 b類：第68図101

101は、D 1 a・D 1 b類では、唯一全体の文様構成が確認できる資料である。器形は、深鉢D 1と同じである。口縁部直下に2条の沈線を引くことにより作り出された隆縁部に刻み目を施し、2条の刻み目帯を作り出す。括れ部にも2条の刻み目帯が作り出される。口端はミガキ調整され、内面に強く肥厚する。頸部無文で、体部に平行沈線が引かれ、沈線の始点が「つ」の字を描き、平行沈線を縦に切る。

#### 深鉢D 1 c類：第69図142~163

深鉢D 1 a・D 1 b類と同じ器形で、口縁直下に1条の刻み目帯を持ち、頸部文様を持つもの。破片資料で全体の文様構成のわかるものはなかった。

#### 深鉢D 1 d類：第70図164~190

深鉢D 1 a~D 1 d類と同じ器形で、口縁直下に2条の刻み目帯を持ち、頸部文様を持つもの。全形をうかがえる資料は164のみである。

164は、頸体境で一旦くびれて、その後内湾気味に口縁部にいたる。口縁形態は5単位の緩やかな大波状口縁である。口縁直下に2条、括れ部に3条の区画沈線を引くことにより2条の刻み目帯を作り出す。頸部の残存率が低く、詳細な文様はわからないが、太目の帶状文が施文され、内部に異原体による羽状繩文が横位に充填される。体部文様帯は、太い入組帶状文が施文される。内部は異原体による羽状繩文が横位に充填される。

#### 深鉢D 2類：第71図191~第72図228

深鉢D 1類とほぼ同じ器形で、口縁部文様帯が繩文帯のもの（無文帯のものも含む）。口縁形態は、5単位の緩やかな大波状口縁である。口縁部文様帯が1条の繩文帯である。頸部・体部共に文様を持つ。括れ部には口縁部文様帯と同様に1条の繩文帯を持つ。

191は、口縁形態が5単位の緩やかな大波状口縁である。口縁部文様帯は、L RとR Lを交互に施文している。頸部文様帯は、大波状の波頂部の直下に扇型の磨消部を設け、それ以外は

括れ部直上の区画無文帯まで、異原体による横位の羽状縄文が充填される。括れ部には、口縁部文様帯と同様に1条の縄文帯が作り出される。体部は下半が欠損のため不明だが、おそらく太目の帶状文が施文される。帶状文内部に異原体による羽状縄文が充填される。

194は、口縁部文様が無文で、大波状の波頂部と波底部に突起が付く。口端の突起を除けば口縁形態は平縁に近い大波状となり、口縁部文様帯も1条であり、深鉢D2類の一種と理解した。単位は5単位である。頸部文様帯には太目の入組帶状文が連結した文様が配置される。

192・193は出土位置も近く、同一個体の可能性がある。192は体部資料であるが、文様も判然としない。193は、頸部資料である。緩やかな大波状を呈し、口縁直下に狭い無文帯が配置される。194同様に、刻み目・縄文の代わりに無文帯を配したものと理解した。頸部上半には幅の広い縄文帯が認められるが、文様は判然としない。括れ部文様も不明である。

195・196は同一個体であるが、未接合資料である。196が頸部から口縁部にかけての資料である。口縁形態は、緩やかな大波状を呈し、口縁直下に1条の沈線が引くことによって作り出された隆線部に1条の縄文帯が配される。縄文帯には異原体による羽状縄文が充填される。括れ部文様帯は円弧状の文様が組み合わされ、口縁部文様帯と同様に異原体による羽状縄文が充填される。括れ部文様帯はほとんどが欠損しているが、わずかに残った部分から推測すると、口縁部文様帯と同じく1条の縄文帯が配される。括れ部直上には比較的幅広の無文帯が配される。195が体部資料であるが、まったく接合しなかった。195から判断すると、体部文様にはおそらくタスキ掛け状の文様が描かれ、内部には異原体による羽状縄文が充填される。

197～228は、深鉢D2類の口縁部の破片資料である。小さな破片では、次の深鉢E1と区別の困難なものもあり、若干の異同があるかもしれない。基本的には、大波状口縁の波頂部が緩やかに曲線を描く。また、断面の形状も刻み目帯を持つ深鉢D1と同じようなものが多い。また沈線の掘り込みが深く明瞭である。中には大波状の波頂部に突起の付くように見られるものもある(205・218)。施文される縄文をみると、多くがL R若しくはR Lの単節縄文が多いが、中には異原体による羽状縄文のものもある(198・207・215・228)。また、221・227は同一個体である。

228は破片資料でもっとも大きく、頸部文様の構成がよくわかる資料である。口縁形態は緩やかな大波状を呈し、口縁直下に1条の縄文帯を持つ。縄文帯は、異原体の羽状縄文が充填される。頸部文様帯は太い帶状文が施文され、異原体による羽状縄文が充填される。注目すべきは164との類似点である。228は頸部文から口縁部までしかないが、口縁形態・頸部文様帯・異原体による羽状縄文など共通する部分が多い。唯一の大きな相違点は、口縁部文様帯が164が2条の刻み目帯であるのに対して、228が1条の縄文帯であることである。器形・文様などの構成から、この2個体は同一時期の所産と考えている。

#### 深鉢E1類：第73図229～第79図295

土器の数量から見ると、本遺跡の主体となるタイプの一つである。底部から丸みを帯びながら立ち上がり、頸部境で一旦括れる。その後やや内湾気味に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁形態は、5単位の三角状の大波状を呈する。前掲の深鉢D2類と区別の困難なものもあるが、

大波状の波頂部の先端が三角状のものを選んだ。口縁部は口内に肥厚するものが多い。また口端に突起の付くものも見られる。口縁部文様帶は1条の縄文帶からなる。頸部には、充填縄文による比較的細目の入組帶状文やタスキ掛け状文などが描かれる。括れ部文様帶には口縁部文様帶と同様に1条の縄文帶が配される。体部文様帶は、頸部同様に細目の入組帶状文やタスキ掛け状文などが描かれる。沈線は浅く、縄文の原体も細く、はつきりしないものが多い。基本的には器面に瘤は貼付されない。

229は、全体の1/2が残存している良好な資料である。口縁形態は三角状の大波状を呈し、口内に強く肥厚する。突起はない。口縁部文様帶に1条の縄文帶が配される。原体はR L 縄文である。頸部には梢円形を組み合わせた入組文を描き、R L 単節縄文が充填される。括れ部文様帶は、口縁部同様1条の縄文帶である。口縁部・括れ部の縄文帶はかなり狭い。体部は太目の帶状文が描かれ、R L が充填される。体部下端にも太目の区画縄文帶が1条描かれる。体部文様が太く、やや古い印象を与える。また頸部文様帶が、体部文様に比べて狭く、これもやや古い印象を与えている。

230は、残存率は1/5ほどであるが、全体の文様構成がわかる資料である。口縁形態は三角状の大波状を呈し、口内にやや肥厚する。突起はない。口縁部文様帶に1条の縄文帶が配される。原体はL R 単節縄文である。頸部にはタスキ掛け状文を描き、L R が充填される。頸部中位に、一箇所穿孔が見られる。括れ部文様帶は、口縁部同様1条の縄文帶である。口縁部・括れ部の縄文帶はやや幅広である。体部はやや太目の入組帶状文が描かれ、L R が充填される。

231は小型の深鉢で、全体の1/2が残存する。口縁形態は、三角状の大波状若しくは、緩やかな大波状に突起の付く形態である。非常に悩ましい個体である。或いは前掲の深鉢D 2としてもおかしくないが、あえて深鉢E 1類とした。口縁部文様帶は1条の無文帶であるが、E 1類の指標である1条の縄文帶の一種と理解した。頸部文様帶は太目の弧線連結文と、それを縦に連結した梢円形の文様からなる。文様内には異原体による羽状縄文が充填されるが、器形が小さく文様が狭いためか羽状を呈する部分はほぼない。括れ部文様帶には1条の刻み目帯が施される。口縁部文様帶と括れ部文様帶が異なり、さらに刻み目帯が見られる。口縁形態を含め、悩ましい個体である。体部には入組帶状文が施文され、体部下半に1条の区画縄文帶が配される。この縄文帶の下端には区画の沈線は見られず、ケズリ調整される。

232はかなり大型の深鉢で残存率は低いが、全形把握のため全体を復元した。口縁形態は三角状の大波状で、波頂部に突起がつく。口縁部文様帶は1条の縄文帶で、L R 単節縄文とR 無節縄文による羽状縄文が充填される。頸部には細目の弧線文が波状に沿って描かれ、波頂部直下で縱位の対向する弧線文によって連結される。頸部下位には頸部文様帶を区画する1条の縄文帶が存在するが、括れ部文様帶とは區別した。括れ部文様帶は、1条の縄文帶である。体部はほとんど残存しないが、残った部分からやや太目の帶状文が描かれ、下端で折り返すものと理解した。

233は大型の深鉢で残存率は低いが、全形把握のため図上復元した。口縁形態は5単位の大波状で、波頂部に大型の突起がつき、波頂間に小型の突起が5つ見られる。波頂部の大突起は

口内側に隆線が2本めぐる。また突起の先端にさらに小型の突起がつけられ、2段構成となる。波頂間の突起は、口内側に沈線が引かれ2分される。口縁部文様帶は、一見2条の縄文帶に見えるが、下の縄文帶は口縁部文様ではなく頸部文様の一部と判断した。頸部文様の始点が上の縄文帶に接続し、下の縄文帶を切っているからである。縄文帶はLR単節縄文からなる。頸部文様帶は左から右に流れる入組帶状文を基本としている。さらにそれぞれの入組帶状文を横に連結する帶状文が描かれる。入組帶状文内部にはLR単節縄文が充填される。頸部文様は他の個体と比べて違和感がある。山形県及び宮城県仙台湾周辺で見られる単純な入組帶状文ではなく、どちらかといえば宮城県北から北で見られる文様に似ている。括れ部文様帶は1条の縄文帶である。体部は上半の一部しか残存しないが、タスキ掛け状文が描かれるようである。

234～237は体部から底部にかけての資料である。括れ部に1条の縄文帶が確認される。深鉢E1は、口縁部文様帶と括れ部文様帶の1条の縄文帶を指標としているため、これらの資料も深鉢E1とした。234は体部に入組帶状文が確認できる。RL単節縄文を充填している。235は体部のタスキ掛け状文が確認できる。異原体による羽状縄文を充填している。236は体部に磨消部強調のS字状文が描かれる。括れ部・体部ともにLR・RLの異原体による羽状縄文が充填される。沈線は深く明瞭である。これらの特徴は本類よりも古手の土器に見られるが、口縁形態が不明なことから本類に入れた。237は口縁形態が不明だが、頸部にタスキ掛け状文、体部に入組帶状文の折り返すものが施文される。RL単節縄文を充填する。

238～240は、分類に問題のある資料である。

238は口縁形態が4単位の大波状口縁を呈し、口内に強く肥厚する。波底部に突起がつき、この突起は口内側が沈線によって2分される。口縁部文様帶は1条の櫛齒状条線帶である。頸部には弧線文が描かれ、内部に櫛齒状条線文が充填される。括れ部文様帶は、括れ直上の文様帶をそれとすれば、櫛齒状条線帶となる。ただしこれは頸部文様帶の一部とも考えられ、その場合、括れ部文様は無となる。体部は欠損により詳細は不明だが、入組帶状文のような文様が描かれる推測される。内部は櫛齒状条線文が充填される。大波状口縁が4単位であるものはほとんど無く特異といえる。また口縁部文様帶の櫛齒状条線帶は、縄文帶の一種と理解した。本類とするには特異だが、器形や文様構成から本類と判断した。

239は口縁形態が平縁若しくは三角状の大波状に突起がつくもので、単位数が4単位のものである。突起間に二山状の平坦部が作り出される。またこの突起と二山状の突起の間にも頂部を沈線で2分した突起がつく。口縁部文様帶も1条の縄文帶か2条なのか判断に迷う。本土器群の場合口縁部文様帶と括れ部文様帶は同じ形狀になるため、括れ部を確認すると2条の縄文帶とその間に無文帶に入る形狀をしている。改めて突起直下の口縁部文様帶を見ると2条の文様帶とその間に無文帶が見える。頸部文様帶には基本的にタスキ掛け状文が描かれているが、その間に半円状の弧線文が描かれる。体部は入組帶状文が2段となっている。縄文帶はLR・RLの異原体による羽状縄文が充填される。口縁部文様帶がこれまでの分類基準と一致せず、判断に苦しむが、タスキ掛け状文や入組帶状文などが見られる点、突起間にも突起が配置されること、異原体による羽状縄文が見られることなどを勘案して、本類に分類しておく。

240は、平縁若しくはそれに近い大波状口縁に突起が付いたもの。単位数は4単位である。突起は四角柱を呈する。突起間には頂部が沈線で2分される小突起がつく。口縁部文様帯は1条の無文帯で、括れ部文様帯も同様である。1条の縄文帯の一端と理解した。頸部文様帯はハの字状に連結した入組み文で、異原体による羽状縄文が充填される。体部文様帯は詳細は不明だが、円弧状の入り組み文で、内部に櫛齒状条線文が充填される。頸部と体部の文様帯で充填される原体が異なることは珍しい。

241～295は深鉢E 1の破片資料である。241～280・284・289が口縁部資料である。口縁部に1条の縄文帯を持つものを無作為に集めた。多くが突起を持つ。突起には大波状の波頂部と区別のつかないもの(241・242・254)、棒状の突起の付くもの(245・248～253)、棒状の突起の口内側が沈線で2分されるもの(243・244・246・237・267)、突起の先端が沈線で2分されるもの(255～258・262)がある。また波底部や波頂間の突起はほとんどが頂部や口内側を工具により2分されている(268～272・277・280・284・289)。他に器面に瘤の付くもの(259～261)や、口縁部文様帯の1条の縄文帯の代わりに櫛齒状条線文が充填されるものがある(263～267)。281～283・285～288・290・291・293・294は体部の破片である。これだけでは判断できないものもあり、他の分類に入るべきものもある(286・295)。

#### 深鉢E 2類：第80図296～第81図323

器形的には深鉢E 1とほぼ同じで区別は困難である。口縁形態が5単位の三角状の大波状口縁となる。口縁部文様帯は2条の縄文帯である。これは深鉢E 1の1条の縄文帯を沈線で2分したものである。大波状口縁の波頂部には比較的大きな突起の付くものが多い。大突起の口内側は沈線で2分される。また波頂間に先端を沈線で2分された突起の付くものが多い。また器面に瘤が付着するのもこの類型からである。

297は口縁形態が三角状の大波状を呈する。波頂部には突起は付かないが、波底部にのみ小型の突起が付く。波底部の突起は単純な突起で、沈線などは認められない。頸部文様帯は大波状の単位数と同じく5単位で、円形区画の内部に三角・菱形の磨消部を持つ。L R単節縄文が充填される。括れ部文様帯には1条の縄文帯が認められる。2条あるうちの下端が欠損で不明となるのか、もともと1条しかしないのか判断に苦しむ。もし1条とすると頸部文様帯と異なることになる。異論もあるが、ここでは口縁部文様帯をとって深鉢E 2に分類しておく。

298は比較的小型の資料である。残存率が低かったが図上復元した。口縁形態が三角状の大波状を呈する。口端に突起はつかない。口縁部文様帯は2条の縄文帯である。括れ部文様帯も同様である。細いL RとR Lの異原体が充填される。それぞれの原体は充填される場所が区別されており、一つの区画で羽状縄文を描くことはない。頸部文様帯は弧線文とそれを結ぶ梢円形の区画からなる。体部文様帯はおそらく帶状文と思われるが、欠損により詳細は不明である。

299～309・319～323は、大波状口縁の波頂部の破片資料である。全て波頂部に大突起を持つ。口縁部文様帯が2条の縄文帯からなる。299・300は波頂部の突起が弱いが、それ以外は突起の巨大化が印象的である。なかには大突起に装飾のようなものを施したものも見られる(321・323)。また大突起の口内側に瘤状の突起がつくものも見られる(309・320)。

310～318は、口縁部の破片資料で、波頂部以外のものである。

全体に器面に瘤がつけられるものが目立つようになる（301～304・307・308・311～313・316・318～323）。ほとんどが円錐状の先端のとがった小さな瘤だが、316のように豆粒大で頂部を沈線で2分するものも見られる。

なお、本類には口縁部形態が2条の縄文帯のものだけではなく、3条のもので無文帯のもの（303・322・323）も加えた。2条の縄文帯の範疇に入れることができると考えたからである。

#### 深鉢F類：第82図324～第83図354

本遺跡からは全形の確認できる資料は出土していないが、本県の村山市の宮ノ前遺跡の第3次調査で本類の完形品が出土しており、それを参考とした。体部が球形を呈し、頸体境で括れるが、頸部は直に立ち上がる。口縁形態が鋭角な大波状口縁となり、口縁部文様帯は2条から3条の無文帯となる。口端には突起は付かない。全ての資料で器面に瘤の添付が認められる。口内側への肥厚はあまり認められず、断面は棒状に近い。また基本的に文様内への縄文の充填は認められない。全面無文でよく磨かれている。ただし小破片のもので判断が難しく深鉢E2類などが混入している可能性も否定できない（330・335・338・339・341～343）。

344は本類である程度の形の確認できる唯一の資料である。口縁形態は鋭角な大波状口縁となり、王冠のような形状となる。口縁部文様帯は1条の幅広の無文帯を沈線により2分して2条の無文帯を作り出している。2分する沈線上に等間隔で三角錐状の小瘤が配置される。頸部文様帯は上下に2条一対の無文帯が配置され、その間に2段の入組帶状文が描かれる。入組帶状文は無文で縄文は充填されない。入組帶状文の入り組み部に瘤がつけられる。また帯状文の中心も沈線で2分されている。括れ部文様帯は口縁部と同様に2条の無文帯が配置される。

#### 深鉢G類：第83図356～368

大波状深鉢で分類不能なもの。いわゆる関東の安行1式に属するものも含んでいる。

#### 深鉢H類：第84図369～373

平縁で、口縁部文様帯が無文若しくは刻み目帯を有するもの。本来はそれぞれ別個に分類されるべき資料であろうが、個体数が少なく、1分類をつくるまでに至らなかったものを一括した。369・370は器形不明である。371は口縁部文様帯が無文で、頸部の屈曲部に刻み目が1条確認できる。372は平縁で、口縁部無文である。口端にはねじれた突起が付く。口端は口内に強く肥厚する。口端及び口縁部無文帯はよく磨かれている。頸部文様帯に縄文帯を平行に切ける沈線が上下に6条確認できる。またそれを縦に切る2条一対の沈線が見える。縄文帯はLR単節斜行縄文を横位回転している。373は平縁で、口縁部文様帯に2条の刻み目帯を有する。また口内側にも1条の刻み目帯が認められる。口端には突起が付き、さらに口端直上に1条の沈線が引かれる。

#### 深鉢I類：第84図374

底部から丸みを帯びて立ち上がり、頸体境で「く」の字状に屈曲する。その後頸部が内湾気味に短く立ち上がる。口縁部形態は平縁で、口縁部と括れ部に2条の刻み目帯が巡るもの。前掲の深鉢D1d（括れる大波状口縁で、口縁部に2条の刻み目帯が巡るもの）に相当するもの

で、その平縁形のもの。

374が唯一の個体である。平縁で、口縁部文様帯と括れ部文様帯に2条の刻み目帯が巡る。頸部は体部に比べて極端に短い。頸部文様は太目の帯状文で、左から右へ流れる。体部には直線的なS字状文が描かれ、磨消部を強調している。頸部・体部共にR L 単節縄文が充填される。体部下端には区画として1条の刻み目帯が巡る。

**深鉢 J 1 a 類：第85図375～378・382～384・386～第86図409・第87図417・418・425～427・431・433・437・442～第88図446・449**

底部から丸みを帯びて立ち上がり、頸部境で「く」の字に屈曲する。頸部が直線的に立ち上がり口縁部にいたる。口縁形態は平縁で、口縁部文様帯・括れ部文様帯が1条の縄文帯となる。口端に突起の付くものがよく見られる。多くが単純な形の突起で、先端や口内側を沈線で2分するようなものは少ない。頸部・体部共に文様帯を持つ。挿図作成後に分類を2分したためJ 1 a 類とJ 1 b 類が混在している。

375～378・382～384・386～409は、口縁部の破片である。口端に突起の付くものが半数近くある（375～378・382～384・387・388・390～395・398～401・403～406・408～409）。402・405は全面無文であるが、分類不能であったが、とりあえず本類に分類しておいた。器形から見た措置である。399・400・403・404は同一個体である。

409は口縁形態が平縁で、口端に突起を確認できる。突起は先端が刻まれ2分される。口縁部文様帯と括れ部文様帯は共に1条の縄文帯からなり、R L 単節縄文が横位回転される。頸部文様帯は文様全体は欠損により明瞭ではないが、残存部分からタスキ掛け状文と理解した。R L 単節縄文が充填される。体部文様帯は欠損によりほとんどわからないが、帯状文のようなも一部が見てとれる。

442～446・449は体部の破片である。体部のみでは他類のものと判別が難しく、かなり他類のものが含まれると考えられる。

**深鉢 J 1 b 類：第85図399～381・385・第86図410～第87図416・419～424・428～430・432・434～436・438～441・第88図447～448・450～456**

前掲の深鉢 J 1 a 類と同様に、口縁形態が平縁で、頸部境で括れ、口縁部文様帯と括れ部文様帯に1条の縄文帯を持つもの。当初深鉢 J 1 a 類と同分類としていたが、409と413の比較の結果、細分されるべきと考えた。大きな違いは409の頸部文様が1段のタスキ掛け状文で西ノ浜式に良く見られる文様であるのに対して、413の頸部文様が多段化した入組帶状文と瘤付土器第二段階に良く見られる文様である点である。さらに413の器面には瘤がつく。413にみられる特徴の多くは、後述の深鉢 J 2 類に良く見られる。さらに深鉢 J 1 b 類の個体数は少なく、深鉢 J 2 類の一種を見るべきかもしれない。とりあえず、深鉢 J 1 a 類とは分離しておいた。

413は口縁形態が平縁で、突起は付かない。口縁部文様帯と括れ部文様帯が共に1条の縄文帯で、L 無節縄文が横位に施文される。ここには等間隔で瘤が配置される。瘤は表面を沈線で2分してある。頸部文様帯は2段の入組帶状文で、内部に無節しが充填される。入組帶状文の結節点及び帶状文の中心に円錐状の先端が鋭角な瘤がつく。体部は地文の上に、右下がりの斜

行沈線が等間隔で施文される。一部左下がりの斜行沈線が引かれ、格子目状を呈する部分もある。体部文様は、体部中位に区画沈線が横に引かれ、それより下は無文調整される。

452～455は縄文の替わりに櫛歯状条線文が充填される資料である。破片資料のため、細分せず、ここで一括して扱った。

本類は数量が極めて少ない。また413がS T 3で次の深鉢J 2類と共伴していることから、J 2類の一例と考えるべきかもしれない。

#### 深鉢J 2：第89図457～第93図524

数量的に本遺跡の主体の一つとなるものである。底部から丸みを帯びて立ち上がり、頸体境で一旦括れ、その後直線的に立ち上がり口縁部にいたる。口縁形態は平縁で、口縁部文様帶・括れ部文様帶には1条の縄文帯を沈線で2分した2条の縄文帯が配置される。頸部・体部には文様が施される。口端には突起が付くものもあるが1個体のみである。口端の内面への肥厚はほとんど見られない。ほとんどの個体が器面に瘤をつける。頸部文様帶と体部文様帶を持つが、なかには体部文様帶が斜行沈線のみのものなど省略の傾向が見られるようになる。

457は口縁形態が平縁で、口端に突起が付く。突起は口内にかけて沈線で2分される。口縁部文様帶は1条の縄文帯を沈線で2分した2条の縄文帯となる。L R横位回転が施文される。口縁部文様帶には2個一対の縦長の瘤が付着する。瘤は頂部が沈線で2分されている。頸部には多段化した入組帶状文が施文されるが、2段目の入組帶状文が折り返している。単節L Rが充填される。入組帶状文内部には台形状の小瘤がつく。括れ部文様は1条の縄文帯となるが、口縁部文様帶が2条となるため本類に入れてある。括れ部の縄文帯には、やや大きめの台形状の瘤がつけられる。

458はやや小型の深鉢である。口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帶は無文帶だが、その下に区画文様がある。それが2条の縄文帯となるため本類に入れた。頸部文様帶には内部が磨り消された弧線連結文が2段描かれ、中間にも区画の2条の縄文帯が配置される。外部に無節しが充填される。括れ部文様帶は欠損により上端の沈線のみが確認できる。体部は欠損により不明である。瘤は口縁部文様帶・頸部文様帶の中位・括れ部文様帶の2条の縄文帯に等間隔で小型のものがつけられる。

459は判断に苦しむ個体である。頸部と体部の一部のみ残存し、頸部と体部も接合しなかつたが、図上復元した。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帶は1条の縄文帯を2条の沈線で3分している。ただし縦長瘤の間は沈線が引かれないようでもある。縄文帯には2個一対の縦長瘤がつけられる。頸部文様帶は2段の入組帶状文で、帶状文の内部には三角モチーフの磨消部が設けられる。括れ部文様帶は1条の縄文帯であるが、拓本の右端に沈線が見えるため、あるいは沈線により分割される可能性もある。括れは弱い。体部文様帶は欠損によりほとんどわからないが、残存している部分からクランク状のモチーフと判断した。L R単節縄文が充填される。器面の瘤は口縁部文様帶のみであり、頸部・体部には瘤は見られない。括れが弱い点、体部文様が太いクランク状文である点、瘤の貼付が少ない点など、他の深鉢J 2類と比べて違和感がある。ただし頸部文様帶が多段化した入り組み文である点などを考慮して口

縁部文様帯による分類をとり、深鉢J 2に分類しておく。

460は頸部の一部しか残存しないが、図上復元した。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の繩文帯を沈線で2分した2条の繩文帯となる。口縁部文様帯には頂部を沈線で2分した縦長瘤と2個一対で縦に並ぶ円錐形の小瘤が交互に配置される。頸部文様帯は2段の入組帶状文である。LR単節繩文が充填される。円錐形の小瘤が入組文の結節部などに配置される。括れ部以下は欠損により不明である。拓本に実測図に無い部分があるが、実測図作成後に接合したもので、大勢に影響は無いと判断し元の実測図をそのまま掲載した。

461は口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の繩文帯を沈線により2分したものである。沈線の引き方で2本の沈線が引かれているように見える部分もある。口縁部文様帯には頂部が沈線により2分される縦長瘤、小型で円錐形の小瘤、上下2個一対の円柱形の瘤が交互に並ぶ。頸部文様帯は3段の入組帶状文である。ただ入り組み部が明瞭でなく、横に流れてしまっている部分がある。LR単節繩文が充填される。帶状文の内部には小型のボタン状の瘤が貼付される。括れ部文様帯は1条の繩文帯である。口縁部文様帯と括れ部文様帯が異なるが、口縁部文様帯をとった。体部文様帯はLR単節繩文の横位回転による地文に、右下がり・左下がりの斜行沈線を引くことにより、格子目状の文様を描く。体部下半に沈線が1条横に引かれ、その下はミガキ調整される。

462は残存率が低かったが、図上復元した。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の繩文帯に3条から4条の沈線を引き分割している。2条の繩文帯の一種と理解して本類においていた。繩文帯には三日月瘤と上下2個一対の円錐形の小瘤が配置されるが、ほとんど剥落しており、配列などは良くわからない。頸部文様帯は2段の入り組みた繩文で、LR単節繩文が充填される。括れ部文様帯はほとんど残存せず、詳しくはわからないが、繩文帯を2条の沈線で分割しているのが見える。括れ部にも三日月瘤と小瘤が配される。

467は残存率が低かったが、図上復元した。器面は磨滅している。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の繩文帯を沈線で2分したものである。繩文帯には背中合わせで2個一対の三日月瘤、上下2個一対の円錐状の小瘤、2個一対で頂部が沈線で2分される縦長瘤の3種の瘤が交互に配される。頸部には2条の繩文帯が確認できる。LR単節繩文を充填するようである。この上に等間隔で頂部が沈線で2分される縦長瘤が配される。括れ部以下は欠損により不明である。

477は口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の繩文帯を沈線で2分するものである。ここには円錐形の小瘤が狭い間隔でつくようである。頸部文様帯は3段の入組帶状文で、やや太い。括れ部文様帯は沈線で2分された1条の繩文帯である。この上には円錐形の小瘤が等間隔で並ぶ。LR単節繩文が充填される。体部文様帯は1条の繩文帯を2条の沈線で3分している。この上には三日月瘤と上下2個一対の円錐形の小瘤が交互に配置される。この繩文帯以下は無文でミガキ調整される。

463～466・468～476・478～497・502・503・508・512は深鉢J 2類の破片資料である。3個体以外は全て瘤がつく。突起がつくものもわずかだが存在する(464・483・484)。

498～501・506は口縁部文様帯若しくは括れ部文様帯の代わりに半截竹管などの工具で器面を刺突し、その後刺突した粘土を盛り上げ、瘤に見立てている（以後「掘起し瘤」とよぶ）。これを2条施文する。深鉢J2類の一種と理解した。

507は口縁部文様帯に繩文の代わりに櫛齒状条線文を充填したものである。この文様帯は沈線によって2分されている。

504・505・509・510・511～524は無文を主としたものである。口縁部文様帯は1条の無文帯を沈線で2分する。

516は口縁部を欠損しているが、括れ部が残っており、本類に入れた。頸部には弧線連結文が描かれる。円弧の内部は磨り消され、外部は櫛齒状条線文が充填されるようである。ボタン状の小瘤がつく。体部無文である。

523はほぼ完形であるが、沈線が細く、器面が磨滅しており、文様はうまくつかめない。括れ部に横位の無文帯と沈線が確認できることから本類とした。口縁形態は平縁で突起はつかない。口縁部文様帯と頸部文様帯は磨滅により不明である。ただし全体に無文を基調としている。体部は櫛齒状条線文による横位の円弧文が見られる。器面に瘤は見られない。

深鉢J3類：第94図525～第100図674

深鉢J3a類：第94図525～第97図587

深鉢J2類と同様に数量的に多く、本遺跡の主体と一つとなるものである。器形的には深鉢J2類と全く同じである。口縁形態が平縁で、突起のつくものは極少ない。口縁部文様帯は2条の繩文帯とその間の無文帯からなる。括れ部文様帯も同様である。頸部文様帯は多段化した入組帶状文や弧線連結文が描かれる。体部文様帯が存在するものもあるが、大部分は体部無文と思われる。全ての個体が器面に瘤を貼付すると考えてよい。

525は大型の深鉢である。口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は2条の繩文帯とその間の無文帯からなる。括れ部も同様である。円錐形の小瘤が極狭い間隔で貼付される。頸部文様帯は2段の入組帶状文で、帶状部の内部が梢円形に磨り消される。体部は無文でミガキ調整される。

526は頸部より上しか残存しなかったが、図上復元している。口縁形態は平縁で、口端に小型の突起がつく。突起は頂部から口内側にかけて沈線で2分される。口縁部文様帯は2条の繩文帯とその間の無文帯からなると理解した。頸部文様帯は弧線連結文が描かれる。弧線の内側は磨り消される。外側はLR單節繩文が充填される。頸部中位以下は欠損で不明だが、頸部文様帯にさらにもう1段弧線連結文が描かれる可能性もある。文様の結節点には極小さな瘤がつくようである。

527は小型の深鉢で、全体の文様構成が窺える資料である。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は2条の繩文帯とその間の無文帯からなる。括れ部文様帯も同様である。頸部文様帯は1段の弧線連結文からなる。弧線連結文は二重の弧線からなり、その間にLR單節繩文を充填する。体部には頸部と逆向きの弧線連結文が描かれる。体部下半は無文でミガキ調整される。瘤は極小さいものが貼付されるが数は少ない。

528は小型の深鉢で、完形品である。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帶は沈線の引き方が稚拙で場所によって異なる。ただし良く観察すると1条の縄文帯に2本の沈線が引かれ、2条の縄文帯とその間の無文帯からなることが理解できる。括れ部文様帶はより明瞭で、2条の縄文帯とその間の無文帯が認められる。口縁部文様帶には頂部を沈線で2分する縦長瘤が貼付される。確認できる瘤は1個であるが、隣接した場所に瘤の剥がされた痕跡が残る。痕跡から焼成前に剥がされていることがわかり、貼付位置のミスか、2個一対で貼付するつもりだったのかと思われる。括れ部文様帶には背中合わせの三日月瘤が2個一対で貼付される。頸部文様帶は実測図の場所が悪いため、明瞭にはわからないが、拓本を見てもらうと基本的には1段の入組帶状文であることが理解できるであろう。文様内部には極細い無節Lが充填される。瘤は極小さいものが文様内に貼付される。体部は無文で、ミガキ調整される。全体に製作技術が稚拙で、器形や文様にゆがみが見られる。

529は小型の深鉢で、ほぼ完形である。口縁形態は平縁で、口端に突起がつく。突起は2個一対で、頂部から口内にかけて沈線で2分される。口縁部文様帶は2条の縄文帯とその間の無文帯からなり、括れ部文様帶も同様である。頸部文様帶は1段のクランク状文が描かれる。無節Lが充填される。体部は無文でミガキ調整される。瘤は極小さなものが貼付される。

530～571・577・578は深鉢J 3類の口縁部破片である。基本的に口縁形態は平縁で、突起がつかないが、わずかに突起のつく資料も見られる(534・536・532・545・565)。突起は基本的に頂部から口内にかけて沈線で2分される。569以外は全て器面への瘤の貼付が認められる。円錐形の極小の瘤が基本だが、口縁部文様帶の2条の縄文帯を連結するように縦長の瘤を貼付するもの(541・550・564・568・570・578)、同様に無文帯をまたいで三日月瘤を貼付するもの(563・568・571)、それぞれを交互に貼付するもの(550・554・563・564・568・578)がある。

572～587は体部破片である。

#### 深鉢J 3 b類：第97図588～第99図647

深鉢J 3類のなかで口縁部文様帶の2条の縄文帯にかわり2条の無文帯を配置したもの。無文帯は1本か2本の沈線によって分割される。また深鉢J 3類と同様その間に無文帯が配される。全体の文様構成がうかがえるものは一つもない。全て瘤が貼付される。深鉢J 3 a類と同じものと考えているが、あえて細分した。

592は口縁形態が平縁で、口端に2個一対の突起がつく。推定4単位である。突起は頂部を沈線で2分され、口端につくというより器面につくといったほうが良い。小林圭一氏が指摘した口端の突起の前倒れ現象である。口縁部文様帶は2本の沈線がひかけた2条の無文帯とその間の無文帯からなる。円錐形の小瘤が2本の沈線を跨ぐように配置される。頸部文様帶は狭く、上下に1本の区画沈線を引き、その間に左下がりの斜行沈線が狭い間隔に並ぶ。

572～591・593～647は深鉢J 3 b類の破片資料である。592以外は、小破片若しくは接合の状態が悪いもので全体の文様構成がうかがわれるものはほとんど無い。口縁形態は全て平縁で、突起のつくものもある(592・601～605・609・612～613・615・621・622・629・631・633)。

突起は頂部を沈線で2分するものが主であるが、沈線の無い単純なものも多い。ほとんどが口端に横につく（601・602・604・609・613・615・621・631・633）。前述の小林氏の指摘した突起の前倒れ現象である。瘤はほとんど全てに貼付される。無いものも若干あるが分類ミスか瘤の無い部分しか残存しなかったと考えられる。瘤はほとんど全てが円錐形の小瘤である。前述の深鉢J 3 a類に見られる縱長瘤や三日月瘤は見られない。

#### 深鉢J 3 c類：第99図639・645・650

深鉢J 3類のうち、口縁部文様帯の繩文帯にかわり櫛齒状条線帯となるもの。3個体のみの出土である。全て破片資料のため全体の文様構成は不明である。口縁形態は平縁で、口縁部文様帯は2条の櫛齒状条線帯とその間の無文帯からなる。櫛齒状条線帯には円錐形の小瘤が貼付される。

#### 深鉢J 3 d類：第99図648・649・651・654・657・658・661

深鉢J 3類のうち、口縁部文様帯の繩文帯にかわり掘り起こし瘤帯となるもの。ほとんどが小破片である。口縁形態は基本的に平縁で、突起がつくものは654のみである。頸部文様帯はほとんどが小破片で不明であるが、口縁部に並行する無文帯を数条繰り返すもの（654）、入組帶状文を描くもの（652・653・657）がある。

#### 深鉢K類：第99図653・656・660・662～第100図676

深鉢J類に近いと推測されるもので、分類不能のものを一括した。全て破片資料である。

660・663は同一個体である。口縁形態は平縁で、口縁部文様帯に3条の掘り起こし瘤のつく無文帯がある。頸部文様帯にはおそらく多段化した入組帶状文が描かれる。

653・662は、頸部文様帯に3段以上の細い入組帶状文が見られ、内部に掘り起こし瘤が充填される。以上4点は、コブ付土器3段階まで下る可能性もある。

664～672は口縁部直下に無文帯を持つものである。

673・674は2条の隆帯をもち、口縁直下は無文である。

675・676は口縁直下に幅広の無文帯を持つものである。詳しい器形や文様は不明である。

#### 深鉢L類：第101図677～第102図700

数量的には極少数の出土しか見られなかった。底部から丸みを持って立ち上がり、頸体境で一旦括れる。その後頸部が短く垂直に立ち上がる。広口の壺、若しくは鉢とすべきものかもしれないが、深鉢に分類した。口縁形態は平縁で、突起のつくものもわずかだがある。口縁部文様帯と括れ部文様帯は基本的に同じ文様が描かれる。口縁部文様帯と括れ部文様帯を基準に細分した。瘤の貼付されるものは存在しないようである。挿図では本類としたが677・679はともかく、680は別分類の土器の可能性がある。

#### 深鉢L 1類：第100図672・第101図682～684

口縁形態が平縁で、突起は確認できなかった。おそらくつかないと思われる。器面にも瘤はつかない。口縁部文様帯は1条の刻み目を持つもの（682～684）と、2条の刻み目を持つもの（678）が存在する。括れ部文様は1条の刻み目を持つもの（683）と、2条の刻み目を持つもの（682・684）が存在する。当該期の深鉢は口縁部文様帯と括れ部文様帯が基本的に同じはず

だが、682・684は異なる。深鉢L類は他の深鉢に比べて著しく頸部が狭く、或いはそうした器形上の制約があつて口縁部文様帯に2条の刻み目帯をつくれなかつたのかもしれない。

678はかなり小さな破片である。口縁形態は平縁で、突起は確認できなかつた。口縁部文様帯は2条の縄文帯である。括れ部文様帯は欠損により不明である。頸部文様帯は極狭く、口縁部文様帯の直下に横位の縄文帯が1条描かれ、内部にはLR・RLの異原体による羽状縄文が充填される。

682は口縁形態が平縁で、突起は確認できない。口縁部文様帯は1条の刻み目帯で、括れ部には2条の刻み目が確認できる。頸部文様帯は無文で、ミガキ調整される。

683は全周の1/5ほどしか残存しないが、全体の文様構成が窺える資料である。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の刻み目帯で括れ部文様帯も同様である。頸部には2条の縄文帯が充填される。体部には太目の帶状文が描かれ、RL単節縄文が充填される。

684は口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の刻み目帯で、括れ部文様帯は2条の刻み目帯が見られる。頸部には1条の縄文が描かれ、LR・RLの異原体による羽状縄文が充填される。体部には帶状文の一部のような沈線が見えるが詳細は不明である。

#### 深鉢L 2類：第101図681・685～第102図694

口縁形態が平縁で、突起はほとんどつかないが、突起のつくものもいくつか存在する(685・688・694)。口縁部文様帯は1条の縄文帯である。極狭い縄文帯を持つもの(681・686)や、やや広い縄文帯を持つもの(685・687～694)がある。括れ部文様帯も1条の縄文帯である。頸部文様帯は太目の縄文帯に異原体による羽状縄文を充填するもの(681・686)と、無文帯のもの(685～694)がある。

681は口縁形態が平縁で、突起はつかないようである。口縁部文様帯は極狭い1条の縄文帯である。括れ部文様帯は欠損により不明であるがおそらく口縁部文様帯と同じ文様となる。頸部文様帯は、口縁部文様帯直下にやや太目の1条の縄文帯が描かれ、内部には異原体による羽状縄文が施文される。

686は体部中位と底部に接合する場所がなく図上復元したが、うまく復元できなかつた。器高が大き過ぎ、器形的には683や685に近い形になると思われる。口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は極狭い1条の縄文帯で、異原体による羽状縄文が施文されるが、磨滅によりわかりづらい。括れ部文様帯も同様である。頸部文様帯は全面に異原体による羽状縄文が横位に施文される。体部文様帯は右方向に流れる入組帶状文で、下端で折り返す。LR・RLの異原体による羽状縄文が充填される。

685は口縁形態が平縁で、明確な突起は見られないが、口端に突起の剥がれた痕跡が残ることからおそらく突起がつく。口縁部文様帯と括れ部文様帯は共に1条の縄文帯で、LR単節縄文が横位回転される。頸部文様帯は無文帯である。体部文様帯は入組帶状文で、下端で折り返すものようである。LR単節縄文が充填される。

693は口縁形態が平縁で、突起はつかないようである。口縁部文様帯はやや太目の1条の縄文帯で、異原体による羽状縄文が施文される。括れ部文様帯も同様である。頸部は無文である。

体部文様帶はやや太目の帯縄文が施文され、異原体による羽状縄文が充填される。

#### 深鉢L 3類：第102図699

699のみの出土である。口縁形態が平縁で、口端に突起がつく。口縁部文様帶は1条の縄文帶を沈線で2分したもので、LR単節縄文が充填される。括れ部文様帶は1条の縄文帶である。頸部文様帶は無文である。体部文様帶はほとんどが欠損して不明であるが、入組帶状文のようなものが見える。

#### 深鉢L 4類：第102図697・698・700

深鉢L類のうち、全面無文のものである。

#### 深鉢L類その他：第102図695・696

695・696は口縁直下が無文帶となるものである。頸部や体部に文様が見えるが、小破片のため詳しく述べられない。

以下の深鉢M類からは、頸体境でのくびれを持たない砲弾型を呈するものである。

#### 深鉢M類：第103図702

702のみの出土である。頸体境で括れず、底部からまっすぐ立ち上がる砲弾型の器形である。口縁形態は緩やかな大波状を呈し、推定5単位である。突起はつかない。口縁部文様帶は1条の縄文帶である。体部上半には不整円形の区画がつくられ、内部にLR・RL異原体による羽状縄文が充填される。また区画内部に平行沈線が2本描かれる。体部下半にも文様帶が描かれるようであるが、欠損により詳細は不明である。

#### 深鉢N 1類：第103図701

701のみの出土である。頸体境で括れず、底部からまっすぐ立ち上がる砲弾型の器形である。口縁形態は平縁で、口端に突起がつく。突起の数は少なく、かなり間隔が空く。突起は頂部が工具で2分される。口内側にやや肥厚が見られる。口縁部文様帶は1条の縄文帶でやや太めである。LR単節縄文が横位回転される。体部上半には2段の入組帶状文が描かれる。入組帶状文は太めで、LR単節縄文が充填される。体部下半には太めの区画縄文帶が配置される。器面への瘤の貼付は見られない。

#### 深鉢N 2類：出土例なし。

深鉢N 1類に後続し、N 3類に先行するものとして設定した。頸体境で括れず、底部からまっすぐ立ち上がる砲弾型の器形である。口縁形態は平縁で、突起がつくものもある。口縁部文様帶は1条の縄文帶を沈線で2分した2条の縄文帶である。体部上半に文様帶が見られ、体部下半に口縁部文様帶と同じ区画帶が配置される。

ただし概念上の想定であり、本遺跡では出土していない。

#### 深鉢N 3類：第103図703

703のみの出土である。頸体境で括れず、底部からまっすぐ立ち上がる砲弾型の器形である。口縁形態は平縁で、口端に突起がつく。突起はやや小さく、ほとんど隙間なく配置される。突起は頂部が工具で2分される。口縁部文様帶は2条の縄文帶とその間の無文帶からなる。細いLR単節縄文が横位回転される。口縁部文様帶には円錐状の小瘤が貼付される。体部上半は3

段の入組帶状文が描かれる。入組帶状文内部はLR単線縄文が充填され、帶状部には三角モチーフの磨消部が設けられる。瘤が入組帶状文の内部に添付される。体部下半には2条の縄文帯が区画としては位置されるが、内部の沈線が複数見えることから無文帯を間に入れようとしたと思われる。よって図上では2条の縄文帯とその間の無文帯として復元した。

深鉢O1類：第104図704～711

器高が小さく鉢とも考えられたが、そのまま深鉢とした。頸体境で括れず、底部からまっすぐ立ち上がる砲弾型の器形である。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の縄文帯を沈線で2分し、2条の縄文帯とする。縄文帯の代わりに櫛齒状条線帯とするものもある(704・708・711)。瘤の貼付は口縁部文様帯に限られる。瘤は円錐状の小瘤や頂部を沈線で2分する豆粒状の小瘤である。また口縁部文様帯の沈線を跨いで貼付される縦長瘤も見られる。体部文様帯は地文である。縄文のかわりに櫛齒状条線文を施すものもある(708・710)。なお706・707は分類ミスの可能性もある。

709はほぼ全体の文様構成がわかる唯一の個体である。口縁形態は平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は1条の縄文帯を沈線で2分した2条の縄文帯である。LR単節縄文を横位回転する。口縁部文様帯には瘤が貼付される。頂部が沈線で2分される縦長瘤が推定4単位貼付され、その間に頂部が沈線で2分される豆粒状の小瘤が4つ程配置される。口縁部文様帯直下に2個一対の補修孔が確認できる。RL単節縄文を横位からやや右上に押捺回転させる。

深鉢O2類：第104図712～第105図721

器形は深鉢O1類とまったく同じだが、口縁部文様帯が2条の縄文帯とその間の無文帯からなるもの。

712は、口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯が2条の縄文帯の代わりに2条の無文帯となり、その間に無文帯を配置する。口縁部縄文帯の2条の無文帯には、半截竹管を左右から刺突することによって瘤に見立てたものが等間隔で見られる。体部は無文で、右下がりと左下がりの斜行沈線によって格子目を呈するが、一部乱れて格子目とならないものもある。

713は、口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯が2条の縄文帯の代わりに2条の櫛齒状条線帯となり、その間に無文帯を配置する。口縁部の櫛齒状条線帯には縦長瘤と円錐形の小瘤が配置される。体部文様帯は櫛齒状条線文を右下がり左下がりに描くことによって縦位の矢羽状文を呈する。

721は、口縁形態が平縁で、突起はつかない。口縁部文様帯は2条の櫛齒状条線帯とその間の無文帯からなる。2条の櫛齒状条線帯には円錐形の小瘤が等間隔に貼付される。体部には右下がりと左下がりの櫛齒状条線文が交互に配置され、矢羽状文を呈する。

714～720は破片資料である。714は、口縁部文様帯にボタン状の瘤を貼付けている。715は口縁部文様帯が2条の無文帯とその間の無文帯からなり、2条の無文帯は2本の沈線により分割される。716は3条の縄文帯からなるが、円錐形の小瘤が貼付されるのは上下の2条の縄文帯であり、間の縄文帯は本来無文帯となるべきものと判断した。体部文様帯は不明である。717は2条の櫛齒状条線帯とその間の無文帯からなる。718・719は分類が違う可能性が大きい。720

は口縁部文様帯が3条の櫛齒状条線帯からなり、その間にはそれぞれ無文帯が配置される。本類に分類されるか疑問であるが、一個体のみの出土のため、ここには位置しておいた。

722~1017は、粗製深鉢及び底部資料である。

#### 深鉢P 1類：第106図722~第121図946

粗製の深鉢で、底部からやや内湾気味に立ち上がり、砲弾型を呈するもの。口縁形態は平縁で、突起はつかない。体部の地文とその施文法によって細分した。本遺跡の主体をなす粗製深鉢である。口端に粘土紐を貼り付けミガキ調整しており、多くのものがしっかりとつくられている。また口端は口内に向けて肥厚するものもある。

当然時期幅があると思われるが、出土状況から地文などで時期差を想定することは難しい。また口端の口内側への肥厚の程度で時期差を想定することも考えられるが、肥厚の度合いも個体によって異なり困難である。本遺跡の主体をなす縄文時代後期中葉から後葉にかけての東北地方南部の粗製土器と、大きくまとめておくべきと考える。ただし地文の差異が存在しており、これは地域差を表していると考えられる。櫛齒状線文を主体とする地域、斜行縄文を主体とする地域、羽状縄文を主体とする地域というように分かれる可能性が高い。

#### 深鉢P 1a類：第106図722・724~第108図763

深鉢P 1類のうち、体部に細い櫛齒状条線文を施文するもので、文様が直線を基調とするもの。櫛齒状条線文は1単位あたりの条数は10条前後が多い。数量が多いため、以下代表的なものを掲げて説明し、1点ごとの分類は記載しない。

施文される文様は749に代表される単純な斜行条線文、740・744に代表される右下がり左下がりの斜行条線文を交互に描き矢羽状の文様を描くもの、750に代表される格子目状の文様を描くものに細分される。

また750などのように、口縁直下に櫛齒状条線文を横位に施文するものもあるが、口縁直下からすぐに櫛齒状条線文による文様を描くものも見られる。

#### 深鉢P 1b類：第108図764~第111図796

深鉢P 1類のうち、体部に細目の櫛齒状条線文を施文するもので、文様が曲線を基調とするもの。文様には次の3つがある。

771のように対向する円弧文を縦位に繰り返し、それを横位に展開するもの。

781のように対向する円弧文を横位に繰り返すもの。

791のよう蛇行する円弧文を縦位に展開するもの。精製深鉢に施文される入組帶状文を連想させる。

#### 深鉢P 1c類：第111図797~第114図833

深鉢P 1類のうち、体部に太めの櫛齒状条線文を施文するもの。櫛齒状条線文の1単位あたりの条数は4から6条前後で、条線の間隔は広い。対向する梢円状の円弧文を描くものがほとんどで、他に小さな円弧文を描くもの（827・829）、直線的な斜行条線文となるもの（826・830・831）がある。

#### 深鉢P 1d類：第115図834~839・841~第116図867・第117図869~878・881・884

深鉢 P 1 類のうち、体部に一種類の斜行縄文のみを施文するもの。数量的に少ない。L R 単節縄文の横位回転のものが多いため、R L 単節縄文の横位回転のものもみられる。また853のようにR L 単節縄文を右上方向に回転押捺することにより、条が垂直方向に屹立するものもある。848は口端直下に沈線があるように見えるが、口端部分への粘土の貼り付けが滑らかでなく、沈線に見えているだけである。

深鉢 P 1 e 類：第115図840・第116図867～868・第117図879・880・882・883・885～892・第118図895～897・902・903

深鉢 P 1 類のうち、体部に異原体による羽状縄文を施文するもの。数量的に少ない。ほとんどがL R・R L 単節縄文を横位回転させることにより羽状縄文を作り出す。ごく僅かに縦位の羽状縄文を施文するものがある（889・890）。886は小破片のため明瞭でないが、同一原体の異方向への押捺回転による羽状縄文か。

深鉢 P 1 f 類：第118図893・894・898・899・900・901・904～第121図946

深鉢 P 1 類のうち、体部が無文のもの。大型と小型のものがある。小型のものは、瘤付土器第2段階に伴うものもあり、この時期の盛行する可能性もある。体部は良く磨かれるものが多いが、ケズリやミガキの痕跡を明瞭に残すものもある（933・941）。

深鉢 P 2 類：第122図948・949

948・949のみの出土で、両者は同一個体である。縮尺が異なることを注記しておく。粗製の深鉢で、砲弾型を呈すると考えられる。口縁直下は無文で、その後体部上位に推定5条の太い沈線が横位に引かれ、その間に親指状の押圧痕が連続して施文される。体部中位以下には太い櫛歯状条線文が対向する円弧状に施文される。おそらくそれが底部付近まで続く。

こうした口縁直下のあり方は、本遺跡周辺では認められない。関東方面の影響下と推測している。

深鉢 P 3 類：第122図951～953

粗製の深鉢で、体部が砲弾型を呈し、口端に突起がつくもの。

深鉢 Q 類：第122図947・950

分類不能のものを一括した。

947は、体部上位で内側に「く」の字に屈曲する。口縁形態は平縁で、突起はつかない。体部上位の屈曲部には1条の沈線が引かれ、その上は幅広の無文帯となる。沈線から下の体部下半には太めの櫛歯状条線文が横位に施文されるよう見えるが、描かれる文様が一様でなく詳しくは不明である。底部は欠損のため不明である。

950は、全体の半分が残存している。底部から外傾しながら口縁部にいたる。全面縄文である。唯一の器形で、本遺跡では異質な土器である。

深鉢底部：第122図955・956・958～第125図1017

955～959は精製土器の底部と見られる。974～981・985・986は、底部が張り出るものである。982～984・987～995は、底部からそのまま立ち上がるものである。996～1003・1005～1007は、底部から垂直に立ち上がるものである。1004・1008～1017は台のつくものである。ほとんどが

粗製である。1013と1016は同一個体ではない。高台がつく。体部もしくは底部に文様をもつ。本遺跡では珍しい文様である。1013は円形モチーフの磨消部が認められ、その他の部分はLR単節縄文が充填される。1016はやはり円形モチーフの磨消部が認められるが、地文は異原体による羽状縄文である。

### (2)鉢：第122図957

口径と器高がほぼ同じものを鉢とした。ほとんどが破片資料で器形が判別できなかったものも多い。本報告書では深鉢か浅鉢に分類されたものもあるであろう。1個体のみである。

957は、粗製の鉢である。底部から内湾氣味に立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。口縁形態は平縁で、突起はつかない。器厚は厚く、どこをとっても同じである。口縁で内側に肥厚することもない。体部はLR単節縄文が右上方向に回転押捺され、条が上を向く。SK244の一括出土の土器の一つである。編年的な位置づけは後述する。

### (3)浅鉢：第126図1018～第128図1085

小破片が多く、全体の器形や文様構成がわかるものは少ない。分類が適正でない場合もある。よって細分せず、特殊なものについて記述する。

#### 第126図1018～1033

底部から内湾氣味に立ち上がり、そのまま口縁部にいたるもので、口縁部が幅広の縄文帯もしくは無文帯が存在するもの。1単位の文様も大きい。

1018～1025・1028・1030・1031・1033は口縁部に幅広の縄文帯を持つものである。横位の単節縄文を施文するもの（1019・1021・1024・1025・1031・1033）や横位の羽状縄文を施文するものの（1018・1022）、縦位の羽状縄文を施文するもの（1020・1023）がある。1021・1025は同一個体である。また1030・1031・1033も同一個体である。全体がわからぬため、鉢や壺型の口縁部と誤認したものもあるかもしれない。時期的には全て同じ時期なの野かは資料不足により不明である。

口縁部に無文帯を持つもの（1027・1029・1032）がある。これらは体部に各区沈線を上下に引き、その間に縄文帯をもつようである。

1028は口縁形態が平縁で、口端に突起を持つ。口端は内側に強く肥厚する。体部には半円状のモチーフが連続して描かれ内部にLR単節縄文を横位に充填する。体部下半には上位の半円と対向する半円状モチーフが描かれる。底部は欠損により不明である。

1034～1045は底部から内湾氣味に立ち上がるもので、口縁部に刻目帯を持つもの。1034・1041は誤認の可能性が高い。刻目帯というより櫛歯状条線帯といったほうがよいか。

1035～1038は同一個体で、体部上位で一旦屈曲し、その屈曲部にも刻目帯がみられる。小破片のため器形が不明だが、口縁形態及び球形を呈するものかも疑問な個体である。

1042はほぼ全形がわかる固体である。口縁形態は平縁で、口縁部文様帯が1条の刻目体である。体部中位に上下の区画沈線を引き、その内側に異原体による羽状縄文を充填する。底部直

直上は縄文帯である。

1045は口縁形態が平縁で、口縁部文様帯が1条の刻目帯である。体部には帯状文が施文され、内部には異原体による羽状縄文が充填される。

1054は底部から内湾気味に立ち上がる器形のもの。口縁形態は平縁で、口内に強く肥厚する。全面無文調整されるが、楕円形モチーフの区画沈線の内部に6条の平行沈線が引かれる。この楕円モチーフが上下に2段施文され、推定5単位施文される。底部直上には異原体による羽状縄文が施文される。本遺跡の3群土器（縄文時代晚期最終末期）の平衡沈線に似るがこうたんの肥厚、出土位置・層位の違い、楕円モチーフの区画沈線などから本土器群で問題はなかろう。

1048・1049は事実誤認である。1048は口縁部が縄文帯、1049は無文体のもので鉢形か。

1050～1057は口縁部に狭い縄文帯を持つもの。古いものに属するのではないかと推定されるものが多いが、1050のように新しいものと推定されるものもある。

1058～1059は粗製の浅鉢のうち、異原体による羽状縄文が施文されるもの。

1060はおそらく全面無文と思われるが、平行沈線とそれを「つ」の字に切る文様が見える。

1062は全面無文の個体である。口縁形態は平縁で、口端に瘤状の突起が2個一対で推定4単位貼付される。口縁直下には半円モチーフの連弧文が施文される。体部中位には三条の平行沈線が引かれ、4単位の大きな瘤がつく。

1063・1064は口縁部に狭い無文帯を持つが、器形が不明なものである。

1065・1066は口縁形態が平縁で、突起のつくものである。口縁部文様帯はおそらく1条の縄文帯である。体部には文様帯か（1066）、格子目状の文様が（1065）が見える。

1067は口縁部に1条の縄文帯がみえ、この縄文帯は円弧状を呈するようにも見える。文様の要所には貼瘤される。L R 単節縄文が充填される。

1068～1077・1080・1081は器形文様が良くわからないものである。1078・1079は全面無文の浅鉢である。1082は台付き浅鉢と思われるが坏部と台部の間に平行沈線が2条引かれ、その間に貼瘤される。1084は脚付きの浅鉢と思われるが、全面無文である。1085は内外面とも縄文施文の台付き浅鉢と思われる。台部は欠損により不明である。当初、近辺からアメリカ式石族が出土しており弥生時代の蓋とも考えたが、両面に縄文が施文されること、台がつきそうなことから縄文時代後期のものと判断した。

#### （4）壺：第129図1086～第131図1126

小破片が多く、器形や文様にばらつきがあり、うまく分類できなかった。よって特殊なものについて注記する。

1086～1090は口縁部に比較的幅の広い縄文帯を持つもの。異原体による羽状縄文を施文するもの（1087）と同一原体による異方向縄文を施文するもの（1086・1088・1090）、単節斜行縄文を横位回転するもの（1089）がある。

1090は完形の壺である。底部から丸みを持って立ち上がり、体部上位で大きくすぼまり、頸部がやや長く内傾気味に立ち上がる。口縁形態は平縁で突起はつかない。口縁部文様帯にはや

や幅広の縄文帯があり、LR単節縄文を縦位と横位に回転押捺することにより羽状縄文をなす。頸部は無文でよく磨かれる。頸部最下端は2条の沈線が引かれ、その間に粘土紐をまきつけ厚い段を形成する。この「隆帶」の上端には大きな刻み目が1条施される。体部にはLR単節縄文による異方向の羽状縄文が施文される。文様は磨消部を強調したもので、体部の上端と下端に半円モチーフの磨消部が4単位づつ施文される。体部中央には円形モチーフの矢印状の磨消部が描かれる。体部最下端には1条の縄文帯が存在する。1090は丁寧に製作され、全面が赤彩される。出土位置がA区北側のSK244で、ここからは他に浅鉢1、注口土器2、粗製の鉢1が出土している。どれもかなり丁寧に製作されている。おそらく墓壙と考えている。岩手県川口II遺跡などから同様の器形の壺が出土しており、ほぼ同時期と思われる。東北北部の影響のあるものか。時期は縄文時代後期中葉でかまわないであろう。

1091～1093は底部から直線的に立ち上がり、体部が長いもの。体部中位で緩やかにすぼまり、頸部から強く屈曲して口縁部が大きく外に開くもの。頸部は無文帯である。1091は体部下半のみで全形や文様は詳しく述べられない。1092はほぼ全形が窺える資料である。頸部は無文で、頸部直下のすぼまる部分に幅広の縄文帯がみられる。体部中位には波型の曲線モチーフが描かれるが、こうした文様はこの個体のみである。東北北部の土器にも思える。時期的には縄文時代後期中葉でかまわないであろう。A区北側からの出土である。

1094・1097・1098は口縁部文様帯に狭い1条の縄文帯を持つものである。1097が最も大きいが体部の文様は不明である。全て単節縄文を横位回転する。

1103は底部から球形に立ち上がり、体部上位で大きくすぼまり、頸部は直立する。口縁形態は平縁で、突起はつかない。体部上端と下端に区画縄文帯が1条づつみられる。上端の縄文帯は幅が狭く、LR・RL単節縄文が1段横位に回転押捺される。下端の縄文帯は幅広でLR・RL単節縄文が2段横位に回転押捺され、羽状縄文をなす。体部にはタスキ掛け状モチーフが推定3単位描かれ、内部には異原体による羽状縄文が充填される。

1095・1096・1102は無文の小型壺である。1107はやや大きな無文の壺である。口縁部が外に開く。器面がやや磨滅しており、もろい。器面のミガキは荒い。1100・1104は全面無文の小型壺で、器面はよく磨かれる。共に推定4単位の瘤がつく。瘤は頂部を沈線で2分するものである。上げ底である。1099・1105は無文の壺で、体部中位に平行沈線が引かれ、その間に瘤が添付されるものである。1099は台付である。1105は体部中位に3条の沈線が引かれ、大コブが一つとその両側に2個一対の小瘤がつく。1106は全面無文で3段作りの小型壺である。器面は丁寧に磨かれる。体部に4単位の瘤がつく。そのうちの対向する2個の瘤は縦に穿孔されている。

1108・1109は同一個体で、かなり大型の壺である。体部のほとんどを欠損するが、文様のつながりが推測されるため、図上復元している。底部から砲弾型に立ち上がり、体部上位でかなり極端にすぼまる。その後頸部が立ち上ると推測されるが、欠損により不明である。体部上位（肩部）と頸部の間には1条の区画縄文帯がみられLR単節縄文が充填される。また肩部上位に更に1条の区画縄文帯が見える。この二つの縄文帯が一対になり「2条の縄文帯+無文帯」となるのか、「1条の縄文帯」となるのかは頸部欠損により不明である。時期判断もとり

あえず保留しておく。区画縄文帯の下には1段の入組帶状文が施文され、L R単節縄文が充填される。推定7単位とした。体部上位の最大径の部分には更に弧線連結文のような文様が描かれる。この部位には大型の瘤が貼付されるが、2個一対のものか、1つのものか判断できず、1つとして仮に図上復元して置いた。瘤は頂部が沈線で2分される。体部は無文で左下がり、右下がりの沈線が引かれ、斜格子状を意識したものか。

1100～1112・1114～116は判断のつかなかったものである。1110は晩期の土器の可能性もある。1111は口端に推定4単位の瘤がつく。瘤は前に倒れてきている。1112は頸部中位に2条の縄文帯がみられ、その間には無文帯がある。縄文帯内部には小瘤が添付される。1114は頸体境に平行沈線が8条の沈線が引かれ、小瘤が貼付される。器形は不明である。1115・1116は同一個体で体部はよく磨かれる。全部で4段の区画があり、内部には綾衫状の極細の沈線が引かれる。小瘤がつく。

1119・1120・1122～1126は全面無文の壺と思われるものである。口端の形状などから縄文時代後期と判断した。ただし出土地点がA区北側の遺物包含層で晩期の遺物と共に出土している。判断に苦しむものである。

#### (5) 単孔壺：第131図1113・1117・1118・1121

体部下半に1つの孔を穿孔している背の高い壺を単孔壺とした。本遺跡からは4個体のみの出土である。

1113は口縁部及び体部下半を欠損しているが形状から単孔壺とした。頸体境のくびれの部分に2条の刻み目帯がみられる。文様は不明である。1117は形状から単孔壺とした。頸部に入組み状の縄文帯が見える。瘤はつかない。体部には並行する2帯の縄文帯と入組み状の縄文帯が見える。文様内部にはL R単節縄文が充填される。1118は体部下半のみが残存している。文様モチーフの詳細は欠損により不明である。文様内部にはL R・R L単節縄文が充填され、場所によっては羽状縄文を呈している。体部最下端に穿孔される。

1121はほぼ全形がわかる個体である。文様モチーフがわかるように図示したため、肝心の穿孔が図示できなかった。底部から徳利状に立ち上がり頸体境で一旦括れる。その後頸部が膨らみ、再びすぼまり、口縁が立ち上がる。頸部と頸体境には1条の刻み目帯が認められる。体部文様は磨消部を重視した文様が描かれ、体部にはL R単節縄文が充填される。

#### (6) 注口土器：第132図1127～第136図1186

注口土器はほとんどが小破片で完形品は少ない。

1127～1182は壺形に注口がつくものである。1127～1139・1143は、刻み目帯が認められるものである。完形品はない。1140～1145は体部破片で詳細は不明である。1146は口縁部文様帯が1条の縄文帯を沈線で2分したものである。瘤がつき、体部文様はタスキ掛け状文にみえる。1147～1159はミミズ腫れ状の微隆起線で文様が描かれるものであるが、微隆起線上には櫛齒状線文が充填される。1160～1167は体部破片で瘤がつく。詳細は不明である。1168～1172は体部

中位に平行沈線が引かれ、その間に瘤が添付されるものである。体部は無文でよく磨かれる。壺形との区別が難しい。1173～1178は瘤のつく体部破片である。1179は三段作りで、全面無文のものである。1180は全面無文でよく磨かれる。SK244出土である。うまく接合せず、推定できる部分をつないで図上復元した。肩の部分には厚い隆帯がつき文様をなす。文様の全体は不明である。1181は器面が磨滅しており、文様もわかる部分のみ図示した。タスキ掛け状文に似た文様がみえる。器面に小瘤がつく。1182は全面無文で、沈線で円形モチーフが描かれる。器面に瘤はつかない。1183は全面無文の小型の注口土器である。底部には台がつく。推定4単位（注口部も含む）の瘤がつき、瘤の頂部は沈線で2分される。

1184は前述の深鉢J2類に注口がつくものである。深鉢形に注口のつくものはこれのみである。口縁形態は平縁で、口端に2個一対の突起がつく。突起は単純な形である。口縁部文様帶は1条の縄文帯を沈線で2分したもので、括れ部文様帶も同様である。RL単節縄文が横位回転される。頸部文様帶は2条の平行沈線が引かれ、その間にRL単節縄文が横位回転される。体部文様帶は括れ部直下に半円モチーフの文様が描かれ、体部中位以下にはタスキ掛け状文が描かれる。更に上下の文様を括弧状の沈線で連結している。RL単節縄文が充填される。深鉢J2類と同一時期と判断した。

1185は特異な注口土器である。底部には短い筒状の台がつく、その上に金魚鉢状の鉢がつく。頸体境で一旦括れ、頸部が大きく開きながら口縁部にいたる。口縁形態は平縁でやや片側に傾いている。頸部は無文でよく磨かれる。鉢部の上下に区画の縄文帯が1条があり、その間に注口部を中心として円形モチーフの縄文帯が存在する。ただしこの縄文帯がそのまま文様となるわけではない。この縄文帯は本来隆帯の剥落した部分で、隆帯以外の部分は磨かれて無文となっており、隆帯により磨かれなかった部分である。隆帯には刻みが入っている。台部下半には縄文帯が存在する。全体によく磨かれている。この注口土器はSK224出土である。同じ土壙から出土した注口や壺同様に特殊な器形である。器厚は厚い。やはり東北北部で類似した注口土器がみられる。縄文時代後期中葉の所産としてよいであろう。

1186は環状注口土器である。器面は磨滅しており、文様も全てがわかるわけではないが、判別の難しい沈線なども図上に示してある。大きく異なることはないであろう。平面形はドーナツ型で、それに注口部がつく。注口部の反対側には入り口がつく。同時期の遺跡から出土した環状注口土器には人面などがつく場合があるが、これにはつかず短く立ち上がって終わる。底部は欠損しているが、短い台がつくようである。文様は注口のつく先頭部と尻の部分に区画沈線が1条づつ存在する。その間に放射状に片側3帯の縄文帯が描かれる。側壁の縄文帯部分には大型の瘤がつく。瘤は頂部が沈線で2分される。

#### (7)香炉型土器：第136図1187

1187のみの出土である。底部にはやや高い台がつく。坏部の下半は無文でよく磨かれる。坏部上位には3条の沈線が引かれ、その間に小瘤が貼付される。口縁には取っ手と側面に折れた突起がつく。突起は縦に穿孔される。なお取手は欠損している。口縁部文様帶は2条の沈線が

引かれ、小瘤が貼付される。台部には2条の沈線で円弧上のモチーフを描き、それが上下に配置される。沈線の接点などには小瘤が貼付される。内面には煤状のものが付着している。

#### (8)その他：第137図1188～第138図1213

分類不能のものを一括した。1188～1209までは時期的には本群土器とほぼ考えてよいものである。これまで分類したもののはずかに含まれると考える。1210～1213は時期の異なることもありえるものである。2点についてのみ補足しておく。

1210～1212はB区の旧河川跡の6層から出土した。遺物包含層の最上層からの出土である。縄文時代晚期初頭の土器で、本土器群には入らないが、時期的に近接するものとして本群の最後に記載した。口縁形態は平縁で、突起がつく。突起には一山の突起と頂部を沈線で2分する突起の二つがあるようである。頸部には三叉文が描かれるが、単位数などは不明である。極細かなLR单節縄文が充填される。頸部と体部の間に狭い縄文帯が存在する。ただし、頸体境でのくびれではなく、おそらく砲弾型の器形を呈すると思われる。体部はLR单節縄文が横位回転される。

1213は小破片であるが図上復元した。肩の張りのない壺形を呈する。口縁形態は平縁で突起はつかない。口縁直下は無文帯である。頸部の屈曲の下には2条の沈線が引かれ、その間に櫛齒状条線文のようなものがV字形に交互に施文される。その後幅の広い無文帯があるが体部中位あたりに1条の沈線が横に引かれ、櫛齒状条線文のようなものが横位に施文される。その上から縦位の沈線が等間隔で引かれる。本遺跡から出土した縄文時代後期の土器には類似の土器はなく、後期の土器かも不明である。或いは弥生時代のものかと考えてみたが不明である。

#### 2-3 土器の一括性の検討

これまで土器を分類毎にみてきたが、次にそれぞれの土器の時期を考える。最初に本遺跡における土器の一括性を検討することにより土器組成を考えてみる。なお、本土器群は縄文時代後期中葉から後葉の土器と述べてきたが、具体的には後期中葉後半の加曾利B3式並行期から瘤付土器第2段階までである。古い部分から検討を始める。

#### S K 244 : 第49図遺物出土状況

ここからは5個体の遺物が出土している。出土状況は5個体が潰され混合した状態で出土した。埋没した後、土圧などで押しつぶされたと考えられる。他の遺構からの混入などは認められない。極めて一括性が高いといってよい。さらに出土した5個体はほぼ完形品であり、造作も丁寧なものである。墓壙ではないかと推測している。

問題は出土土器の異質性である。ほとんどの土器は山形県を含む東北中・南部では見られないものである。おそらく東北地方北部から搬入されたものと推測される。こうした点を捨象して土器の共通点を抽出すると次のようになる。

①出土した5個体の器種は、全面赤彩される壺・口縁部に1条の刻み目帯を持つ浅鉢、全面無文で台が付き墻帯による装飾のされる注口土器、全面無文で三段作りの注口土器、全面縄文

被覆の粗製鉢である。深鉢は出土していない。

②壺と浅鉢には刻み目が見えることから、同時期の資料にも刻み目が存在すると思われる。

③精製土器の地文は、壺や浅鉢の文様内に同一原体による異方向の羽状縄文が施文される。粗製土器の地文はL R 単節縄文を斜位に回転押捺している。

深鉢が出土していないため詳細な時期を特定するのが困難だが、抽出された特徴を踏まえて縄文時代後期中葉の加曾利B 3式並行の古段階としておく。東北地方南部における加曾利B 3式並行の土器については細分が確立されておらず、この細分も変更の余地もある。筆者にはそれを判断する根拠を持ち合わせていないため、今後の当該土器群の細分案を待ちたい。

#### S X 1406 : 第28図遺物出土状況

破線で推定プランを示したが、東へ伸びる可能性もある。推定プランを無視して説明する。周辺からは加曾利B 3式段階の土器片が出土している。ただしS K 244よりは新しいと思われる。713・733・1074といった瘤付土器段階の土器片も掲載されているが、遺物集中域から外れており除外する。また294・564も瘤付土器段階で、明らかな混入である。これ以外について深鉢の共通点を示すと次のようになる。

①深鉢の口縁形態は緩やかな大波状口縁である。

②深鉢の口縁部文様帯は1条の刻み目帯(100)、2条の刻み目帯(172・186)、1条の縄文帯(221)である。

③深鉢の頸部文様帯は存在するもの(221・227)、存在しないもの(100)がある。

④縄文原体は単節縄文の横位回転と異原体による羽状縄文が存在する。

#### S X 1423 : 第31図遺物出土状況

前記のS X 1406同様に加曾利B 3式新段階の土器片が集中している。問題のありそうな資料は282のみである。以下に抽出された特徴を挙げる。

①深鉢の口縁形態は緩やかな大波状口縁であるが、平縁のもの(374)も存在する。

②深鉢の口縁部文様帯は1条の刻み目帯(82・69・123・374・148・1047・108・143・142・117)、2条の刻み目帯(369・175・176・178・98-)、1条の縄文帯を持つもの(217)、1条の無文帯を持つもの(194)、存在しないもの(78・62)である。

③深鉢の頸部文様帯が存在するもの(217・194・175・374・143)、存在しないもの=地文・無文のもの(82・78・117)がある。

④縄文原体は単節縄文を横位回転するもの、異原体による羽状縄文(横位・縦位)、同一原体による異方向縄文(178?)がある。

⑤浅鉢では口縁部文様帯が1条の刻み目のもの(1045・1047)、幅広の縄文帯を持つもの(1025・846)がある。

#### S T 3 : 第8図遺物出土状況

瘤付土器第2段階の堅穴住居である。92・1034・1127・139は混入であろう。以下に抽出された特徴を挙げる。

①精製深鉢の器形は頸体境で括れるもの(413・477)と括れないものがある(709)

②精製深鉢の口縁形態は平縁で、大波状のものは出土していない。

③深鉢の口縁部文様帯は1条の縄文帯(413・410・407)、1条の縄文帯を沈線で2分するもの(477・511・472・475・482・479・709)、2条の縄文帯とその間の無文帯からなるもの(562・613・645・533)がある。ただし2条の縄文帯とその間の無文帯からなるものは562以外全て破片資料で覆土からの出土である。よってS T 3の土器から除外する。

④縄文原体は単節縄文若しくは無節縄文を横位回転させる。

#### S T 87 : 第14図遺物出土状況

瘤付土器第2段階の竪穴住居である。抽出された深鉢の特徴を以下に示す。

①精製深鉢は頸体境で全て括れる。括れないものは出土していない(ないわけではない)。

②精製深鉢の口縁形態は基本的には平縁で、鋭角な大波状(344)は稀である。

③深鉢の口縁部文様帯は2条の縄文帯とその間の無文帯からなるもの(528・592・626・546・556)が基本である。小破片では他の文様を持つものもあるが、覆土からの出土である。

④縄文原体は単節縄文若しくは無節縄文を横位回転させる。

#### S K 100 : 第14図遺物出土状況

瘤付土器第2段階の土壤である。S T 87を切るが、土器の組成をみるとS T 87と同時期である。近接した時期の遺構と思われる。抽出された深鉢の特徴を以下に示す。

①精製深鉢は頸体境で全て括れる。括れないものは出土していない。

②精製深鉢の口縁形態は基本的には平縁である。

③深鉢の口縁部文様帯は2条の縄文帯とその間の無文帯からなるもの(526・527)である。

④縄文原体は単節縄文若しくは無節縄文を横位回転させる。

以上一括性の高いと思われる遺構を検討したが、その結果加曾利B 3式の古い段階、同式新段階、瘤付土器第2段階古段階、新段階が確認できた。

問題は加曾利B 3式と瘤付土器第2段階の間に位置する西ノ浜式である。前述したように河川跡の層位毎の出土状況からは明確な一括性が窺われず、陸地でも当該時期の良好な遺物集中域は認められなかった。おそらくこの時期には竪穴住居を廃絶する際、河川跡に土器を廃棄したものと推測される。

このように西ノ浜式の土器群については本遺跡だけの出土状況からは良好な成果が得られなかった。当該期の土器編年を考える上では土器の一括性に限界があり、型式学的な方法をとらざるを得ない。以下に形式学的な操作を行った上での編年案を示したい。

#### 2-4 小結 ~土器縄年試案~

土器分類の方法で既に触れたが、器形と口縁部形態、口縁部文様帯による分類が有効なのではないかと考えている。特に瘤付土器第2段階の新古の別をみると文様帯による区別が竪穴住居の床面一括性からも窺える。この方法を西ノ浜式にもあてはめてみたい。こうした方法については既に小林圭一氏が提案している。小林説を参考にしながらも本遺跡の出土資料をもとに次のような試案を示す。

### 砂子田2a群土器

加曾利B3式並行の土器を「砂子田2a群土器」とし、古段階と新段階に細分する。ただし加曾利B3式並行の土器が2つ以上に細分される可能性もある。また新古の時期差を設けたが、明確な証拠はない。或いは同じ時期に属する可能性もある。ただしそれ以上の判断は不可能であるため、ここでは仮に新古に分別しておく。

#### 砂子田2a群土器（古段階）

加曾利B3式古段階の土器。SK244出土土器から設定した。深鉢が出土せず、器種も壺・浅鉢・注口土器に偏るため、共通する口縁形態は抽出できなかつた。文様は磨消部を強調するS字文やP字文である。施文される縄文は同一原体を異方向に回転押捺するのが良くみられるが、異原体による羽状縄文も見られる。

#### 砂子田2a群土器（新段階）

加曾利B3式新段階の土器。SX1406とSX1423から設定した。前述したように口縁形態が緩やかな大波状のものである。分類でいうと深鉢C1・C2、深鉢D1・D2である。他に平縁の深鉢である深鉢H、深鉢I、深鉢L1、深鉢Mからなる。口縁部文様帯は無文・1条の刻目帯・2条の刻目帯・1条の縄文帯からなる。頸部文様帯は存在するものとないものがある。仙台湾より北では西ノ浜式段階まで頸部文様帯を欠く傾向がみられることから地域差を表す可能性もある。ここでは出土状況から頸部文様を持つものも持たないものも同一の段階と理解した。文様は太目の帶縄文もしくは入組帶状文であるが、入組帶状文は瘤付土器第2段階にみられるような右もしくは左へ順次下がっていくものではなく、2段目が元の方向に折り返すものである。施文される縄文は同一原体によるものは少なく、異原体による羽状縄文が盛行する。器面への瘤の貼付は認められないが、しばしば突起のつくものが存在するようである。

### 砂子田2b群土器

次に西ノ浜式段階の土器を「砂子田2b群土器」とし、古段階と新段階に細分する。ただし細分案は試案であり、肯首されない場合もある。また新古に細分したが、新段階のものが数量的にかなり少なく、細分されない可能性さえあるが、ここでは試案として細分案を提示する。

#### 砂子田2b群土器（古段階）

口縁形態が三角状の大波状で、口縁部文様帯が1条の縄文帯のもの。具体的には深鉢E1が主となる。これに平縁の深鉢J1a・深鉢L2・深鉢N1が組成する。基本的には大波状が盛行し、平縁はほとんどない。頸部文様帯と体部文様帯と共に持ち、太目の入組帶状文やタスキ掛け状文を施文するものが多い。施文される縄文は異原体による羽状縄文や単節斜行縄文が多い。大波状口縁の波頂部・波底部に突起が付くものが見られるようになる。器面に瘤の貼付されるものは基本的にないようである。

#### 砂子田2b群土器（新段階）

口縁形態が三角状の大波状で、口縁部文様帯が1条の縄文帯を沈線で2分するものである。具体的には深鉢E2が主となる。これに平縁の深鉢L3・深鉢N2（出土例なし）が組成する。深鉢L器形はこの段階で廃絶する。文様構成や文様などは古段階とほぼ同じである。縄文原体

は単節斜行縄文がやや増える。大波状口縁が主体となるのはここまでで、以後平縁の土器が主体となる。なお1条の縄文帯を沈線で2分するものについて大波状のものと平縁のものには時期差があると判断している。また平縁のものでも1条の縄文帯をもつものをJ1a類とJ1b類に細分したが似て非なるものと理解し時期差を設けた。大波状の波頂部・波底部に突起が付くものがあり、器面への瘤の貼付がみられるようになる。

#### 砂子田2c群土器

瘤付土器第2段階の土器を「砂子田2c群土器」とし、古段階と新段階に細分した。

#### 砂子田2c群土器（古段階）

本遺跡のS T 3を基準資料とする。口縁形態が平縁で口縁部文様帯が1条の縄文帯を沈線で2分する深鉢J2類が基準である。これに深鉢O1が組成する。S T 3の出土状況から更に深鉢J1b類が共伴する。ただしJ1b類は数量的に少なく、本来の姿はJ2類と思われる。また大波状深鉢のF器形が組成すると推測されるが、口縁部文様帯は深鉢F類とは異なる可能性もある。他に無文の小型深鉢も共伴するようである。頸部や体部には多段化した入組帶状文や弧線連結文が見られる。また体部文様帯が消失して地文や格子状の沈線文が描かれるものも現れる。縄文原体は無節や単節の斜行縄文が施文される。突起はほとんど見られず、器面への瘤の貼付が盛行する。

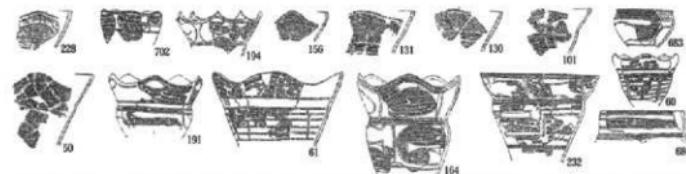
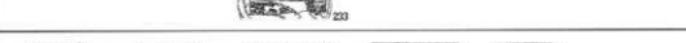
#### 砂子田2c群土器（新段階）

本遺跡のS T 87・S K 100を基準資料とする。口縁形態が平縁で口縁部文様帯が2条の縄文帯とその間の無文帯からなる。深鉢J3類が基準である。これに深鉢F、深鉢N3、深鉢O2が組成すると思われる。文様・縄文原体・突起・瘤については古段階と同じである。

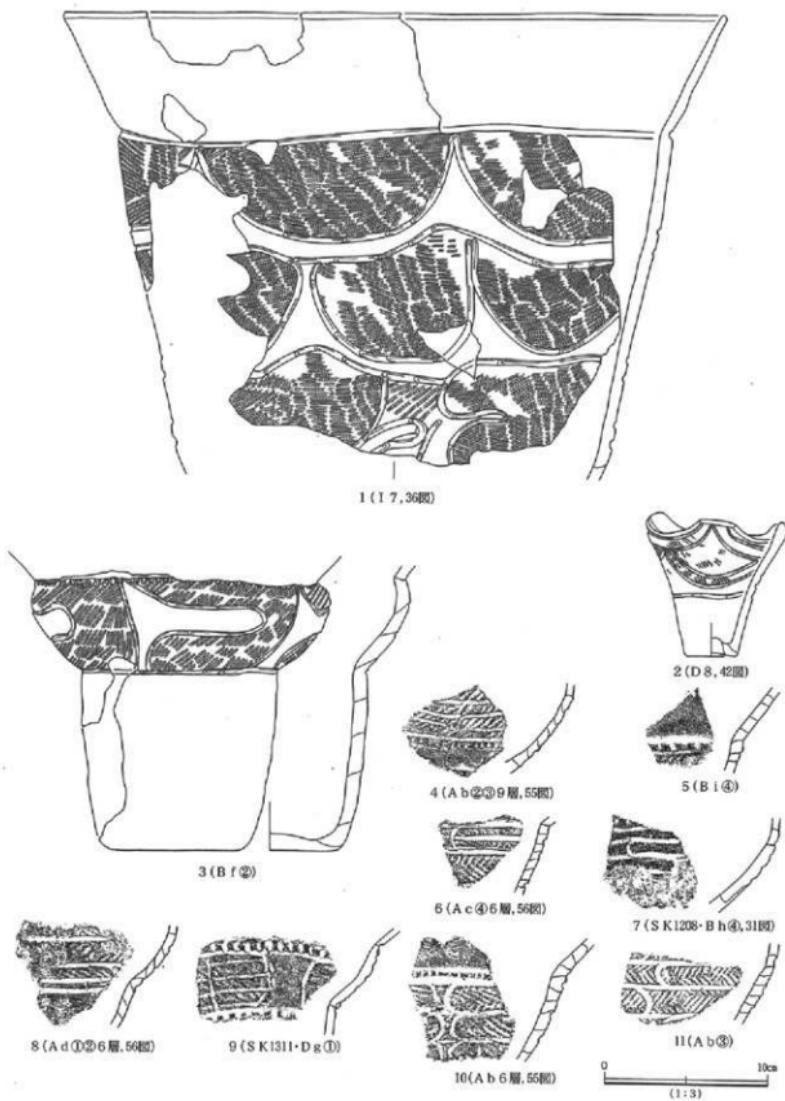
以上編年試案を述べたが、問題点も多い。特に西ノ浜式段階については、細分の可否・1条の縄文帯をもつ平縁深鉢の分別の問題など問題が残されている。西ノ浜式段階の竪穴住居・土壙の一括資料が乏しい現状ではこれらの問題を解決することはできなかつたが、本遺跡の出土状況から西ノ浜式前後の時期の型式学的特徴が明らかとなり、展望も見えてきたのではないだろうか。西ノ浜式段階にても文様構成の窺われる完形土器が多数出土しており、資料操作の可能性も広がった。

また瘤付土器第2段階については竪穴住居跡の一括資料により新旧2細分が可能となった。当該期の土器の編年については安孫子昭二氏や小林圭一氏が既に編年案を示しているが、編年の細分を進める上での基準となる資料といえよう。

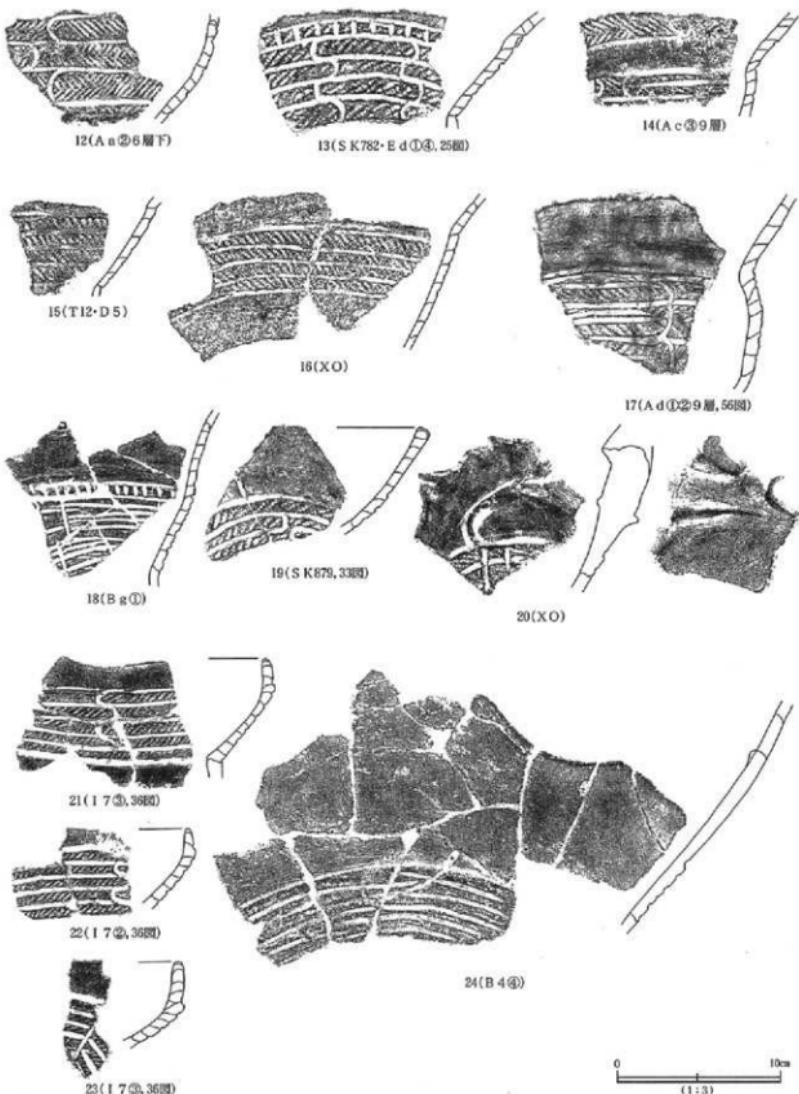
なお、次頁の第62図に編年試案を提示したので参照されたい。小林氏が平成13年の縄文セミナーで発表した編年案とは異なる部分もあるが、併せて参考されれば本報告での試案の意図を読み取っていただけるであろう。紙幅の都合詳述できない部分もあったが小結とする。

砂子田2号 墓 （西）	古段階 （？）	(遺物) SK244		
		(遺物) SK1406 SK1423		
砂子田2号 墓 （西）	新段階 （？）	(口縁部文様) ゆるやか な大波状		
		(口縁部文様) 幾文字 幾文字 1金の環形 2条の環形		
砂子田2号 墓 （西）	古段階 （？）	(遺物) なし		
		(口縁部文様) 三脚状の大波状		
砂子田2号 墓 （西）	新段階 （？）	(口縁部文様) 1金の環形 1条の環形 1条の波形		
		(遺物) なし		
砂子田2号 墓 （西）	新段階 （？）	(口縁部文様) 三角状の大波状		
		(口縁部文様) 1金の環形 1条の環形 1条の波形		
砂子田2号 墓 （西）	古段階 （？）	(遺物) ST3		
		(口縁部文様) 主井:平縫		
砂子田2号 墓 （西）	新段階 （？）	(口縁部文様) 1条の波形 +波形		
		(遺物) SK257 SK100		
砂子田2号 墓 （西）	新段階 （？）	(口縁部文様) 主井:平縫 1条の波形 +波形		
		(口縁部文様) 2条の波形 とその他の波形		

第62図 後期土器編年試案

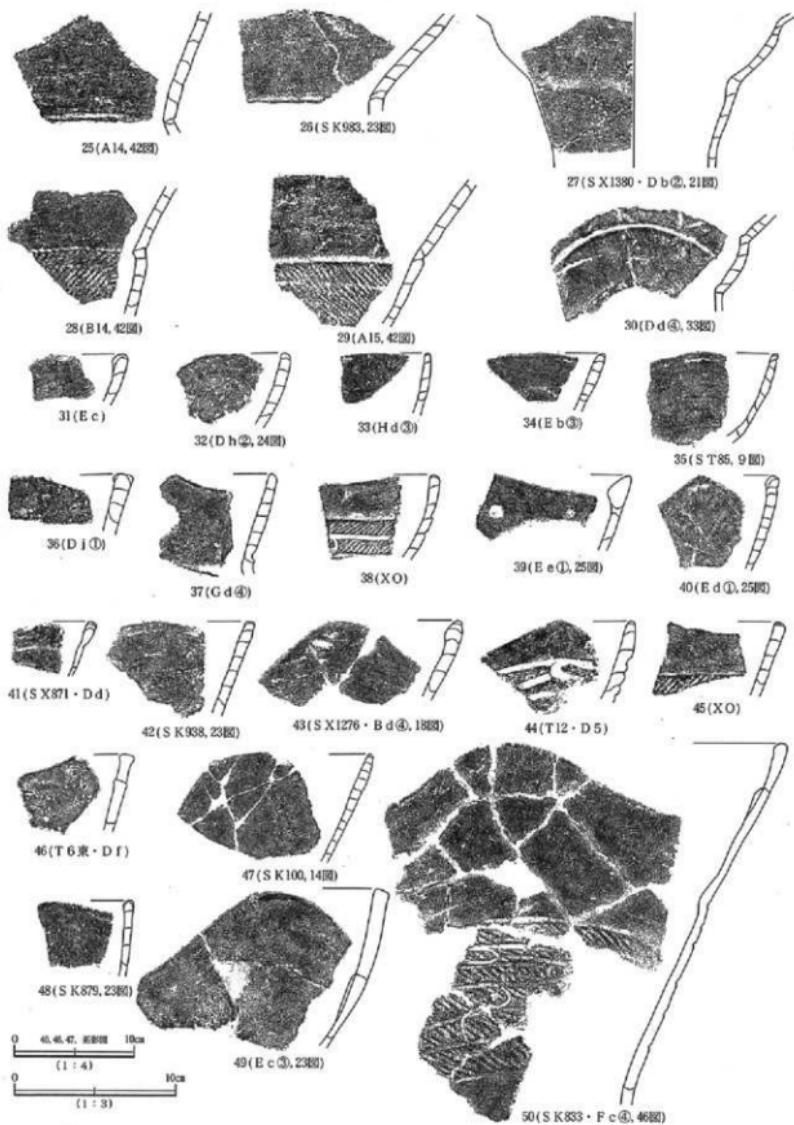


第63図 後期土器実測図(1)

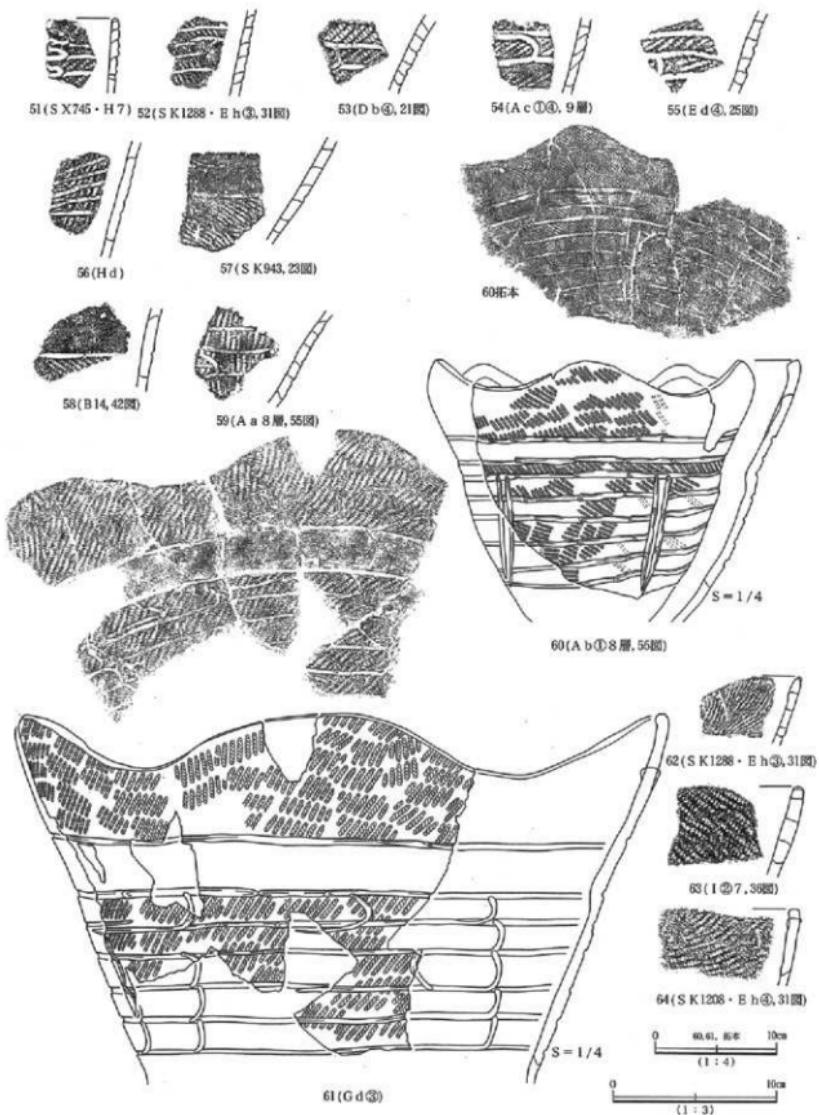


第64図 後期土器実測図 (2)

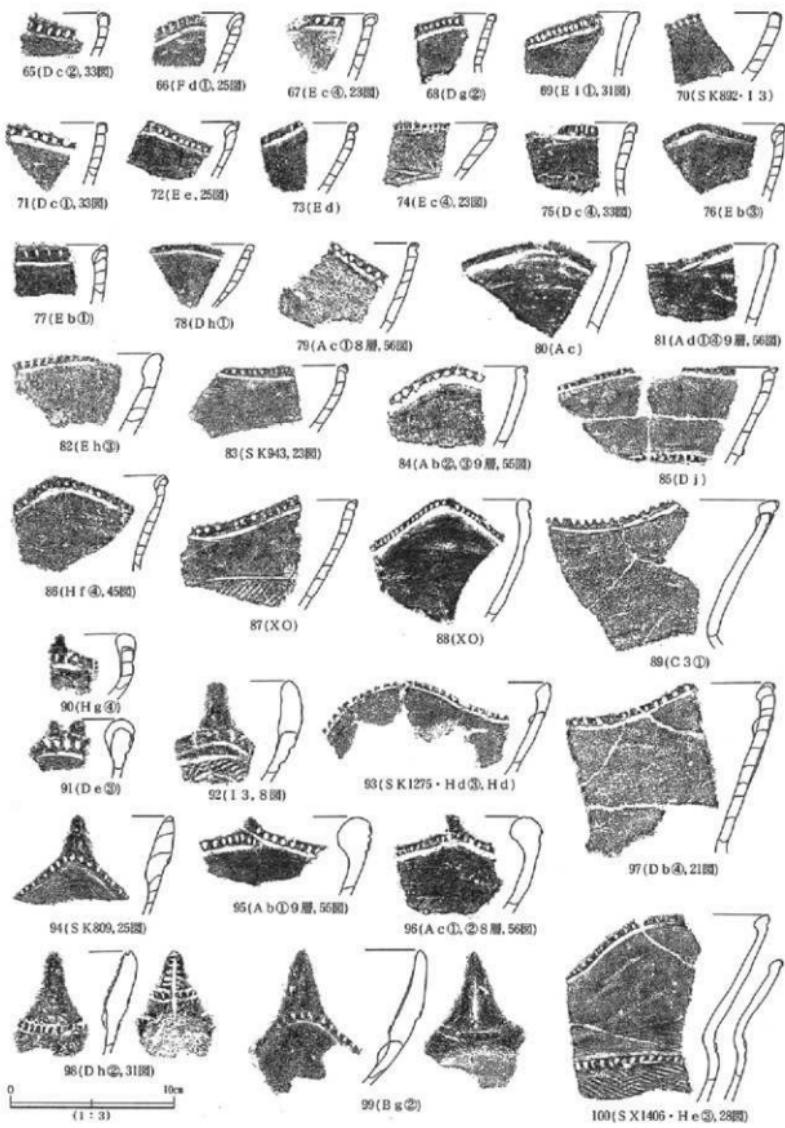
出土した遺物



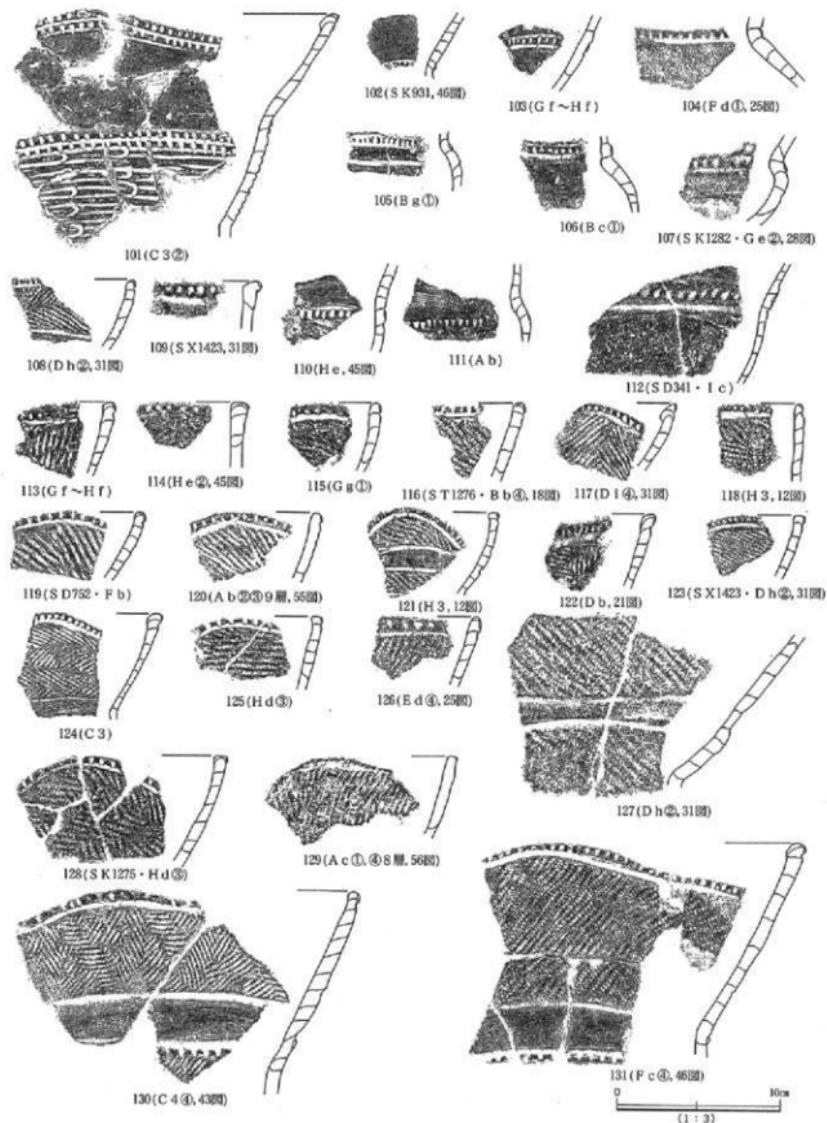
第65図 後期土器実測図 (3)



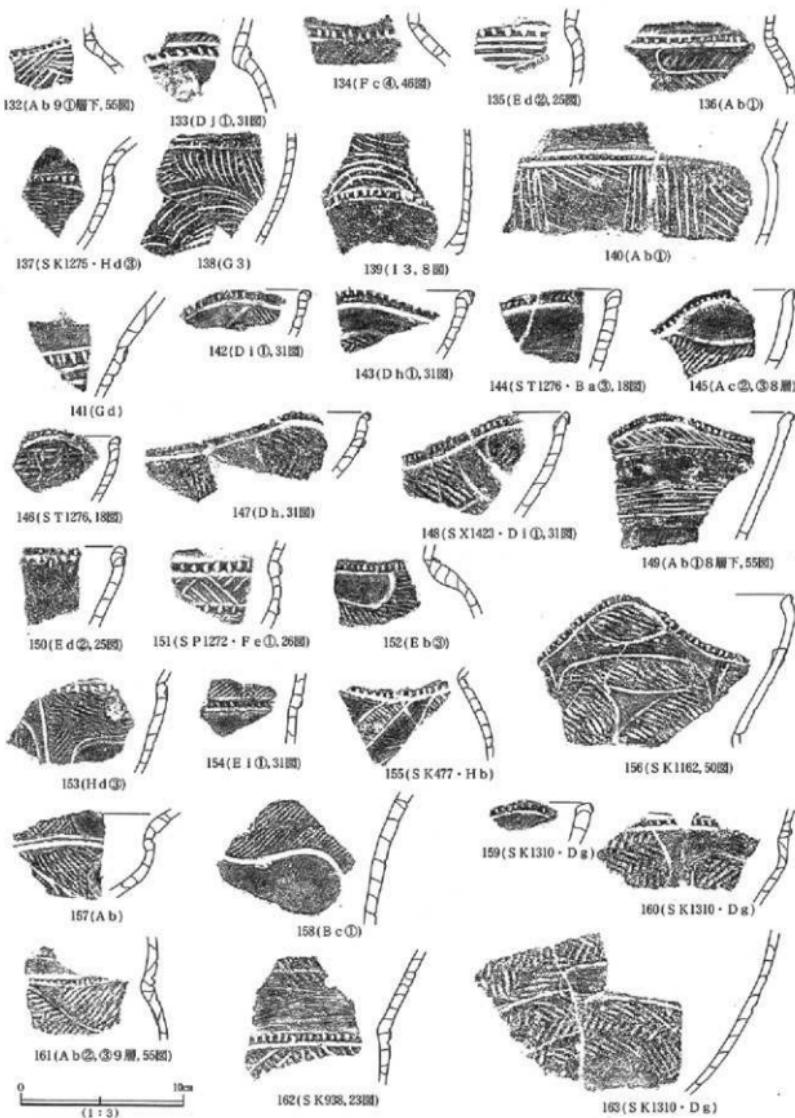
第66図 後期土器実測図 (4)



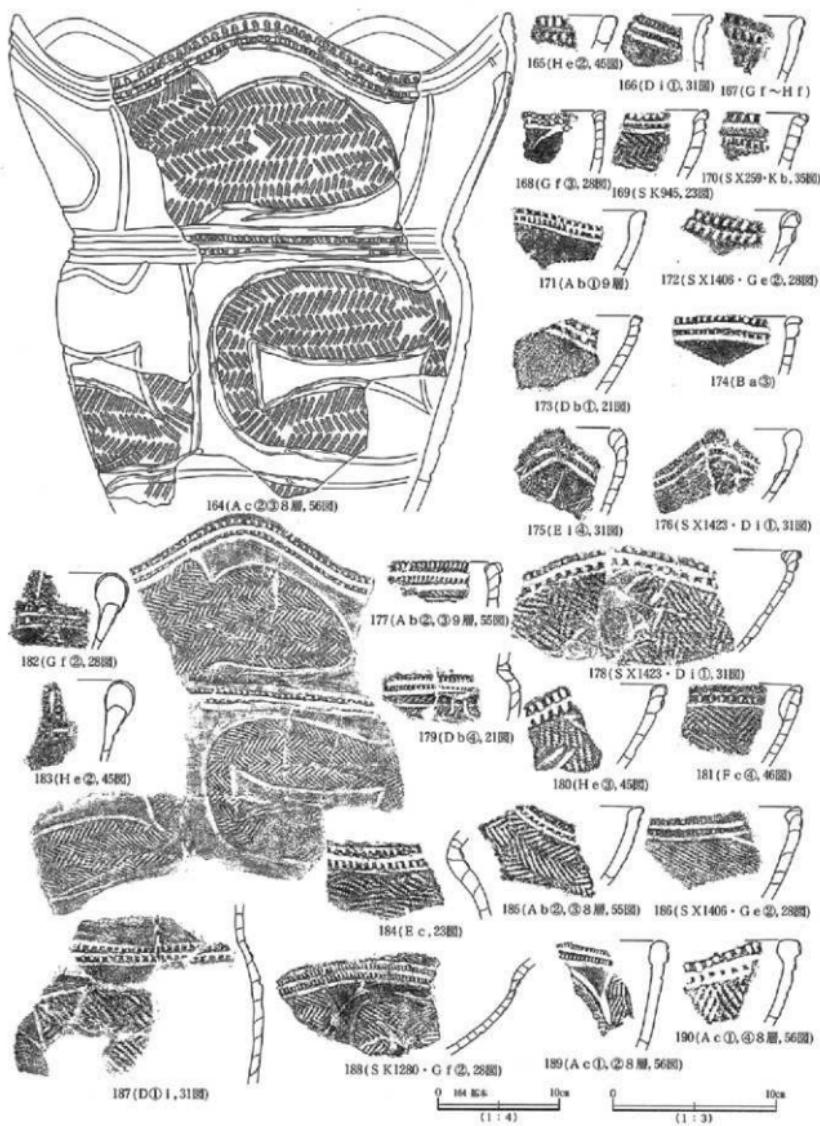
第67図 後期土器実測図 (5)



第68図 後期土器実測図 (6)

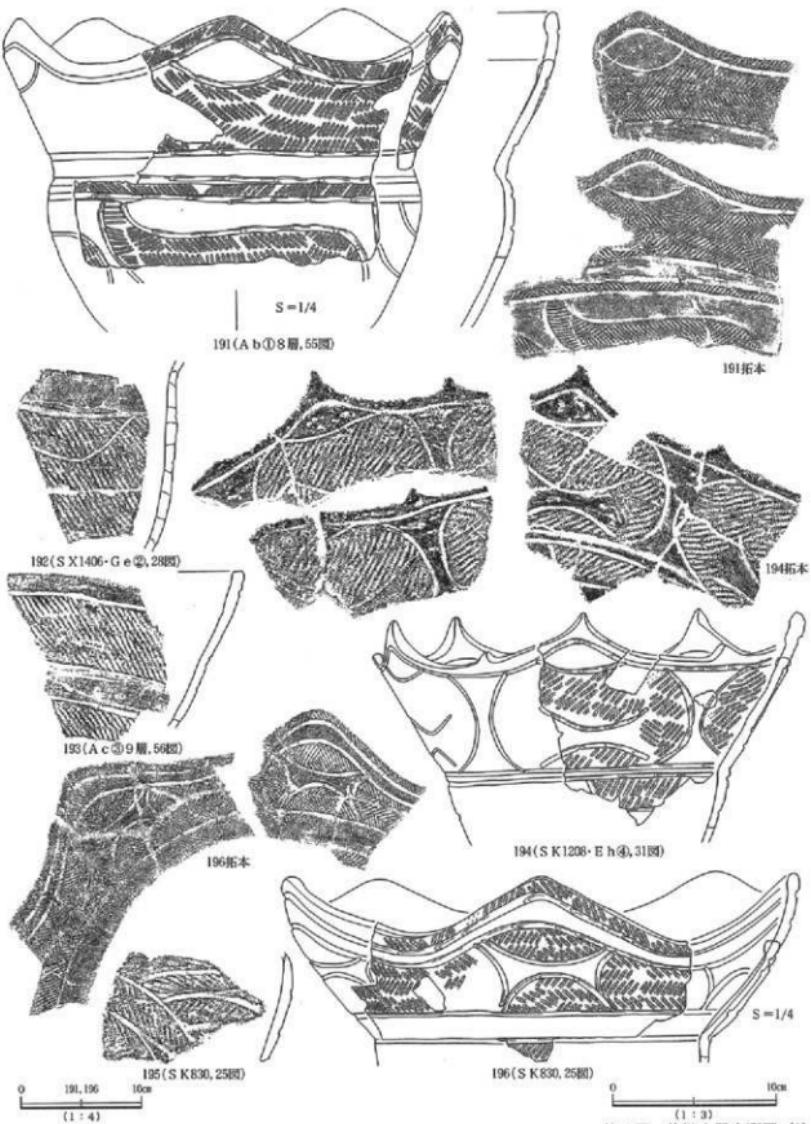


第69図 後期土器実測図 (7)

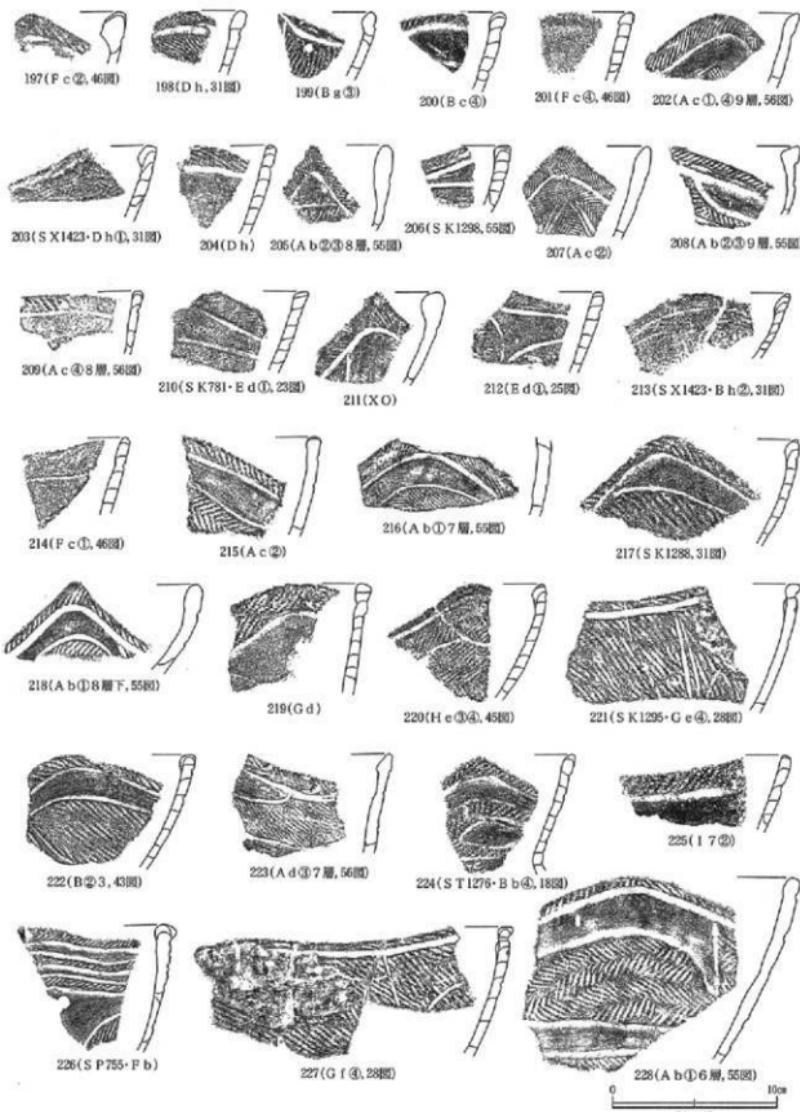


第70図 後期土器実測図 (8)

出土した遺物

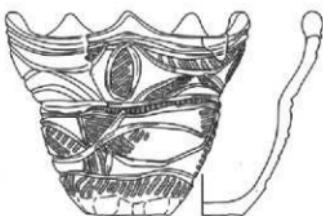


第71図 後期土器実測図 (9)



第72図 後期土器実測図(10)

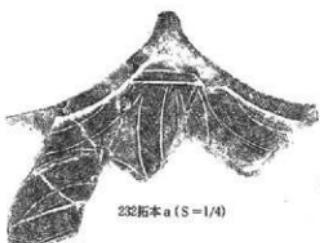




231(A b②, ③ 9層, 55図)



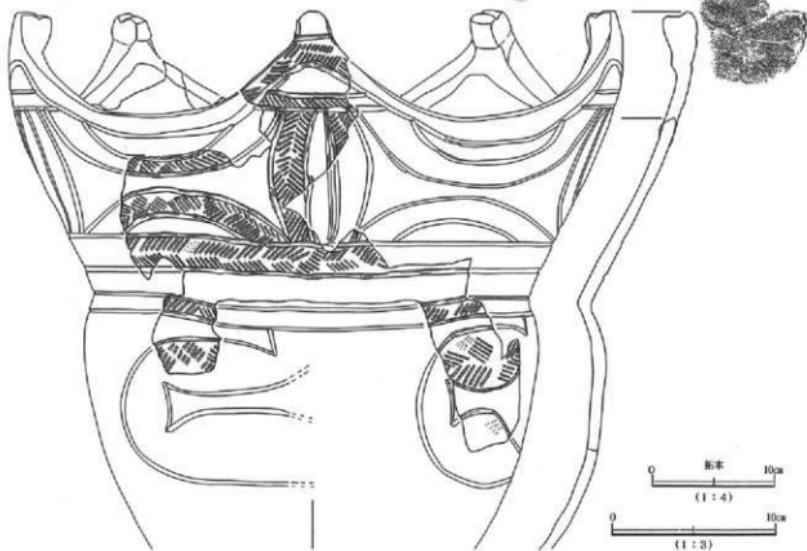
231拓本 (S = 1/4)



232拓本 a (S = 1/4)

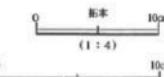


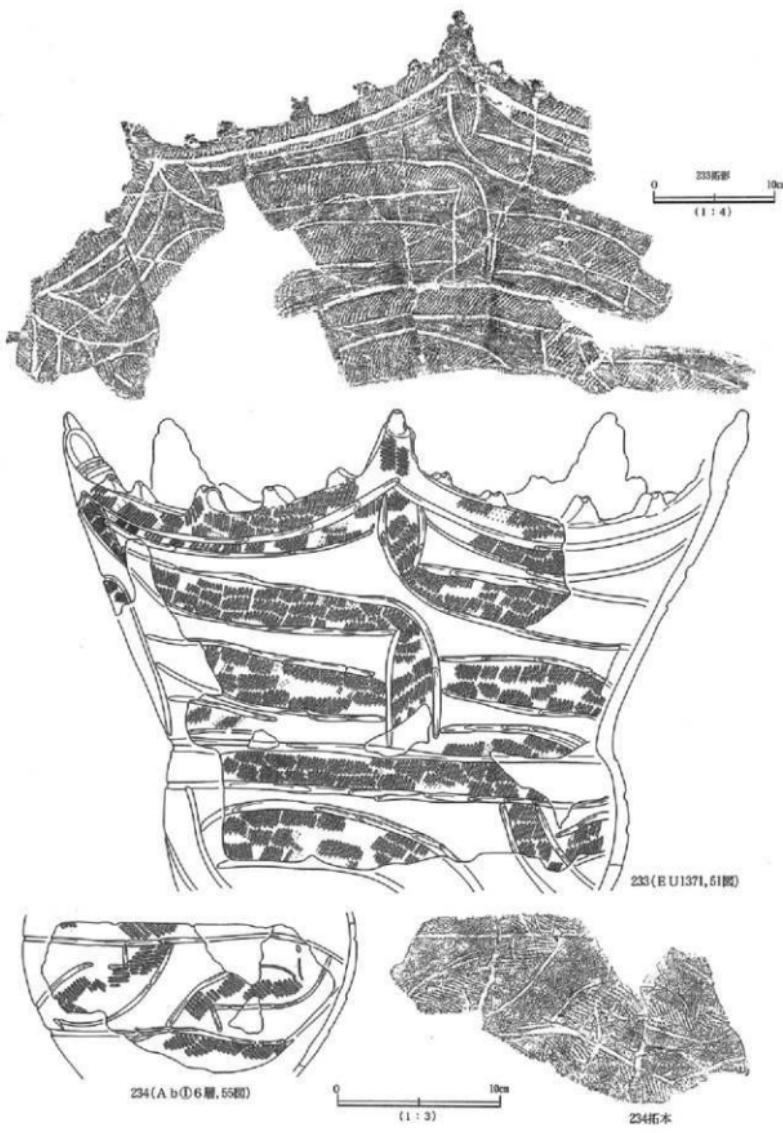
232拓本 b (S = 1/4)



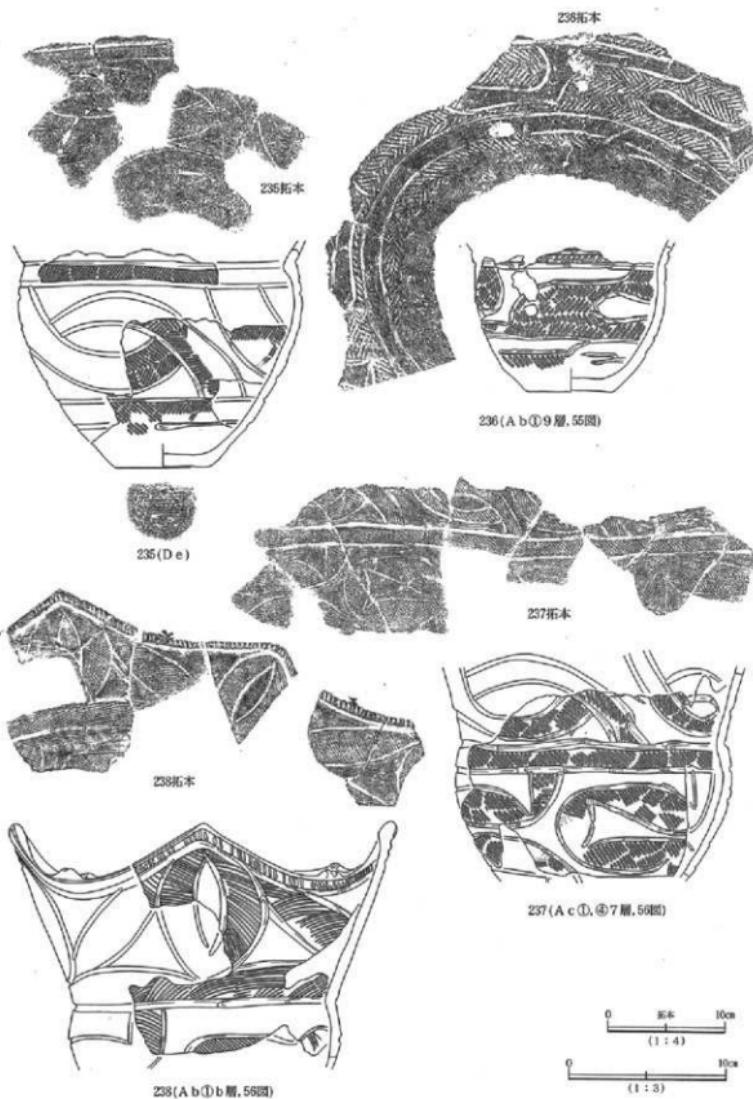
232(A h①)

第74図 後期土器実測図 (12)

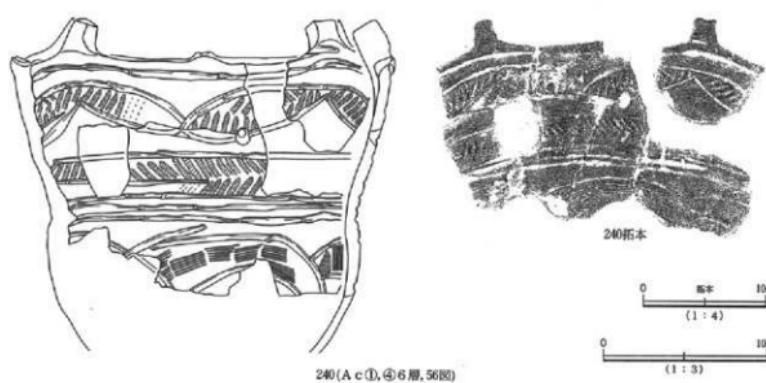
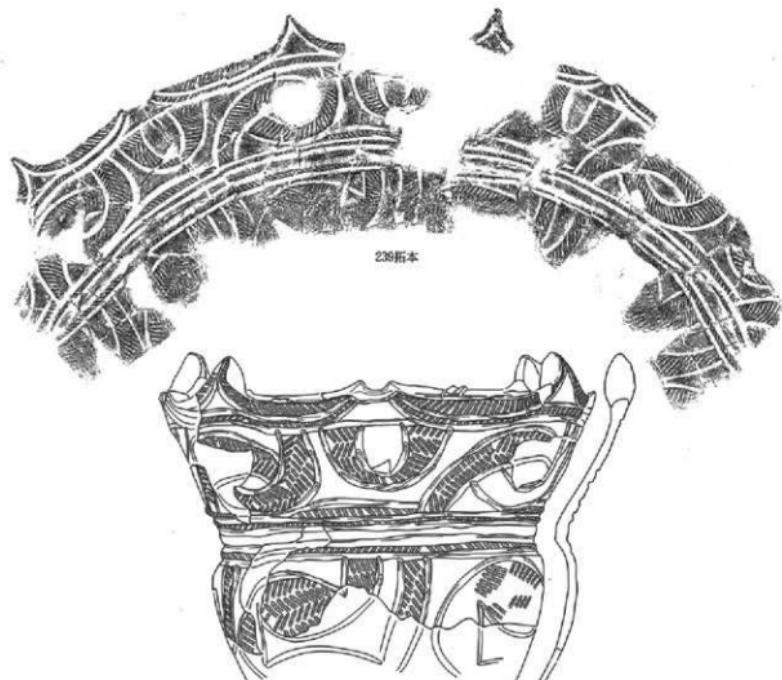




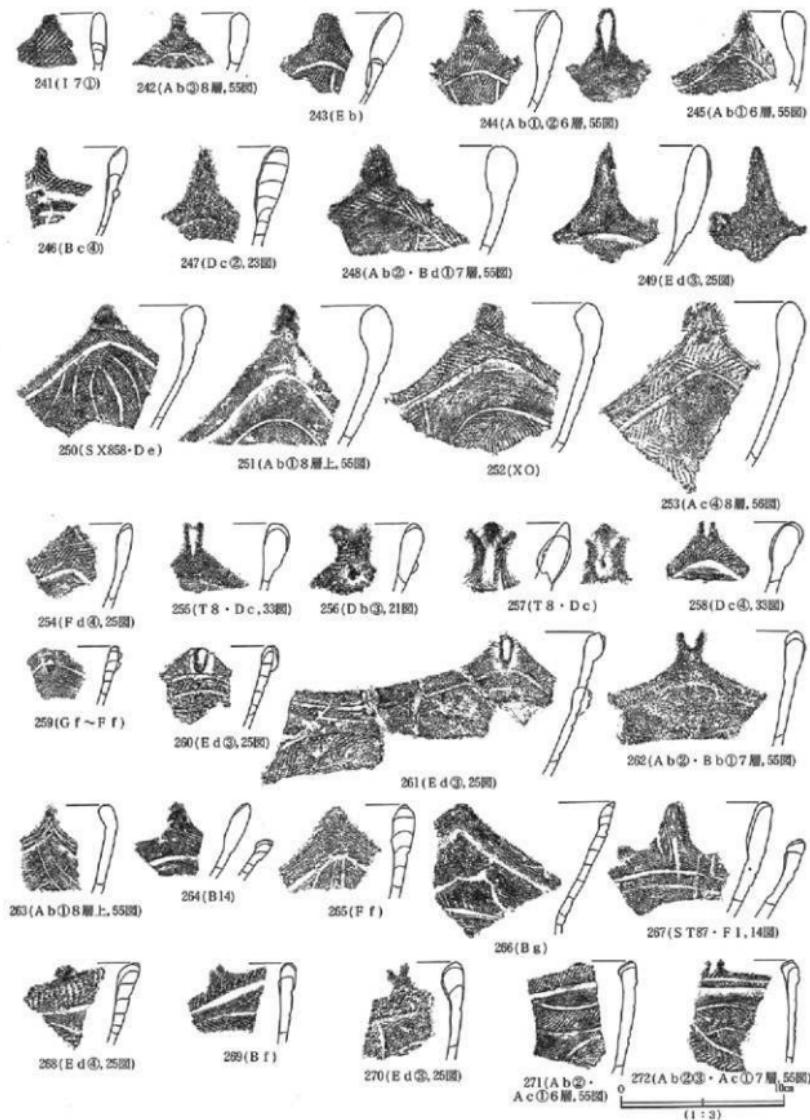
第75図 後期土器実測図 (13)



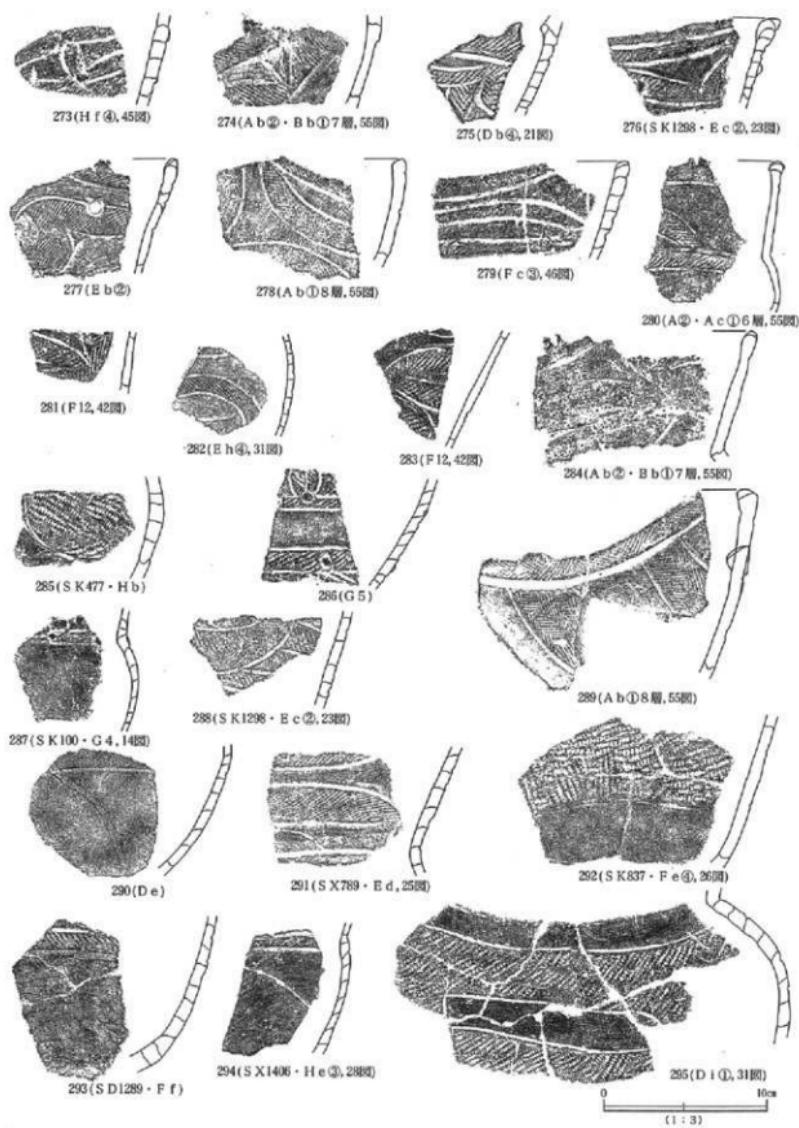
第76図 後期土器実測図 (14)



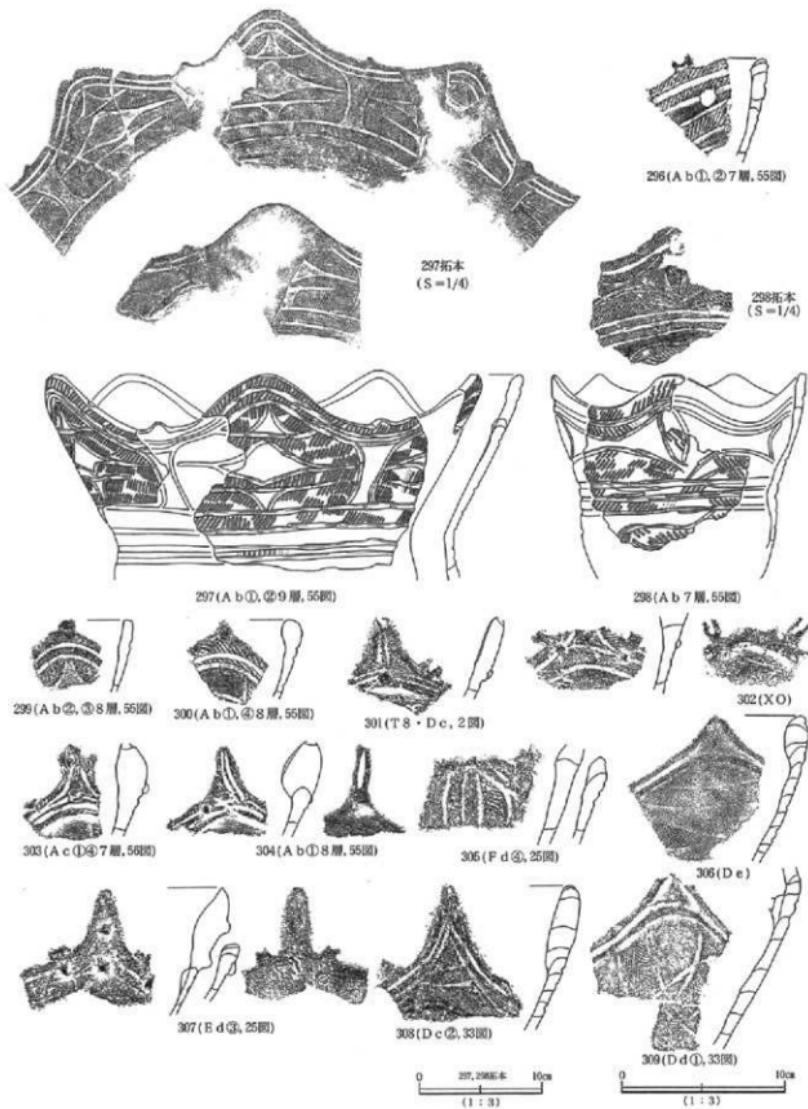
第77図 後期土器実測図 (15)



第78図 後期土器実測図 (16)

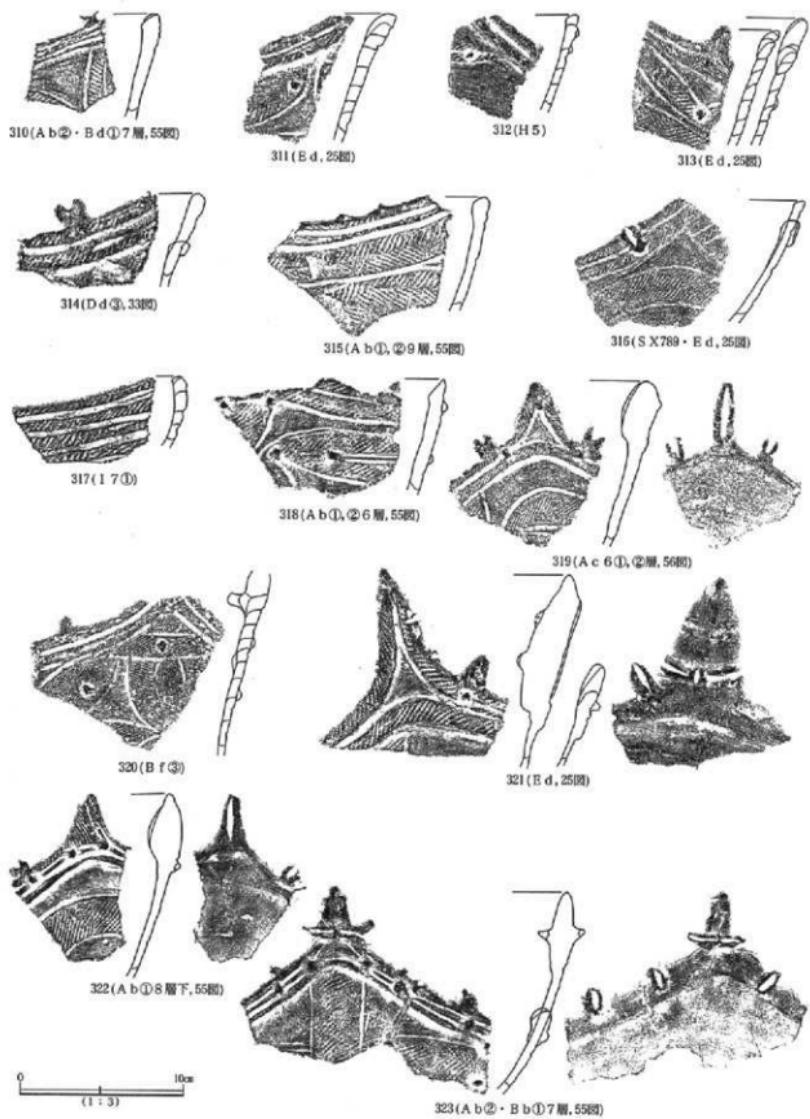


第79図 後期土器実測図 (17)

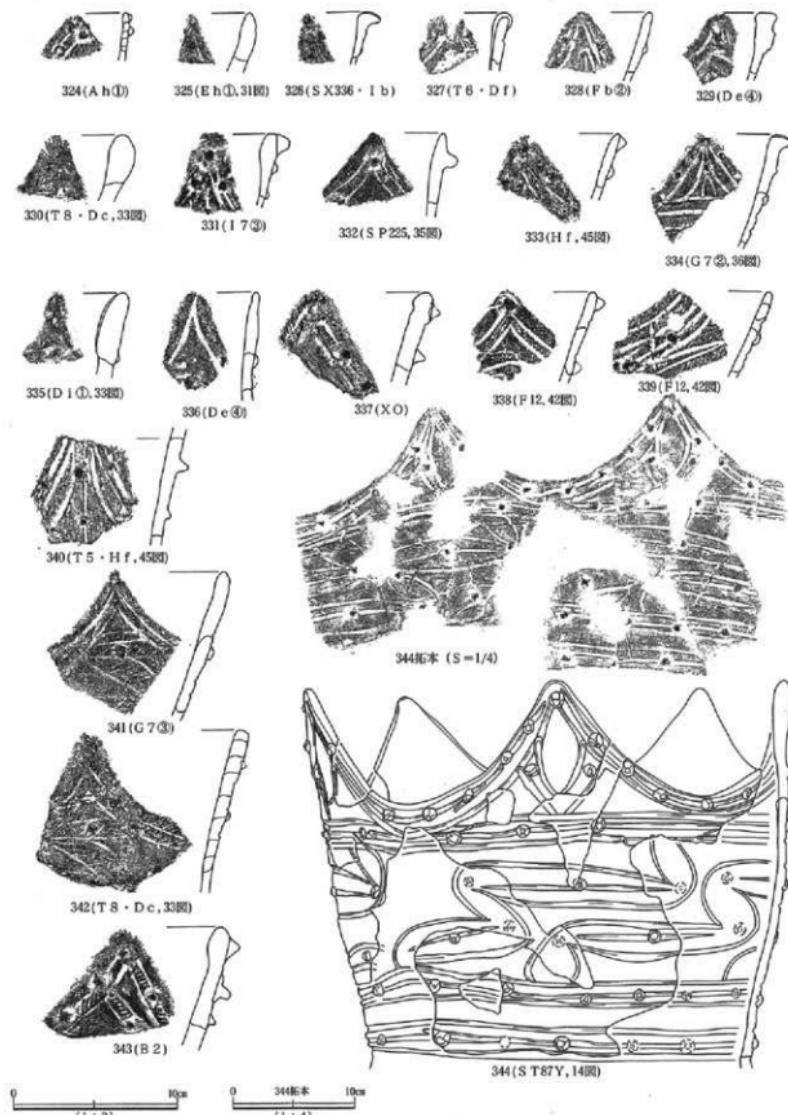


第80図 後期土器実測図 (18)

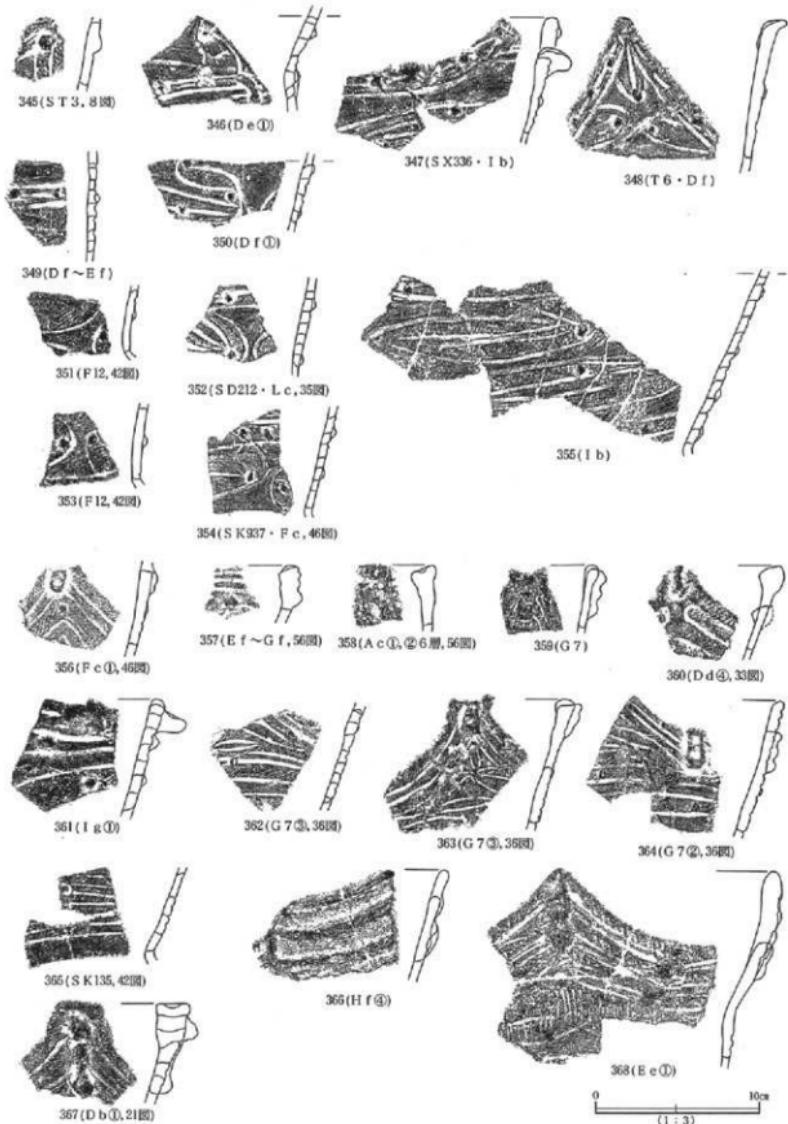
出土した遺物



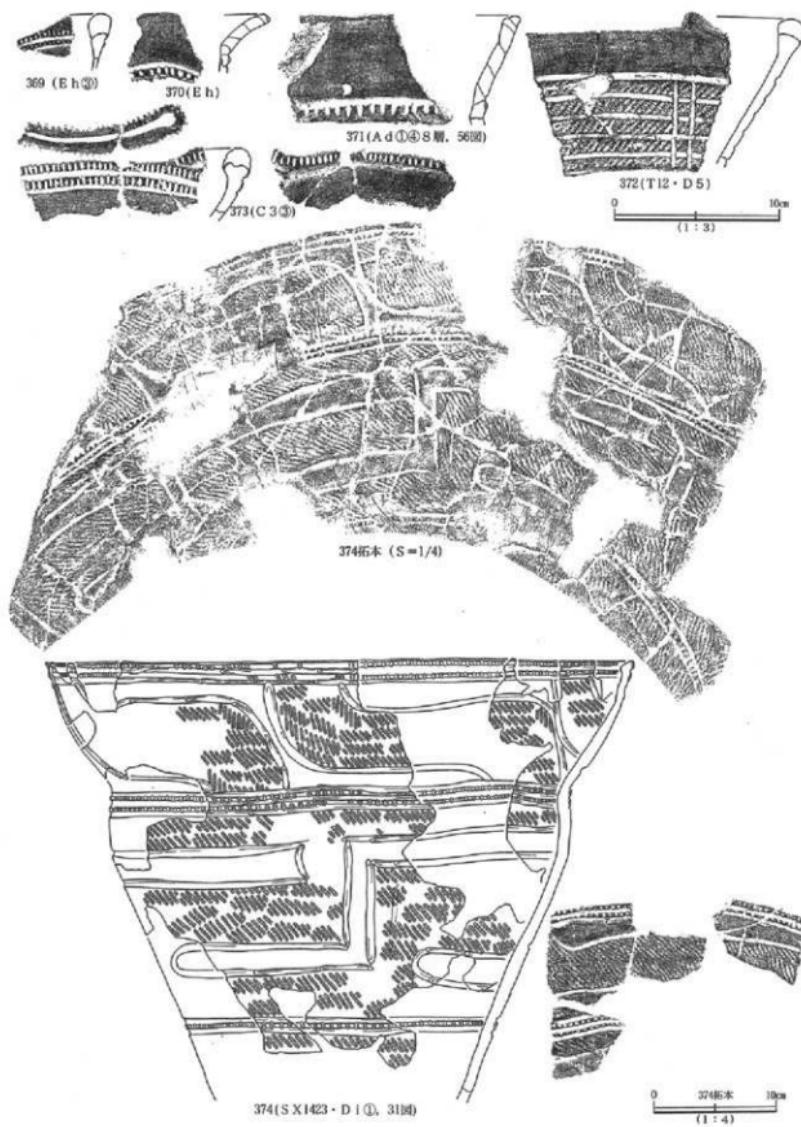
第81図 後期土器実測図 (19)



第82図 後期土器実測図 (20)

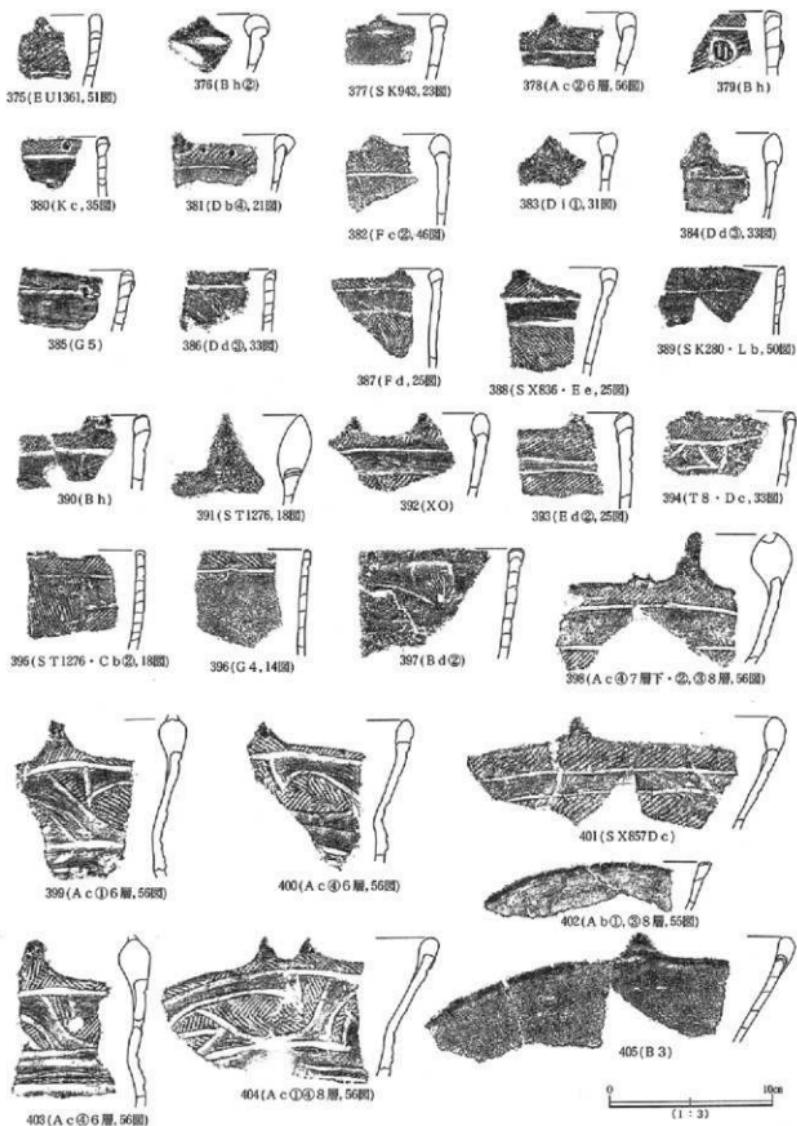


第83図 後期土器実測図 (21)

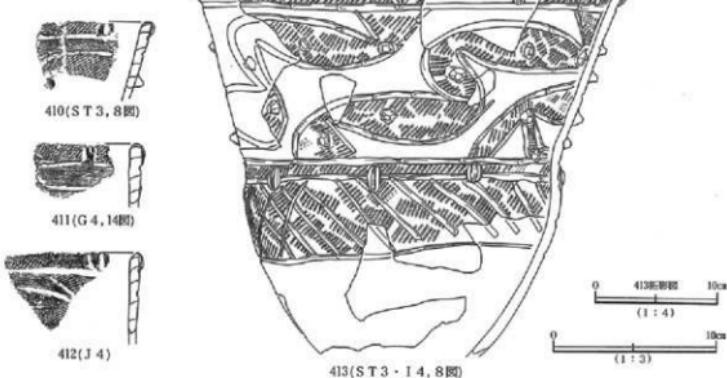
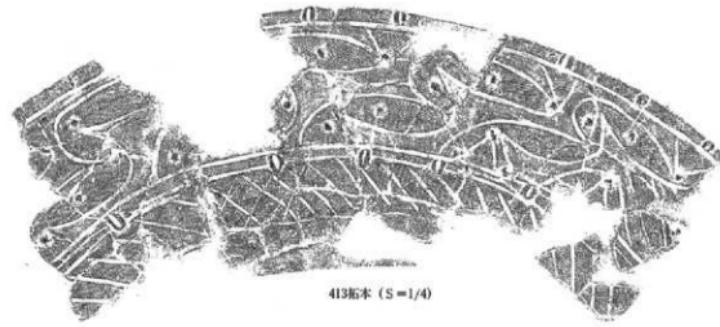


第84図 後期土器実測図 (22)

出土した遺物

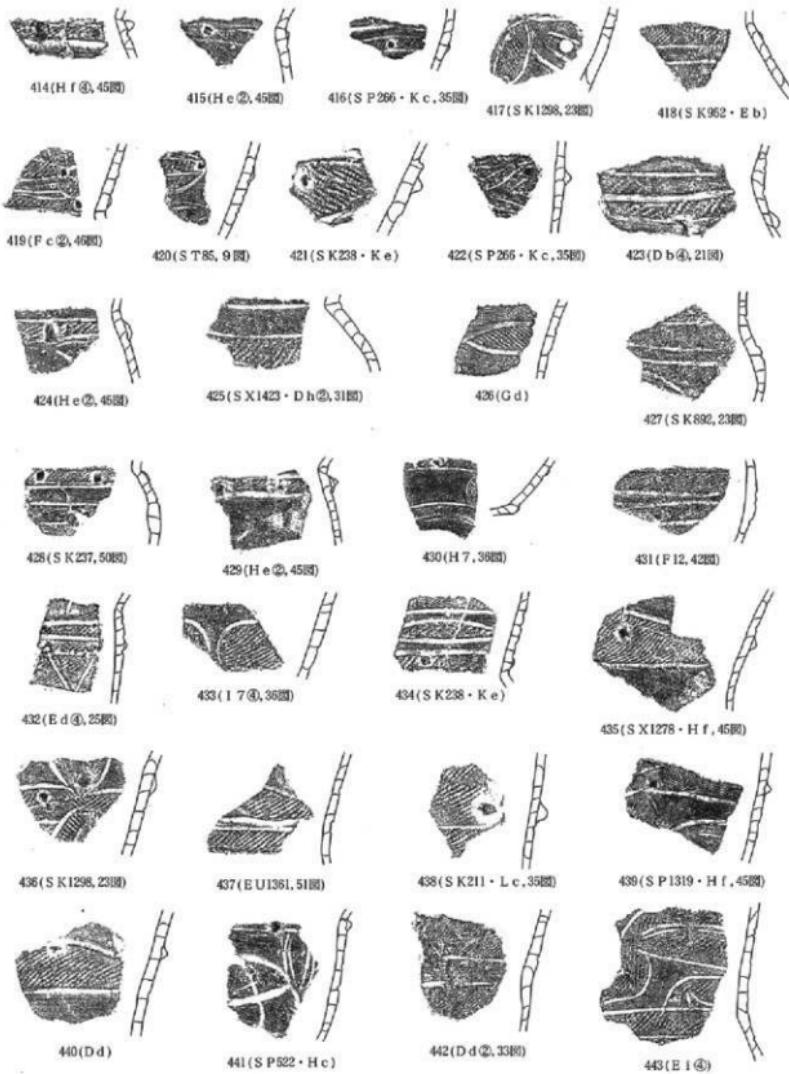


第85図 後期土器実測図 (23)



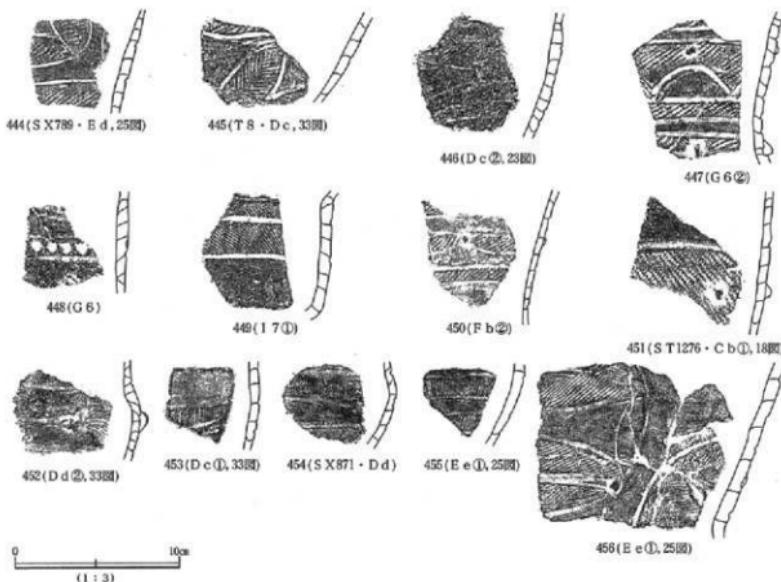
第86図 後期土器実測図 (24)

出土した遺物

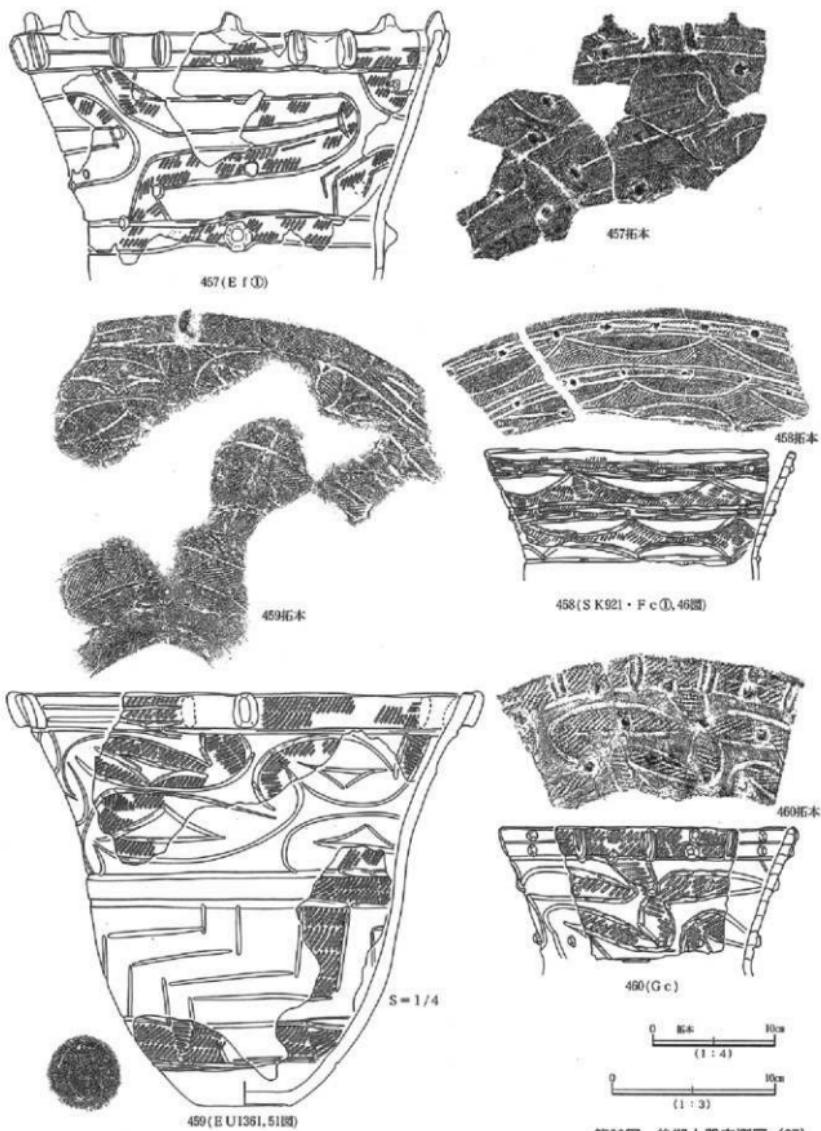


0 10cm  
(1 : 3)

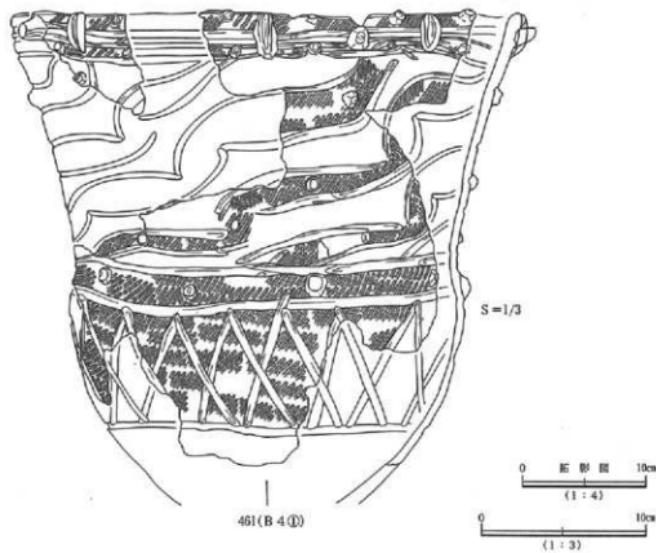
第87図 後期土器実測図(25)



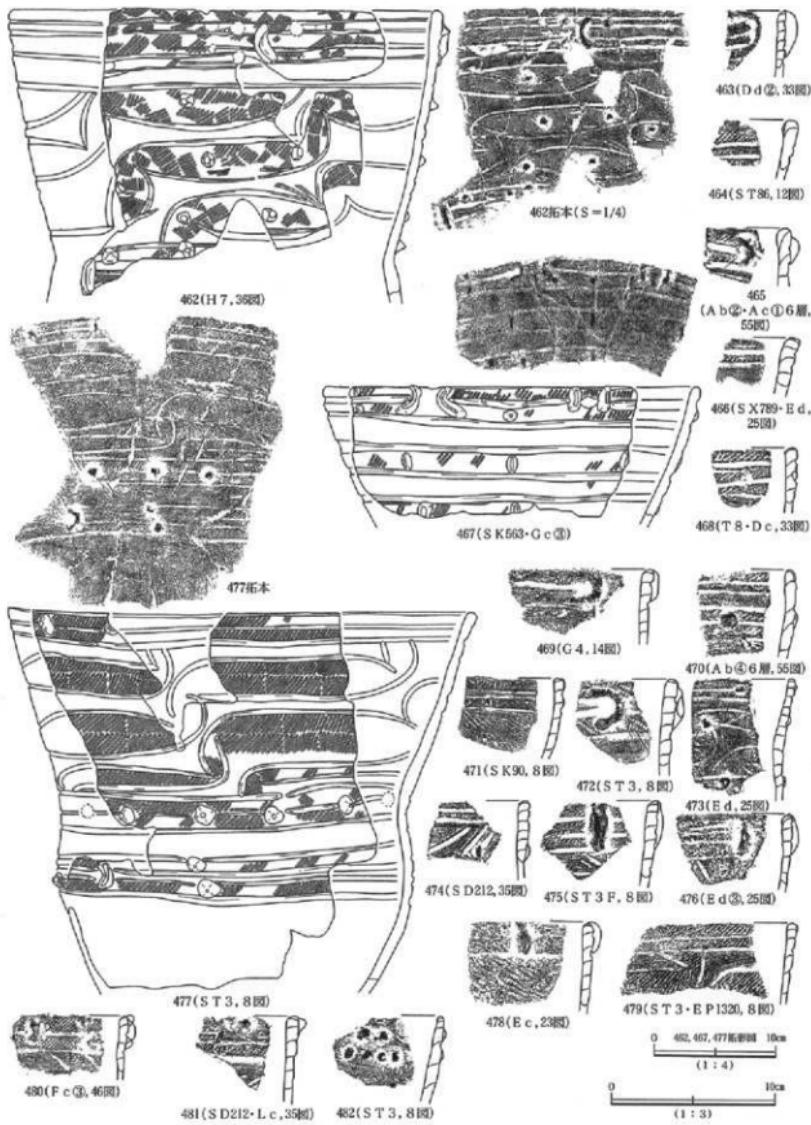
第88図 後期土器実測図 (26)



第89図 後期土器実測図 (27)



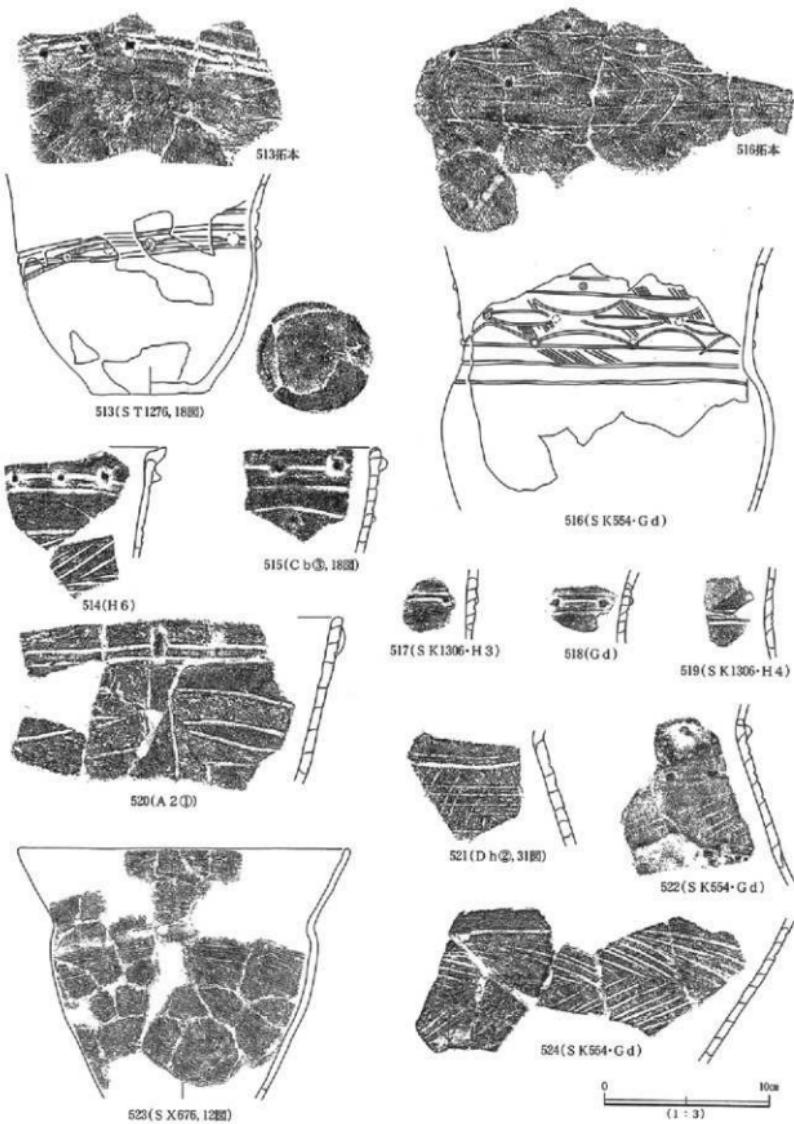
第90図 後期土器実測図 (28)



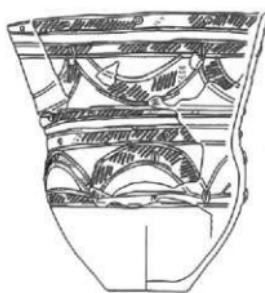
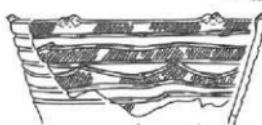
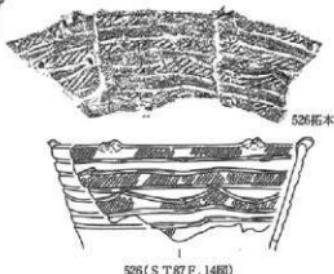
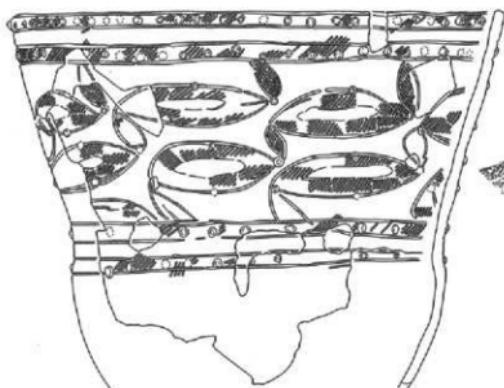
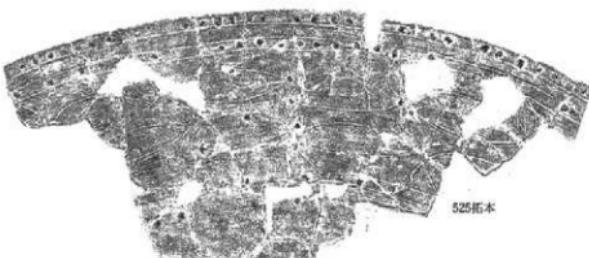
第91図 後期土器実測図 (29)



第92図 後期土器実測図 (30)



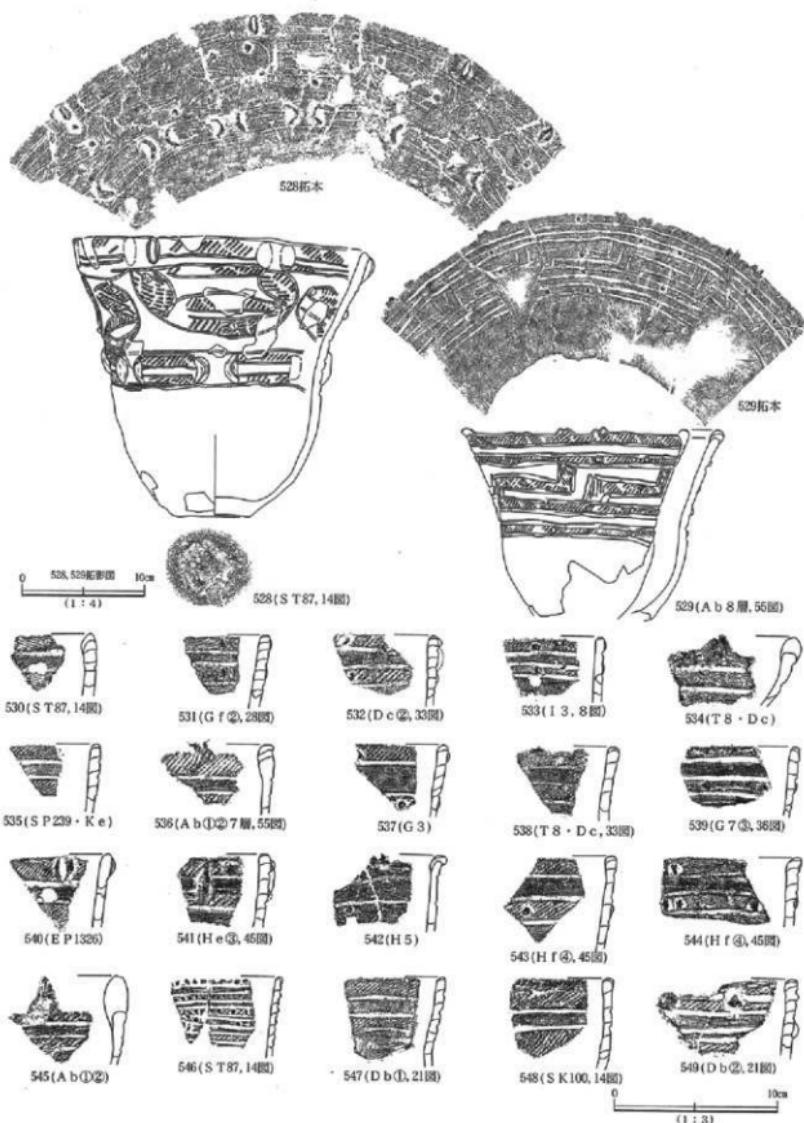
第93図 後期土器実測図 (31)



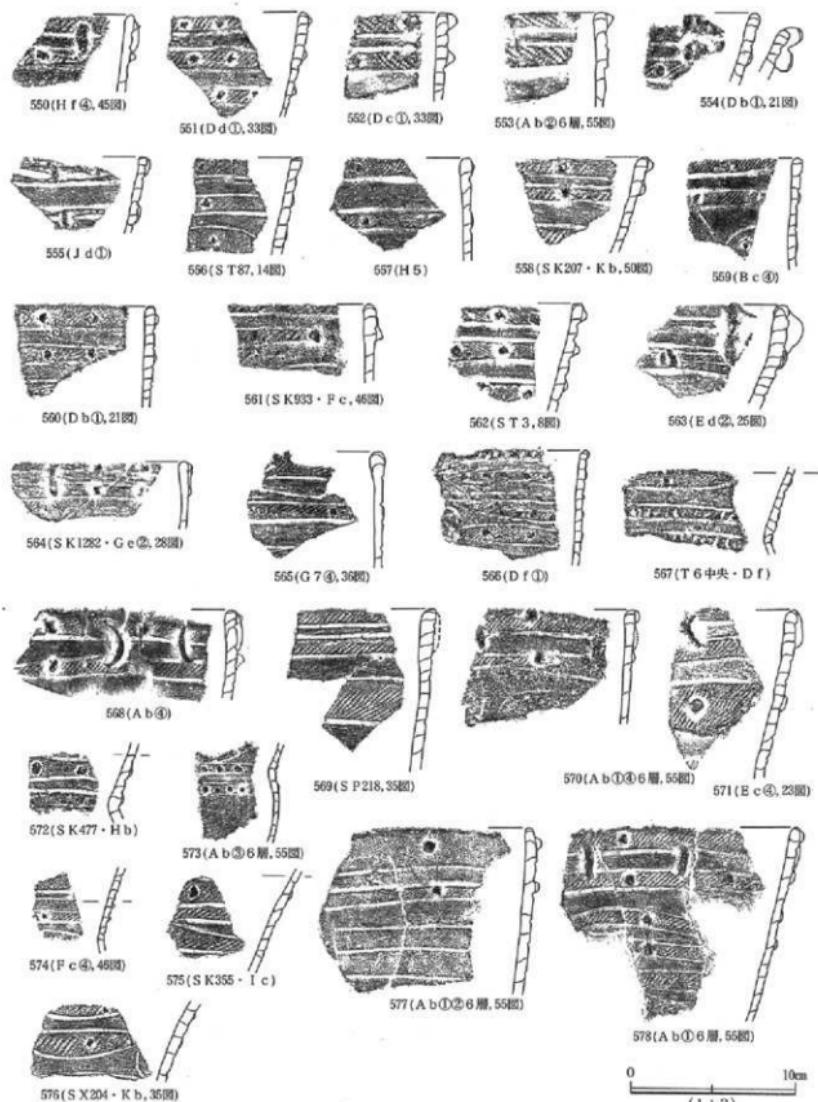
0 525, 527拓本圖 10cm  
(1 : 3)

0 525, 527拓本圖 10cm  
(1 : 3)

第94図 後期土器実測図 (32)

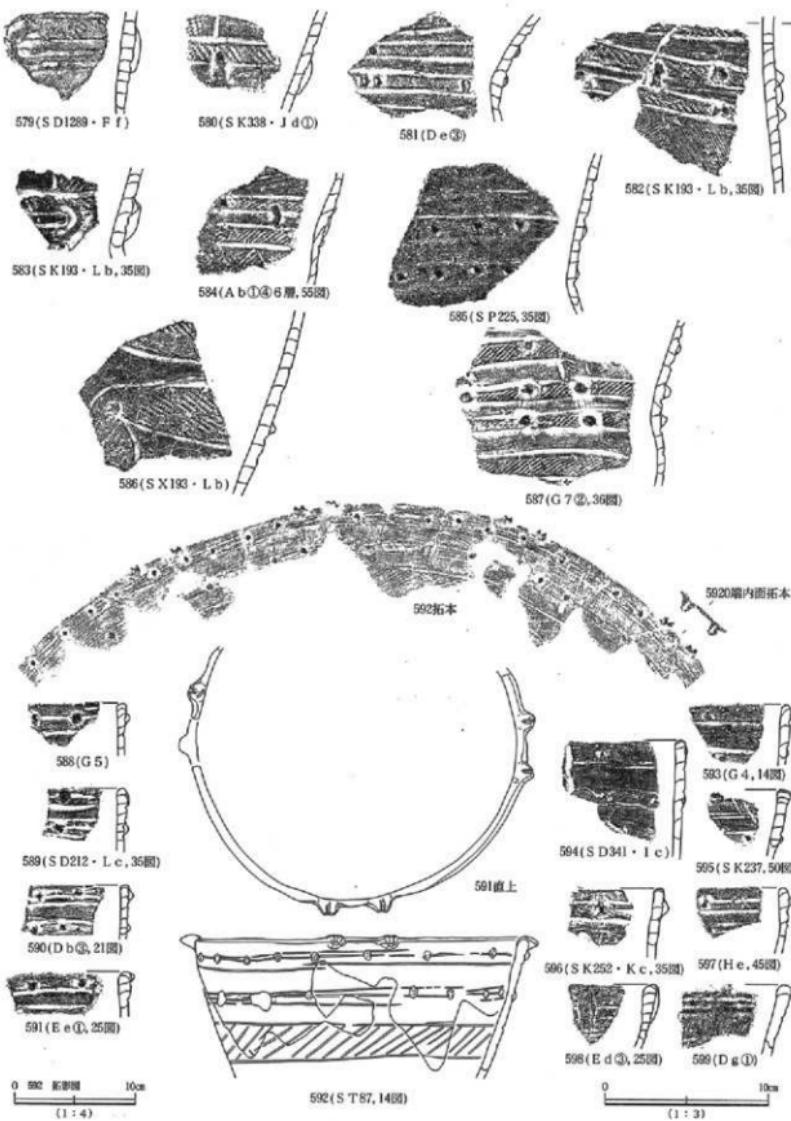


第95図 後期土器実測図 (33)

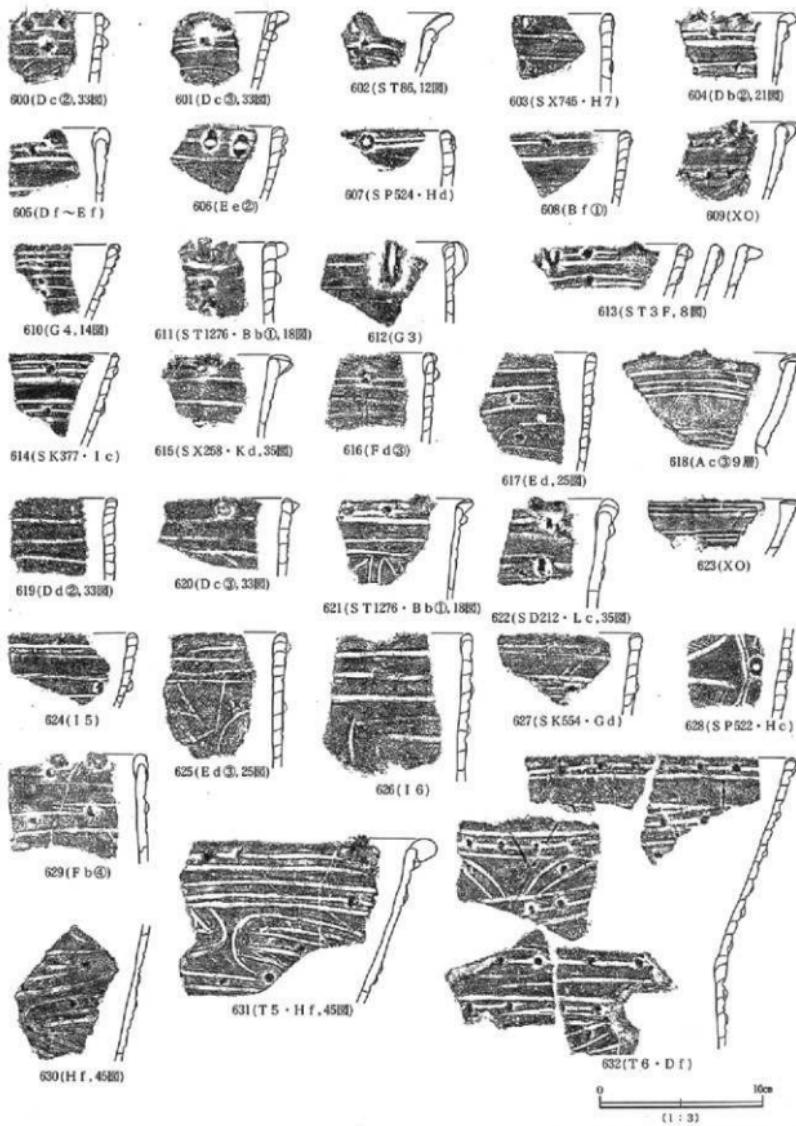


第96図 後期土器実測図 (34)

出土した遺物



第97図 後期土器実測図 (35)

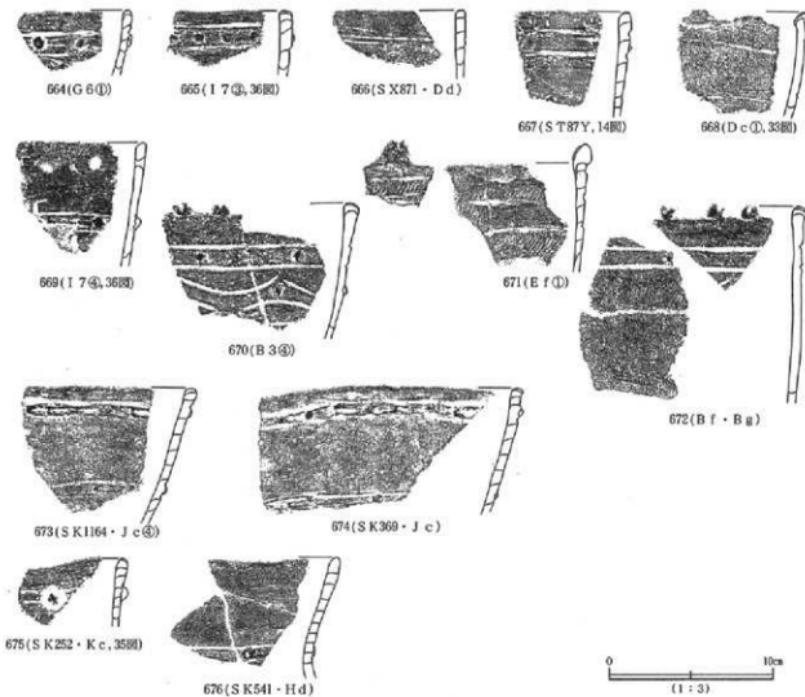


第98図 後期土器実測図 (36)

出土した遺物

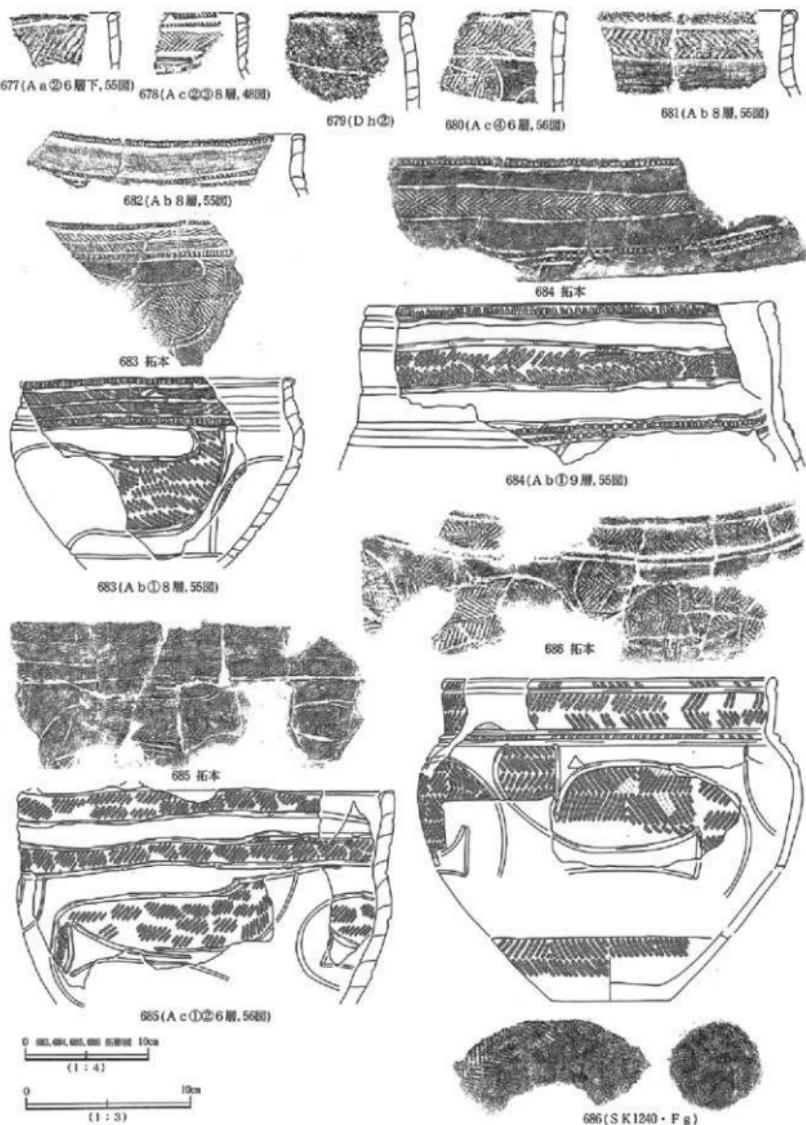


第99図 後期土器実測図 (37)

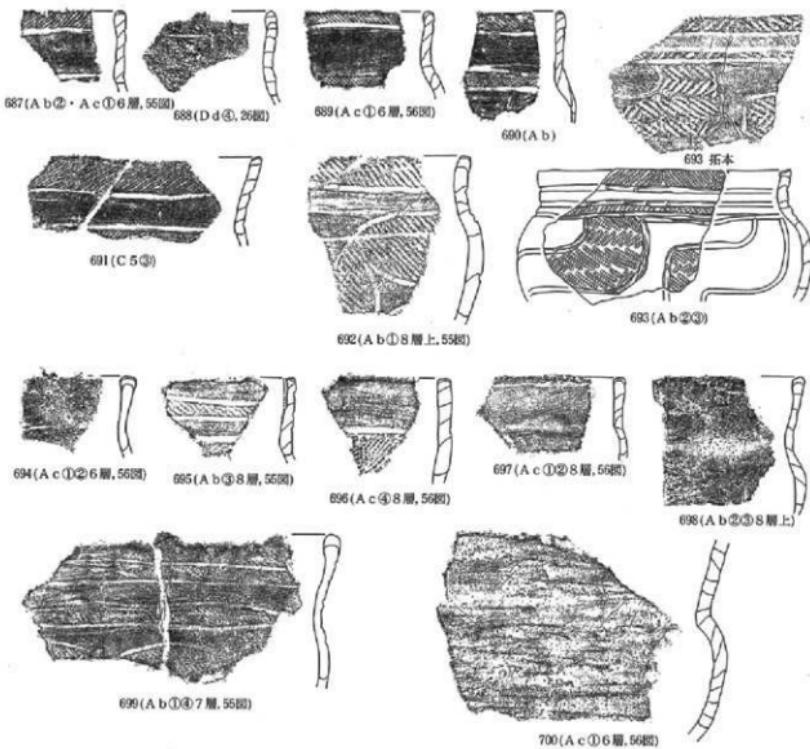


第100図 後期土器実測図 (38)

出土した遺物

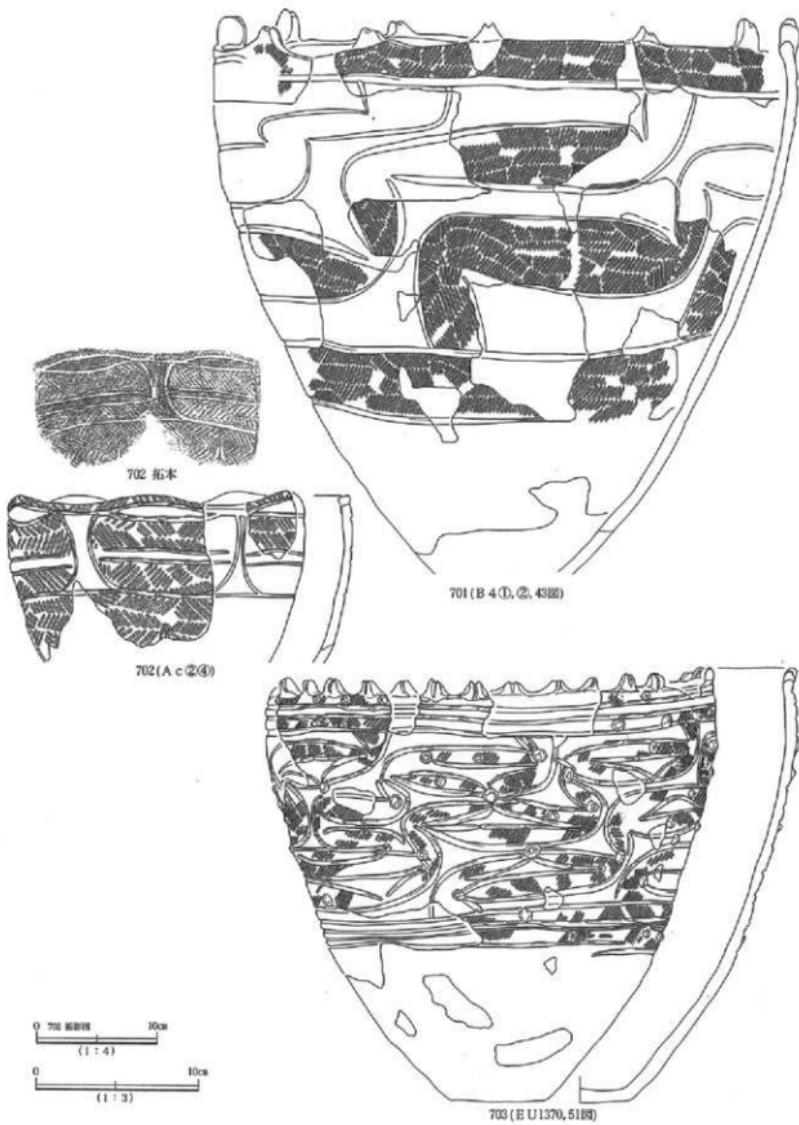


第101図 後期土器実測図 (39)

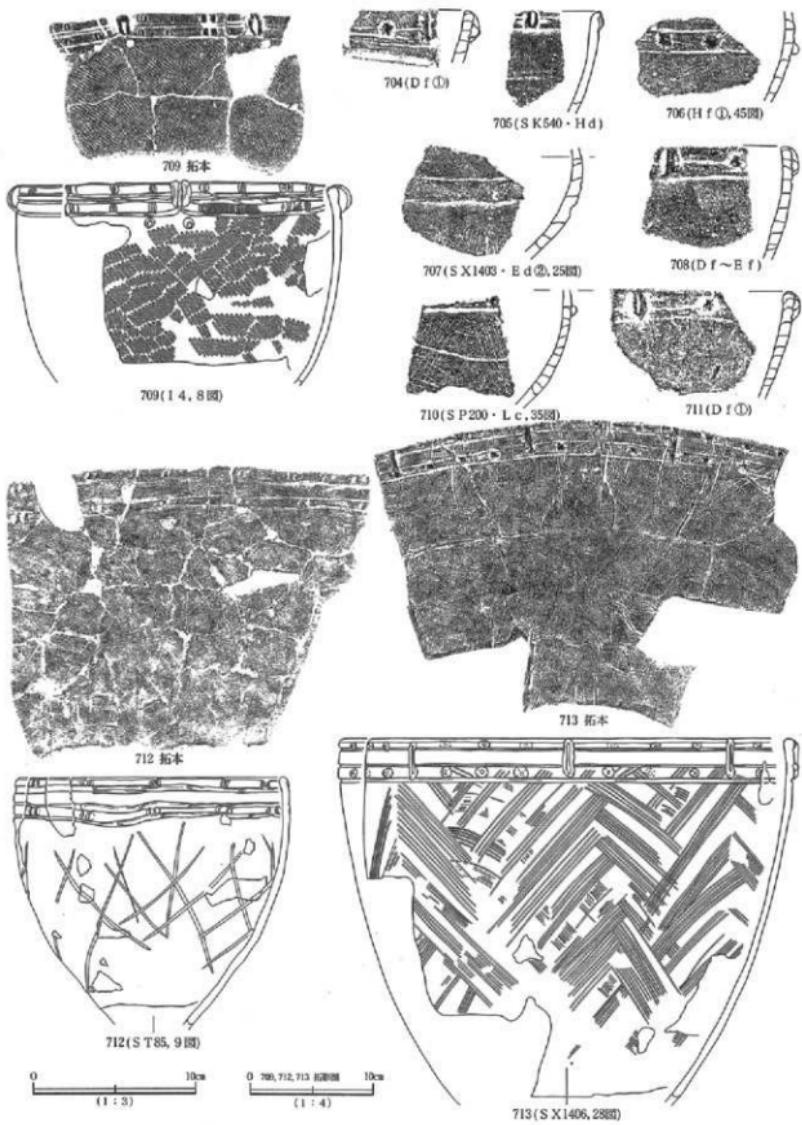


0  
(1 : 3) 10cm

第102図 後期土器実測図 (40)

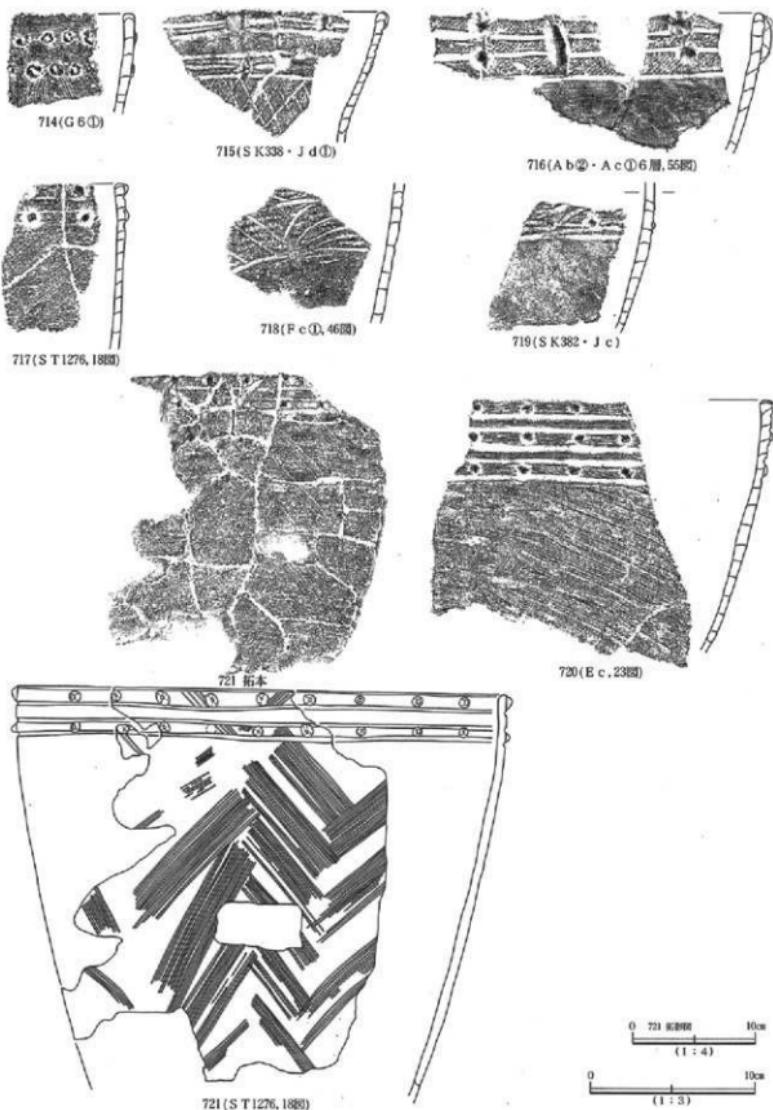


第103図 後期土器実測図 (41)

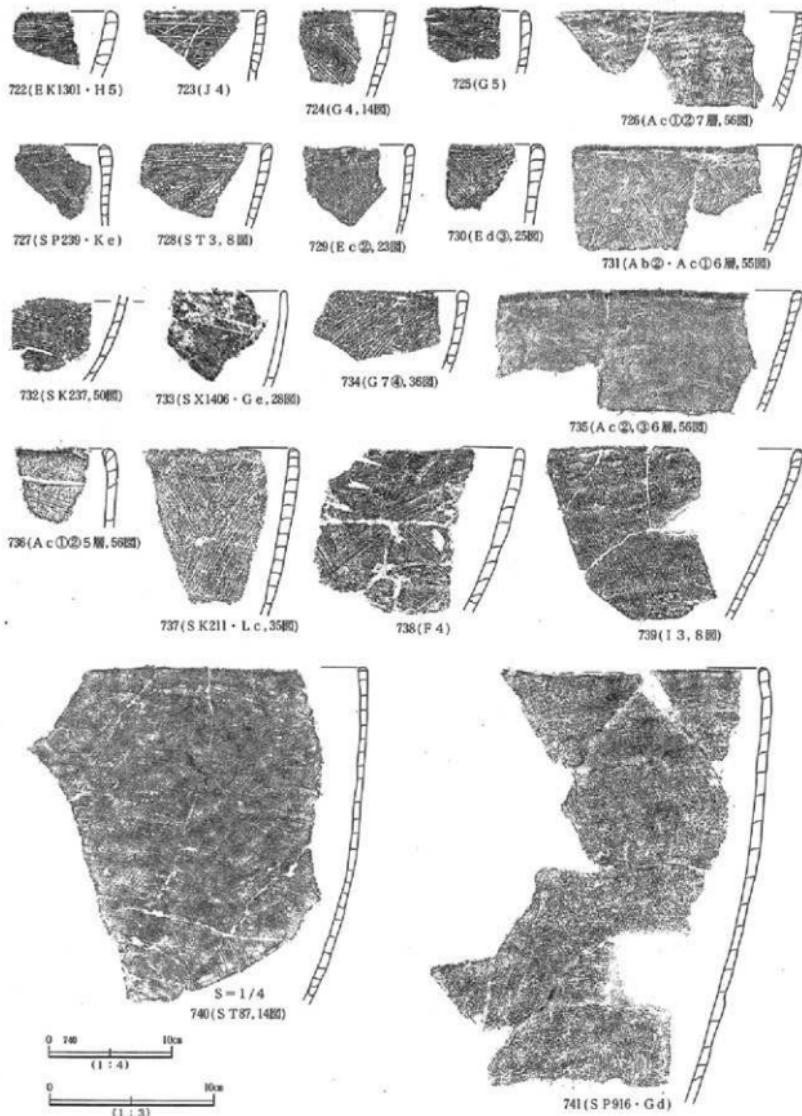


第104図 後期土器実測図 (42)

出土した遺物

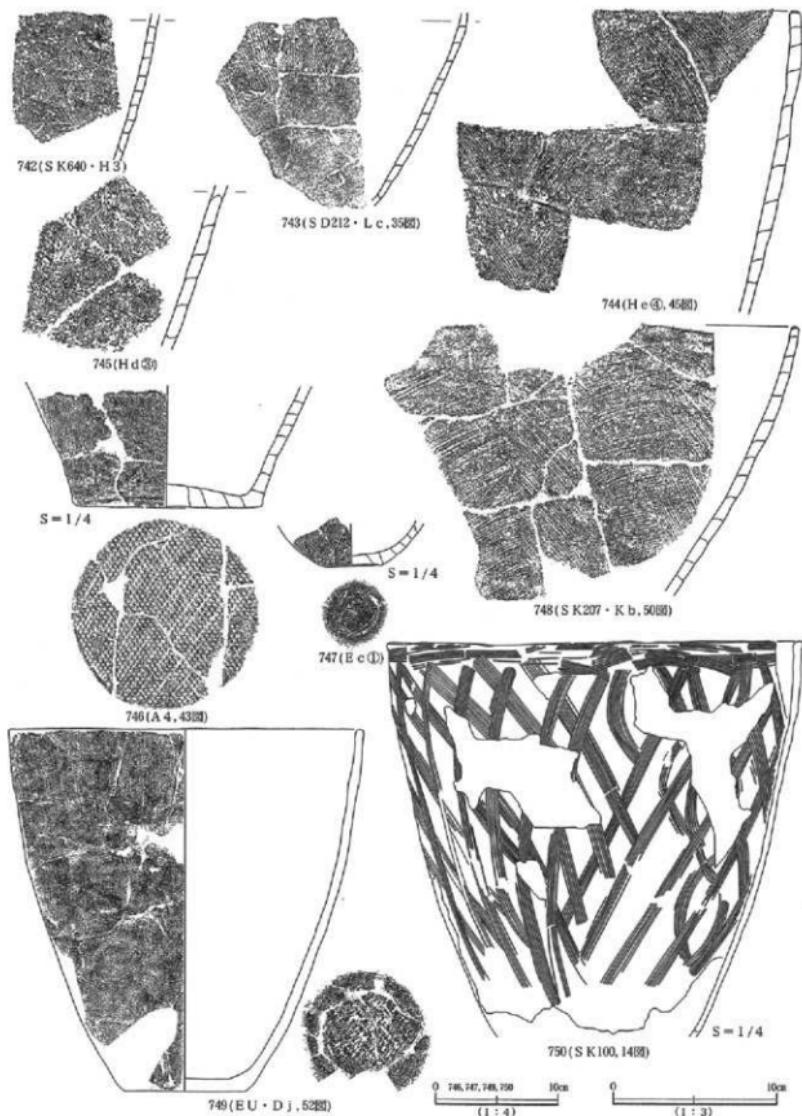


第105図 後期土器実測図 (43)

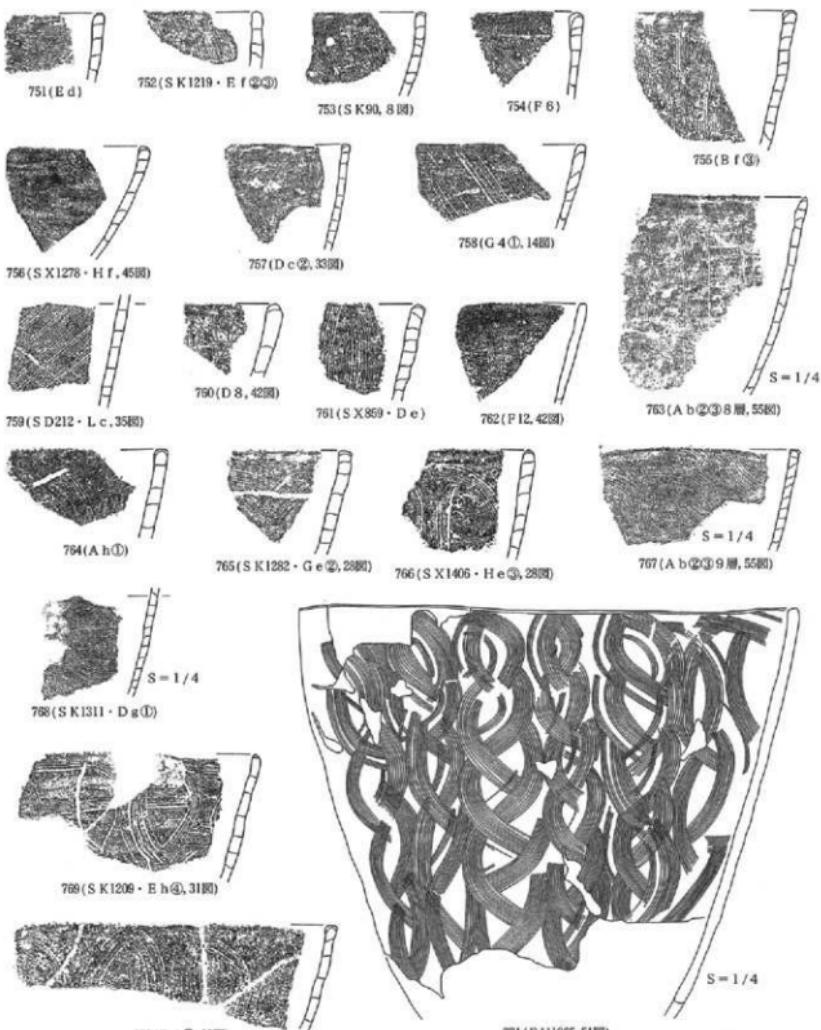


第106図 後期土器実測図 (44)

出土した遺物



第107図 後期土器実測図 (45)

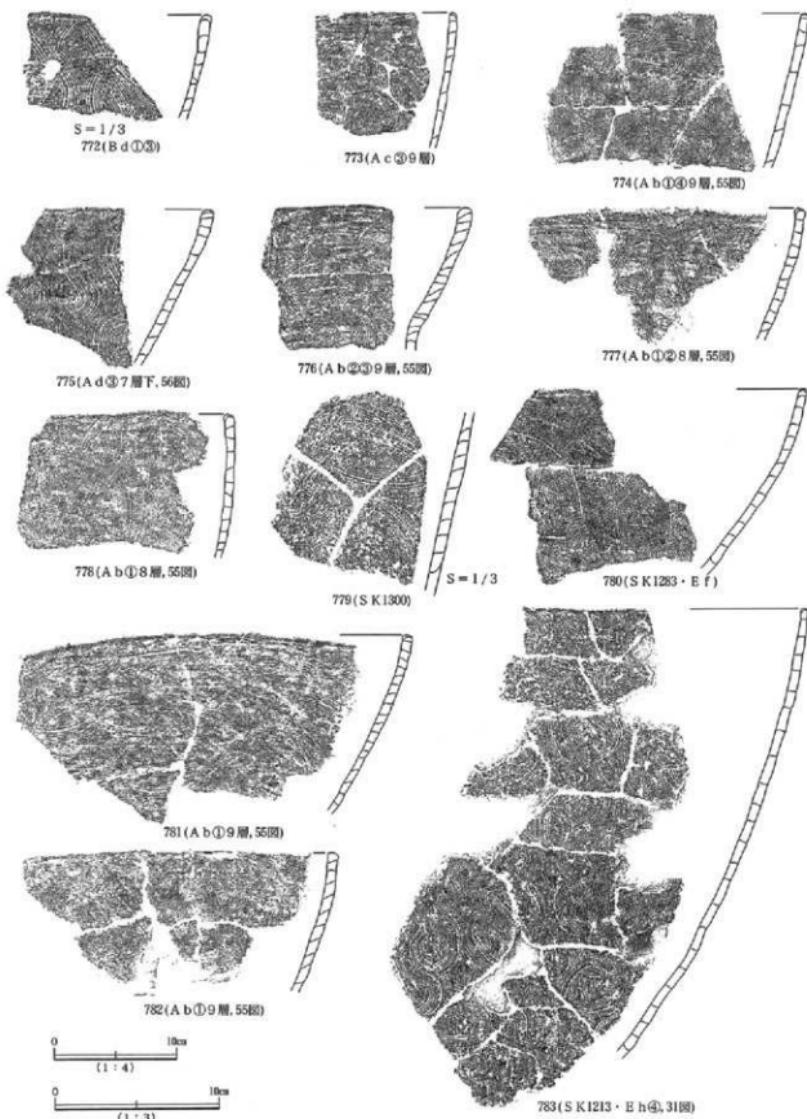


0 703, 707, 708, 771  
(1 : 4) 10cm

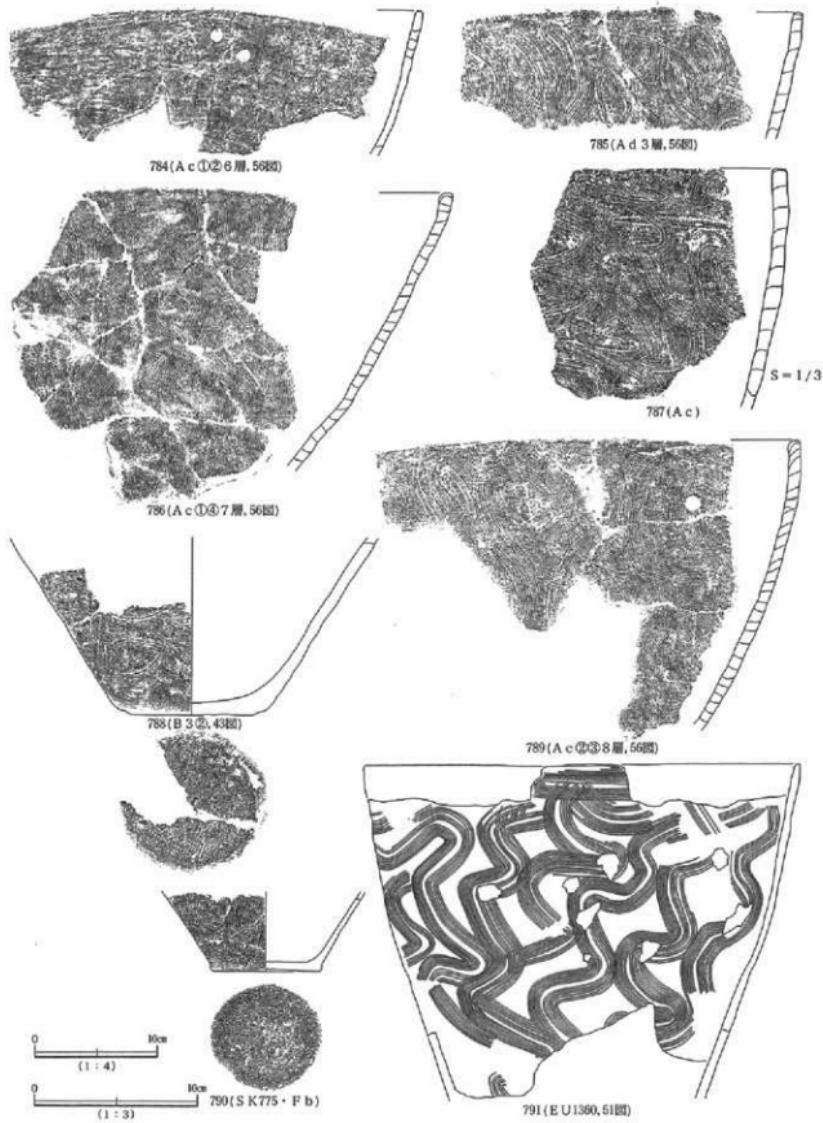
0 (1 : 3) 10cm

第108図 後期土器実測図 (46)

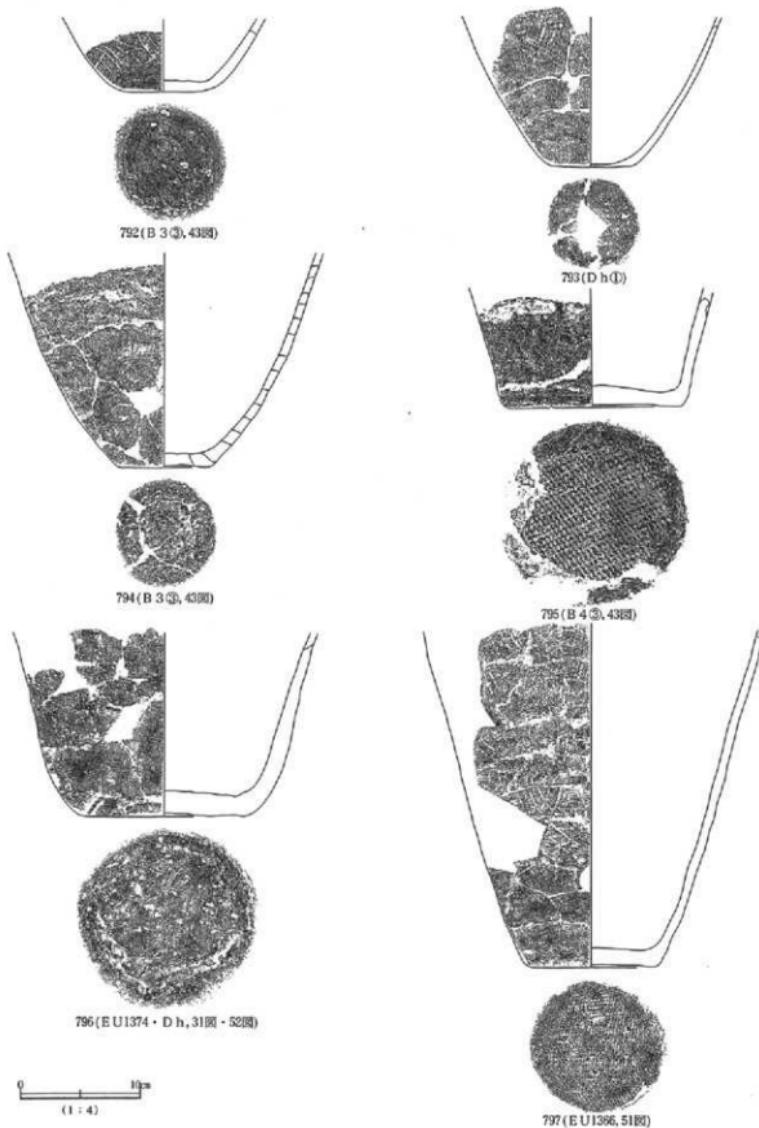
出土した遺物



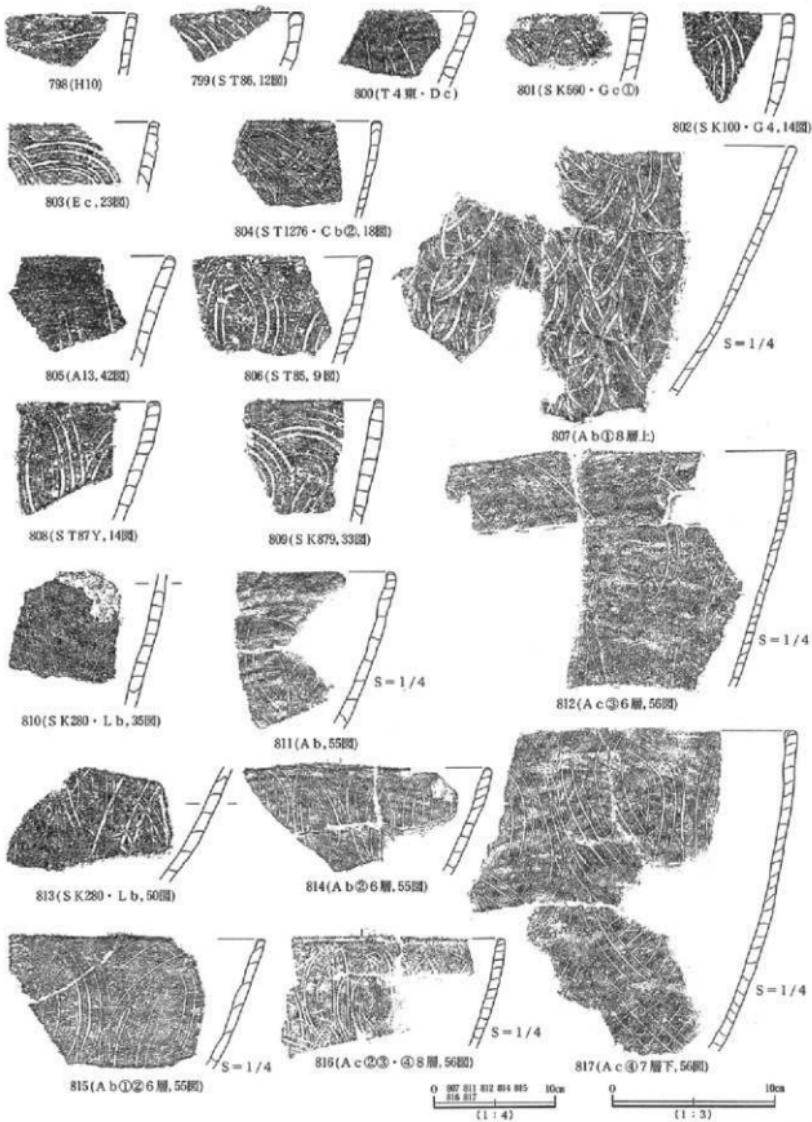
第109図 後期土器実測図 (47)



第110図 後期土器実測図 (48)

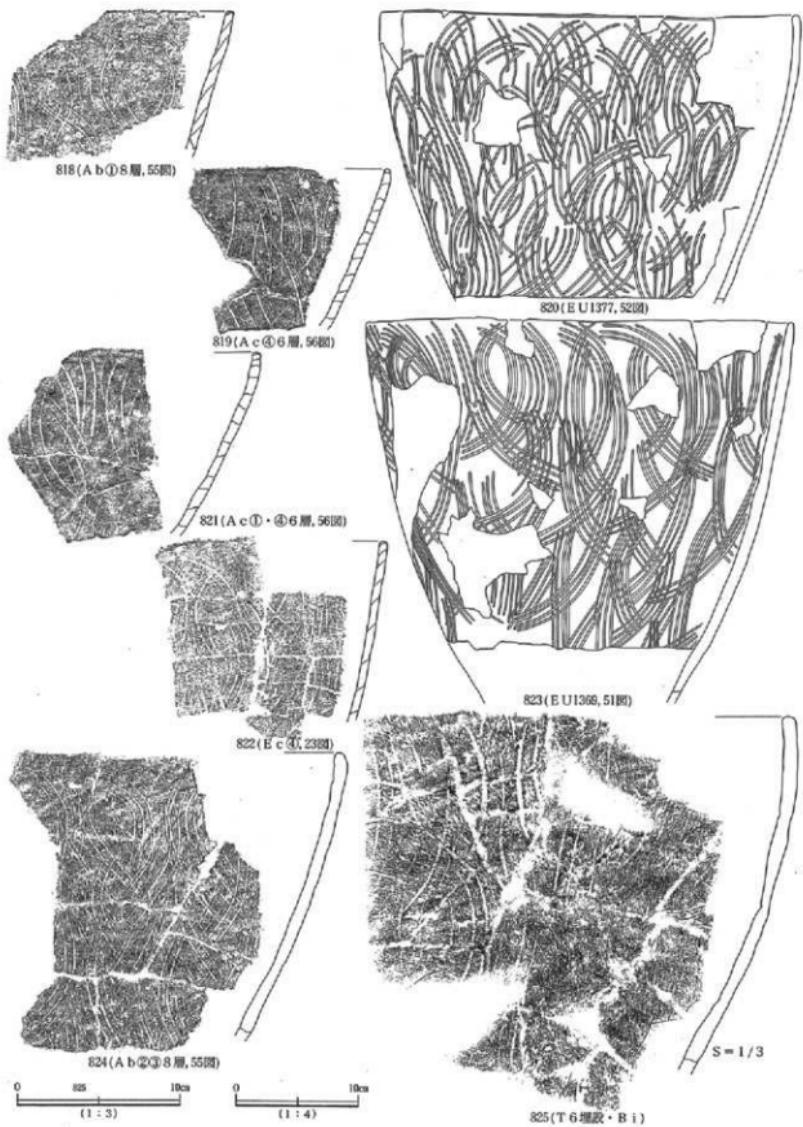


第111図 後期土器実測図 (49)

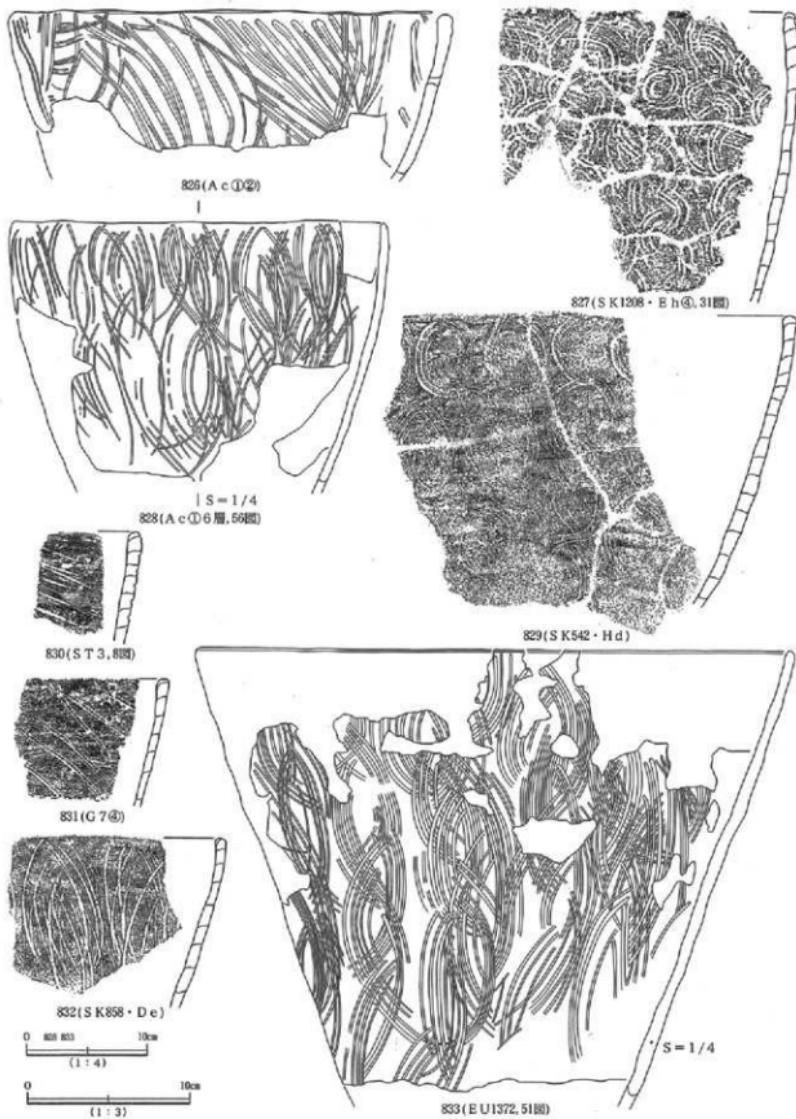


第112図 後期土器実測図 (50)

出土した遺物

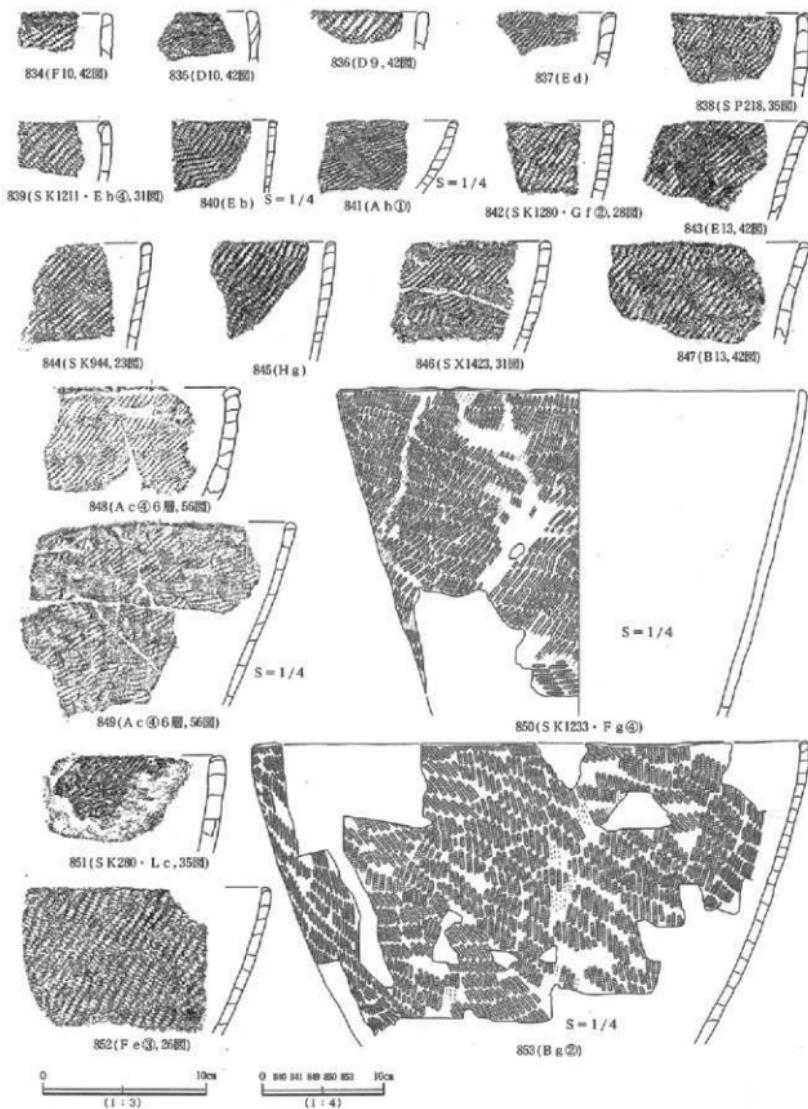


第113図 後期土器実測図 (51)

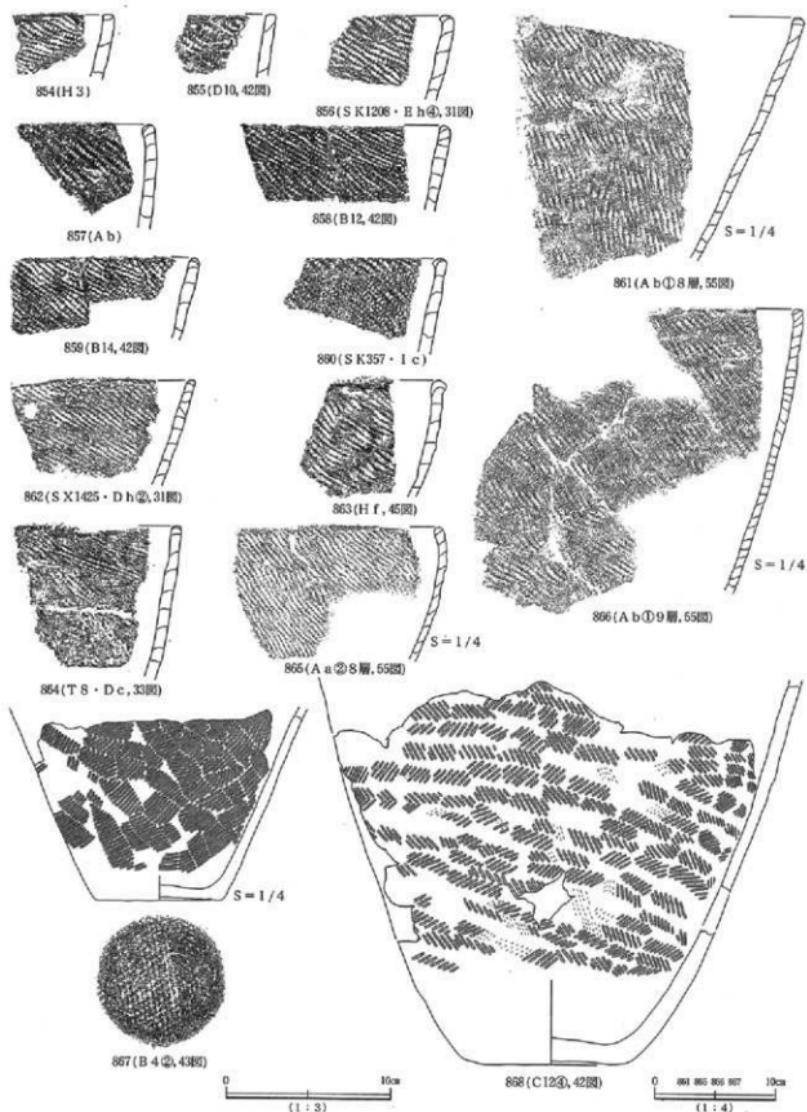


第114図 後期土器実測図 (52)

出土した遺物

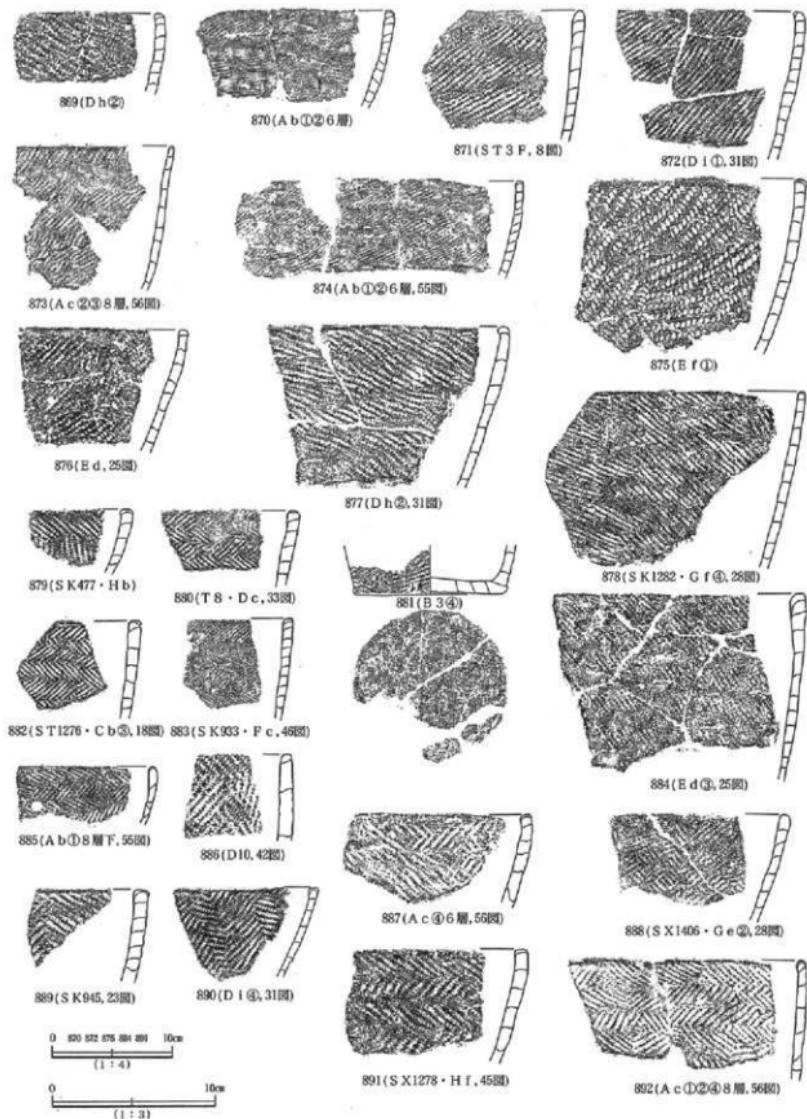


第115図 後期土器実測図 (53)

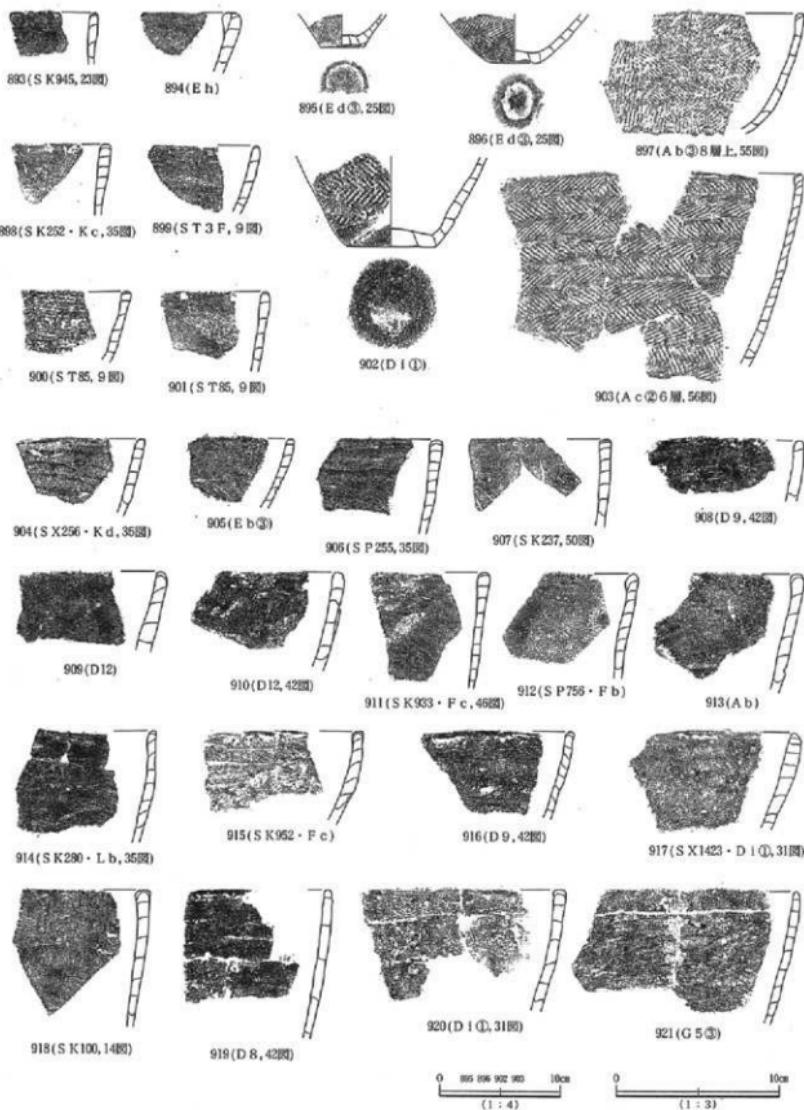


第116図 後期土器実測図 (54)

出土した遺物

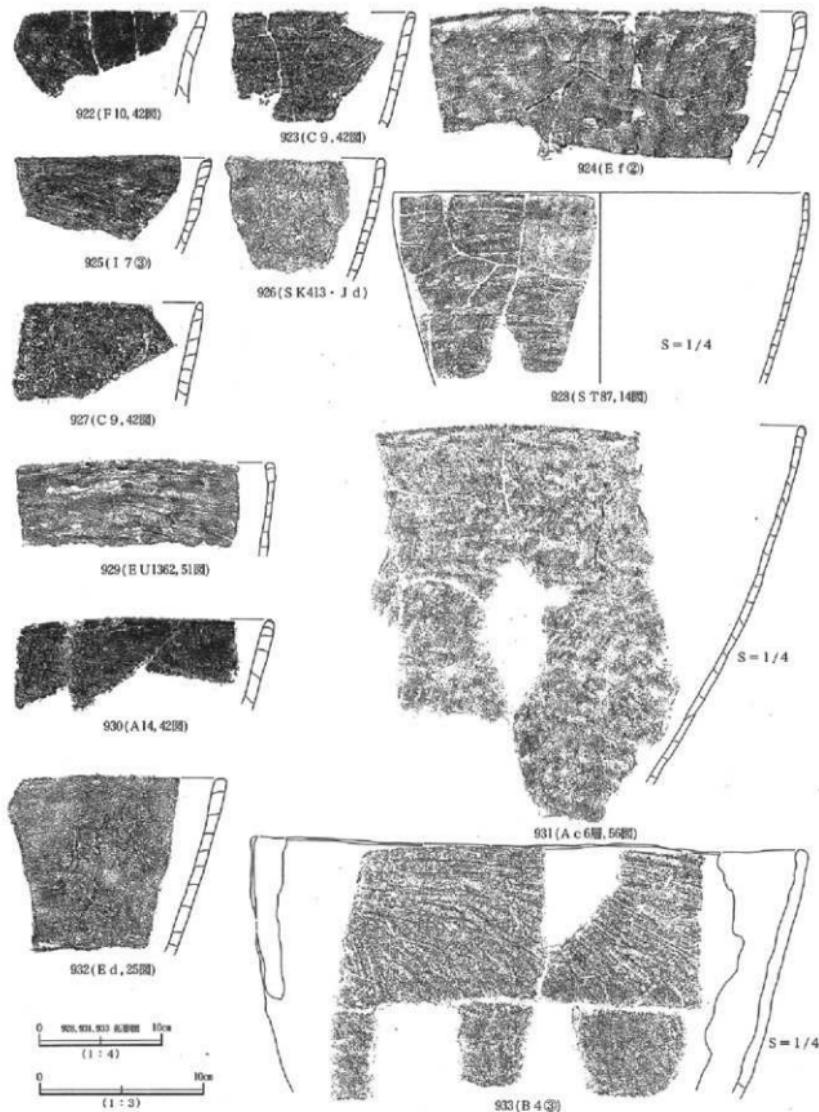


第117図 後期土器実測図 (55)

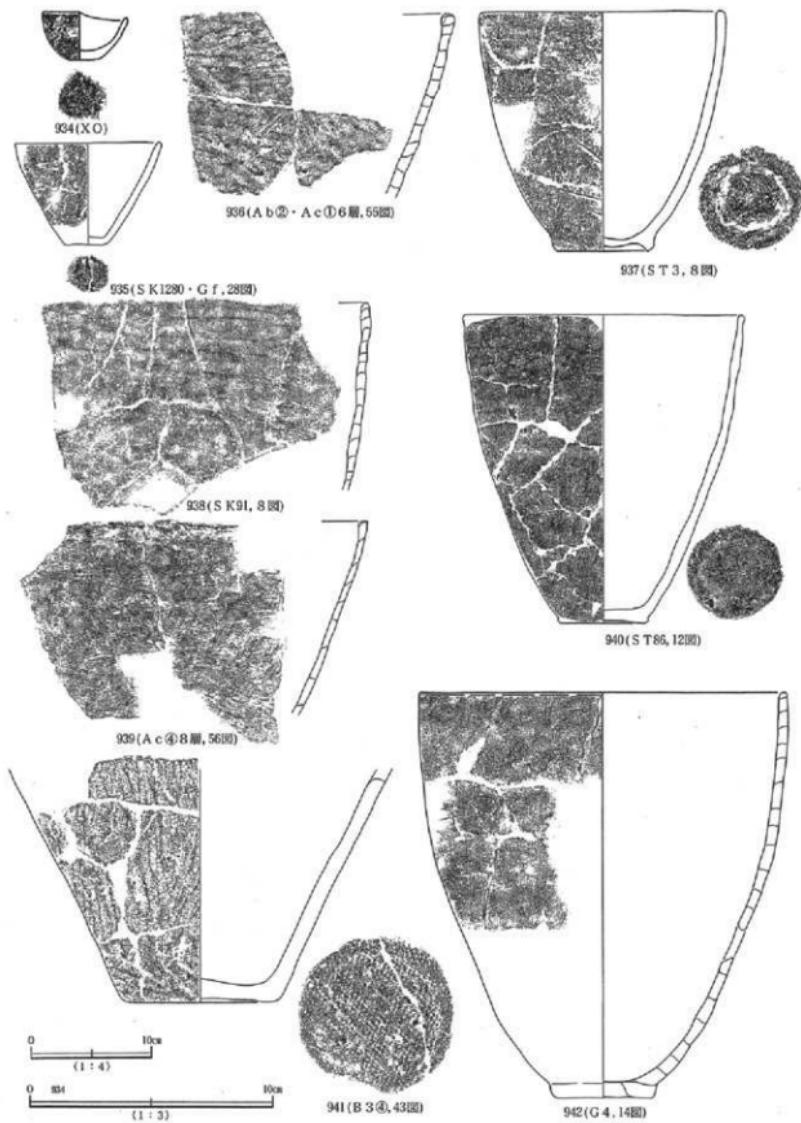


第118図 後期土器実測図 (56)

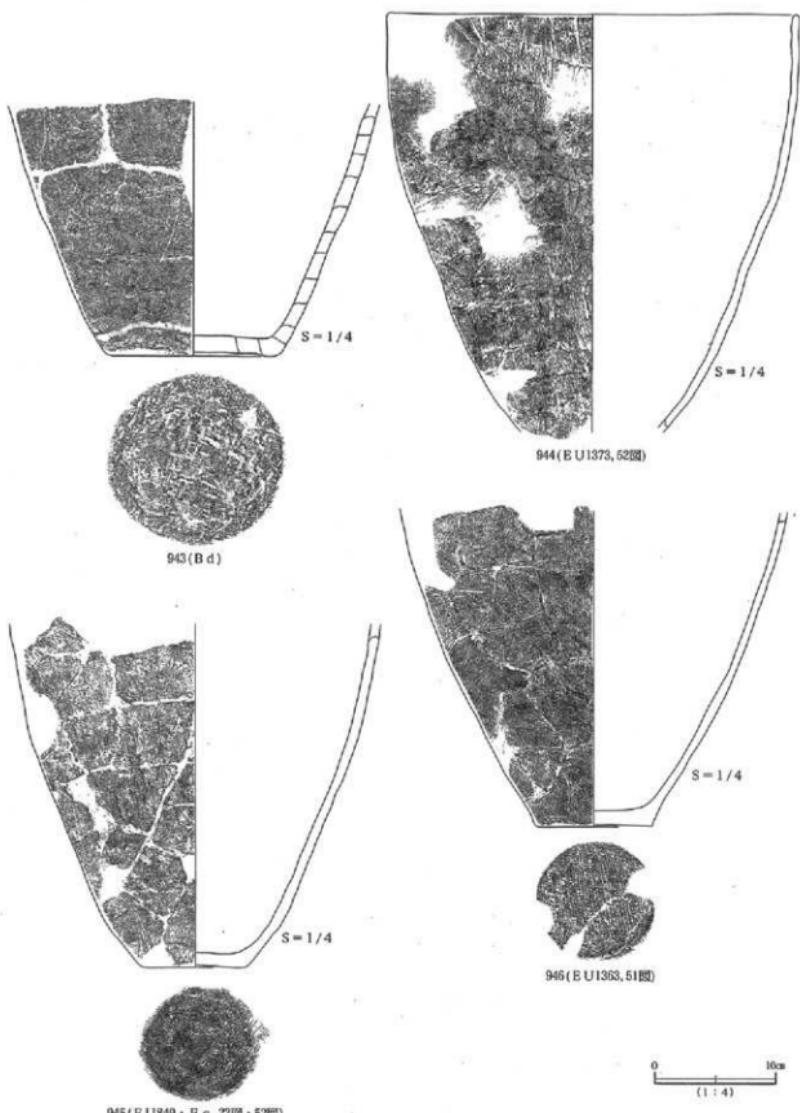
出土した遺物



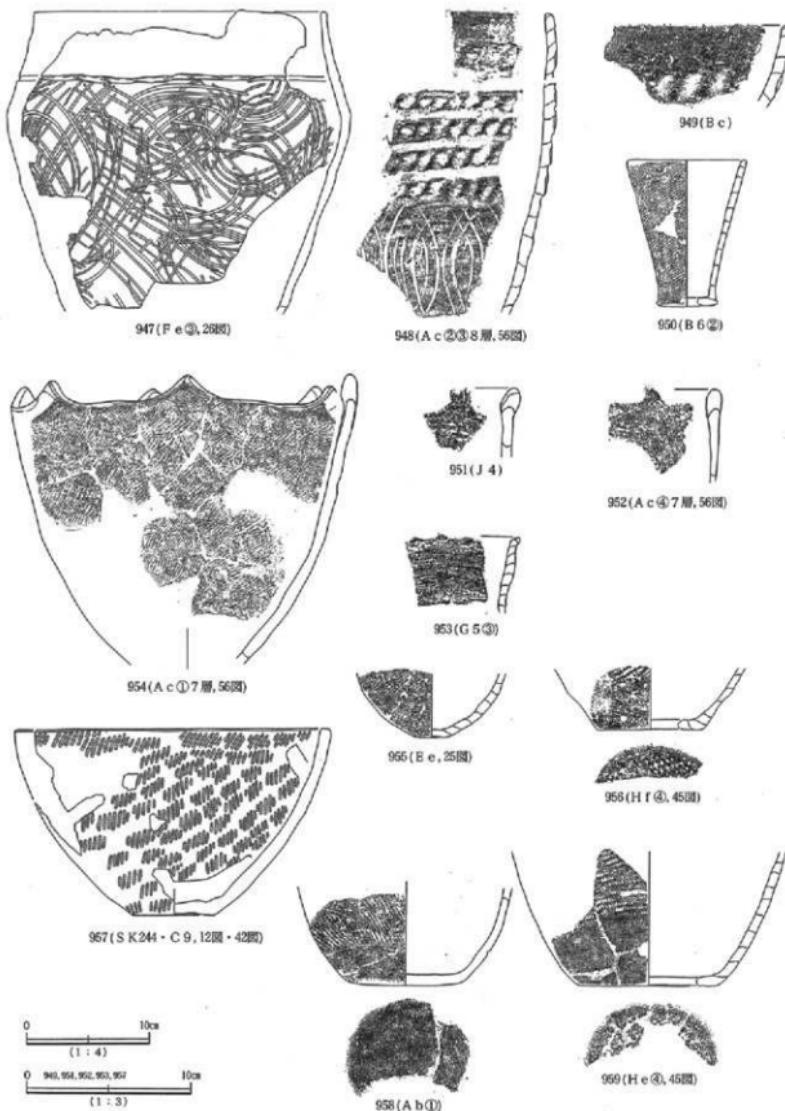
第119図 後期土器実測図 (57)



第120図 後期土器実測図 (58)

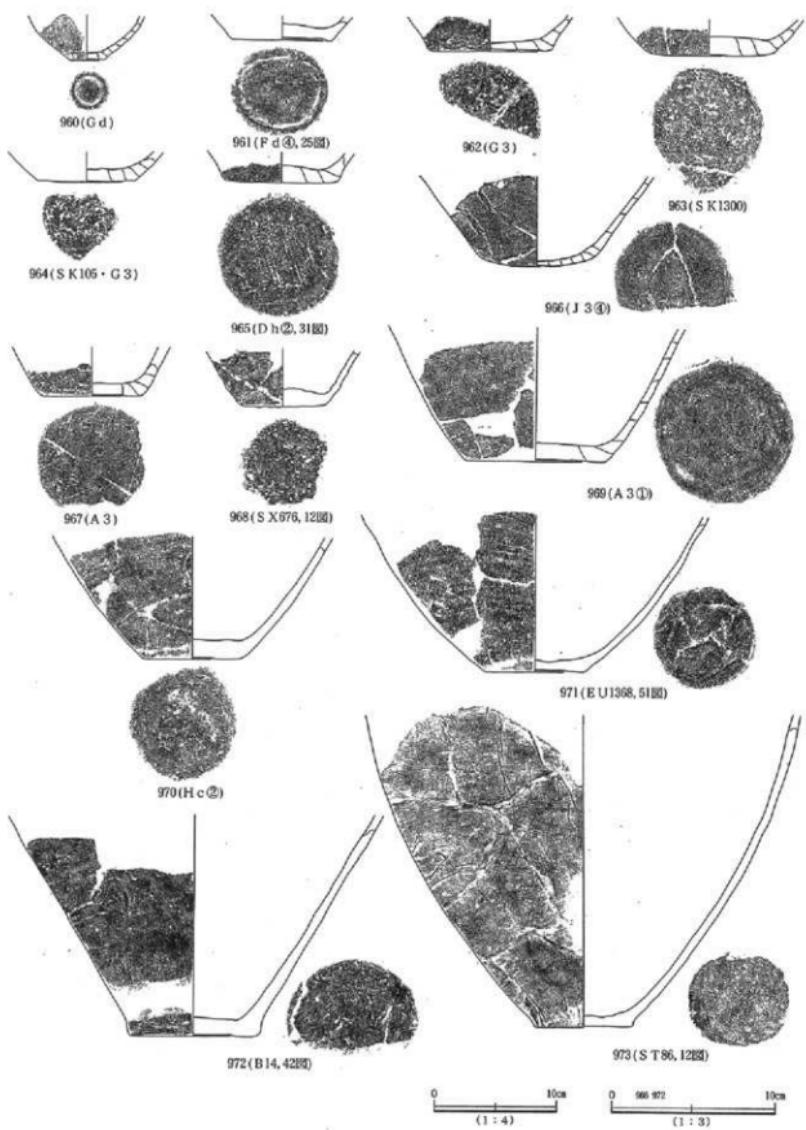


第121図 後期土器実測図 (59)

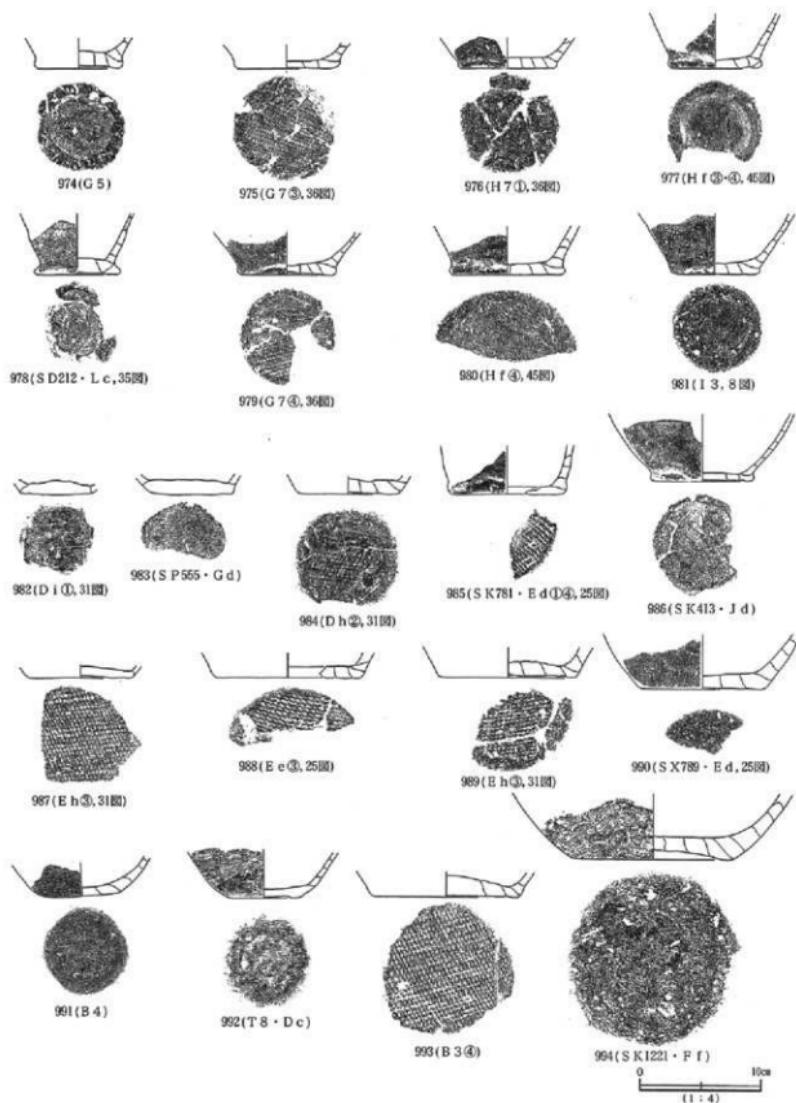


第122図 後期土器実測図 (60)

出土した遺物

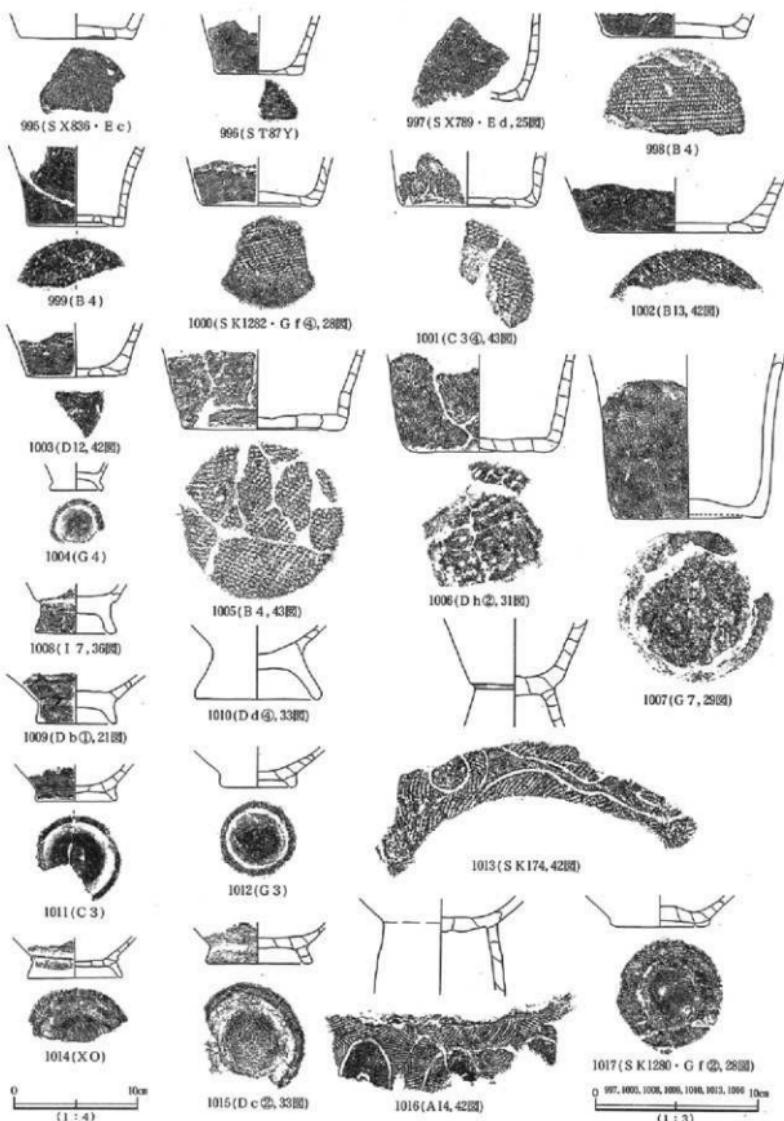


第123図 後期土器実測図 (61)

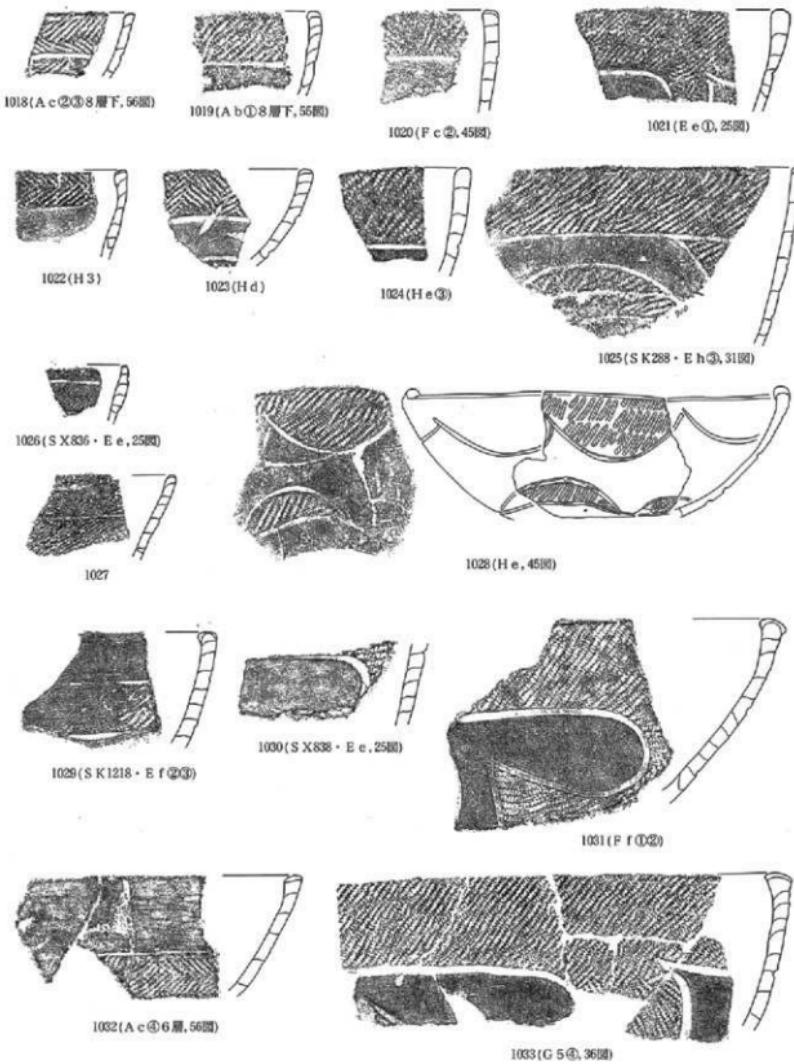


第124図 後期土器実測図 (62)

出土した遺物

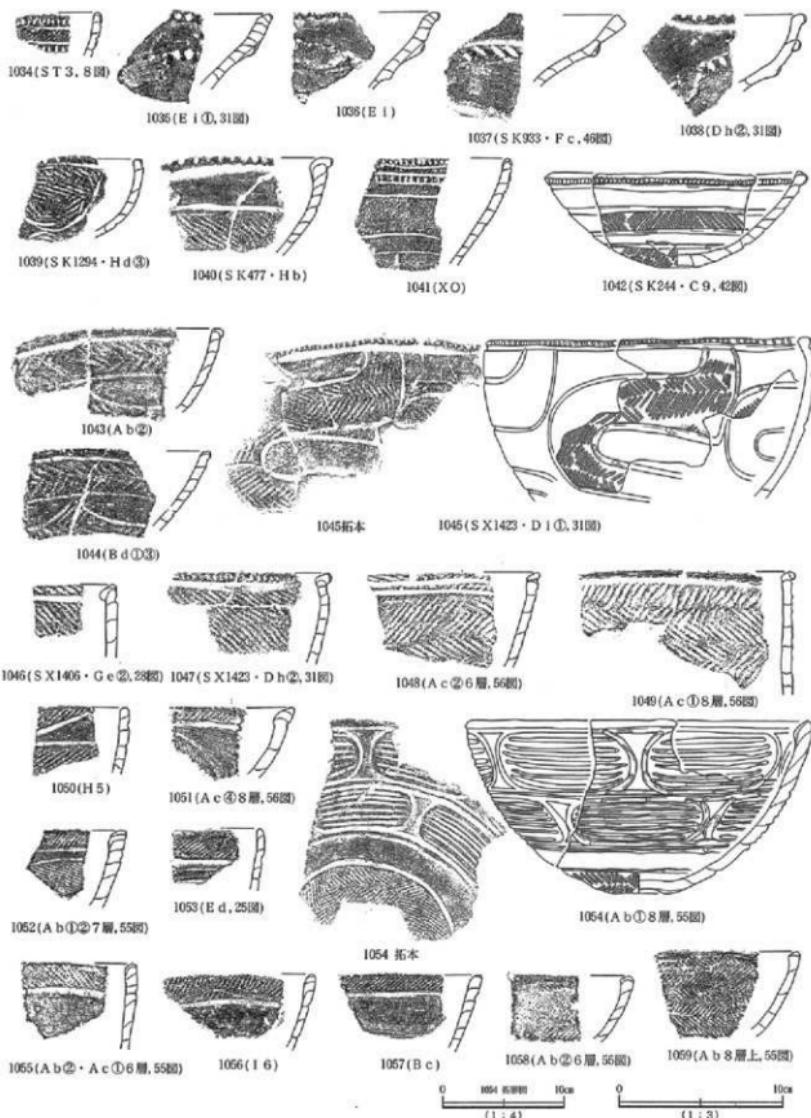


第125図 後期土器実測図 (63)

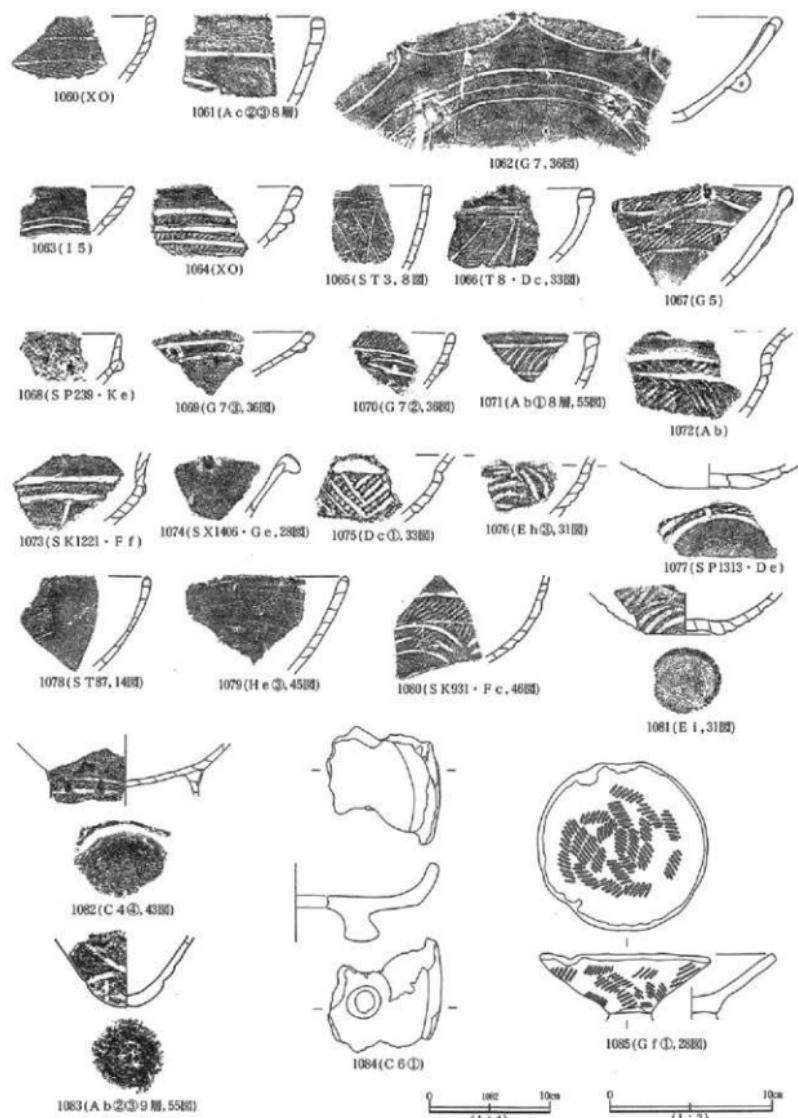


第126図 後期土器実測図 (64)

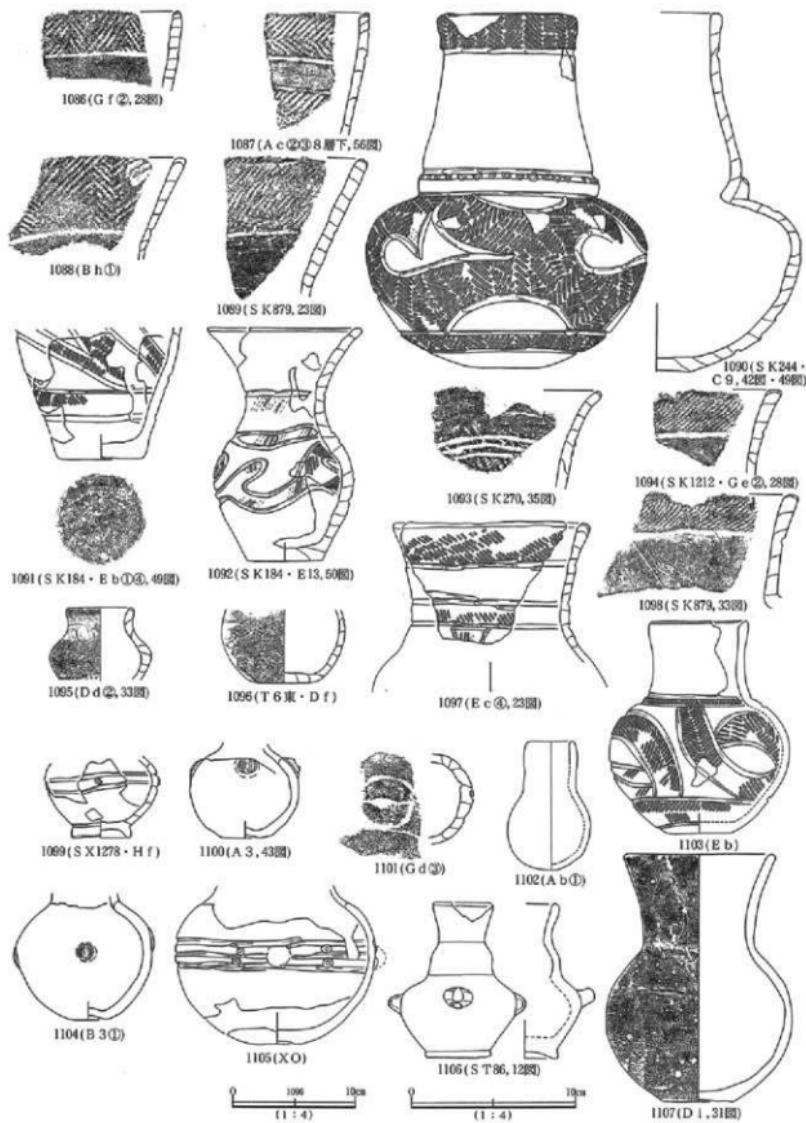
出土した遺物



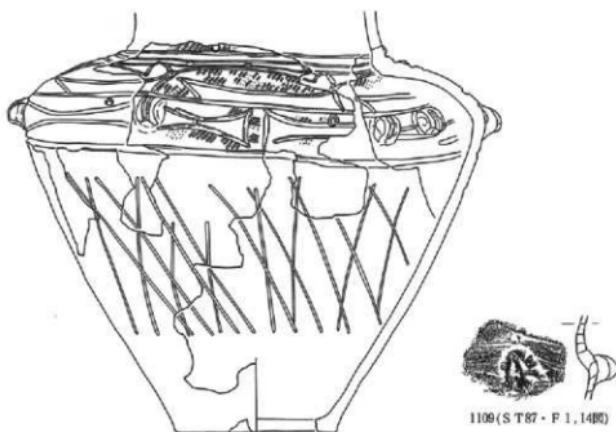
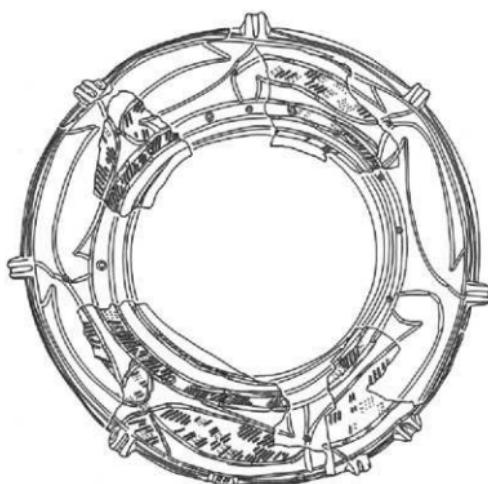
第127図 後期土器実測図 (65)



第128図 後期土器実測図 (66)



第129図 後期土器実測図 (67)

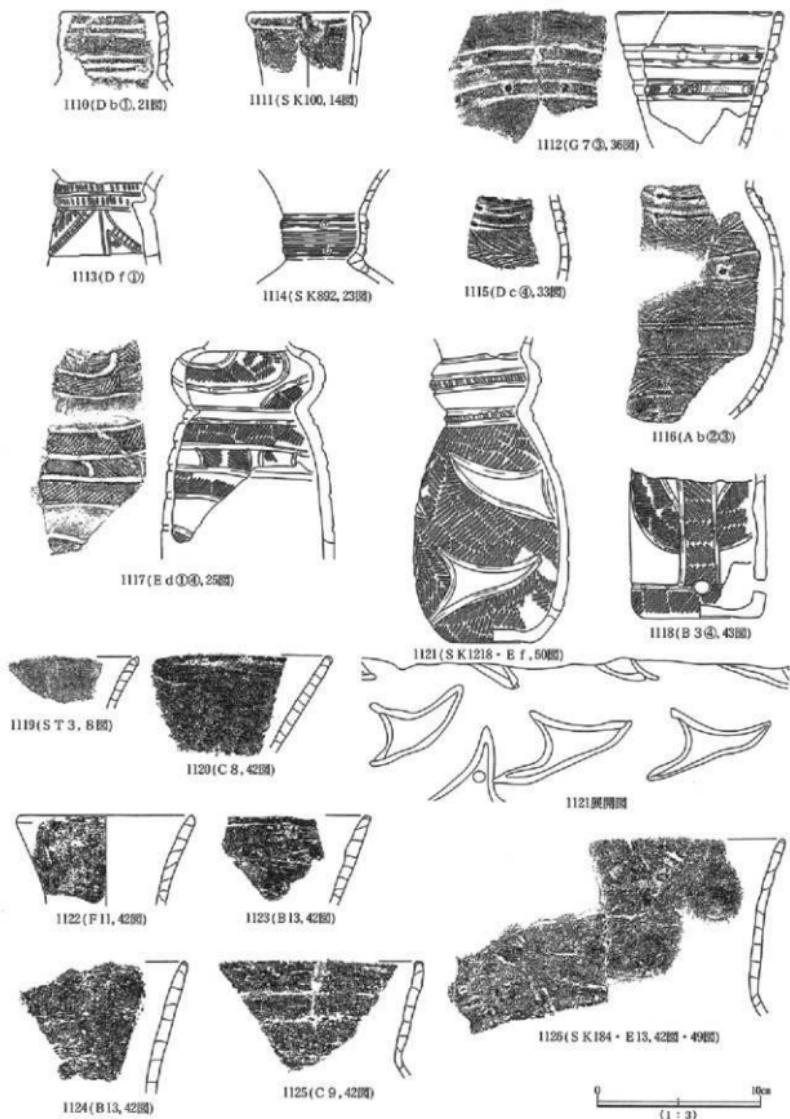


1108(S K90, 8面)

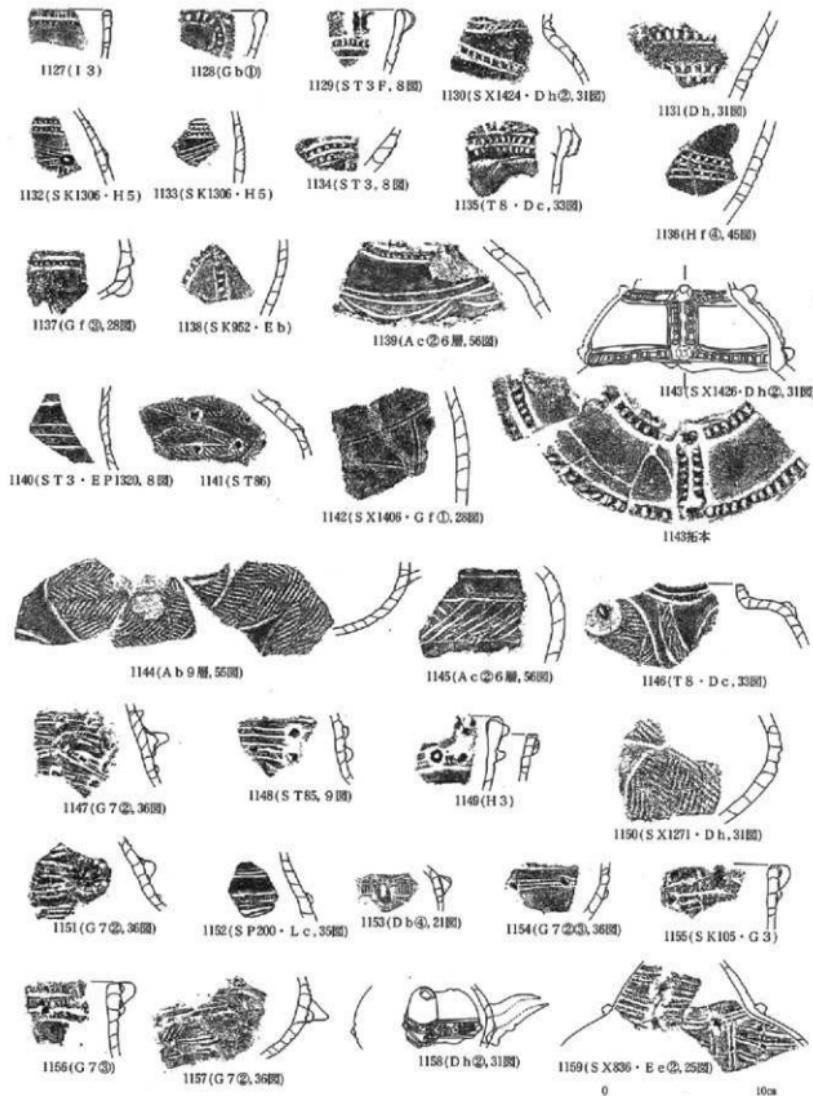


第130図 後期土器実測図 (68)

出土した遺物

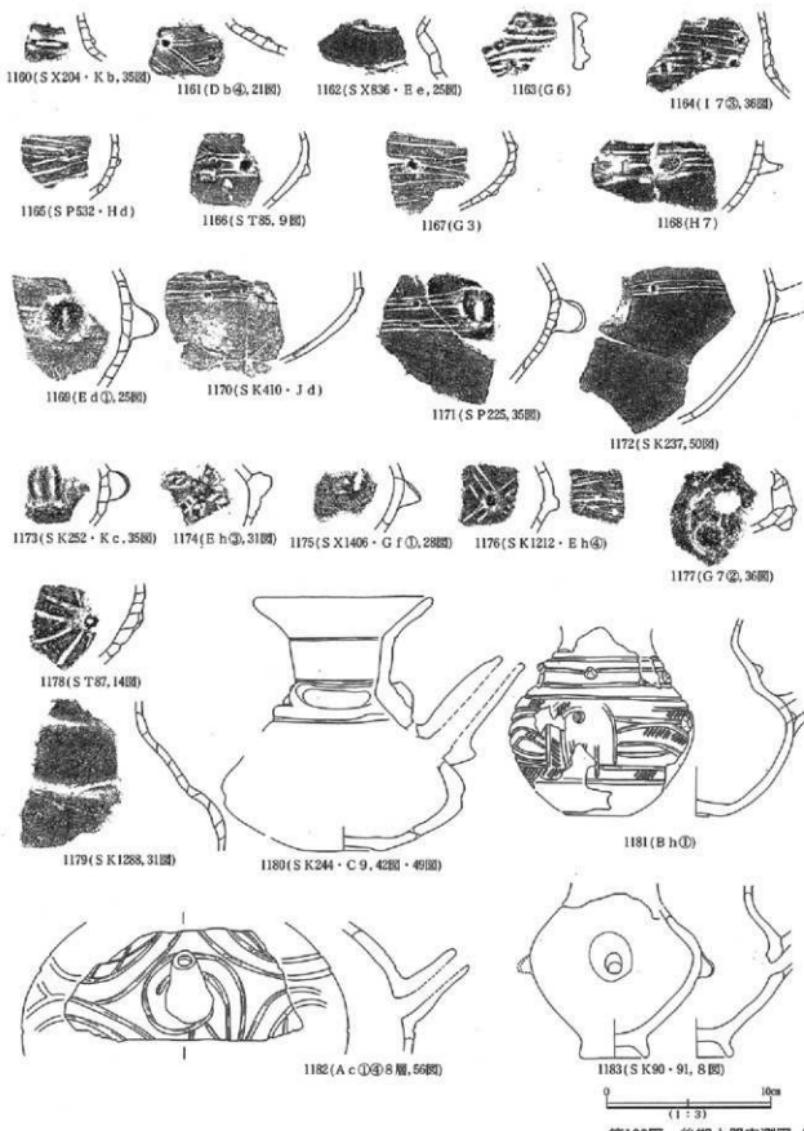


第131図 後期土器実測図 (69)

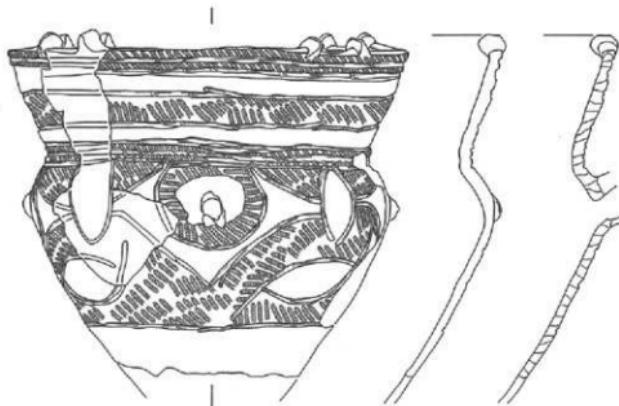
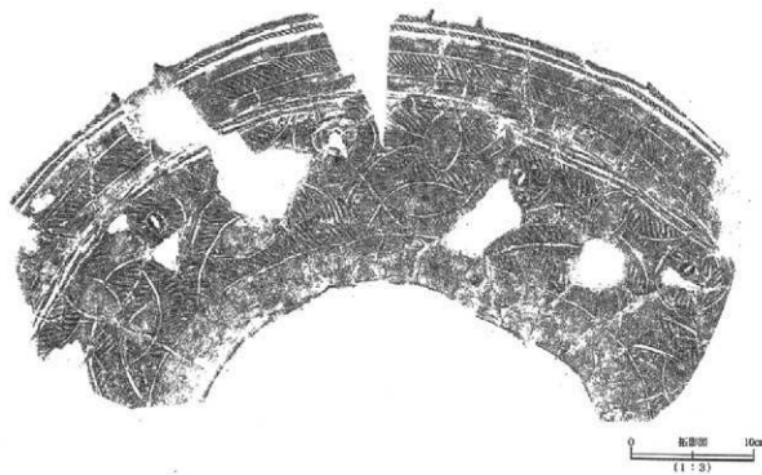


第132図 後期土器実測図 (70)

出土した遺物



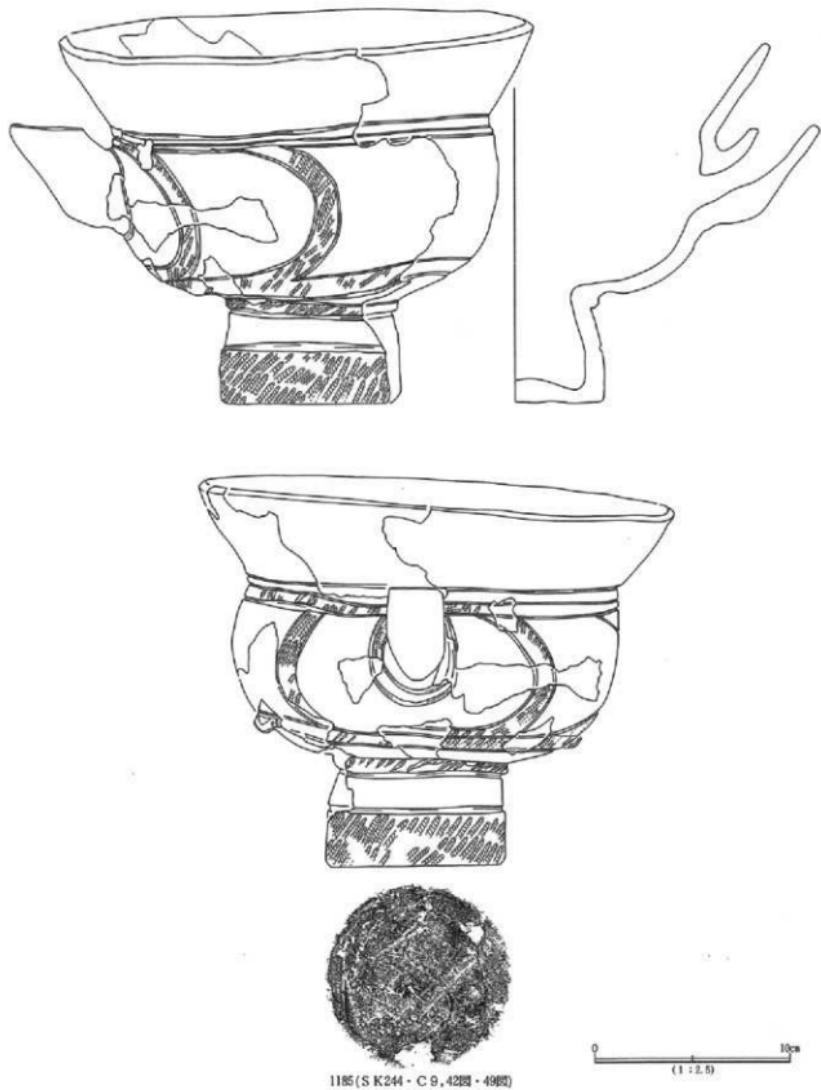
第133図 後期土器実測図 (71)



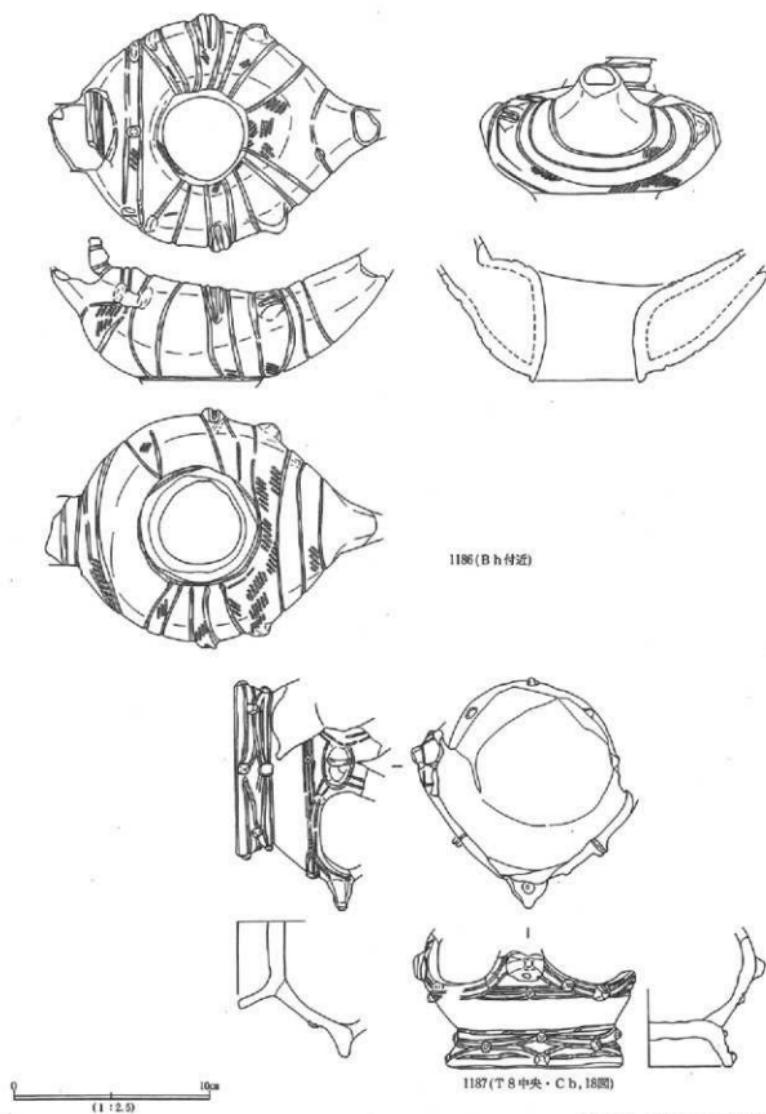
1184(A b)①8層下, 55回

0 10cm  
(1 : 3)

第134図 後期土器実測図 (72)

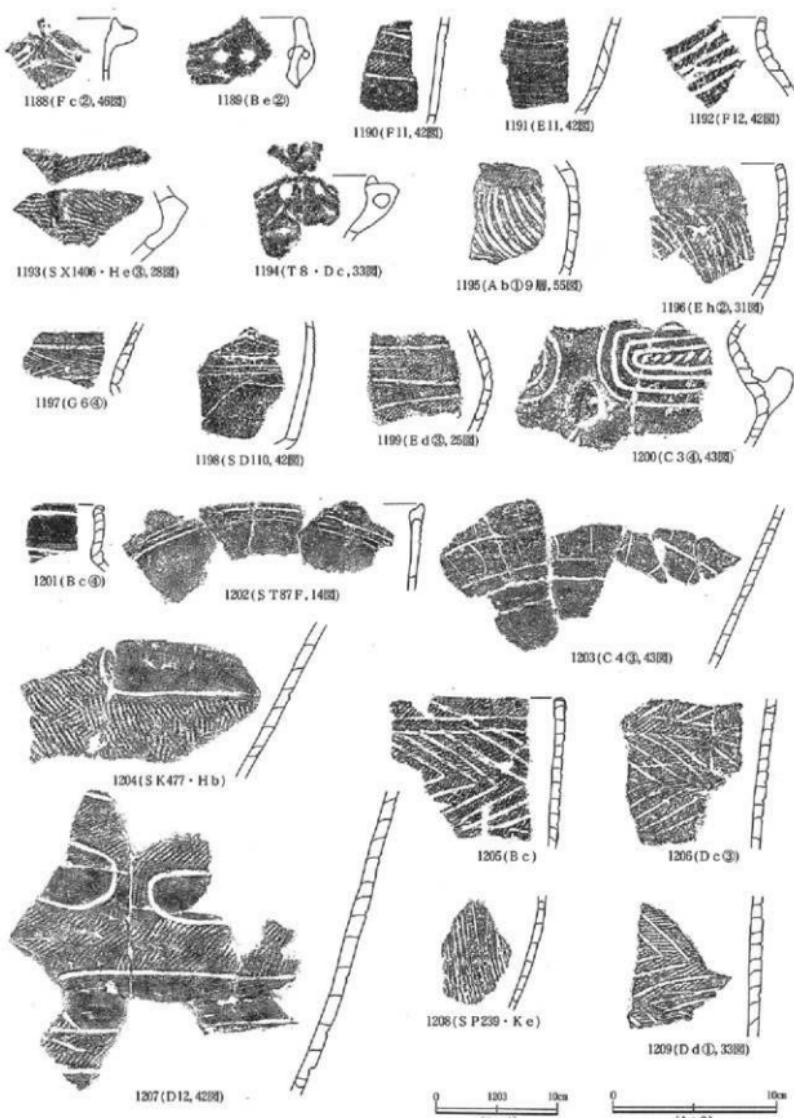


第135図 後期土器実測図 (73)

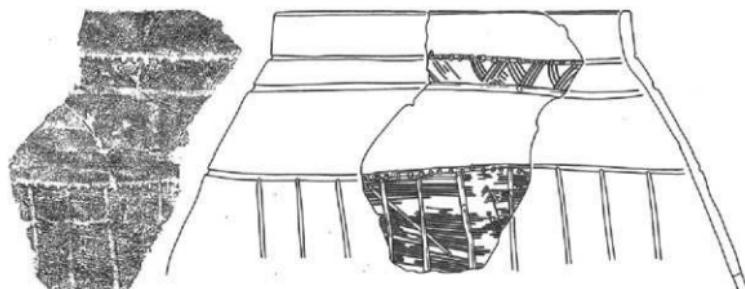
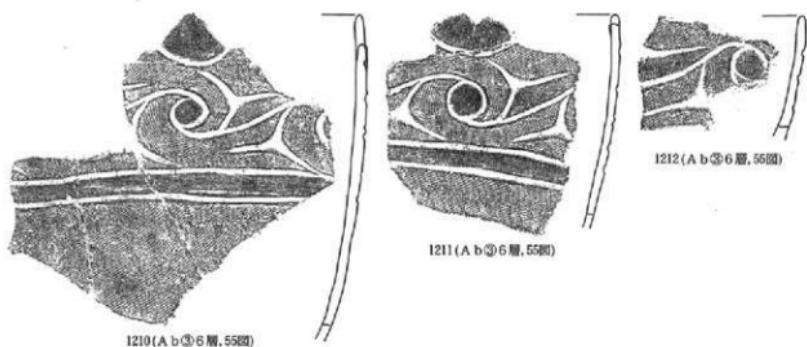


第136図 後期土器実測図 (74)

出土した遺物



第137図 後期土器実測図 (75)



0  
10mm  
(1 : 3)

第138図 後期土器実測図 (76)

### 3 砂子田第3群土器：第142図1～第182図744

砂子田3群土器は縄文時代晚期最終末期の土器である。縄文時代晚期の遺物は、コンテナで約100箱分出土している。出土地点はほぼ全てがA区北側（SG1北側）からで、それ以外の地点からの出土は極僅かである。A区北側では出土遺物の約7割が旧河川跡の縁沿いに捨てられていた。残りの3割のうち2割が包含層から、1割が遺構から出土している。

遺物の凡その時期は、縄文時代晚期最終末期である大洞A式新段階若しくは大洞A'古段階と考えられる。具体的には考察において検証するが、ここでは取り敢えずそう呼称しておく。それ以外の時期については縄文時代後期直後の大洞B1式に属するものが3点、晚期後葉にあたる大洞A式（古段階）の資料が2点、晚期最終末期の大洞A'式に属するものが約2点である。実測点数が800点余に達するので、主体となる大洞A式新段階若しくは大洞A'式新段階の時期の遺物が如何にまとまりのよい遺物であるかがわかる。

#### 3-1 用語の定義

以下、縄文時代晚期の遺物について述べるまでの基準及び用語の定義について触れる。

##### （遺物の選択基準）

遺物の出土量が多量のため、精製土器については①完形品・②完形品に近い物・③破片でも全形の窺えるもの・④出土点数は少ないが重要なものの、粗製土器については①完形品・②完形品に近い物・③破片でも全形の窺えるものを基本として抽出した。ただし、出土位置毎のまとまりを図示したいという意図からなるべく小さな破片でも図示している。特に精製土器の文様部分についてはそのように心掛けている。

##### （文様施文技法）

該期では大きく隆線手法と沈線手法に分けられるが、同じ時期でも東北地方南部ではこれに浮線的な手法が加わる。精製土器では砂子田遺跡は浮線文の影響はほとんど見られない。

**隆線手法**：基本的には棒状工具によって押し引きされた沈線文である。沈線の押し引き後に表面をミガキ調整している可能性が高い。ミガキ調整により沈線の屹立面は鋭角に立つ。文様帶では隆線部と沈線部の面積がほぼ同じである。当該期の主体をなす。

**沈線手法**：隆線手法同様に棒状工具によって押し引きされた沈線文である。文様というより区画に近い。沈線手法では隆線文に比して文様帶に占める面積が大きい。

##### （文様の名称）

第139図に砂子田3群土器の文様模式図を示した。なお単位数は6単位を基本とした。

##### 匹字文

漢字の「匹」の字に似ることから一般に「匹字文」と呼ばれる。同じ文様を「π」の字に似ることから「π字文」とも呼ぶ。煩雑なため本報告書では「匹字文」と統一する。

##### 下向きの匹字文：第139図A

もっとも単純な形の匹字文である。よくみられる。

##### 上向きの匹字文：第139図B

純粹な形でこの文様を持つものは少ない。

#### 上下交互の匹字文：第139図C

上向きと下向きの匹字文が交互に配置されるものの「下向きの匹字文」と「上向きの匹字文」が合成されたもの。上下の匹字文をそれぞれ別の文様帶と考えることもできる。

#### 上下対向の匹字文：第139図D・E

上向きと下向きの匹字文が同じ位置に上下に並んだもの。匹字文間に一条の隆線が入るのが基本形となる。上下の文様が一つのまとまりをなす。模式図Dが一般的だが、Eのように中心の隆線を欠くものもある。

#### 変形匹字文：第139図F

鈴木正博氏が定義した当該期に特徴的な文様である。基本単位文とその間に施される補助単位文としての斜行沈線文からなる（鈴木正博「大洞A 2考」『古代』早稻田大学 1984）。単位数はそれぞれ3単位、合わせれば6単位となる。

#### 基本単位文：第139図F

大洞A式古段階にすでに見られる文様だが、この時期に盛行するようである。

#### 斜行沈線文：第139図F

当該期の土器文様は平行沈線文を基本とおり、斜行沈線文は異質である。斜行する沈線は広く彫去され匹字文と結合する。この斜行沈線と匹字文の結合は上下に対向して表出される。上下対向の匹字文の影響を受けており、当該期の文様の一つと考えている。恐らく斜行沈線文自体は東北地方北部の影響と思われるが、上下対向の傾向は東北地方南部の独自の形と考えたい。また東北地方北部での斜行沈線文の沈線的手法と陽影と陰影の関係にある。

#### 〈口内沈線〉

口縁部の内側に施される沈線。当該期の土器は平縁の場合、土器製作にあたり口端に粘土紐を貼り付け、丸棒状の口端を作出する。その粘土紐を貼り付けるために内外両面から棒状工具により圧着していると思われる。その結果として表出された口縁内の沈線を「口内沈線」と定義する。口内沈線は1条を基本とし2条のものは本遺跡では未出である。装飾ではなく製作技法の一つであろう。また口内沈線はミガキ工程によりほとんど段差と化すものもある。

#### 〈口端沈線〉

#### A、下向きの匹字文



#### B、上向きの匹字文



#### C、上下交互の匹字文



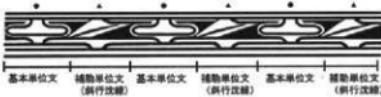
#### D、上下対向の匹字文



#### E、上下対向の匹字文 (中心の隆線を欠くもの)



#### F、変形匹字文



#### G、変形匹字文の補助単位文が失われたもの



第139図 3群土器文様模式図

口端に上向きに沈線がある場合、頸部の文様と区別して「口端沈線」と呼称する。丸棒状の口端に突起をつけるために粘土紐を貼り付けるが、その圧着のために棒状工具で押し引きしたものと考えている。多くは頸部の傾きに対して外反するものが多い。この沈線部は本来山形突起を貼り付けるための工程の一つと考えているため、本書では口端沈線を持つものは山形突起に分類している。

#### 〈口縁形態〉

精製土器の口端には突起が配置されるものがある。但し器種毎に口縁形態は決まっているよう、平縁しか組成しないものや山形突起のみのものなど分類可能である。基本形は平縁で、平縁の口端に厚めの粘土紐を貼り付け突起を作り出す。貼り付けた粘土紐には上から棒状工具によって押し引きされ口端沈線を作り出す。ほぼ以下の5種に分けられる。

#### 平縁：第140図A

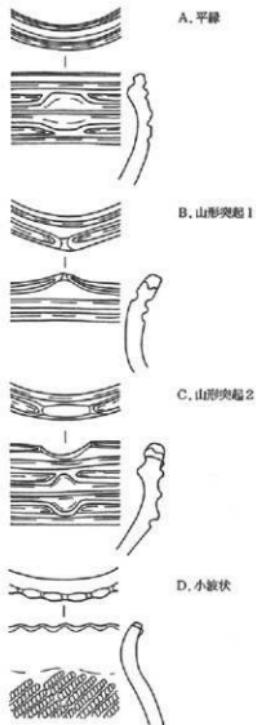
口端が平らのまま1周するもの。中には突起に見えるものもあるが意図的な造作がない限りはそのまま平縁とした。精製土器では浅鉢A・B・C・D・Fによく見られるが、特に浅鉢C・D・Fはほとんど全てが平縁である。

#### 山形突起1：第140図B

名称通り1単位の突起の数が1個のものを指す。単位数は土器によって異なる。山形突起の両側の口端には沈線が巡る。山形突起の作り出しは、平縁の口端に更に粘土紐を重ねて突起を作り出す。この平縁の口端と粘土紐の接着をよくするために、上から粘土紐に沈線を引いていると考えられる。山形突起1は壺形によく見られる。

#### 山形突起2：第140図C

名称通り1単位の突起の数が2個のものを指す。2つの突起の間は磨かれ平坦部を作り出し、山形突起の外側の口端には沈線が巡る。山形突起1と同様に、山形突起2も、平縁に粘土紐を貼り付け突起を作り出すが、沈線はその接着を強くするためと考えられる。また、突起間の平坦部だが、平縁に粘土紐を張りつけた結果、平縁の口端とは異なり外側に削ぎ落とされた状態を呈する。山形突起2は浅鉢A・B、精製深鉢を主に作り出される。これまで土器の口端に沈線が施される場合、器形自体が違うと考えざるを得なかつたが、今回の調査で、この沈線の大部分は山形突起2に伴うもの



第140図 3群土器口縁形態模式図

であることが明らかになった。もちろん山形突起1の可能性もあるが、山形突起1を有するものは器種も限られ、数も少ない。大部分は山形突起2として問題はない。以上の結果、突起の両側に沈線が囲周するものを山形突起1、山形突起の片側にのみ沈線のあるものを山形突起2と判断した。

#### 小波状：第140図D

粗製土器に見られる口縁形態。口端に粘土紐を貼り付けて、そのち指によって上から押圧を加える。間隔は親指大で、その結果小さな波状の口縁部が形成される。

### 3-2 遺物の分類及び遺物

当該期の土器について第2表土器分類表及び第141図土器分類図に分類の基準と遺物を掲載した。以下、分類毎に完形品を中心に詳述する。

#### (1) 浅鉢：第142図1～第159図303

##### 浅鉢A類：第142図1～第152図191

1類から7類まで細分し、更に口端の突起の種類によって細分している。浅鉢Aの細分器種は本来それぞれ一つの分類に昇格してもよいものであるが、形状が似通っているため敢えて浅鉢Aの中に含めた。

##### 浅鉢A1類：第142図1～第146図110

数量的に多く見られる器形である。底部から緩やかに立ち上がり、頸部で屈曲する。その後垂直若しくは外傾気味に立ち上がり口縁部にいたるもの。平縁と山形突起2を持つものに細分され、山形突起1は組成しない。文様は頸部にある。文様の上下を平行沈線により区画しその間に文様帶が描かれる。下端の平行沈線がミガキにより消失しているものもある。文様は「上下対向の匹字文」若しくは「上下交互の匹字文」で単純な匹字文を描く。「変形匹字文」を描く浅鉢A1類は本遺跡では見られない。他遺跡では浅鉢Aに「変形匹字文」が描かれることもあるが、主体的ではない。浅鉢Aの文様の違いは地域差を表している可能性もある。地文は縄文のものと無文のものがある。縄文の原体は、ほとんど全てがL Rである。なお突起・文様・地文の間には約束事は存在していない。

##### 浅鉢A1a類：第142図1～第143図44

浅鉢A1類のうち、平縁のものを一括した。ほとんどが隆線手法をとり、口内沈線が一周する。

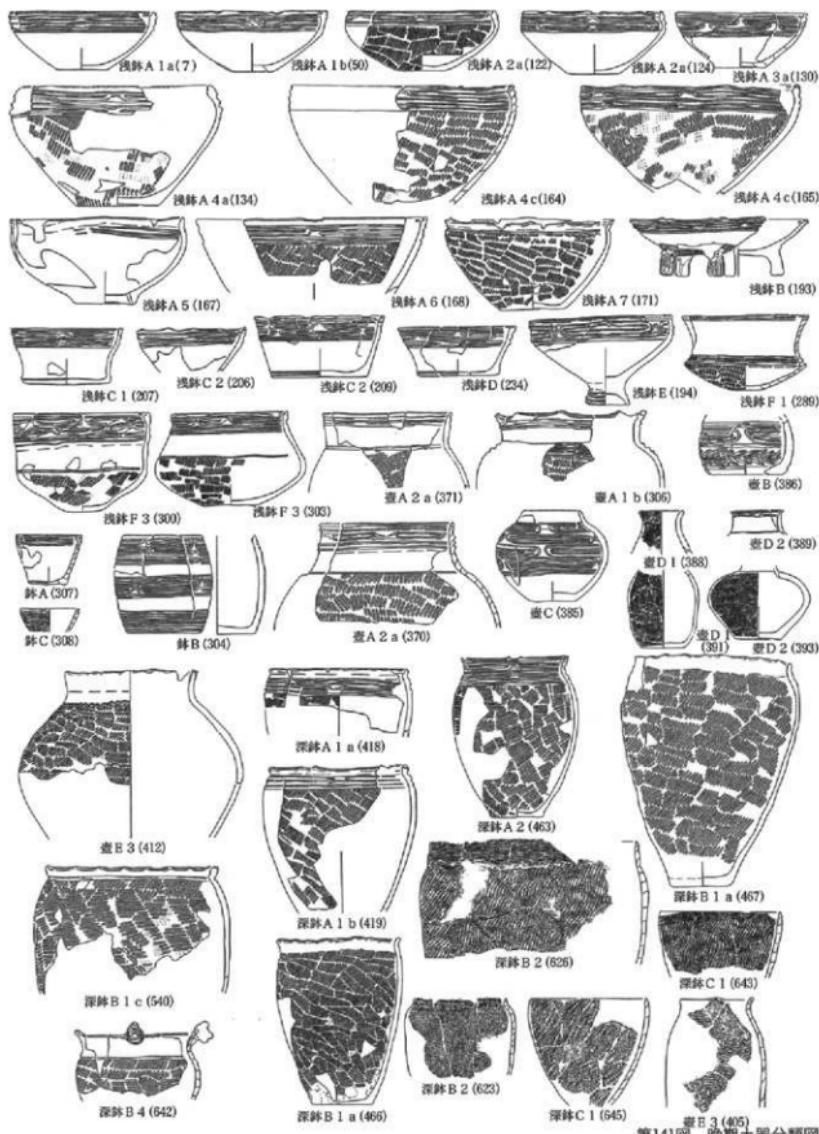
1は頸部に5条の沈線を引き、沈線は明瞭で良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下交互の匹字文」を描く。体部無文で良く磨かれる。

2は頸部に5条の沈線を引き、沈線間のミガキは稚拙である。隆線手法であるが、沈線自体もやや蛇行し、一定ではない。文様は「上下対向の匹字文」で、推定6単位である。最下段の区画沈線は失われている。確認できる部分では、下の段の匹字文が体部と体部と接続していない。体部はL R単節縄文が横位・斜位に回転押捺される。

3は頸部に4条の沈線を引き、沈線は明瞭で良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6

表2 3群土器分類表

分類	細分	口縁形態	胎形の特徴	口内化粧	口縁底面	報告書番号
A	A 1	a 平縁 b 山形突起2	底部から紙やかに立ち上がり、頭部で屈曲する。その後直若しくは外傾気味に口縁にいたる。	有 有	無 有	1~44 45~110
	A 2	a 平縁 b 山形突起2	底部から紙やかに立ち上がり、頭部で「く」の字若しくは内傾気味に屈曲する。	有 有	無 有	111~125 124~129・131~132
B	A 3	平縁	渋体A 1・A 2に似るが、底部からの立ち上がりがやや外傾気味である。頭部で屈曲する。	有	無	130~131
	A 4	a 平縁 b 山形突起1 c 山形突起2	渋体A 1・A 2に似るが、底部から紙やかに立ち上がり、頭部で屈曲する。器高が大きくなる。	有 有 有	無 有 有	134~155 156~160 161~165
C	A 5	平縁	渋体A 1に似るが、頭部附近で強く内傾しながら立ち上がり、金魚鉢状を呈する。口縁は外傾する。	有	無	166~167
	A 6	山形突起2	底部から直線的に立ち上がる。器高が大きくなる。	有	有	168
D	A 7	山形突起2	輪郭の渋跡を一巡した。	無	有	169~180
	B	山形突起2	四脚式の渋跡	有	有	193
E	C 1	平縁	底部から直線的に立ち上がる。山形突起1	有	無	197~205・207~224
	C 2	山形突起1	底部から直線的に立ち上がる。逆台形状を呈する。	有	有	206~209
F	D	平縁	底部より且頭部後方に外反し、頭部で屈曲、その後内傾気味に立ち上がる。底部形状は丸底と平底がある。	有	無	225~238
	E	平縁	台付山形を一巡した。	有	無	192~194
G	F 1	平縁	広口の壺に似る。底部下半は丸みを持ち、屈曲後外傾気味に強く立ち上がる。頭部は横標帶のみ。	有	無	239~250~292
	F 2	平縁	広口の壺に似る。底部下半は丸みを持ち、そのまま垂直に立ち上がる。頭部にも文様帶を持つ。	有	無	291~293~295
H	F 3	平縁	広口の壺に似る。底部下半は丸みをもち、屈曲後内傾気味に立ち上がる。頭部にも文様帶を持つ。	有	無	299~303
	G	—	その他の浅鉢。	—	無	該当なし
I	A	山形突起1	底部から直線的に立ち上がり、器高の高い逆台形状を呈する。	有	無	307
	B	平縁	底部から直線的に立ち上がり、円柱状を呈する。	有	有	304
J	C	—	全前腹部の小型壺。	—	無	308
	A 1	a 平縁 b 山形突起1	大底の壺。体部上端（肩部）と頭部に文様帶を持ち、肩部の文様が主文様となり、口縁部には平行横線のみ施文される。	有 有	無 有	311~327 305~306・309~310・328~369
K	A 2	a 平縁 b 山形突起1	大底の壺。体部上端（肩部）と頭部に文様帶を持ち、口縁部の文様が主文様となり、肩部には平行横線のみ施文される。	有 有	無 無	370~374 374~384
	B	山形突起1	小底の長頸壺（雁首）。体部上及び下半に文様帶あり。頭部は欠損のため不明。	有	有	386
L	C	平縁	体部の断面が琴形をなす。体部中位に最大径を持ち、肩部で屈曲後、無文の頭部で中腹しながら斜く立ち上がる。	有	無	385
	D 1	平縁	全前腹部の小型壺。	無	無	387~388~391~392
M	D 2	—	無文の小型壺。体部上位に最大径を持ち、口頭部に文様を持つ。	有	無	389~390~393~394
	D 3	—	無文の大壺形。体部上位（肩部）に文様を持つ。	無	無	395~397~399~401
N	D 4	山形突起1	全前腹部の大壺形。体部中位に最大径を持つ。	無	無	398~402
	E 1	山形突起1	前腹部の小型壺。	無	無	403
O	E 2	平縁	織文文様の小型壺。体部が短く、直ぐに肩部にいたる。口頭部のほうが体部よりも長い。頭部は無文。全腹無文の物も存在する。	無	無	404
	E 3	小波状	織文文様の大壺形。頭部で屈曲し、頸部の無文帶を持つ。	無	無	405~412~414~417
P	F	—	分業不徹の窓を一覧した。	—	無	413
	A 1	a 平縁 b 山形突起2	肩部の渋跡で、体部上位に最大径を持ち、弱く屈曲し口縁に至る。口頭部に文様帶を持つ。	有 有	無 有	418~425~422~430~438~442~448
Q	A 2	山形突起2	肩部の渋跡で、体部上位に最大径を持ち、弱く屈曲し口縁に至る。口頭部に文様帶を持つ。	有	有	419~425~428~431~433~435~439~441~445~447~450~459
	B 1	a 平縁 b 小波状	頭部の渋跡で、頭部で屈曲し頸部の無文帶を持つ粗製の深鉢。	無 無	無 無	466~467~469~534 535~537
R	B 2	c 小波状	頭部で弱く屈曲し無文帶が強く直に立ち上がる。粗製の頭部。	無	無	458~538~563
	B 3	d 小波状	頭部で屈曲し頸部の無文帶を持つ粗製の深鉢で、平縁のもの。	無	無	564~616~619~620
S	B 4	—	その他の特徴を持つ粗製の深鉢。	有	無	617~626 627~635
	C 1	平縁	口縁でやや内傾しながら立ち上がる飽満型の粗製深鉢。頭部で屈曲しない。	無	無	643~659
T	C 2	平縁	口縁でやや内傾しながら立ち上がる飽満型の粗製深鉢。頭部の屈曲なし。頭部に横模様無文帶を持つ。	無	無	660~666
	D 1	小波状	深鉢Bの形態で、体部に条痕文・器底文を施すもの。	無	無	675
U	D 2	平縁	深鉢Cの形態で、体部に条痕文・器底文を施すもの。	無	無	667~674~676~693



第141図 晩期土器分類図

単位の「上下交互の匹字文」である。拓本では一箇所で下向きの匹字文が連続して施文されている部分も確認できる。体部無文で良く磨かれる。

5は、頸部に5条の沈線を引き、沈線は明瞭で良く磨かれる。隆線手法である。下向きの匹字文が1単位確認できるが、単位数は欠損により不明である。体部無文で良く磨かれる。

6はやや大型のものである。頸部に4条の沈線を引き、沈線は明瞭で良く磨かれる。隆線手法である。文様は6単位の「上下交互の匹字文」であるが、実測図では下向きの匹字文が2単位続けて施文される部分を示した。体部無文で良く磨かれる。底部は平底である。

7はほぼ完形のものである。頸部に6条の沈線を引き、沈線は細く、明瞭である。隆線手法である。「上下交互の匹字文」を6単位描く。体部は無文で良く磨かれる。赤彩される。

10・11は同一個体であるが、文様が「変形匹字文」であるが明瞭でない。25は沈線手法をとるものである。33は沈線間が良く磨かれ、隆線部が細い線状を呈するものである。浮線的な印象を与えるが、隆線手法と理解した。

#### 浅鉢A 1 b類：第144図45～第146図110

浅鉢A 1類のうち、口端に山形突起2を持つものである。ほとんど全てが隆線手法で、口内沈線が一周する。

45は文様帶の1/2が残存する。頸部に7条の沈線が引かれ、沈線は良く磨かれている。隆線手法である。文様は「上下対向の匹字文」であるが、上段の匹字文が発達し、2段下の隆線と接続している。下段の匹字文は通常のものであるが、上段に比べると小さく見える。特異な点は頸部文様帶が頸部の屈曲よりも下まで広がっている点である。他のものは頸部文様帶は頸部も屈曲がよりも上にあり、その分文様帶が広くなっている。体部無文で良く磨かれる。

46は頸部に5条の沈線を引き、沈線は良く磨かれている。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下対向の匹字文」である。下段の匹字文を構成する隆線が一単位ごとに1段ずれて接続しており、上下の匹字文の間に隆線が存在する所とない所がある。口端の山形突起2は盛り上がりが弱く、他の部分と区別できないところもある。体部無文で良く磨かれる。赤彩される。

47は頸部に6条の沈線を引き、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下対向の匹字文」である。体部無文で良く磨かれる。

49は頸部に5条の沈線を引き、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定4単位の「上下対向の匹字文」である。最下段の区画沈線が失われ、下段の匹字文が直接体部と接続すると思われる。体部にLR単節繩文を横位回転させる。赤彩される。

50は頸部に頸部に5条の沈線を引き、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は6単位の「下向きの匹字文」である。匹字文は通常と異なり2段下の隆線と接続する。体部無文で良く磨かれる。

51は頸部に6条の沈線を引き、沈線は良くがかかる。隆線手法である。文様は6単位の「上下対向の匹字文」である。体部はLR単節繩文を上位では横位回転、中位以下では斜位に回転押捺する。

52～110は口縁部の破片資料である。

100は問題のある資料である。100は器形的には浅鉢A 1 b類に分類したが、文様が細い沈線で描かれ、沈線手法をとっている。また文様も平行沈線ではなく、斜行する沈線が見えており、この部分だけを見れば変形工字文に見える。残念ながら斜行沈線と上段の沈線の接続部分が確認できないが、おそらく変形工字文を施文すると推測させる。山形突起2も異質で、きわめて細い粘土紐を貼り付けて製作している。出土位置は旧河道の土器捨て場のG10IIである。大洞A'式とすべきかもしれない。胎土に海綿骨針を含む。

#### 浅鉢A 2類：第146図111～第148図129・131・132

浅鉢A 1と器形的にはほとんど違いはない。次の時期の器形との関係を考えて敢えて細分した。平線と山形突起を持つものに細分され、山形突起1は組成しない。文様及び地文については浅鉢A 1と同様である。基本的には口内沈線が一周する。

#### 浅鉢A 2 a類：第146図111～123

浅鉢A 2類のうち平線のものを一括した。

111は口端が丸棒状を呈し、外側に張り出す。頸部に4条の沈線を引き、沈線のミガキは丁寧ではない。隆線手法である。単位数は不明だが、「下向きの四字文」を描く。四字文は2条目の隆線を上に押し上げ、1条目の隆線と接続することで形成される。その際に押し上げられた隆線は瘤状に盛り上げられる。ただし貼瘤ではない。体部無文で良く磨かれる。胎土に海綿骨針を含み、ざらつく。

112は頸部の上下に2本の区画沈線を引き、沈線のミガキは丁寧ではない。隆線手法である。2本の区画沈線の間に流水状のモチーフを描く。モチーフは変形四字文の基本単位文にも似る。体部にはR L 単節繩文が横位回転される。胎土に海綿骨針を含み、ざらつく。

122は頸部に4条の沈線を引き、沈線は良く磨かれる。文様は推定6単位の「下向きの四字文」である。体部にL R 単節繩文が横位回転される。

123は大型の個体であるが、ほぼ122などの相似形となる。頸部には平行沈線が5条引かれるが、沈線はやや蛇行している。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。焼成が極めて良好で、須恵器のように硬質である。文様は平行沈線のみである。体部の最上部（頸部文様直下）には結節がみられる。体部上位はL R 単節繩文を横位回転させ、体部中位以下は斜位に回転させる。

113～121は破片資料である。

117・118は問題のある資料である。これは同一個体であるが、頸部で「く」の字に屈曲する。文様は平行沈線とそれを結ぶ斜行沈線からなるが、文様全体をうかがうことはできない。沈線手法による。文様は頸部の屈曲より下にも広がる。口端は平線のようだが、口内沈線は確認できない。おそらく存在しないと思われる。出土地点は旧河道の土器捨て場の外れである。おそらく大洞A'式のものであろう。この土器を念頭に置いて浅鉢A 2類を設定したが、他の浅鉢A 2類の土器とは異質である。

#### 浅鉢A 2 b類：第147図124～第148図129・131・132

浅鉢A 2類のうち山形突起2を持つもの。

124は頸部に6条の沈線を引き、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は6単位の

「上下対向の匹字文」である。体部無文である。

125は頸部に6条の沈線を引き、器面は磨滅している。隆線手法である。文様単位は欠損により不明だが、「上下対向の匹字文」が描かれる。体部無文である。

126は頸部に5条の沈線を引き、沈線は良く磨かれる、隆線手法である。平行沈線はやや蛇行しており、文様の書き方は稚拙である。文様は6単位の「上下対向の匹字文」であるが、匹字状の文様が上下の隆線に接していない部分がある。また最下段の区画沈線は失われ、匹字文が直接体部と接している。体部は無文である。赤彩される。

127はほぼ完形の個体である。頸部には6条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は6単位の「上下対向の匹字文」である。かなり丁寧につくられている。体部は無文である。赤彩される。

128は頸部に6条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定3単位で、「変形匹字文」に似た文様が描かれるがやや異なる。基本単位文は横長扁平で、斜行沈線部分はほとんど「上下対向の匹字文」と化し、基本単位文と接するようにみえる。体部無文である。

129は頸部に4条の平行沈線が引かれる。隆線手法である。文様は6単位の「下向きの匹字文」だが、匹字部を作り出す際、隆線を瘤状に盛り上げている。貼瘤ではない。体部はLR単節繩文を横位回転させる。胎土に海綿骨針を含む。

#### 浅鉢A 3類：第148図130・131

2点のみの出土である。浅鉢A 1・A 2類に似るが、体部の立ち上がりが外に屈曲気味で、浅鉢A 1・A 2類とは違和感がある。

130は頸部にやや広めの文様帯を持つ。無文部の多い所もあるが基本的には隆線手法と理解した。沈線は丁寧に磨かれる。頸部の多くを欠損しているが、残存部から推測して文様を圖上復元した。上下の区画沈線の間には流水状モチーフが描かれる。このモチーフは基本単位文に似る。体部はよく磨かれる。

132は、頸部での屈曲し、口縁部にかけて内湾する。頸部の文様帯は狭く、4条の平行沈線が引かれ、「下向きの匹字文」が認められる。体部はよく磨かれる。

#### 浅鉢A 4類：第148図134～第150図165

浅鉢A 1・A 2類に似るが、底部からの立ち上がりが急で、頸部で屈曲後、内湾気味に立ち上がり口縁部にいたるもの。器高が大きく、鉢に近い。口縁部の形状により3つに細分した。口内沈線が一周し、文様は「上下対向の匹字文」や「下向きの匹字文」がみられる。

#### 浅鉢A 4a類：第148図134～第149図155

浅鉢A 4類のうち口縁形態が平縁のものを一括した。

134は口端の断面形が三角状を呈し、体部に比べて肥厚している。粘土の貼り付けが他の個体よりも多い。頸部には平行沈線が6条引かれ、沈線は丁寧に磨かれる。平行沈線はやや蛇行する。文様は「上下対向の匹字文」であるが、単位数は不明である。体部にはLR単節繩文を横位もしくは斜位に回転押捺する。

135は頸部に平行沈線が4条引かれる。沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「下向きの匹字文」が推定6単位である。体部は細かなLR単節縄文が横位に回転されるが、体部中位以下では斜位に回転押捺する部分も見られる。

141は口端の断面形が三角状を呈し、外側に張り出す。この部分はやや幅広の無文帶となっている。頸部には4条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれている。隆線手法である。文様は「下向きの匹字文」であるが、匹字状の文様が横長扁平となり、通常のものとややイメージが異なる。単位数は不明である。体部には結節を持つLR単節縄文が横位回転される。頸部文様の直下だけではなく、体部全体に結節が見られる。

149は頸部に3条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は真ん中の2本の隆線を縦の隆線で結んだもので、本遺跡では数は少ない。体部は無文である。

154は頸部に6条の平行沈線が引かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下対向の匹字文」である。体部無文である。器厚が厚い。

136～140・142～148・150～153・155は破片資料である。148・150～152は分類の誤りである。

#### 浅鉢A 4 b類：第150図156～160

浅鉢A 4類のうち口縁形態が山形突起1のものである。数量的にかなり少ない。全て破片資料である。

#### 浅鉢A 4 c類：第150図161～165

浅鉢A 4類のうち口縁形態が山形突起2のものである。

164は山形突起を作り出すにあたって、口端への粘土紐の貼り付けが少なく、突起自体もごく小さいものである。ただし口端沈線は施されている。頸部には6条の沈線が引かれ、沈線のミガキは丁寧ではない。隆線手法である。沈線はやや蛇行する。文様は「上下対向の匹字文」であるが、単位数は不明である。体部はLR単節縄文が横位回転される。赤彩される。胎土には海綿骨針を含み、器面はざらつく。

165は口端への粘土紐の貼り付けが少なく、突起自体もごく小さい。口端沈線は施されている。頸部には6条の沈線が引かれ。隆線手法である。文様は「上下対向の匹字文」で推定6単位である。匹字文は一部崩れてきており、実測図中央の下端の匹字文はかなり横長扁平となっている。体部はLR単節縄文が横位回転するが、一部斜位の施文もみられる。

#### 浅鉢A 5：第151図166・167・第164図413

底部から丸みを帯びて立ち上がり、頸部で強く内湾しながら口縁部にいたる。口端は外に張り出し、金魚鉢状を呈するもの。口端は外反する。口縁形態は平縁である。

166は口端にやや幅広の無文帶が見られ、器厚も厚い。頸部には5条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。文様は6単位の「上下対向の匹字文」だが、下段の匹字文が不明瞭となっている。実測図中央の匹字文は下端が体部に接しておらず、他の部分も沈線が直線的で、匹字状の彫去を作り出している。頸部最下段の区画沈線は失われ、下段の匹字文は体部に直接接する。体部は無文である。赤彩される。胎土に海綿骨針を含む。

167は口端にやや幅広の無文帶が見られ、器厚も厚い。頸部には3条の沈線が引かれるが、

途中から磨滅によるものか確認できなくなる。沈線手法と理解した。また下2条の沈線が最上部の沈線に向かっており、変形工字文となる可能性も否定できない。底部には数箇所棒状工具で穿孔される。体部は無文である。

413は当初壺に分類したが、本類とした。ただし本類と考えるにしてもかなり異質な土器である。底部から丸みを持って立ち上がり、頸部で強く内湾する。口端が外に強く張り出し、大きな装飾となる。口縁形態は山形突起1であるが、通常の突起と異なり単位数が極めて多く、ほとんど連続的に突起があらわれる。口端には沈線が存在する。この口端の大きな装飾は内外の双方に平行沈線を基調とする文様が描かれる。外面は口端の突起に沿った沈線が1条引かれ、さらに平行沈線が周囲する。内面にも文様が描かれ、4条の平行沈線と匹字状モチーフが確認できる。頸部にも文様帶があり、5条の平行沈線と匹字状モチーフが描かれる。ただし、この匹字状モチーフは、これまでみてきた「匹字文」とは異なる。「匹字文」が隆線を上下に上げ下げし、その接点に幅広の影が存在するのに対して、この匹字状のモチーフは単に隆線を上げ下げして上下の隆線と接続させたに過ぎない。匹字状の隆線は三角形を描く。後述の台付浅鉢192も同じようなモチーフを描いている。また沈線も細く、ミガキも甘い。あるいは本土器群の土器よりも古いものにも思える。

#### 浅鉢A 6 : 第151図168

底部から直線的に立ち上がり、そのまま口縁部にいたるもの。168のみである。

168は、口縁形態が山形突起2であるが、口端を削り取ることにより残った部分を突起に見立てている。口端沈線はない。口縁直下にやや幅広の無文帶を持つ。口内沈線が一周するが、ほとんど稜と化している。頸部には5条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「上下対向の匹字文」で、単位数は不明である。下端の匹字文はだれています。最下端の区画沈線は失われ、匹字文が直接体部と接する。体部はLR単節繩文を横位回転させる。胎土に海綿骨針を含む。

#### 浅鉢A 7類 : 第151図169～第152図180

粗製の浅鉢を一括した。169～170が頸部に1・2条の平行沈線を引き、口縁形態が山形突起1を持つものである。その他が口縁形態が平線で体部が地文か無文のものである。

169は口縁形態が山形突起1で、口端沈線がみられる。口内にも1条の沈線がめぐるようである。頸部には2条の平行沈線がひかれるが、丁寧なミガキとはいえない。体部にはLR単節繩文が横位に回転される。場所によっては斜位の回転押捺もみられる。

171は口縁形態が山形突起1で、口端沈線はみられない。口内にも1条の沈線がみられる。頸部には1条の沈線が一周する。体部は頸部直下に結節がみられ、LR単節繩文を横位回転させる。場所によっては斜位の回転押捺もみられる。胎土に海綿骨針を含む。

172～180は破片資料で全体のうがわれるものはない。全面無文のもの(175・178)、全面繩文のもの(176)、口縁直下に結節を施し全面繩文のもの(172・173)、口縁直下に沈線を持つもの(174・177・179)、頸部無文帶で体部繩文施文のもの(180)

#### 浅鉢A類底部資料 : 第152図181～191

全て破片のみで、細分是不可能である。

#### 浅鉢B類：第153図193

四脚のつく浅鉢である。本遺跡からは193の1点のみの出土である。浅鉢部分は浅鉢Aに似るが器高が小さく、浅い皿型を呈する。山形突起2がつく。四脚はミガキ調整され、稜線は見られない。文様帶は頸部にあり、上下の区画沈線内に「下向きの四字文」が6単位見られる。隆線手法である。浅鉢部の底部には四脚を囲むように4条の平行沈線が四角形に囲周し、文様帶が形成される。4条の平行沈線により3条の隆線が形成され、良く磨かれる。3条の隆線のうち四脚を結ぶ中央の1条には刺突が施される。数量も少なく特殊な器形のため日常雑器として用いられたとは考えがたい。

#### 浅鉢C：第154図197～第155図224

底部から直線的に立ち上がり、逆台形状を呈する。数量的に多い。後述の浅鉢D類とは区別が難しい。体部が直線的に立ち上がるものを基準とする。口端は基本的に平縁であるが、ごく僅かに山形突起2を持つものもある。口内沈線が全てにみられる。頸部に平行沈線による文様が施文され、体部は無文で良く磨かれている。底部は平底である。全て底部直上に沈線が一周する。文様は基本的に「上下対向の四字文」を基準とするが、「変形四字文」を施文するものもみられる。

197は小型の個体で、口端部分を全周欠損する。頸部には5条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は5単位の「上下対向の四字文」である。最下段の区画沈線が失われ、下段の四字文は体部に直接接する。平底である。赤彩される。

198は頸部に3条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。頸部文様帶は推定5単位の「上向きの四字文」である。文様帶は極狭い。底部は平底である。

199は小型の個体で、頸部文様帶に「変形四字文」の基本単位文が施文される。隆線手法である。最下段の区画沈線が明瞭でなく、稜と化している部分もある。平底である。

200は底径に比して器高が小さい。文様帶は広く6条の平行沈線が引かれ。沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「上下対向の四字文」で、推定6単位である。器厚が厚い。胎土に海綿骨針を含む。

201は底径に比して器高が小さい。頸部に6条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。文様は推定5単位の「上下対向の四字文」である。

202は底径に比して器高が小さい。頸部に4条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。文様は推定5単位の「下向きの四字文」である。

203は197から202と異なり頸部が内湾気味に立ち上がる。頸部には4条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「上下交互の四字文」である。器厚は厚い。胎土に海綿骨針を含む。

204も203と同様に頸部が内湾気味に立ち上がる。頸部には6条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下対向の四字文」である。器厚は厚い。底部はやや上げ底である。胎土に海綿骨針を含む。

205は底径が小さく器形も他のものと異なるが、本類に分類しておいた。頸部には5条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる隆線手法である。頸部文様帶は極狭く、沈線間も狭い。文様は「上下対向の匹字文」であるが、上下の匹字文の間には通常1条の隆線が介在するが、205には存在しない。匹字文自体が左右に流れしており、文様が崩れている。

206は205よりも頸部の開きが大きく他のものと大きく異なるが、本類に分類して置いた。あるいは他類に分類すべきかとも考えたが、適切な分類が見つからないための措置である。浅鉢C類の口縁形態は平縁であるが、206のみは口縁形態が山形突起1である。この点も異質といえよう。頸部には4条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法であるが文様は推定5単位の「下向きの匹字文」である。

207は底部で張り出し、体部で湾曲し、頸部で内湾しながら立ち上がる。器形的には浅鉢D類に属するが、外傾の度合いが小さく、文様も「変形匹字文」ではないことから、これを本類とした。口端を全周欠損しているが平縁と推測される。頸部には6条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下対向の匹字文」が施文される。赤彩される。

208は205・206のように体部がやや外に開く。頸部には6条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下対向の匹字文」が施文される。赤彩される。

209は口縁形態が山形突起2であるが、口端沈線はない。頸部には上下端に1条の区画沈線が引かれ、その間に「変形匹字文」の基本単位文のみが推定3単位もしくは4単位施文される。隆線手法である。基本単位文は上の匹字部が強調され、下の匹字部は弱い。209の文様帶は狭いが、これが縱に広がり、基本帶文が直線化すれば、大洞A'式の「変形工字文」に近いものになる。底部直上に2条の沈線が一周する。底部直上が2条の沈線となるものはこれのみである。胎土に海綿骨針を含む。

210～224は破片資料である。224以外は隆線手法である。

224はやや異質である。口縁部は平縁で、頸部に6条の平行沈線が引かれ。沈線は極細で、沈線よりも隆線部分が広く、隆線手法というより沈線手法といったほうが良い。文様も平行沈線のみしか確認できない。本土器群にも既に沈線手法が用いられたことを示す。

#### 浅鉢D類：第155図225～第157図288

底部で一旦張り出し、その後屈曲しながら外傾し、頸部でやや内湾しながら口縁部にいたる。口縁形態は平縁である。口端は丸棒状を呈し、口内沈線が一周する。頸部には平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。基本的には隆線手法が用いられる。文様は「変形匹字文」が主体となるが、「上下対向の匹字文」などが描かれる場合もある。体部は無文で良く磨かれる。底部直上に1条の沈線が一周する。底部は丸底と平底があるが特別区別しなかった。丸底のものを蓋と考える説もあるが、浅鉢D類を蓋として使用したことを裏付ける出土状況は未検出である。なお平底のものについては浅鉢C類と区別の難しいものもあり、文様で「変形匹字文」を施文するものを本類に入れた。当然分類に当たって誤認のものもあると思われる。

225は破片資料で残存している部分が少なく文様も不明であるが、「変形匹字文」の斜行沈線部分の下部と思われる沈線がみられる。底部は丸底と思われる。

226は小型の個体で、強く湾曲した丸底が特徴的である。文様は不明である。

227は平底の個体である。頸部文様帶はやや狭い。頸部に2条の区画沈線を引き、その間に「変形匹字文」の基本単位文に似た文様がみられるが、詳しくはわからない。

228は底部を欠損しているが、微妙に丸底を呈すと思われる。頸部文様帶はやや広く、「変形匹字文」を施文する。沈線は良く磨かれる。隆線手法である。

229は平底の個体である。頸部文様帶には「変形匹字文」が施文される。沈線は良く磨かれる。隆線手法である。赤彩される。

230は底径が大きく器高が小さい横長扁平の器形をしている。文様は「変形匹字文」で基本単位文はかなり横長扁平である。斜行沈線は基本単位文に比べて短く、斜行というより平行沈線に近くなっている。底部は欠損により不明だが、弱い丸底を呈すと推測される。赤彩される。

231は小型の個体である。頸部文様は「変形匹字文」で、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。底部は弱い丸底を呈す。

232は頸部文様の大部分を欠損している。残存している部分は「変形匹字文」の基本単位文である。斜行沈線の一部が見えるが、通常のものと異なるように見える。沈線は良く磨かれるが、磨滅している。隆線手法である。

233は注目すべき個体である。器形は深鉢Dで問題ではなく、底部は平底である。問題は文様である。崩れた匹字文を狭い間隔で繰り返している。その結果浮線文に似た印象を与えていている。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。浮線文のモチーフを意識しながら、隆線手法を用いたものか。

234は欠損と磨滅により文様構成が詳しくわからなかったが、残存部から図上復元したものである。器形は本類とするのに悩むが、底部から直線的に外傾して口縁部にいたる。文様は「上下対向の匹字文」だが、次の単位の匹字文が一段下の隆線と結びついて「下向きの匹字文」を作り出している。胎土に海綿骨針を含む。

235は丸底の個体で、底径に対して器高が大きい。図上復元の際にやや直立させたかもしれない。頸部文様帶はやや広く、文様は「変形匹字文」である。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。

236は極弱い丸底の個体である。頸部文様帶はやや広く、文様は「変形匹字文」が施文される。沈線は良く磨かれる。隆線手法である。胎土に海綿骨針を含む。

237は丸底の個体である。文様が一部しかないため「変形匹字文」の基本単位文なのか「上下対向の匹字文」なのか判断できない。沈線は良く磨かれる。隆線手法である。胎土に海綿骨針を含む。

238は平底の個体である。底径が大きく、器高が小さい。横長扁平の器形をしている。文様は「変形匹字文」の基本単位文に似るが、匹字状の隆線が中心の隆線と結合し、匹字状の影去が特異な印象を与える。また斜行沈線は存在せず、推定3単位の文様をなす。沈線は良く磨か

れる。隆線手法である。胎土に海綿骨針を含む。

239は破片資料である。おそらく丸底となるものである。文様は「変形匹字文」の斜行沈線部分である。

240は底径と器高がほぼ同じである。文様帶は広く、文様は「変形匹字文」である。実測では残存部の関係で斜行沈線部分を中心とした。沈線は一部蛇行している。また最下段の区画沈線はほとんど失われて、稜と化している。丸底である。

241は丸底で、底径が大きく器高が小さい長扁平のものである。文様は「上下対向の匹字文」で、沈線は良く磨かれる。隆線手法であるが、沈線のミガキにより隆線部は極めて細く、浮線的な印象も受ける。

242は平底の個体である。やや小型の個体である。口端を全周欠損する。文様帶は狭く、文様は「変形匹字文」が施される。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。器面は磨滅している。

243～277・281・285が口縁部、278～280が頸部、282～284・286～288が底部の破片資料である。破片だけでは浅鉢Cと区別が困難であり、分類の誤認もある。大部分が「変形匹字文」を描くが、「上下対向の匹字文」のもの（243～245・257・261・265）や「下向きの匹字文」のもの（258・269・272）、「上向きの匹字文」のもの（276）、平行沈線しか確認できないもの（267・273・274）も存在する。これらは頸部が直線的なものが多く、浅鉢C類の可能性も多い。

266は文様が他のものと異なる。おそらく「変形匹字文」の斜行沈線部分が失われ、基本単位文が斜行沈線部分まで横長に延びたものと思われる。それでも斜行沈線部分の匹字文は上下に退化しながらも残っている。

278は頸部の一部分と思われるが、矢羽状沈線の一部か。

279は本遺跡の第3群土器では唯一の出土例である。「変形匹字文」の基本単位文の中央部分と思われるが、磨消繩文がみられる。

浅鉢E類：第153図192・194

台付浅鉢を一括した。個体数が極めて少なく、特別な器種である。それぞれ器形・文様が異なるため、個別に注記する。

192は台の上端から上ののみが残存しているものである。体部は浅鉢A類のように緩やかに立ち上がり、頸部で直立気味に屈曲し口縁部にいたる。口縁形態は山形突起1で、推定4単位である。突起間にはさらに口縁部文様帶が配置される。突起を含めて口縁部文様帶と理解した。口縁部文様帶の存在するものはこの個体のみである。口端の断面形は他の個体が小さな丸棒状を呈するのに対して、これのみは厚い大きな丸棒状を呈する。また口内沈線は通常斜め上から施されるようにみえるが、これは真横から沈線を引いているようである。口縁部文様帶の直下に頸部文様帶が描かれる。7条の平行沈線が引かれ、3・4・5条目の隆線によって「上下交互の匹字文」が描かれる。ただし匹字文自体は他のものに比べて小さく、匹字状の膨去も狭い。これは413と同様のモチーフと考えられる。体部は極細のLR単節繩文が横位回転される。台部は不明である。底部内側には拓本にあるように円文が存在する。口縁部文様帶の存在、口端の形状、匹字文の形状などから砂子田3群土器の範疇ではなく、一段階古いと考えられる大

洞A式のものと理解した。

194は台部から口縁部まではほぼ残存する。台部は低く、体部の立ち上がりは急である。頸部で屈曲し、その後直立もしくは内湾気味に立ち上がる。口縁形態は平縁で、突起は付かない。歪みも大きい。頸部文様帶は「変形匹字文」の基本単位文様が推定4単位描かれる。基本単位文の間にはそれをつなぐように大きな下向きの匹字文が描かれる。体部は無文である。台部には3条の平行沈線が引かれ、3単位の「下向きの匹字文」が描かれる。最上部の区画沈線は失われ、稜と化している。坏部の底部内側には、拓本にあるように円文が描かれる。砂子田3群土器にともなう台坏浅鉢と考えている。

#### 浅鉢F類：第158図289～303

小さい底部から体部が球形に立ち上がり、頸体境で強く屈曲する。その後湾曲しながら立ち上がる。口縁形態は平縁で、突起のつくものは存在しない。文様帶は頸部と頸体境の屈曲部の2箇所存在する。文様は隆線手法で描かれる。頸部と体部の間は無文で良く磨かれる。体部は繩文が施文される。文様帶が2つに分かれるところは壺型の頸部文様と体部上位の肩部文様を思わせる。器高を考えなければ、広口の壺とさえいえる。文様帶の位置や器形から3つに細分した。

#### 浅鉢F1類：第158図289・290・292

浅鉢F類のうち、頸体境で屈曲後短く外傾気味に立ち上がる。頸部文様帶には平行沈線のみが、頸体境の文様帶には平行沈線のみか文様が描かれる。

289はB区E c ②グリッドから出土したものである。遺構は検出できなかったが、周辺は繩文時代後期の遺構が密集するので、本来は土壙などがあったものと推測している。口縁形態は平縁で、頸部には1条の沈線のみが引かれる。頸部文様帶直下は幅広の無文帶である。頸体境の屈曲部には平行沈線が3条引かれ、2本の隆線が結合して匹字文が描かれる。隆線の押し上げが弱く判然としないが、「上下交互の匹字文」にも見える。2条目の沈線には平らな棒状工具による刺突痕が極狭い間隔で存在する。体部にはL R単節繩文が横位回転される。

290・292は2箇所の文様帶とともに2条の平行沈線のみからなる。頸部文様帶直下は無文である。体部にはL R単節繩文が横位回転される。底部は欠損により不明である。

#### 浅鉢F2類：第158図291・293～295

浅鉢F類のうち、頸体境での屈曲後ほぼ垂直に立ち上がる。頸部文様帶、頸体境の文様帶共に文様を持つ。

291は装飾の多い個体である。頸部には6条の沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下対向の匹字文」である。頸部直下は幅広の無文帶となる。頸体境には6条の沈線が引かれる。上端の2本の隆線で「下向きの匹字文」が推定6単位作り出される。頸体境の最大径を図る箇所には、山形突起2を横にしたような突起とその間の平坦部が推定6単位作り出される。突起間に沈線が引かれる。この突起状のものと匹字文は同じ箇所につくられる。下端の2条の隆線は欠損のため文様を描くものか不明である。体部はL R単節繩文の横位回転である。体部はかなり薄手に作り出される。

293は大部分が欠損により不明であるが、頸体境に4条の沈線が引かれ、「上下交互の四字文」を描くと思われるものである。体部はLR単節縄文の横位回転である。赤彩される。

294は頸部の破片資料である。頸部文様に「変形四字文」の基本単位文を描き、斜行沈線は失われている。基本単位文はお互いが接して、新たな文様効果を生み出している。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。

295は極小さな破片資料であるが、図上復元した。図上復元に当たりやや口径・底径が大きくなつたようである。頸部には6条の沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。中央の3条の隆線が接して四字状のモチーフを描くが、浮線文に良くみられるメガネ状のモチーフにも似ている。ただし隆線手法によって描かれている。推定6単位である。頸部文様帶直下は無文である。頸体境文様帶は欠損により下部は不明だが、5条の平行沈線が確認できる。文様は推定6単位の「上下交互の四字文」である。

296～298は底部の破片資料である。

#### 浅鉢F3類：第159図299～303

浅鉢F類のうち、頸体境での屈曲後頸部が直立若しくは内傾しながら立ち上がるものの口縁部のみに文様を持つ。頸体境には1条の沈線のみが引かれ、文様は描かれない。頸部文様帶直下の無文帶はF1・F2類に比べて狭く感じる。

289は頸体境で屈曲せず、そのまま直立する個体で箱型を呈する。頸部に4条の平行沈線を引き、推定6単位の「上下交互の四字文」が描かれる。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。頸部文様帶直下は幅広の無文帶である。頸体境に1条の沈線が引かれる。体部はLR単節縄文を横位回転している。

300は頸体境で屈曲せず、そのまま直立する。頸体境より上部の幅がかなり広い。頸部に「変形四字文」を推定6単位描く。沈線は良く磨かれるが、磨滅している。沈線はかなり蛇行しており稚拙である。最下端の沈線の下にさらに沈線があるようだが、稜と化している。頸体境には1条の沈線が引かれる。体部はRL単節縄文を横位回転している。

301は体部上位で屈曲後、内傾しながら立ち上がるものである。頸部には2条の平行沈線が見られるが、大部分を欠損しており、文様の有無を含めて不明である。頸体境に1条の沈線が引かれる。底部はLR単節縄文を横位回転する。

302は頸体境で弱く屈曲し、その後内傾気味に立ち上がる。頸部には3条の沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「下向きの四字文」で推定6単位である。頸体境に1条の沈線が引かれるが、ほとんど段と化している。頸部直下は無文で、体部にはRL単節縄文が横位回転される。赤彩される。

303は体部上位で屈曲後、内傾しながら立ち上がり、口端が外に張り出す。器形は301に似る。頸部には5条の沈線が引かれる。沈線は良く磨かれる。2・3条目の隆線が「下向きの四字文」を描く。6単位だが、実測図中央では四字文が二つ並んでいる。この部分のみが異なる。頸部直下は無文で、頸体境に1条の沈線が引かれる。体部にはLR単節縄文が横位回転される。

#### (2)鉢：第160図304・307・308

口径と器高がほぼ同じものを鉢とした。

#### 鉢A類：第160図307

底部から直線的に立ち上がり、逆台形状を呈するもの。307のみの出土である。

307はかなり小型の個体である。実測図では良くわからないが、実測図中央には山形突起1が付く。拓本の中央にあるのがそれである。口内には沈線が1条回周する。頸部は3条の極細い平行沈線が引かれる。沈線手法と理解した。文様は確認できない。体部は無文で良く磨かれる。体部直上には1条の沈線が回周する。

#### 鉢B類：第160図304

底部から湾曲しながら立ち上がり、円柱状を呈するもの。酒樽に似る。304のみである。

304はほぼ完形品である。口縁部形態は平縁で突起はつかない。文様は頸部、体部中位、底部直上の3段に描かれる。頸部は9条の平行沈線が引かれる。文様は4単位で、上下に2分できる。最上段は「変形匹字文」の基本単位文と「下向きの匹字文」が交互に描かれる。下段は「変形匹字文」の基本単位文が折り返し、「上下対向の匹字文」と結合している。また基本単位文の接点には半截竹管による刺突痕が存在する。体部中位には8条の平行沈線が引かれ、文様は頸部と同様である。底部直上には8条の並行沈線が引かれ、「上向きの匹字文」の下に「下向きの匹字文」が引かれる。実測図には欠損部分が描かれた結果この文様が存在しないが、拓本を見てもらうと理解できるであろう。3段の文様は全て同じ部分に描かれ、4単位となっていて。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。304の内部には漆の皮膜などの残存が見られ、漆を貯蔵する鉢として利用されたようである。

#### 鉢C類：第160図308

全面無文の粗製の鉢である。308のみである。底部欠損のため器形全体を窺うことはできないが、鉢と判断した。口縁形態は平縁で、体部は無文でよく磨かれる。

### (3)壺：第160図：305・306・309～第164図417

底部から直線的もしくは内湾気味に立ち上がり、体部上半ですばまる。その後頸部が直立儀もしくは外傾気味に立ち上がり口縁部にいたる。口縁形態は平縁か山形突起1が主となる。

#### 壺A類：第160図305・306・309～第162図384

大型の壺で、文様帶が頸部上端と体部上端（肩部）に描かれるもの。文様は平行沈線によるもので、沈線は良く磨かれる。基本的に隆線手法による。文様体の位置により細分し、さらに口縁形態で細分した。

#### 壺A1類：第160図305・306・309～第162図369

壺A類のうち、肩部の文様が主文様となり、頸部文様帶が平行沈線のみのもの。口縁形態が平縁のものと山形突起1のもので細分した。

#### 壺A1a類：第161図311～327

壺A1類のうち、口縁形態が平縁のものである。

全て破片資料で全形の窺えるものはない。口端の形状が丸棒状を呈するものを平縁と判断し

た。頸部文様は2条の沈線が引かれるものがほとんどであるが、中には1条のものもある。頸部のみでは判断が困難なため、口縁部資料のみ抽出した。

壺A 1 b類：第160図305・306・309・310・第161図328～第162図369

壺A 1類のうち、口縁形態が山形突起Iのもの。

305は小破片だったが、図上復元した。頸部には2条平行沈線が引かれる。沈線内部には棒状工具の刺突痕のようなものが連続的に見られる。肩部文様帶は下半が不明であるが、「変形匹字文」の基本単位文もしくは「上下対向の匹字文」の一部が確認できる。おそらく後者と思われる。肩部以下は欠損により不明である。

306も小破片だったが、図上復元した。頸部には2条の平行沈線が引かれる。肩部は極一部しか残存しないが、「上下対向の匹字文」が確認できる。体部はLR単節繩文を横位回転する。

309はかなり大型の個体である。頸部には2条の平行沈線が引かれ、肩部には7条の平行沈線が引かれ、「上下対向の匹字文」が推定6単位描かれる。3条目と6条目の沈線間に棒状工具による刺突痕が見られる。体部はLR単節繩文を横位回転する。

310もかなり大型の個体である。頸部には2条の平行沈線が引かれる。肩部は推定6単位の「上下対向の匹字文」が描かれる。体部は上半がLR単節繩文を横位回転し、中位以下はLR単節繩文を斜位に回転させ、条が水平に見える。

328～369は破片資料である。口端に山形突起Iが確認できないものでも、口端沈線が確認できるものについては本類に入れた。ほとんどが頸部に2条の平行沈線を引くが、中には1条のものも存在する。またほとんどのものが沈線を良く磨き、隆線手法によっている。沈線手法のものは338・343である。

343は破片資料では全形が判然としないが、壺の口縁部と判断した。沈線は極細く、文様の施文技法は沈線手法である。北柳1遺跡の報告書では判断できなかったものである。

359～369は壺A 1類の体部の破片資料である。

367は拓影図では不明であるが、実物は4条目の沈線内に棒状工具による刺突痕が連続して施文される。古い技法に属するものか。

壺A 2類：第162図370～384

壺A 2類のうち、頸部文様帶が主文様となり、肩部が平行沈線のみのもの。口縁形態が平縁のものと山形突起Iのもので細分した。

壺A 2 a類：第162図370～374

壺A 2類のうち、口縁形態が平縁のもの。

370は小破片だが図上復元したものである。頸部には5条の平行沈線が引かれ、沈線間は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定6単位の「上下交互の匹字文」である。肩部には1条の沈線が引かれるのみである。体部はLR単節繩文を横位回転する。

371はやはり小破片で、図上復元したものの器形がうまく復元できていない。頸部には2条の平行沈線が引かれ、文様は確認できない。ただし肩部文様が1条の平行沈線のみである事から本類とした。体部にはLR単節繩文が斜位に回転押捺される。

**壺A 2 b 類：第162図374～384**

壺A 2類のうち、口縁形態が山形突起1のもの。

全て破片資料である。

**壺B 類：第163図385**

385のみの出土である。底部から球形を描きながら立ち上がり、体部中位に最大径を持つ。肩部で屈曲後強く立ち上がる。頸部は幅の狭い無文帶となる。実測図では口端を欠損しているよう見えるが、口端は存在しており、断面図に表している。文様帶は肩部から体部下位に及ぶ。上端に1条、下端に2条の区画沈線が引かれ、その間に4段の横長扁平の楕円形モチーフが描かれる。推定3単位である。それぞれ外周をなす区画沈線と、その間に引かれる2条の平行沈線からなる。楕円形モチーフの上下の沈線は水平である。沈線は浅く、明確な隆線手法とはいえない。ただし沈線手法のように隆線部が大きくなるわけでもなく、隆線手法と理解した。体部下半は無文である。胎土に海綿骨針を含む。

**壺C 類：第163図386**

底部から内湾気味に強く立ち上がり、体部上位で強く内湾する。その後首の長い頸部が垂直に立ち上がり口縁部にいたると推測されるもの。386のみの出土である。

386は頸部が欠損により不明であるが、おそらく無文の長頸壺と推測される。体部は2段の文様帶を持つ。体部上半には上下に区画沈線が引かれ、内部には「変形匹字文」の基本単位文のような文様の一部が確認できる。上半の文様帶は大部分を欠損しており、詳細は不明である。体部下半には矢羽状沈線が引かれる。沈線は良く磨かれ、隆線手法をとっている。体部下半の矢羽状沈線は、本遺跡では客体的で数個体にしか確認できない。胎土に海綿骨針を含む。

**壺D 類：第163図387～402**

体部頸部とも無文の壺を一括した。

**壺D 1 類：第163図387・388・391・392**

壺D類のうち、全面無文の小壺を本類とした。完形品はなく判然としないが、文様は認められない。口縁形態は平縁のものばかりである。どちらかといえば粗製の壺といえよう。

**壺D 2 類：第163図389・390・393・394**

壺D類のうち、全面無文の小型の壺で、頸部に文様を持つもの。頸部に1条から3条の平行沈線を引き、沈線間に縦に連続する隆線を2条加えることによって文様を描いている。全て小破片で単位数は不明である。体部資料と思われるものが393である。393は頸部を欠損しており上半は不明だが、おそらく上記の頸部がつくものと推測している。体部は全面無文で良く磨かれている。体部上位に最大径を持ち、強く内湾する。肩部には文様はみられない。

**壺D 3 類：第163図395～397・399～401**

壺D類のうち、全面無文の大型の壺で、肩部に文様帶を持つもの。全て破片資料で全形は不明である。頸部は強く外傾するようである。399は肩部に2条の平行沈線が引かれるが、沈線は稜と化し、1条の隆線が強く突出している。文様は不明である。

**壺D 4 類：第163図398・402**

壺D類のうち、全面無文の大型の壺で、体部中位に最大径を持つもの。

壺E類：第164図403～417

体部に縄文を施文する壺を一括した。

412は体部中位以下を欠損する。口縁形態は小波状で、頸部に幅広の無文帯を持つ。粗製の深鉢の形態に似る。頸部直下に結節をもち、体部にはL R 単節縄文を横位回転する。体部中位にも結節が何段か施文される。

壺E 1類：第164図403

縄文施文の小型壺である。403は体部にL R 単節縄文を横位回転している。頸部で屈曲し、幅広の無文帯を持つ。口端には山形突起Iがつく。

壺E 2類：第164図404

縄文施文の小型つばである。404のみの出土である。底部から直に短く立ち上がり、体部上位で強く内湾する。頸部欠損のため不明だが、おそらく長い頸がつくと推測される。

壺E 3類：第164図405～412・414～417

縄文施文の大型壺である。底部から直上に立ち上がるものの(405・406)と、底部から強く膨らみながら体部上位で強く内湾するもの(412・414～417)がある。共に体部上位で屈曲し、頸部には幅広の無文帯を持つ。後述の粗製の深鉢といつても良いが、肩部での屈曲が強いことから粗製の壺として分類した。口縁形態は基本的には小波状を呈するものが多い(412・414～417)。他に平縁のもの(406)がある。405は頸部が僅かしか残らないが、口縁形態は、山形突起Iではなく、小波状と考えたい。414は傾きに問題がある。頸部に1条の沈線と結節が確認できる。

壺底部資料：第164図407～411

(4) 深鉢：第165図418～第182図744

口径よりも器高の大きいものを深鉢とした。

深鉢A類：第165図418～第166図426・428～第167図465

精製の深鉢で頸部に文様を持つもの。頸部の屈曲の度合いにより細分した。

深鉢A 1類：第165図418～第166図426・428～448・450～461

底部から直線的に立ち上がり体部上位に最大径を持つ。そのまま頸部に至る。口端で外反する。頸部には幅広の無文帯が存在する。体部には縄文が施文される。口内には沈線が巡るがほとんどの段もしくは稜と化している。口縁形態により細分した。427は分類ミスで浅鉢Dか。

深鉢A 1 a類：第165図418・第166図426・432・436～438・442・448

深鉢A 1類のうち、平縁のものを一括した。破片資料ではa類かb類か判然としないが、口端の断面形が丸棒状のものをa類と判断した。

418は口縁形態が平縁である。頸部には幅広の無文帯があり、その下に5条の沈線が引かれる。上端の区画沈線は無文帯を作り出す際に失われたものかほとんどわからない。沈線は良く磨かれる。隆線手法による。文様は推定4単位の「上向きの匹字文」である。体部にはL R 単

節縄文が横位回転される。

426・432・436～438・442・448は口縁部の破片資料である。

深鉢 A 1 b 類：第165図419～425・第166図428～431・433～435・439～441・445～448・450～461・第167図465

深鉢 A 1 類のうち、山形突起 2 のつくものを一括した。

419は底部から砲弾型に立ち上がり、体部上位に最大径を持つ。そのまま頸部に至り、頸部には 4 条の平行沈線が引かれる。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。文様は「上下交互の匹字文」だが、拓本中央と左端には「上向きの匹字文」が連続して描かれている。単位数は推定 6 単位である。文様帶上端の区画沈線は口縁直下の無文帶によりほとんど失われている。口縁直下の無文帶は他のものに比べて狭い。口端は直立する。口端の山形突起 2 は文様の位置とずれている。体部には L R 単節縄文が施文されるが、上位は横位に、中位以下は斜位に回転押捺される。

420は最大径が体部中位にある個体である。頸部には 4 条の沈線が控えるが、最上段の沈線は失われている。口縁直下の無文帶は強く外反し幅は広い。体部には L R 単節縄文が施文されるが、上位は横位に、中位以下は斜位に回転押捺される。胎土に海綿骨針を含む。

421は比較的垂直に立ち上がり、口縁直下の無文帶で屈曲して直上若しくは外反しながら立ち上がる。頸部には 4 条の平行沈線が引かれ、6 単位の「上下対向の匹字文」が描かれる。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。上端の区画沈線は失われほとんど稜と化している。下端の区画沈線は存在せず、下の匹字文は直接体部に接続する。口縁直下の無文帶は比較的幅広である。口端の山形突起 2 は、突起がほとんど目立たない。突起間の平坦部があることからかろうじて突起と判別できる。体部には L R 単節縄文が施文され、上位は横位に、中位以下は斜位に回転押捺される。

422は比較的大型の深鉢である。器形は421に似る。底部から垂直に立ち上がり、体部上位が最大径となる。頸部には 6 条の沈線が引かれる沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は推定 6 単位の「上下対向の匹字文」である。上端の区画沈線は口縁直下の無文帶によってほとんど稜と化している。口縁直下の無文帶はかなり幅広である。体部には L R 単節縄文が施文され、体部上位から斜位に回転押捺されている。

423は小型の深鉢である。頸部には 5 条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は 5 単位もしくは 6 単位の「上下交互の匹字文」である。上端の区画沈線は、口縁直下の無文帶によってほとんど稜と化している。口縁直下の無文帶は狭い。体部には L R 単節縄文が横位回転されている。

424は頸部に 6 条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「上下対向の匹字文」で、推定 6 単位である。上端の区画沈線は口縁直下の無文帶により稜と化している。下端の区画沈線は失われ、匹字文が直接体部と接する。体部は L R 単節縄文を斜位に回転押捺する。

425は体部のふくらみがほとんどなく、直線的に立ち上がるるものである。頸部には 6 条の平

行沈線が引かれる。文様は5単位もしくは6単位の「上下対向の四字文」が描かれるが、沈線は蛇行し文様が歪んでいる。口縁直下の無文帯はやや狭い。体部にはLR単節繩文が横位もしくは斜位に回転押捺される。

464は頸部に7条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「上下対向の四字文」である。単位数は不明である。上端の区画沈線は口縁直下の無文帯によって稜と化している。口縁直下の無文帯は狭い。体部にはLR単節繩文が横位回転される。胎土に海綿骨針を含む。

425・428～431・433～435・439～441・445～448・450～462は破片資料である。特記すべき3点について述べる。447は頸部の文様が異質である。上下に三角状のモチーフが底辺に向かい合わせに対向しているように見える。このような文様はこの1点のみである。448は頸部に4条の沈線が認められるが、沈線は極細く、磨きも丁寧ではない。拓本左端に文様のようなものがみえるが、判然としない。「下向きの四字文」に似る。隆線手法というより粗製的印象が強い。あるいは沈線手法というべきか。455は明らかに沈線手法によって文様が描かれる。沈線は極細い。上下端の区画沈線内に「変形四字文」の基本単位文の一部と斜行沈線が見える。斜行沈線が1条となっている点や四字文と結合していない点など特異な点が指摘できる。「変形四字文」の沈線手法によるものと考えているが、数量が少なく時期差があるのかなど詳細な点については不明である。

#### 深鉢A 2類：第166図449・第167図462・463

深鉢A類のうち、頸部で強く屈曲するもの。深鉢A 1類が口縁直下の無文帯と文様帯の境界で屈曲するが、A 2類は頸部文様帯中位で屈曲する。平縁のもの（449）と山形突起2のもの（462・463）がある。著しい相違点は口縁直下の幅広の無文帯の有無である。

449は破片資料である。頸部に6条の沈線が引かれる。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。屈曲部は頸体境にあり、頸部は直立もしくは微妙に外傾する。頸部には6条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。平行沈線のみなのか文様があるのかは不明である。口縁直下の無文帯は存在しない。

462は頸部の上下に区画沈線を引き、その間に「変形四字文」の基本単位文を描く。単位数は3単位である。斜行沈線は失われている。沈線は良く磨かれ、隆線手法である。口縁直下の無文帯は極狭く、存在しない。口縁部の山形突起2は基本単位文の位置とずれている。体部にはLR単節繩文が施され、体部上位は横位に、中位以下は斜位に回転押捺される。

463は頸部に7条の平行沈線が引かれ、沈線は良く磨かれる。隆線手法である。文様は「上下対向の四字文」で、推定6単位である。口縁直下の無文帯は存在しない。口端の山形突起2は文様単位数と一致する。体部にはLR単節繩文が体部上位から斜位に回転押捺される。

#### 深鉢A 3類：第167図465

深鉢A類のうち、頸部に平行沈線を持つものの、分類不能のものを一括した。

#### 深鉢B類：第167図466・467・469～第177図642

頸部で屈曲し、幅広の無文帯を持つ粗製の深鉢。口縁形態は小波状である。数量的に最も多

く、粗製深鉢の主体となる。おそらく本土器群に伴う粗製深鉢の特徴を示していると考えられる。また地域的な差については言及できないが、東北南部の大洞A式新段階もしくは大洞A'式古段階に属する粗製深鉢と考えられる。

#### 深鉢B 1類：第167図466～第176図616・618～620

深鉢B類のうち、頸部での屈曲後外反気味に立ち上がるもの。砲弾型を呈するものや底部から直線的に立ち上がるものなどがあるが、器形による違いは考慮しなかった。頸体境で括れ、頸部が直立するものや外傾するものがある。頸部は基本的に幅広の無文体である。断面形ではわからないものもあるが、口縁形態はほとんどが小波状を呈する。体部には繩文が施文されるが、その際体部上半は横位に、中位以下は斜位に回転押捺する場合が多くみられる。

#### 深鉢B 1a類：第167図466～467・469～第171図534

深鉢B 1類のうち、体部に単純な繩文のみを施文するもの。数量的に粗製土器の主体をなす。

510については補足をしておく。510は遺構の部分で説明できなかったが、A区の南西包含層から出土している。当該箇所は繩文時代後期・晚期の墓域の可能性が高い。510は出土状況が逆位で出土している。本土器も口縁部以外は欠損するか周囲に散らばり復元不能であった。新潟県の低湿地遺跡で有名な青田遺跡でも繩文時代晚期終末期の墓域から逆位の埋設土器が出土している。本例もその一つとも考えられる。

#### 深鉢B 1b類：第172図538・第173図539～563

深鉢B 1類のうち、頸部と体部の境界に1条の沈線を引くもの。単純な沈線をともなうものは極少量である。

#### 深鉢B 1c類：第172図535～537

深鉢B 1類のうち、頸部と体部の境界に1条の沈線を引き、その下に結節をともなう繩文を施文するもの。数量的には少ない。

#### 深鉢B 1d類：第174図564～第176図616

深鉢B 1類のうち、頸部と体部の境界に結節をともなう繩文を施文するもの。かなりの数量が認められる。

#### 深鉢B 2類：第176図617・621～626

深鉢B類のうち、頸部で強く屈曲し、無文帯が短く直に立ち上がるもの。

#### 深鉢B 3類：第177図627～635

深鉢B類のうち、口端に山形突起1のつくもの。数量は極少ない。

#### 深鉢B 4類：第177図636～642

深鉢B類のうち、1類から3類に該当しないものを一括した。

641は口縁直下に繩文帯をもち、繩文帯と体部の間は無文帯となる。1個体のみの出土である。

642は基本的に深鉢B 1b類であるが、口端に推定2単位の大型の装飾突起がつく。1個体のみの出土である。

#### 深鉢C類：第177図643～第178図666

粗製の深鉢のうち、頸部で括れず、底部から丸みを帯びて立ち上がり、砲弾型を呈するもの。口端は強く内湾し、平縁である。口端は指頭状のものでつまみ出され、先端が銳角になるものもある。数量的には極少ない。本土器群の主体をなす粗製深鉢ではない。叢入品もしくは他地域の粗製深鉢を模倣したものか、本土器群に伴う土器ながら主体的にはつくられない器形なのかは判断が難しい。ただし後述の深鉢D 2類のように条痕文を地文とするものもあるため、地域的な差と考えるべきか。

**深鉢C 1類：第177図643～第178図659**

深鉢C類のうち、口縁直下から縄文施文するもの。口端で強く内湾する。平縁である。本遺跡では客体的な深鉢である。

**深鉢C 2類：第178図660～666**

深鉢C類のうち、口縁直下に無文体を有するもの。ただし深鉢B類のように屈曲せず、無文帶も極狭い。

**深鉢D類：第178図667～第179図693**

深鉢のうち、体部文様に条痕文・撚糸文を施文するもの。本報告書では器形による分類を主としているため、地文による分類は一貫性がないが、施文される地文を重視して、敢えて本類を起こした。条痕文や撚糸文は東北地方の縄文時代晚期終末期の土器の地文ではなく、関東の浮線網状文を施文する土器群に特有の地文である。福島県などでは地文に条痕文や撚糸文を持つ土器が散見されるが、これまで山形での出土量は少なく、置賜地方が北限とされていた。米沢市の李代遺跡や飯豊町の数馬遺跡などがその例である。近年の発掘調査では山形市北部の北柳1遺跡から条痕文を体部に施文する粗製の深鉢の完形品が2個体出土している。2個体とも器形は異なるものの、頸部に幅広の無文帶を持ち口縁形態が小波状を呈するものである。本土器群でいう。深鉢B器形である。浮線網状文の影響が山形市北部までみられることが示す。なお本遺跡は北柳1遺跡の北方4kmの地点に位置する。

**深鉢D 1類：第178図675**

深鉢D類のうち、器形が深鉢B類のもの。体部地文が条痕文もしくは撚糸文で、頸部で括れ、口縁直下に幅広の無文帶を持つもの。口縁形態は小波状である。おそらく本土器群固有の粗製深鉢に浮線網状文の条痕文を施したものと推測される。ただし数量は1個体のみであるため、浮線網状文の影響が届かなくなっているのではないかと思われる。

**深鉢D 2類：第178図667～674・第179図676～693**

深鉢D類のうち、器形が深鉢C類のもの。体部地文が条痕文もしくは撚糸文で、底部から砲弾型に立ち上がり、口端で内湾するもの。口縁形態は平縁である。北柳1遺跡でも破片が10点程度出土している。本類が平縁・砲弾型の粗製深鉢の本来の姿かと推測している。

**深鉢底部資料：第180図694～第182図744**

### 3-3 遺物の分布

本土器群の出土位置を確認する。本土器群は基本的にA区北側のSG1より北側から出土している。稀にB区の遺構から出土している場合もあるが数は少ない。またA区南西包含層からもいくつか出土しているが、ここは墓域と推測され、主体的な出土状況ではない。

主な出土位置はA区北側の陸地の遺構及び集中域と旧河川跡沿いの土器捨て場である。A区北側の陸地からは、第42図に示したように本土器群以外に2群土器が出土している。ただし本群の土器との区別は容易であるため、問題はないであろう。また4群土器が出土しているが、これも区別が可能なため問題はない。以下に出土状況を挿図毎に簡略に説明する。

第37図は調査区北西角にあたる地点の出土状況である。A区北の西側の遺物包含層である。縮尺が小さく、かなり広い面積を一つにまとめてある。およそ3箇所の集中域に分けられるが、どれを見てもほぼ全ての類型の土器が出土しており、特別な偏りはみられない。

第38図は旧河川跡沿いの土器捨て場の西端である。この部分からは浅鉢130・台付浅鉢194・壺385など個性的な器形のものが出土している。ただし本土器群に一般的な類型も出土しており、文様などの面からみても大きな問題はない。浅鉢130は流水状のモチーフをもつが、北柳1遺跡でも同様の文様が出ている。また地域は異なるが青森県の剣吉荒町遺跡でも流水状モチーフの土器が出土しており、本土器群でよいだろう。また少し離れるがD8グリッドから117・118が出土している。これはおそらく次の型式である大洞A'式の土器片である。出土位置が離れており、分離は可能である。

第39図は旧河川跡沿いの土器捨て場の中央部にあたる。浅鉢C・Dなどの出土が多い。浅鉢295や234・238など文様にやや変化のあるものもみられるが、概ね偏りなく出土している。なお、図中の下端に掲載したST88出土の台付浅鉢192は問題がある資料である。ST88自体は図中のF11グリッドにあたる陸地に位置する。ただし最終的に遺構とは確認できなかった。口部装飾帯をもち本土器群から除外したい土器である。出土位置からすると本土器群の土器と共に伴関係にあることは否定できないが、こうした特徴をもつ土器はこの個体に限られる。どちらかといえば前型式の大洞A式の特徴といえる。遺跡は多かれ少なかれ前後の形式の土器が混入する可能性があり、同様の土器がないことを考えると、前形式に属する遺跡から本遺跡へ移動する際に搬入したものと考えられる。ただしこの土器のみの出土をとって本遺跡の単純性を否定することはできない。

第40図は旧河川跡沿いの土器捨て場の東端にあたる。やはり浅鉢の出土が多いが、粗製の深鉢などもみられ偏りはみられない。唯一G10グリッド出土の100の土器が特異である。小破片で全体は不明だが、沈線手法により「変形工地文」に似た文様を描く。土器捨て場の中央から出土しており、問題がある資料だが、流れ込みか共伴かは判断に迷うところである。

第41図は陸地のC12グリッド付近の出土状況である。遺構もみられるが、単体の土壙などである。ただし当初竪穴住居として掘り下げた部分でもあり、遺物の出土状況などをみれば円形の集中域がみられ、竪穴住居の可能性もある。鉢304などのように特殊な器形もみられるが、大きな偏りはなく、概ね本土器群の類型を網羅している。なお弥生土器1・4・8が出土して

いるが、この地点の北隣に弥生時代中期の土壙が存在しており、検出はできなかったが弥生時代の遺構が存在する可能性がある。

こうしてみるとA区北側は、地点による遺物の偏りはほとんどみられない。もちろん遺構と河跡の土器捨て場では傾向が異なるであろうが、どこをとってもほぼ同じ類型の土器が出土している。これを出土状況の偏りにより細分することは不可能である。同一時期の遺物と考えるほうが適切であろう。よって、本土器群の単純性は肯定されるであろう。

### 3-4 砂子田3群土器の編年的位置づけ

縄文時代晩期の土器については、まず山内清男が岩手県大船渡市の大洞貝塚の地点による遺物の違いから大洞B式から大洞A'式までの6段階の編年案を示した。晩期最終末期にあたるのが大洞A式・大洞A'式である。しかし後年大洞A式と大洞A'式の間に大洞A2式を設定したもの、型式内容と基準資料があいまいで研究者の間に混乱をもたらした。

その後大洞A2式の土器については鈴木正博氏が荒海貝塚出土の土器の検討を通じて再設定した。鈴木氏は荒海貝塚例と時期的に同じと考えられる土器として東北南部の福島県道平遺跡や宮城県梁瀬浦遺跡の出土土器を挙げ、これを大洞A2式の基準資料とした。鈴木氏が再設定した大洞A2式（以下区別のため「鈴木A2式」と呼称）と山内氏設定の大洞A2式が同一のものかどうかは不明だが、少なくとも当該土器群が一時期を画すことを明示した。

しかしこの鈴木説に対して異を唱えたのが中村五郎氏である。中村氏は同一の土器を大洞A'式と規定し、鈴木説を批判した。その根拠は山内氏が示した文様模式図中の大洞A'式の頸部文様と体部文様の合体の記述と、口部装飾帯の喪失である。

これまで当該土器群については検討を加えてきたが、それを踏まえて次の点を指摘したい。まず山内氏が示した大洞A'式の基準資料の変形工字文と同じ文様は本土器群には存在しない。山内氏提示の基準資料が東北地方北部のものであることを考えれば、地域差のある本土器群に同様の土器がないとする考え方もあるようが、これは地域差というよりも時期差を考えるべきである。次に口部装飾帯であるが、本土器群で口部装飾帯を持つものは192・413の2個体のみである。本土器は大洞A式まで存在する口部装飾帯がなく、山内氏提示の大洞A'式特有の変形工字文もない。よって本土器群は大洞A式でもなく、大洞A'式でもないことになる。青森県の剣吉荒町遺跡を検討した工藤竹久氏も同様の結論に達し、改めて剣吉荒町1群土器を提唱している。

### 3-5 砂子田3群の地域的広がり

本土器群の地域的な広がりを簡略に確認する。

山形県内で当該期の土器群が出土する遺跡は発掘調査の行われたもので白鷹町岡の台遺跡、山形市北柳1遺跡、寒河江市高瀬山遺跡、朝日村的場遺跡、河北町花ノ木遺跡、東根市蟹沢遺跡がある。これ以外に高畠町神立洞穴、新庄市中河原B遺跡などでも出土している。全体に山形県内では置賜地方北部より北に存在している。なお同時期の遺跡と考えられるが浮線網状文

の土器が出土している遺跡に、米沢市壹代遺跡、飯豊町数馬遺跡がある。

宮城県では、一迫町山王団遺跡、七ヶ浜町二月田遺跡、仙台市赤生津遺跡、石巻市沼津遺跡、柴田町鹿野遺跡、蔵王町鍛冶沢遺跡、角田市梁瀬浦遺跡、同鱸沼遺跡、同岩の入遺跡などがある。時期差のある遺跡もあるかもしれないが山形県内と宮城県ではほぼ同じ土器が存在することがわかる。

問題は北限と南限である。まず北限であるが、岩手県の南に位置する一関市の谷起島遺跡が資料としてまとまっている。また、東北大学で調査を行った岩手県花泉町中神遺跡からは層位的に区別されたかたちで出土しているが、上下の層で混在しているようである。これより以北となると土器の文様や器形が変化する。亀ヶ岡文化圏の中心である東北地方北部では中南部域と異なる部分があると思われる。同時期と考えられる東北地方北部の遺跡は数が少なく、青森県剣吉荒町遺跡が代表的な遺跡である。剣吉荒町遺跡については工藤竹久氏が包含層を2分し剣吉荒町1群土器と2群土器に分離している。砂子田3群土器と平行すると考えられるのが下層からより多く出土している剣吉荒町1群土器である。変形匹字文とほぼ同じ構図の文様が描かれるが細部が異なる。特に基本単位文の下端の匹字文が退化し、やや三角モチーフをとっている。また補助単位文である斜行沈線も大きく異なる。砂子田3群土器では斜行沈線は上下の匹字文と結合して大きな彫去をともなう。それに対して剣吉荒町1群土器の斜行沈線は単なる2本の沈線のみである。互いの文様に対する影響は認められるが同一のものとするには抵抗がある。

南限は山形県では置賜地方であるが、東北地方では福島県となろう。当該土器群が出土する代表的な遺跡に、靈山町靈山根古屋遺跡、同道平遺跡、羽白C遺跡などがある。福島県の土器の組成状況は浮線網状文の土器が主体的となるものと大洞式の土器が主体となる遺跡に分かれようである。あるいは福島県内の地域差によるのかかもしれないが、遺跡の分布まで検討する余裕がなかった。特に注目されるのが浮線網状文系の粗製土器の地文に撲糸文や条痕文が多用される点である。砂子田3群土器の粗製土器にも地文が条痕文のものが僅少であるが存在している。また宮城県南部ではやはり地文が撲糸文や条痕文であるものが存在し、浮線網状文の影響が認められる。

### 3-6 小結

最後に砂子田3群土器の土器編年上での意義および土器の特長について簡略にまとめる。

まずこれまでの検討から砂子田3群土器が単一の時間を占める土器群であることが明らかになった。時期的には大洞A式新段階から大洞A'式古段階の一時期である。ただし研究者により呼称が異なるという問題があり、そうした混乱を避けるうえでも本群土器を型式に昇格して「砂子田3式」と呼称することとする。東北地方南部における編年上の位置は大洞A式→砂子田3式→大洞A'式である。

次に土器の特長について記す。器種構成は浅鉢・鉢・台付き浅鉢・四脚付浅鉢・壺・深鉢である。特に浅鉢と深鉢が主体的で、台付浅鉢は少ない。注口土器は組成しないか存在しても数

は極めて少ない。浅鉢ではA類が多い。また本土器群の特徴であるが箱型を呈する浅鉢C・Dもかなり多い。また浅鉢Fも特徴的である。これらの浅鉢は大洞A式期には見られず、大洞A'式以降も残るようである。深鉢は精製と粗製の深鉢に分けられる。精製の深鉢はそれほど多くはない。最も多いのが粗製の深鉢であるB類である。頸部で括れ、幅広の無文帯を持つものである。一方砲弾型の深鉢C類は極めて少なく、本土器群固有の器種なのか疑問を感じる。

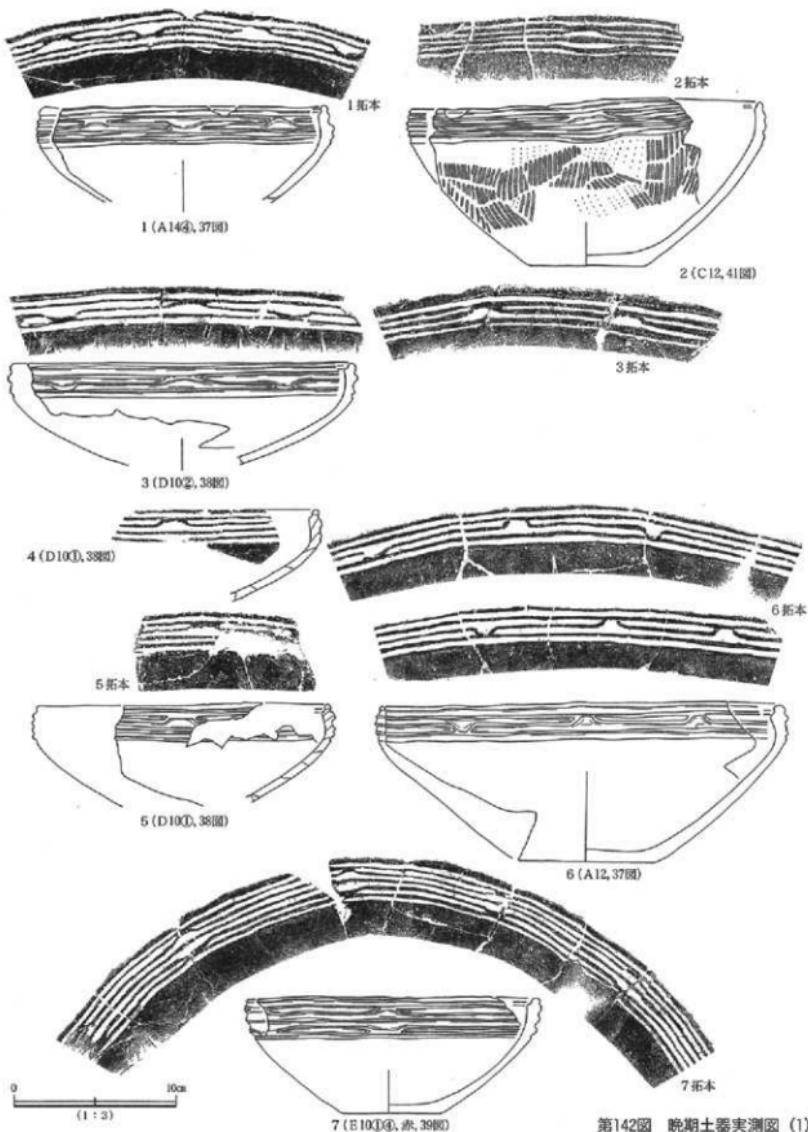
口縁形態は平縁のものと山形突起1・2の付くものがあるが、器種・器形によって突起の形状が決まっているようである。例えば浅鉢は平縁若しくは山形突起2が基本、壺は山形突起1が多い。精製深鉢は山形突起2がつく。粗製の深鉢は基本的に口縁形態が小波状を呈する。口端沈線は平縁のものにはつかず、全て山形突起にともなうものである。口内沈線は精製土器については全てにつく。底部直上の沈線は浅鉢C・D・Fや精製の壺につく。

文様は精製土器の頸部に平行沈線によって描かれ、匝文字や変形匝文字が施文される。いわゆる口部文様帶は存在しない。沈線は良く磨かれ、隆線手法によって文様が描かれる。中には沈線手法によって描かれるものもあるが、極少ない。地文は基本的にはL RもしくはR Lの単節繩文を回転押捺したものである。量的にはL Rが主体的である。なかには結節をもつものも良く見られる。大抵は頸部直下に施文されるが、体部に数段施文されるものもある。回転押捺の方向は体部上位では横位回転だが、体部中位以下では斜位回転されるものが良くみられる。結果体部中位以下では繩文の条が横を向く。なお地文に撚糸文や条痕文を施すものも極僅かだが見ることができる。ただし本土器群にともなう地文ではない。

胎土はよくしまり、小砂礫・石英を混入する。また海綿骨針を混入するものも多く見られる。後期の土器群では海綿骨針を含むものはほぼ絶無であり、砂子田3群土器の胎土が如何に選択的であるか理解できよう。また、海綿骨針の胎土への混入は、時期差をあらわすだけではなく、地域差をあらわす可能性もある。なお海綿骨針を含む土器片は、器面が非常にザラつき、手触りのみでもほぼ分別可能な程である。

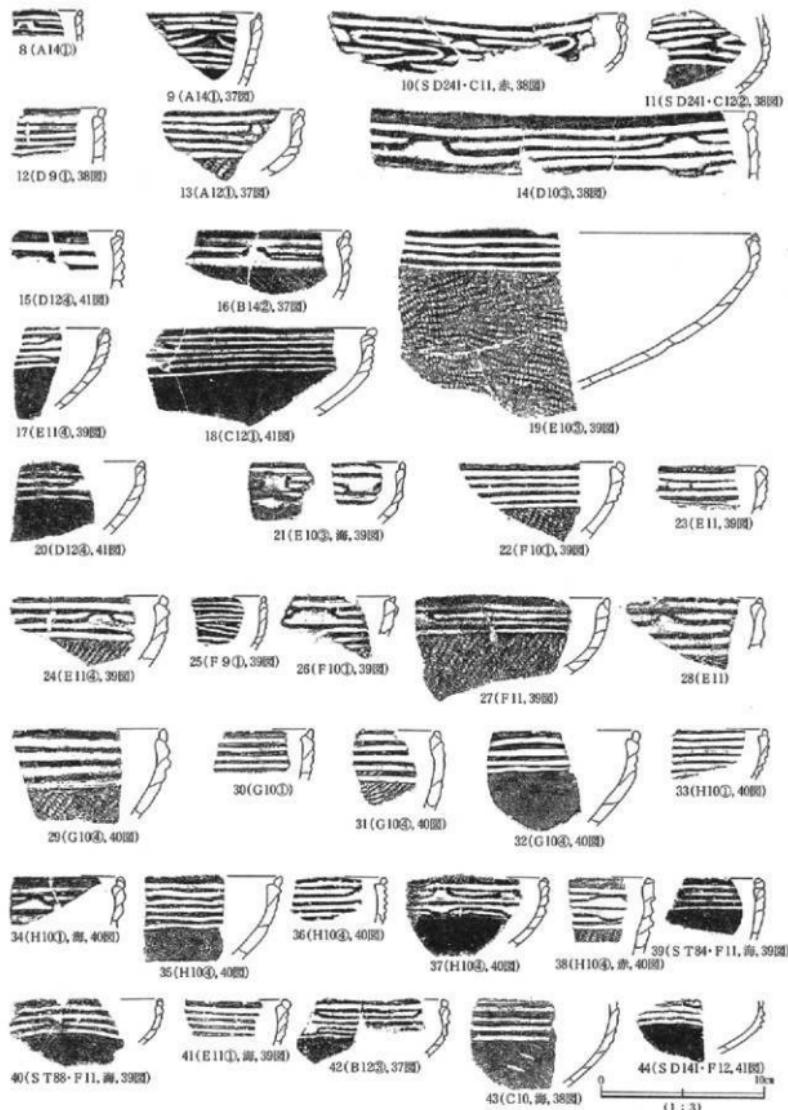
こうした特色を持つ砂子田3群土器は極めて齊一性が高く、他の時期の混入がほとんど認められない。よってA区北側については単純地点といえる。東北地方中南部における繩文時代晚期最終末期の土器編年を研究する上での基準資料のひとつと評価できる。

なお、紙幅の関係で詳しく述べることができなかったが、東北大学の調査による宮城県一迫町山王廻遺跡及び岩手県花泉町中神遺跡の層位的な出土例については、本土器群の単純性を鑑み再検討の必要があるのではないかと考えている。

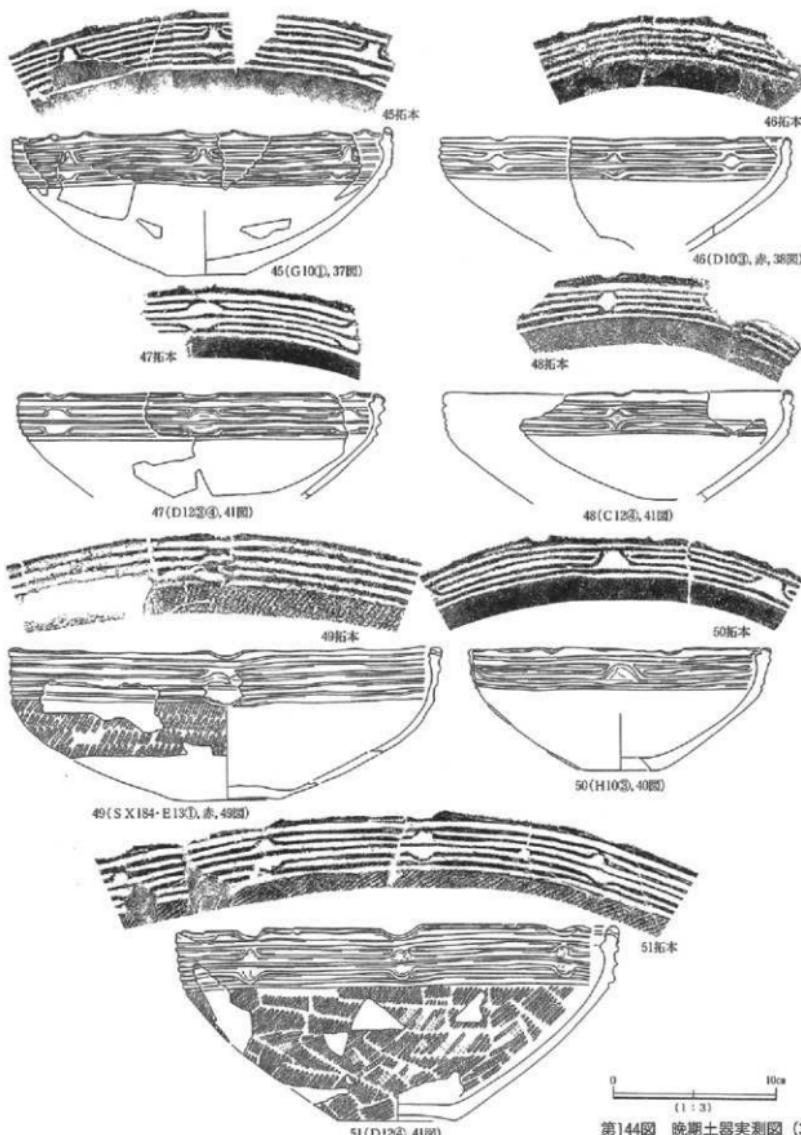


第142図 晩期土器実測図 (1)

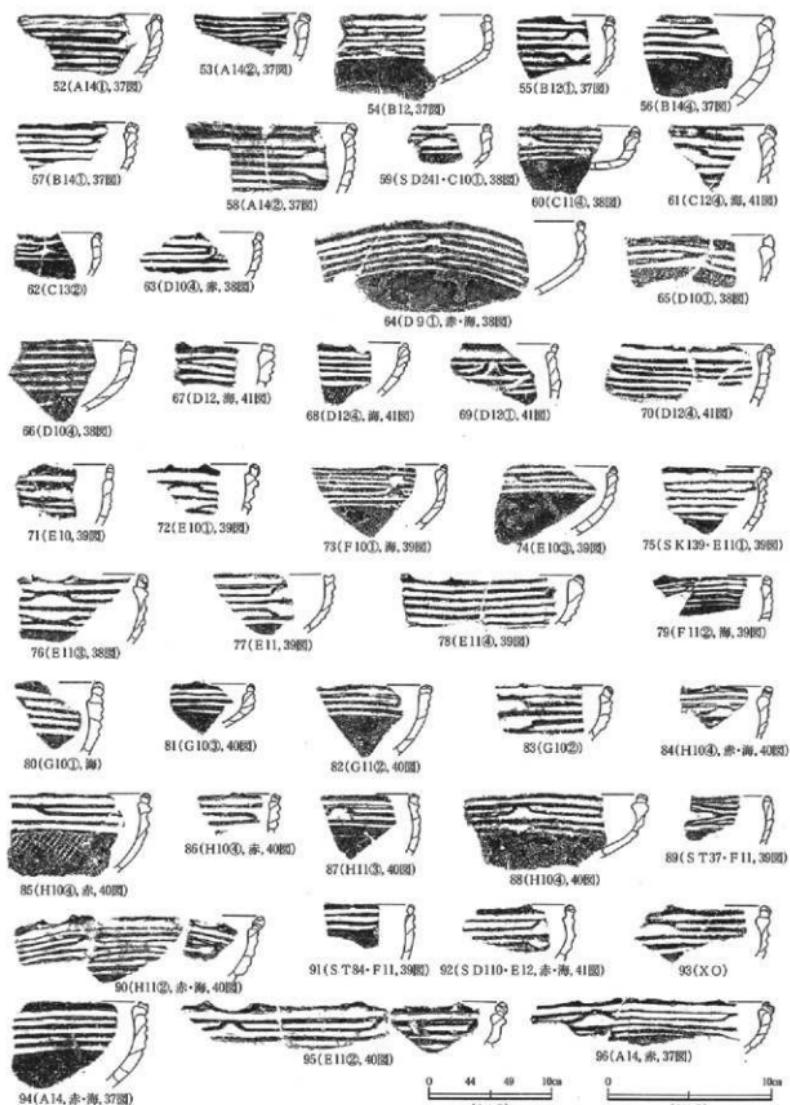
出土した遺物



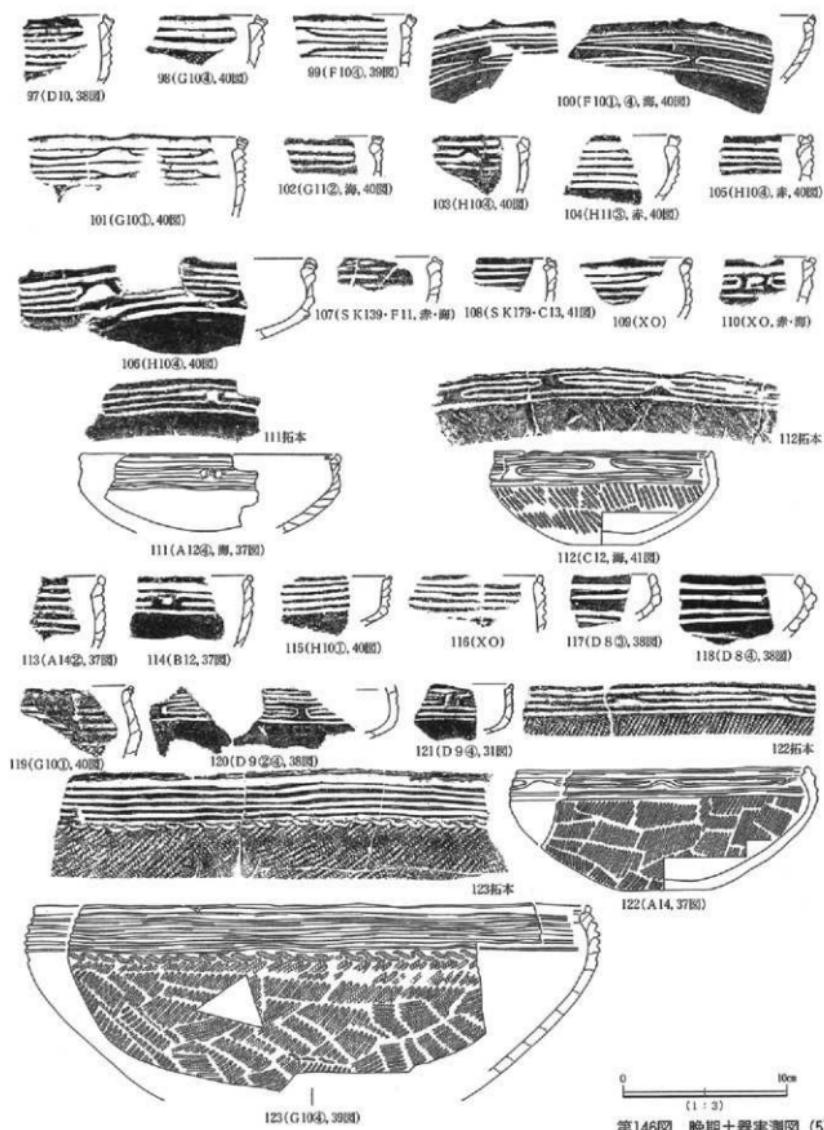
第143図 晩期土器実測図 (2)



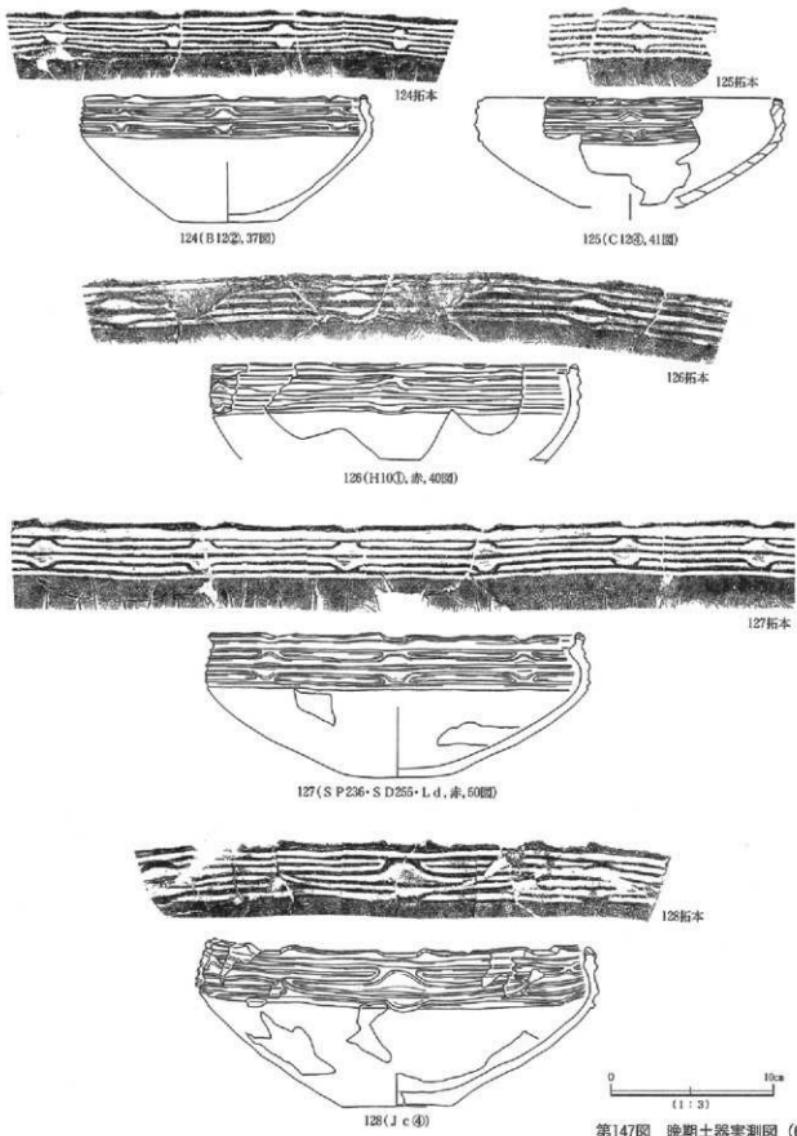
第144図 晩期土器実測図 (3)



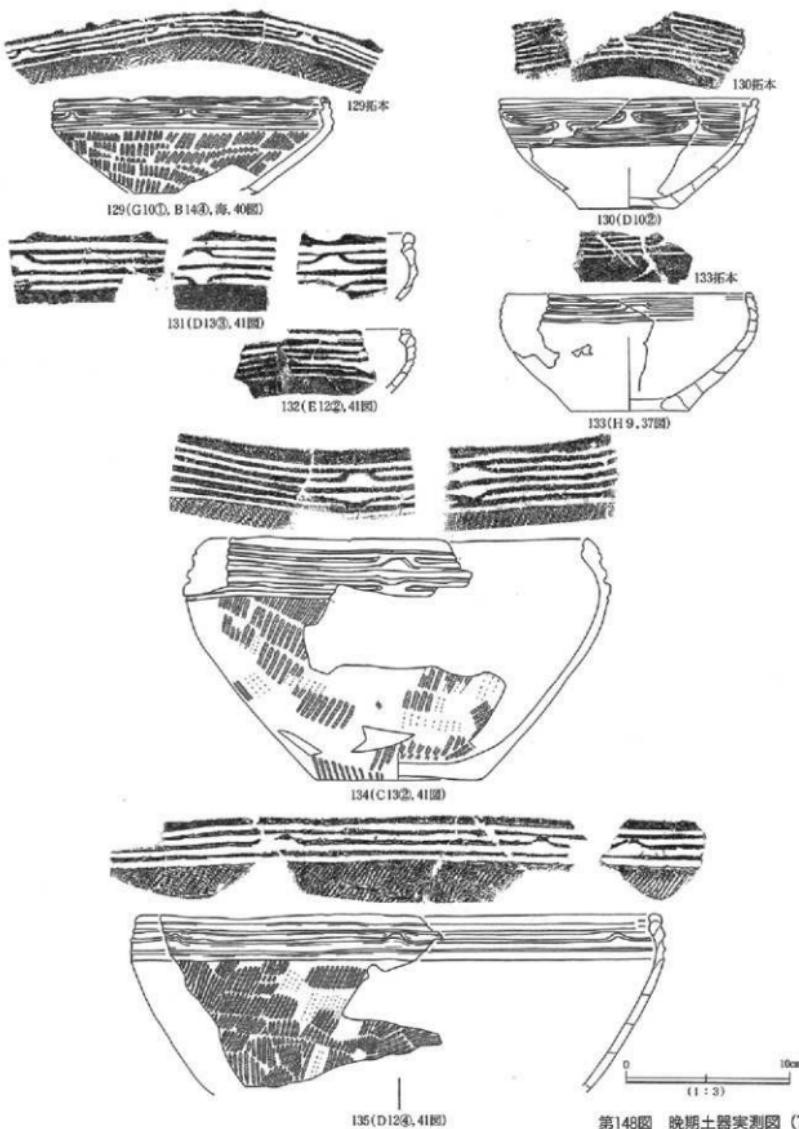
第145図 晩期土器実測図 (4)



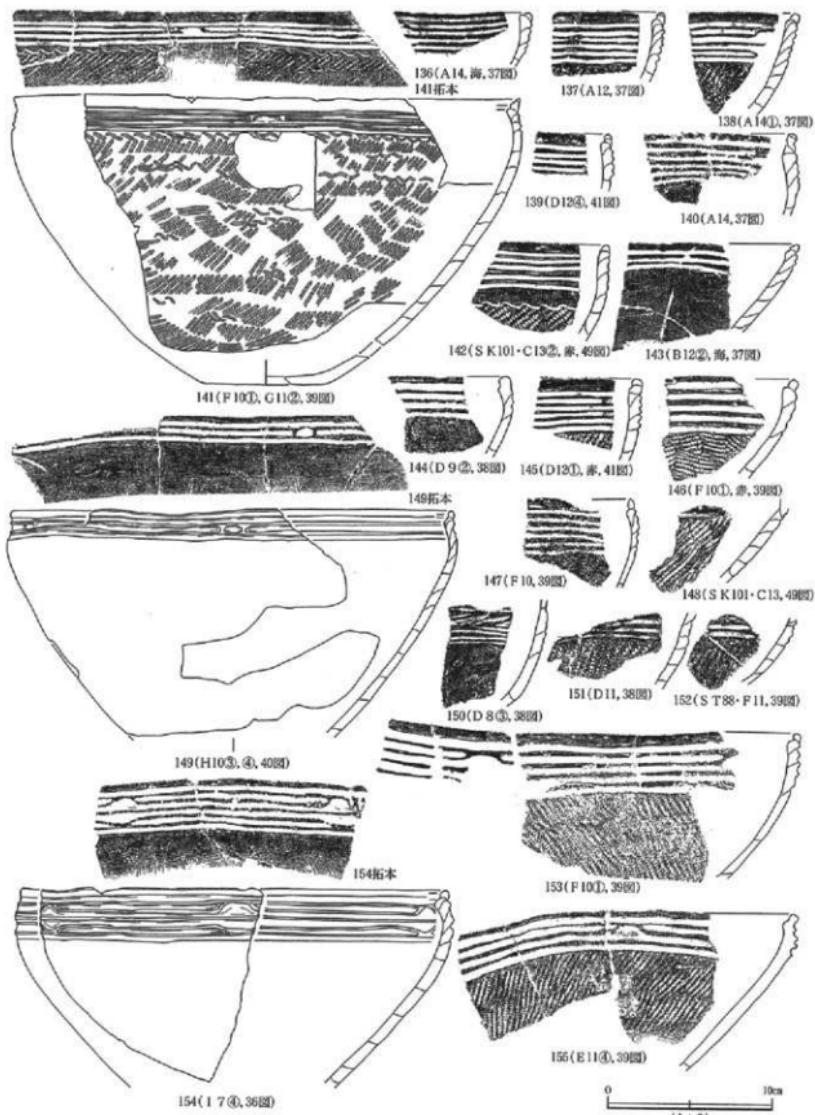
第146図 晩期土器実測図 (5)



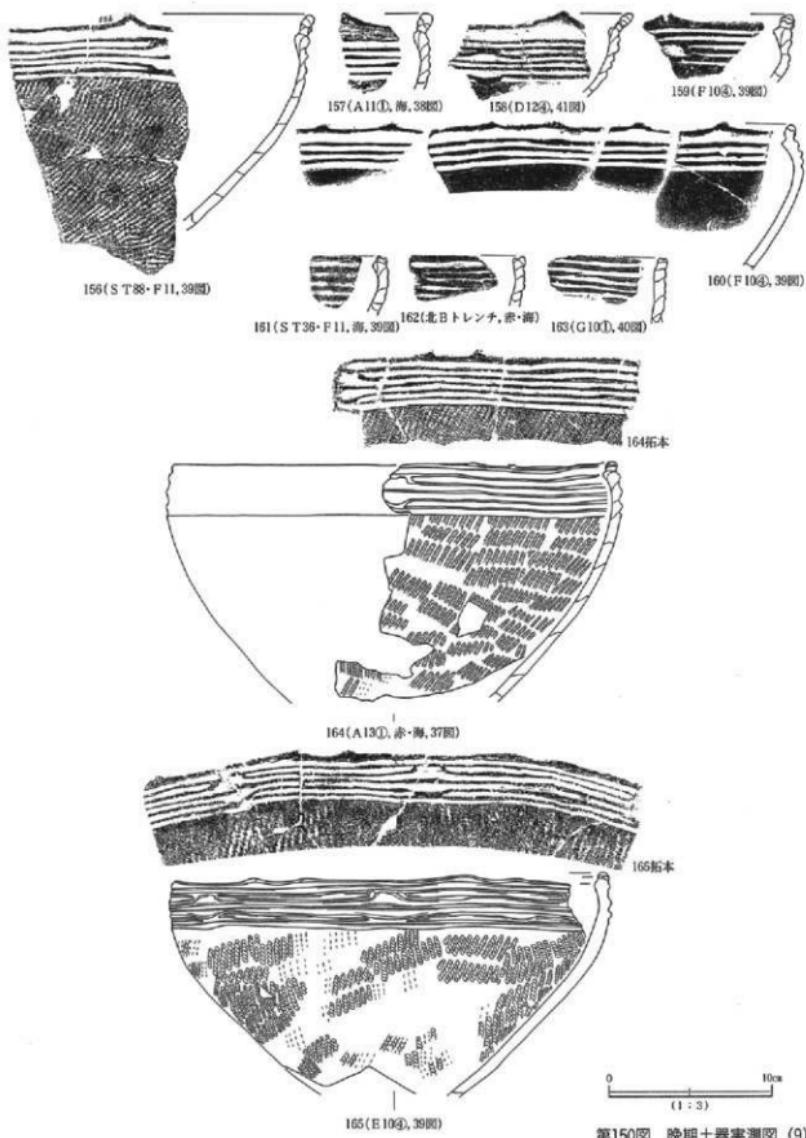
第147図 晩期土器実測図 (6)



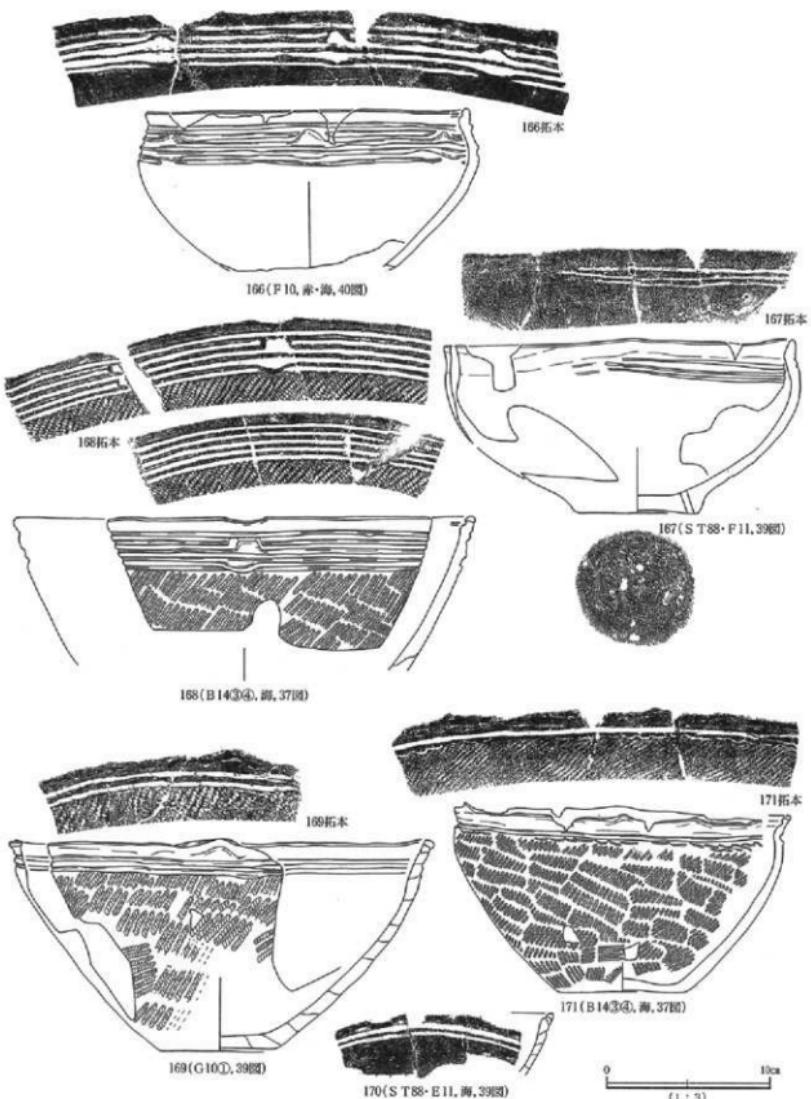
第148図 晩期土器実測図 (7)



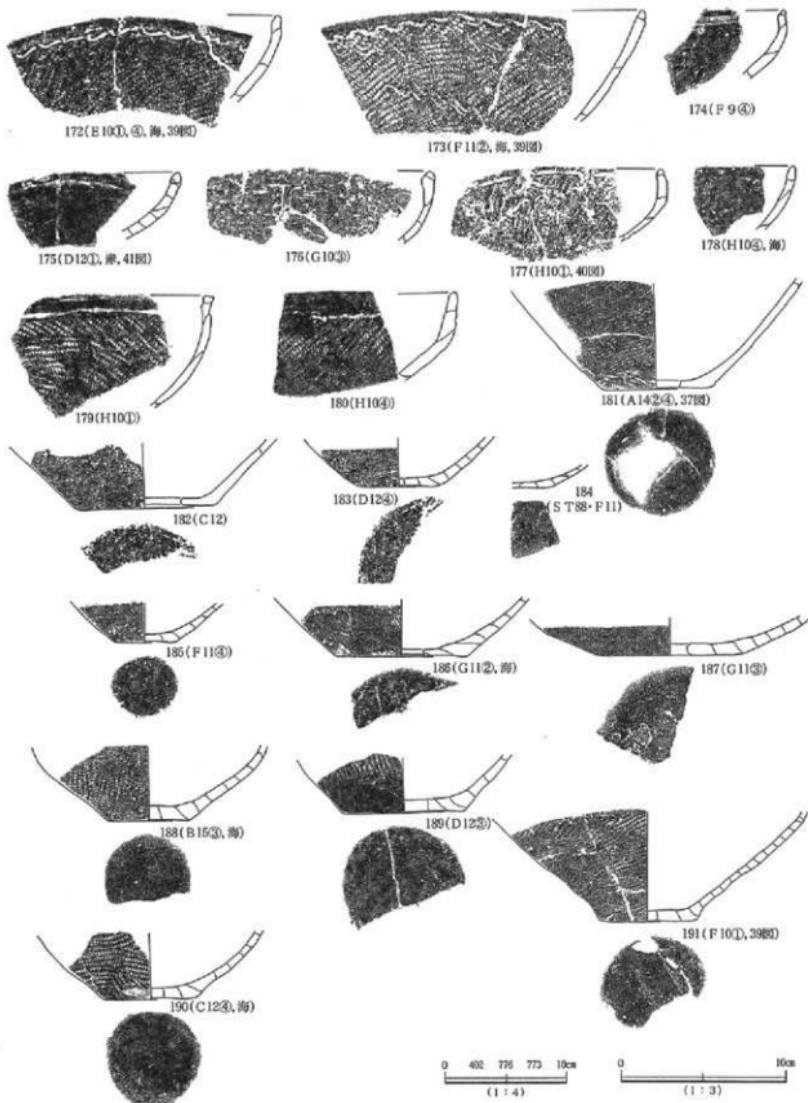
第149図 晩期土器実測図 (8)



第150図 晩期土器実測図 (9)

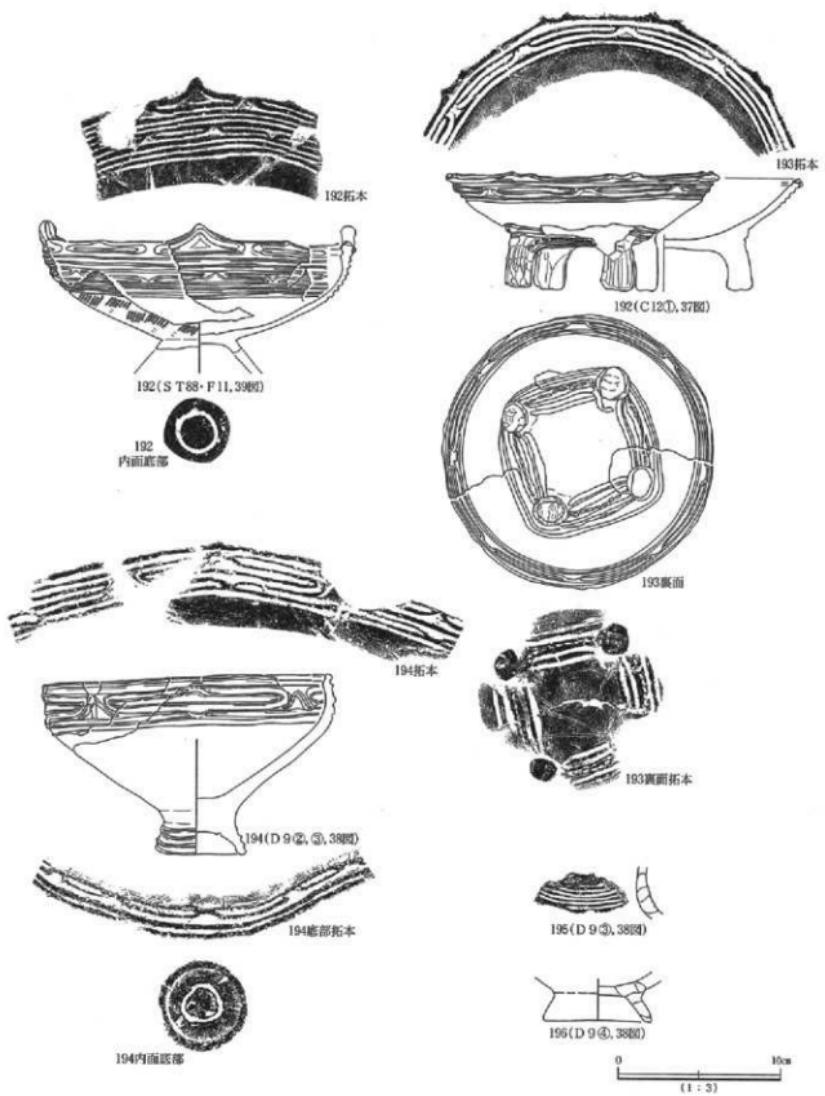


第151図 晩期土器実測図 (10)

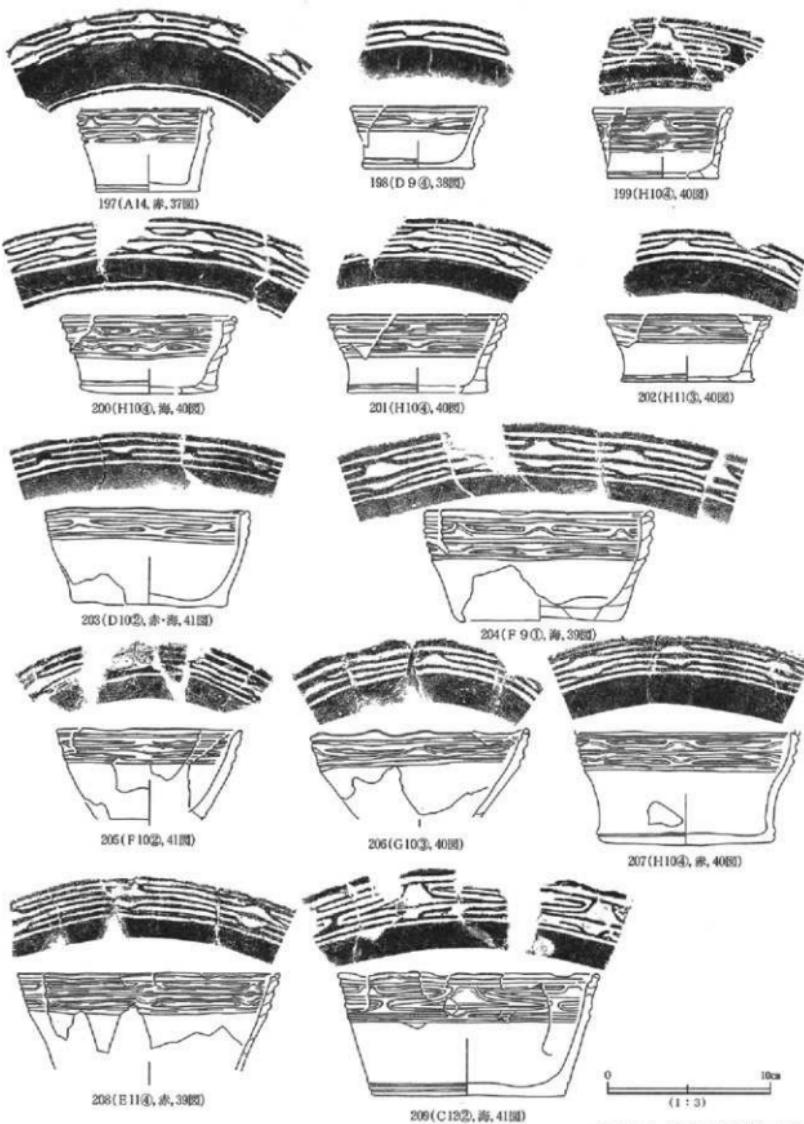


第152図 晩期土器実測図 (11)

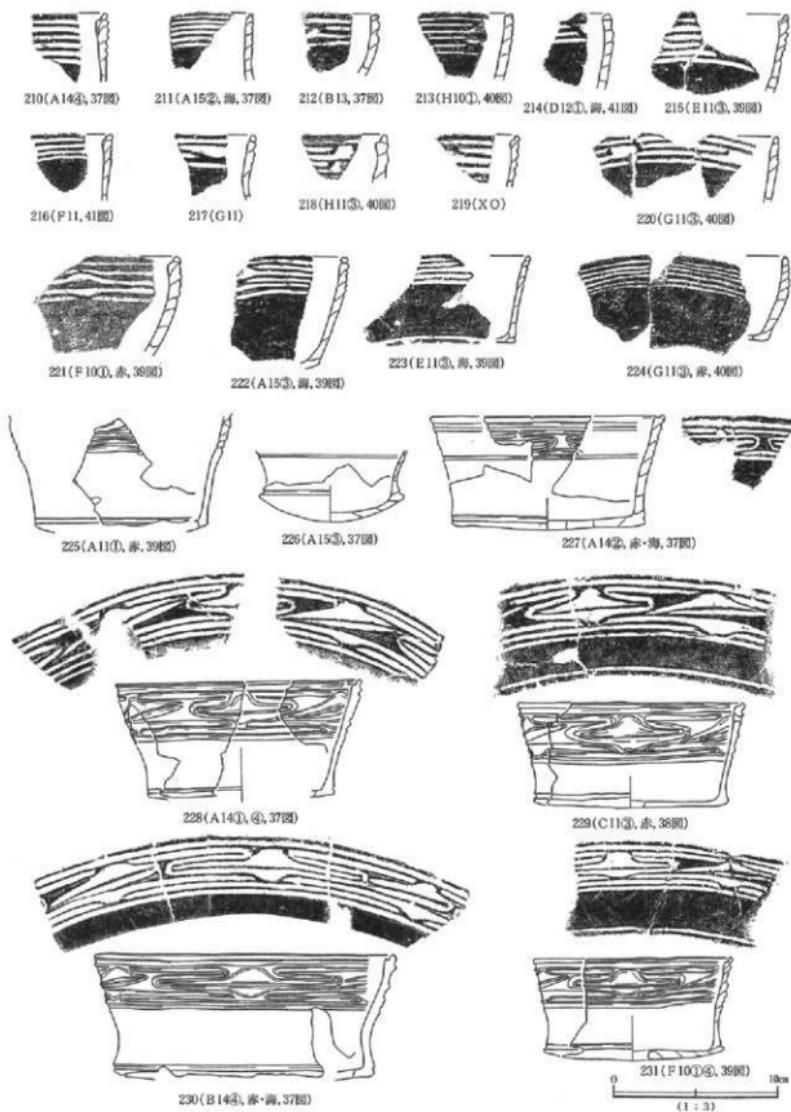
出土した遺物



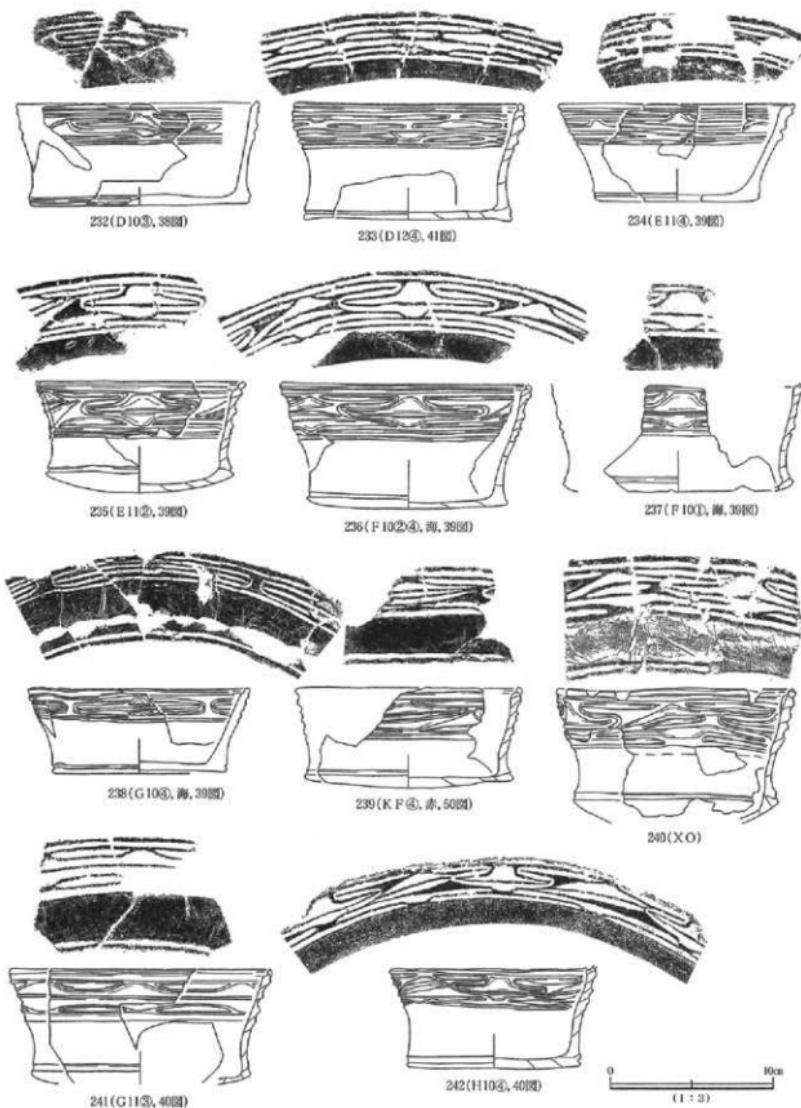
第153図 晩期土器実測図 (12)



第154図 晩期土器実測図 (13)

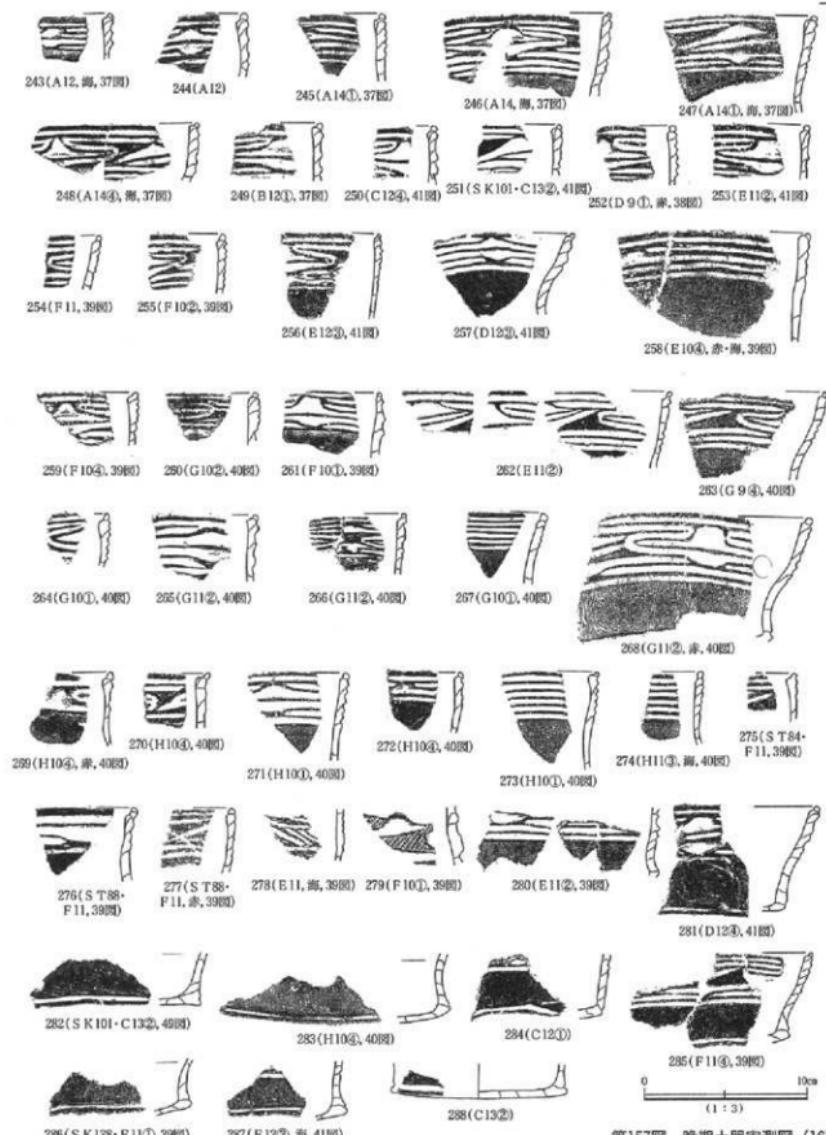


第155図 晩期土器実測図 (14)

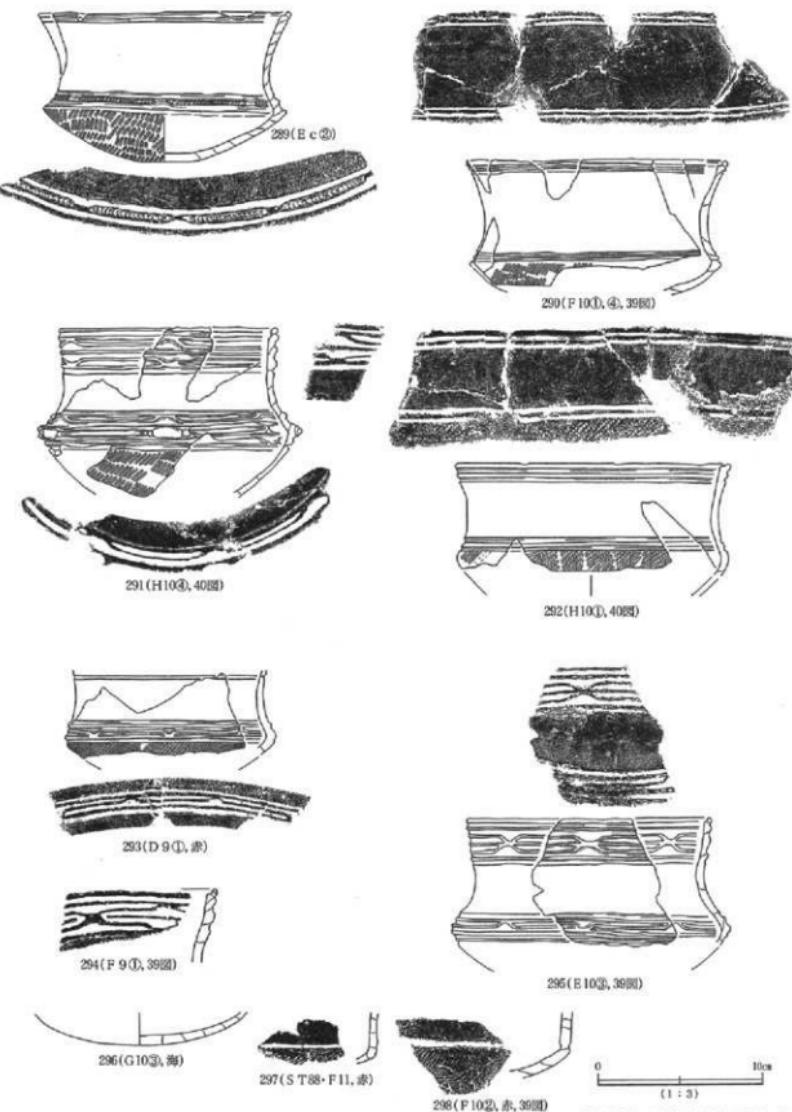


第156図 晩期土器実測図 (15)

出土した遺物

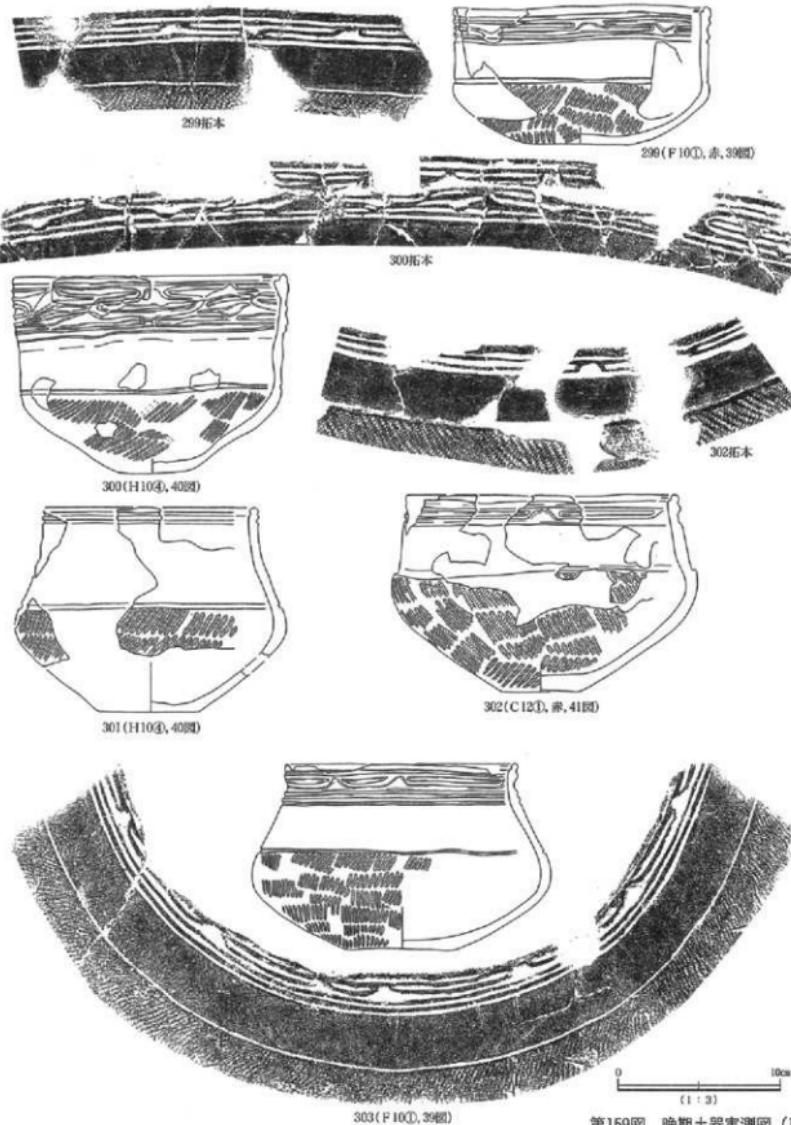


第157図 晩期土器実測図 (16)

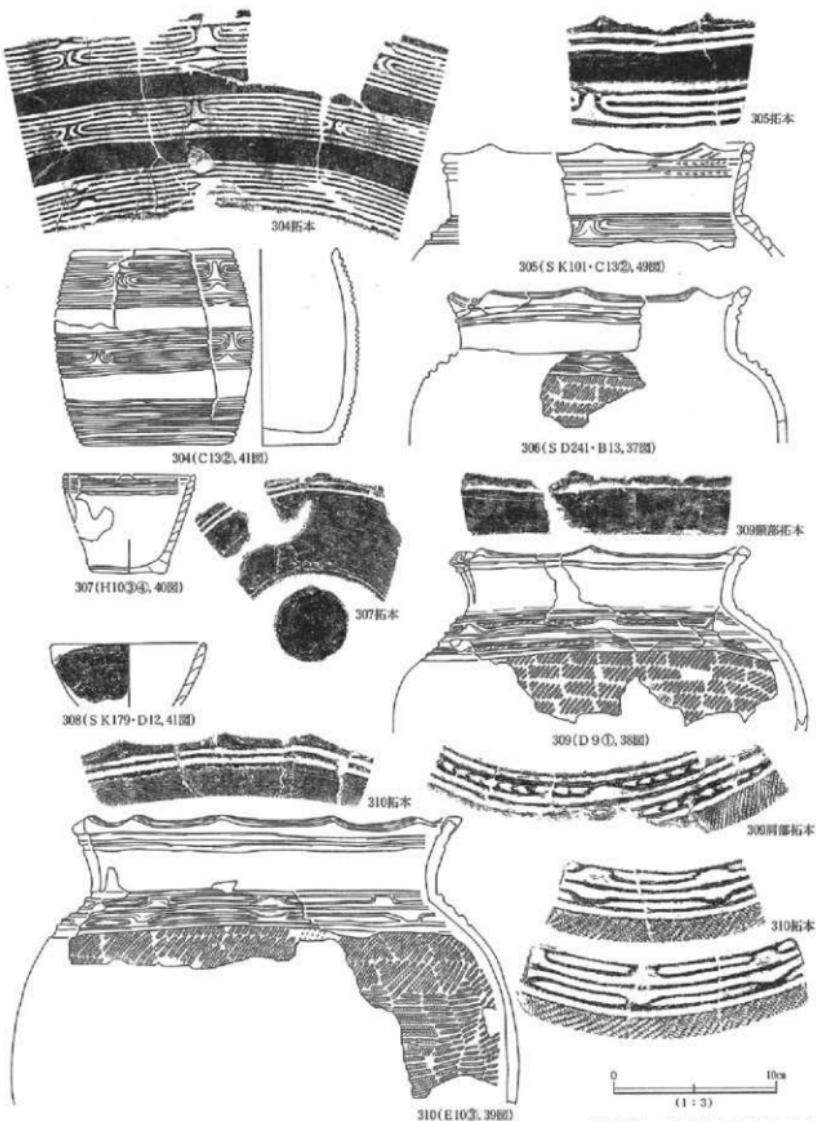


第158図 晩期土器実測図 (17)

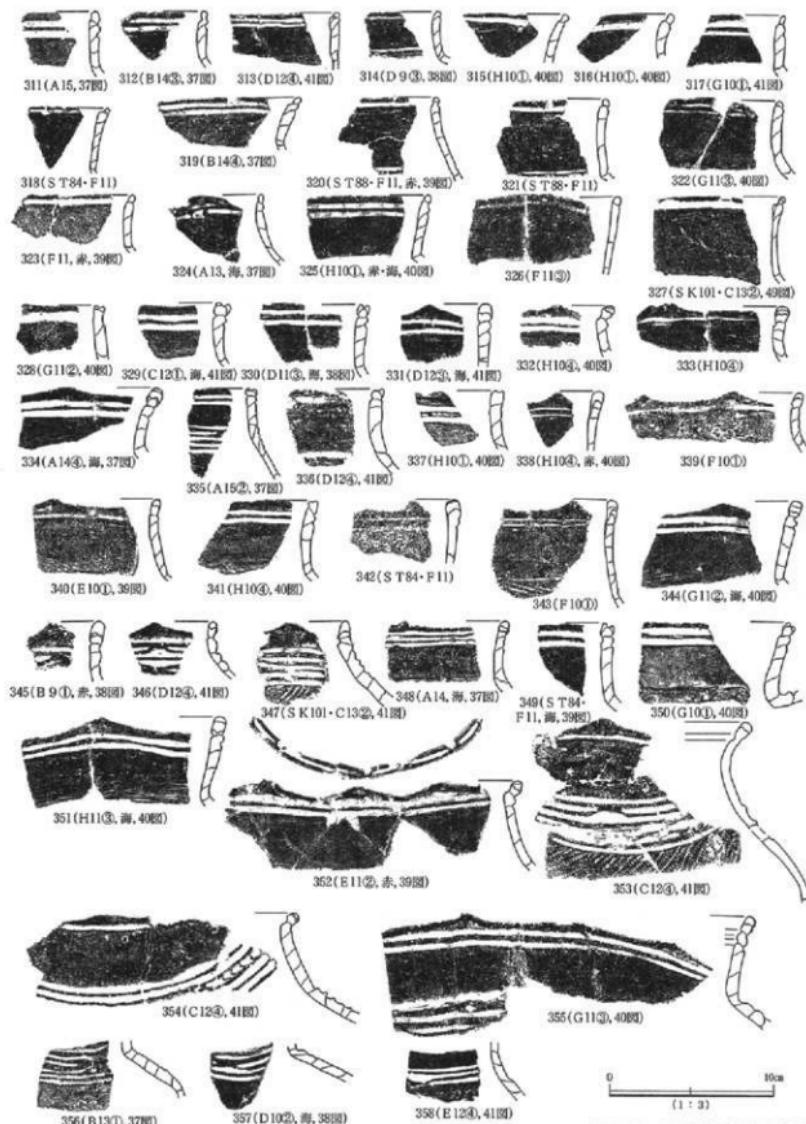
出土した遺物



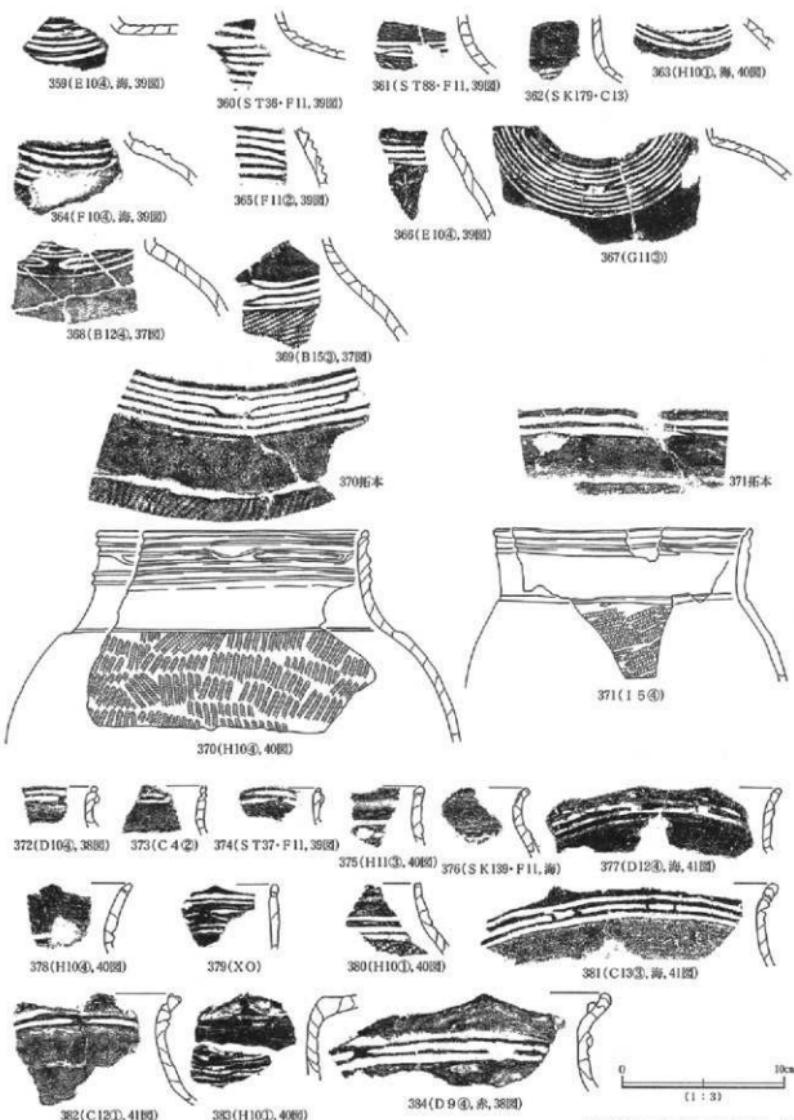
第159図 晩期土器実測図 (18)



第160図 晩期土器実測図 (19)

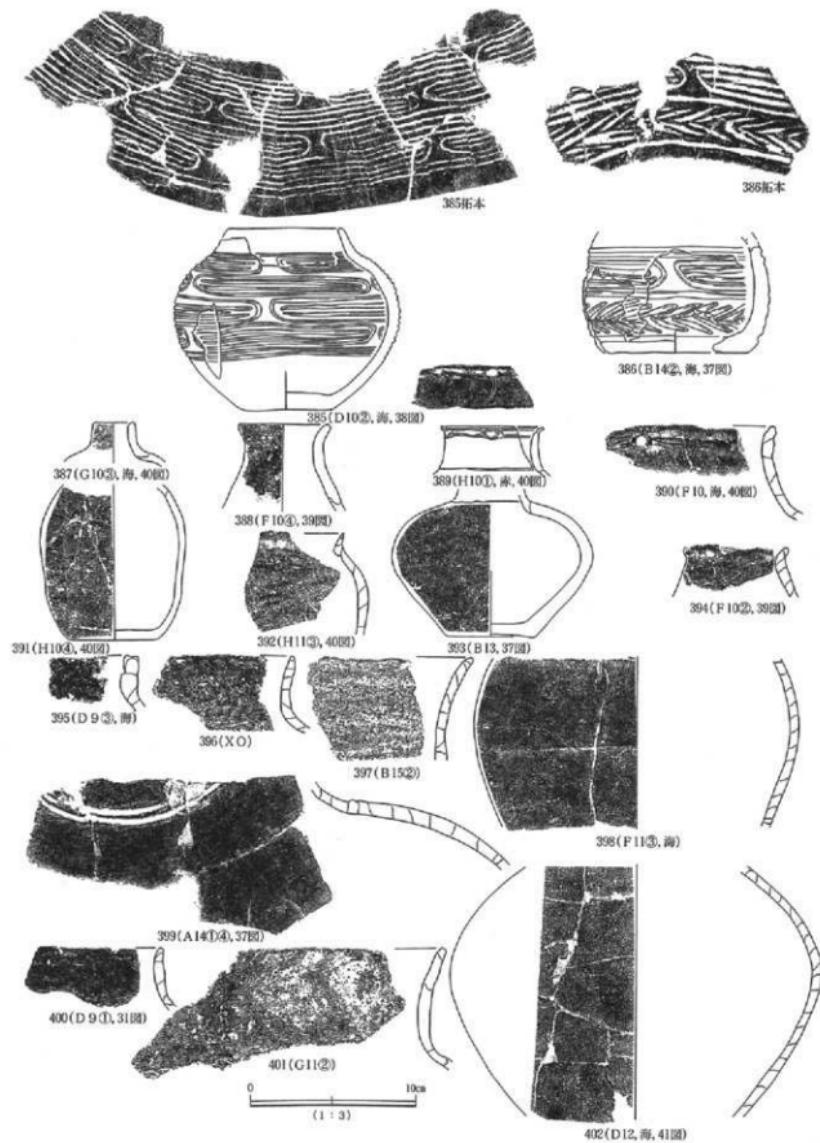


第161図 晩期土器実測図 (20)

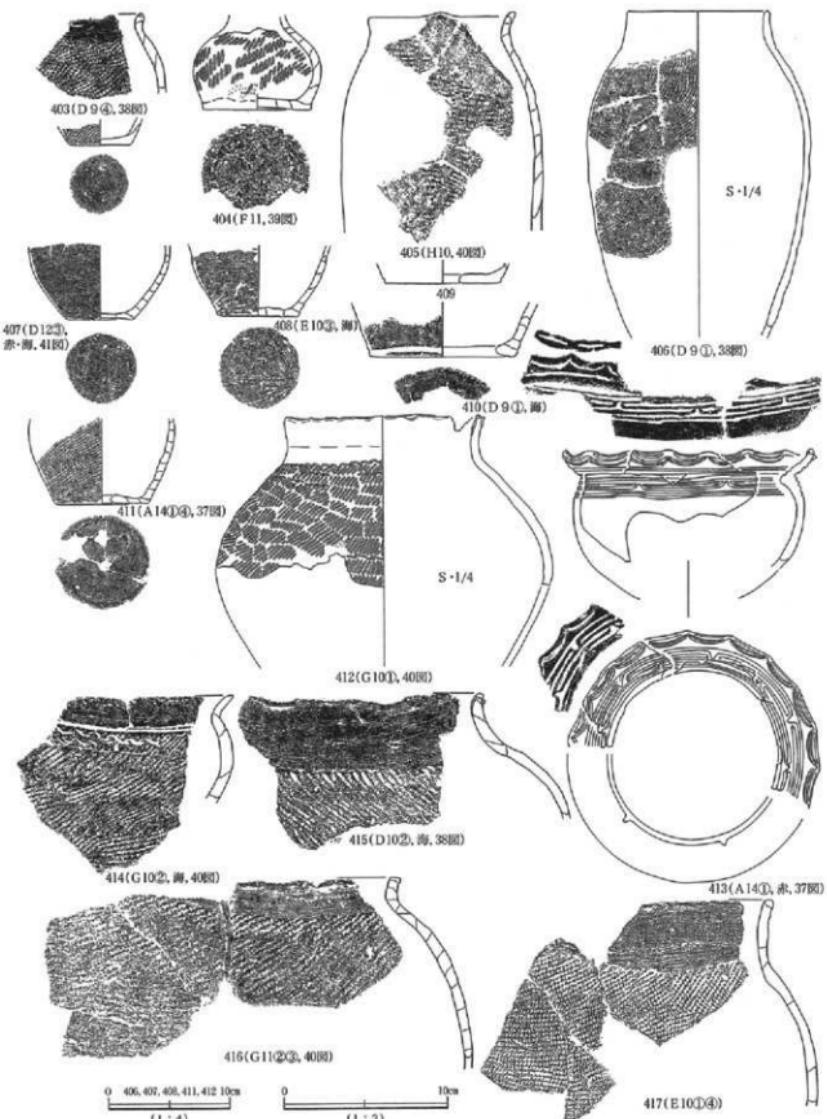


第162図 晩期土器実測図 (21)

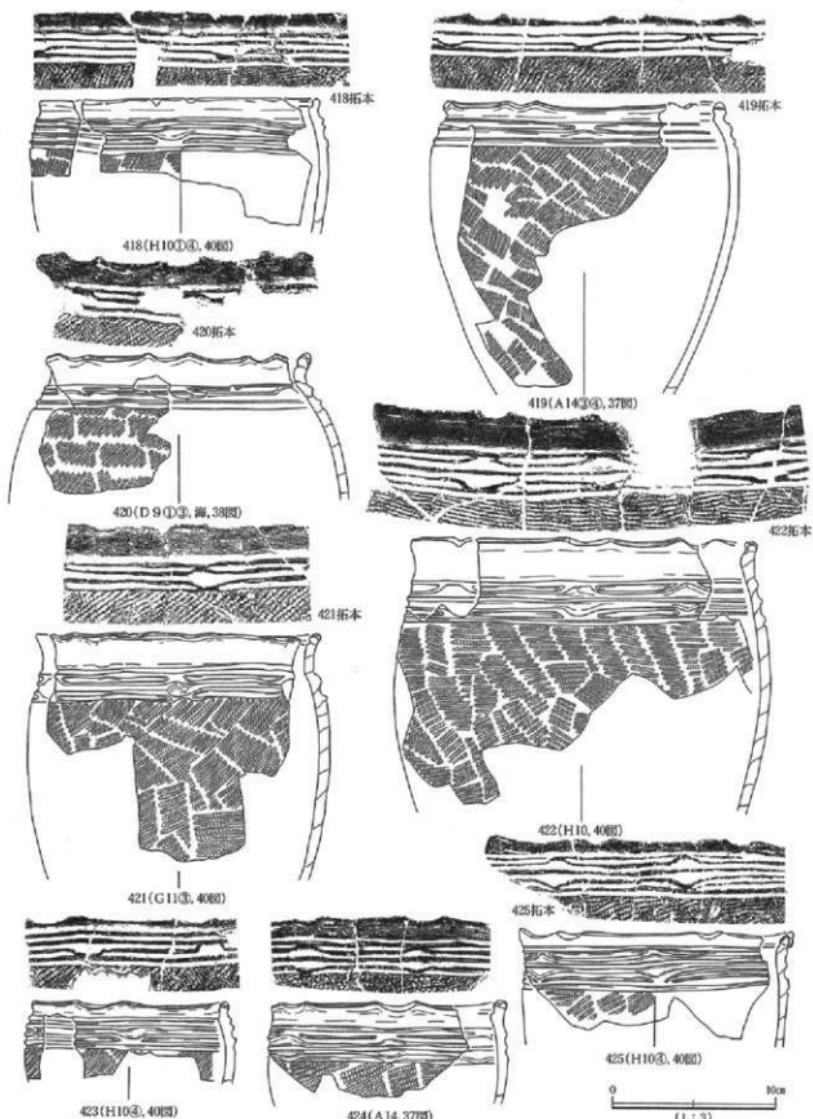
出土した遺物



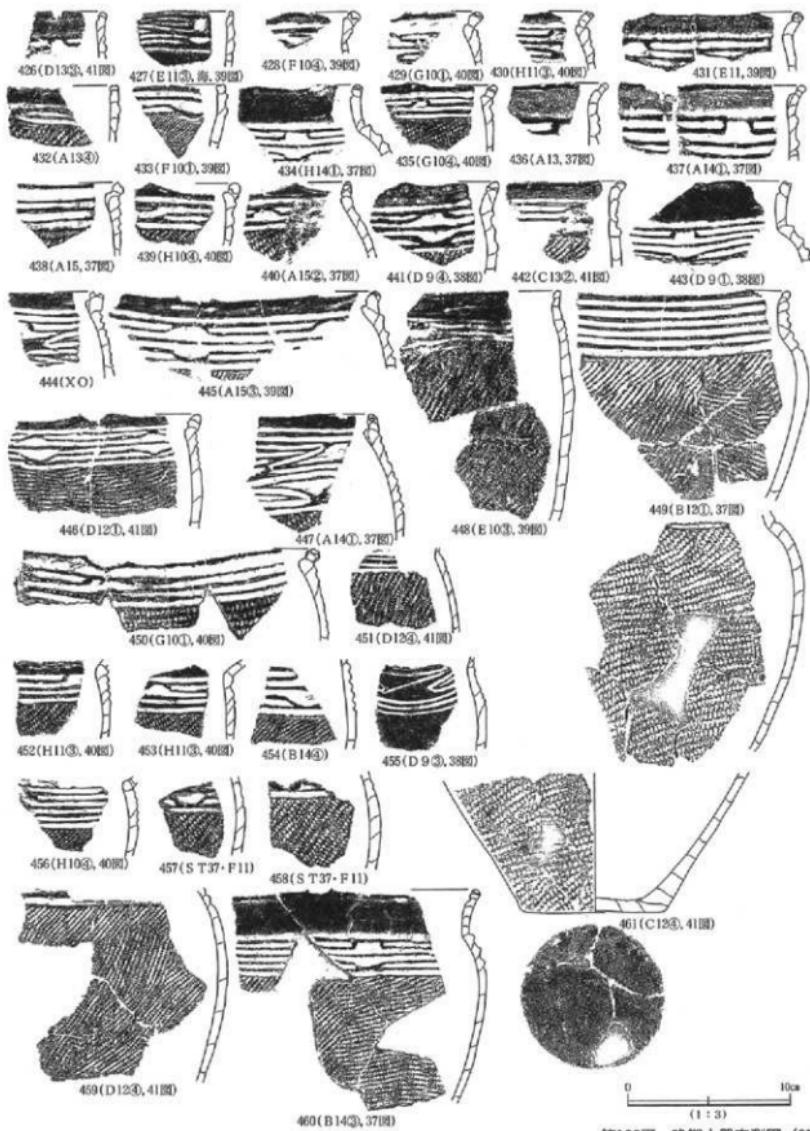
第163図 晩期土器実測図 (22)



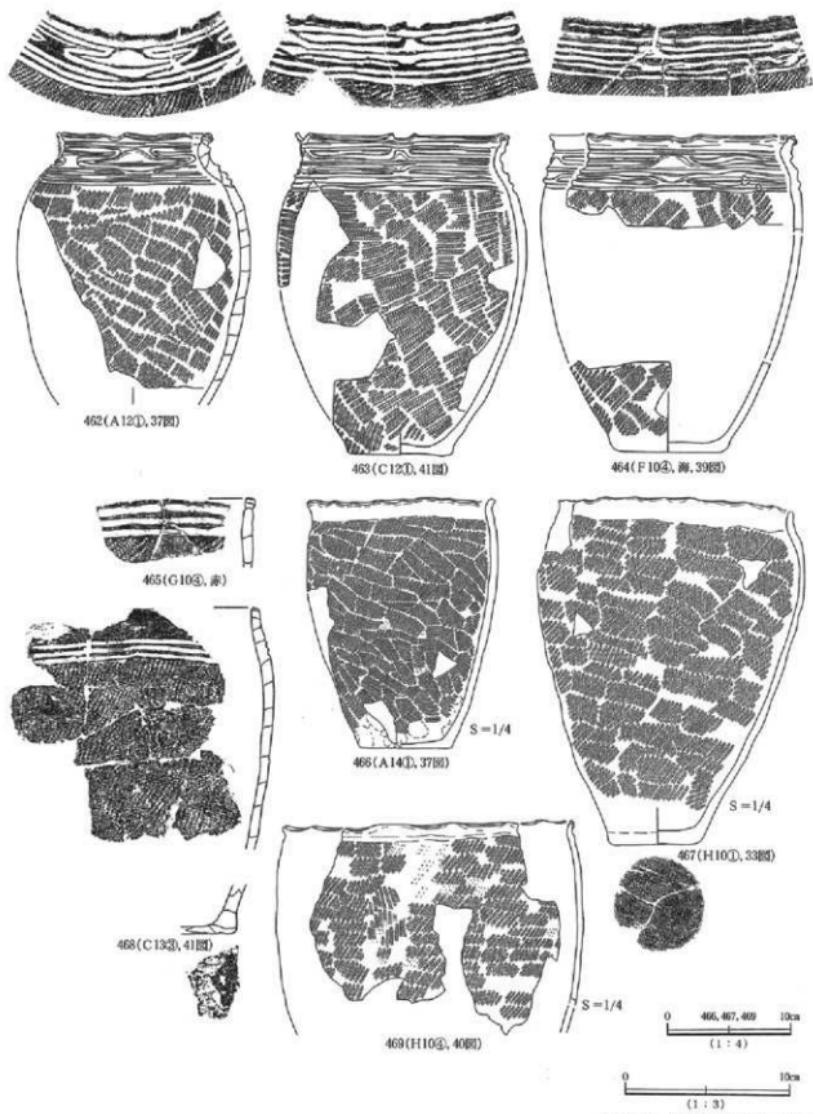
第164図 晩期土器実測図 (23)



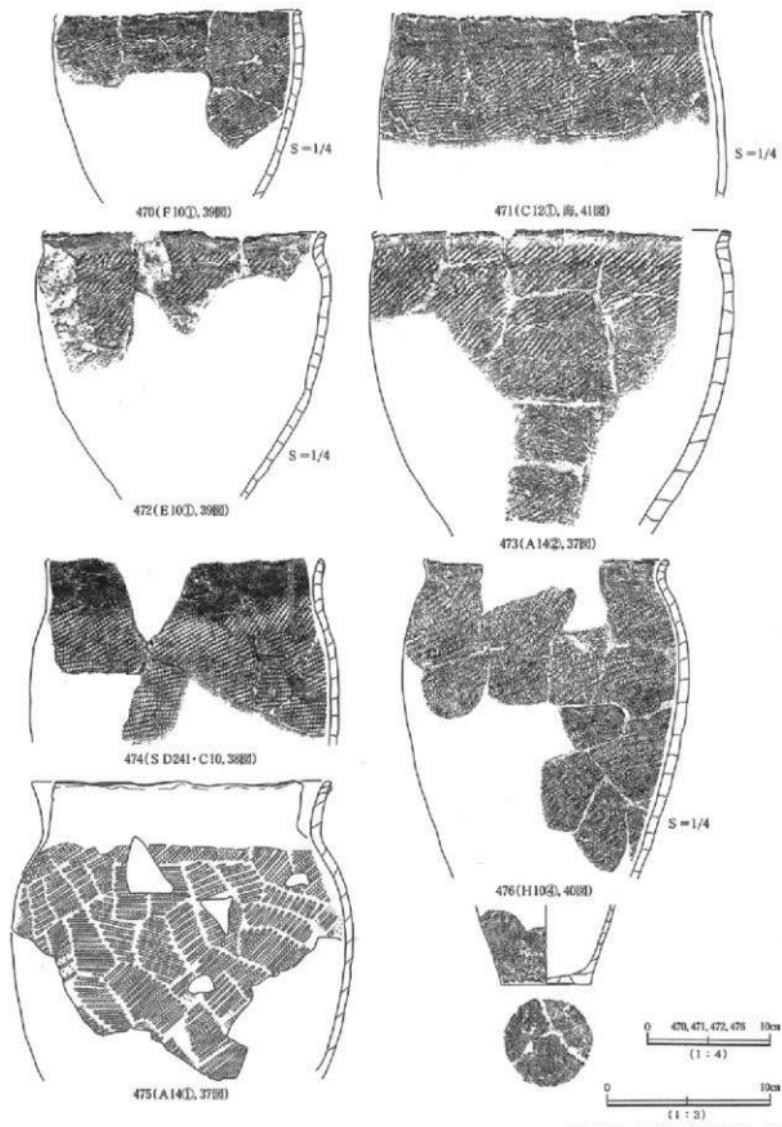
第165図 晩期土器実測図 (24)



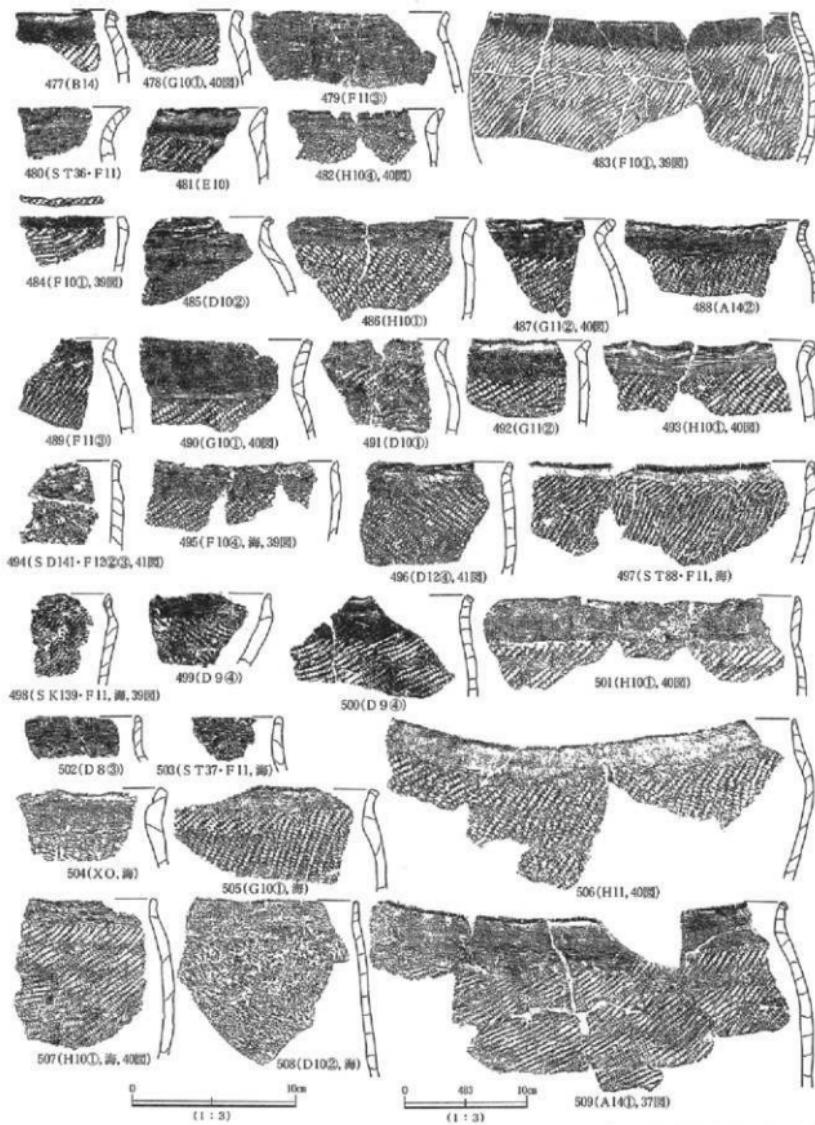
第166図 晩期土器実測図 (25)



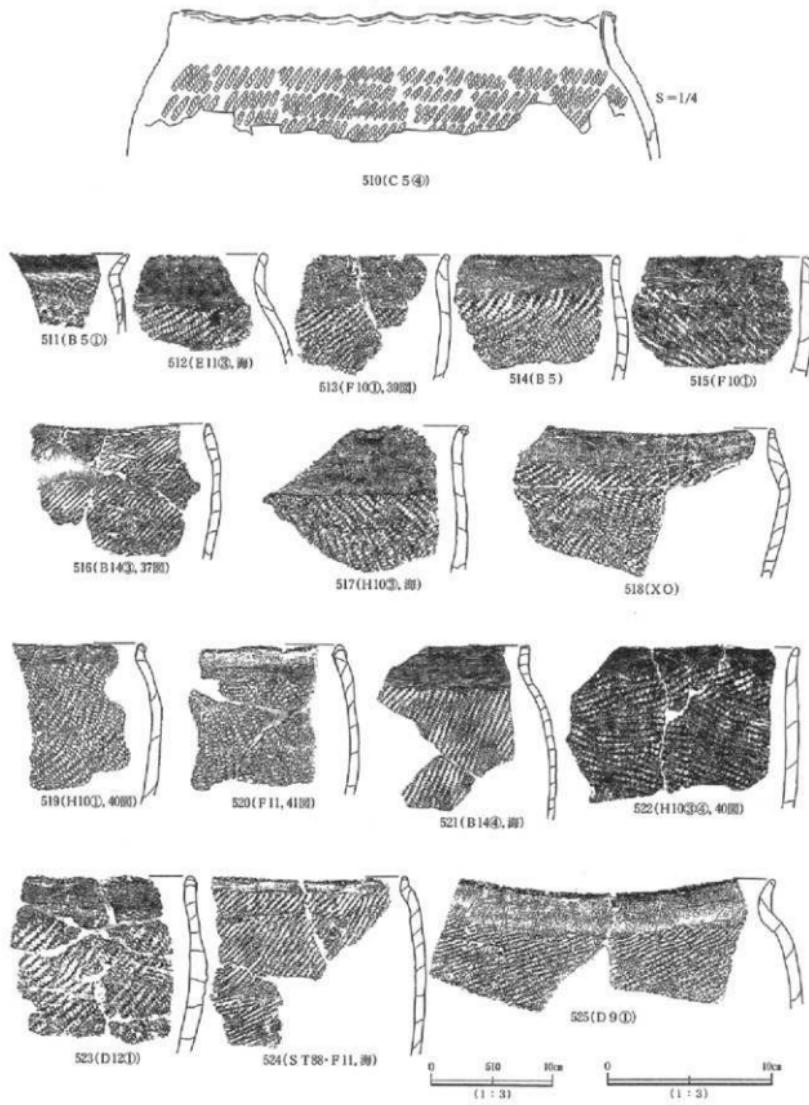
第167図 晩期土器実測図 (26)



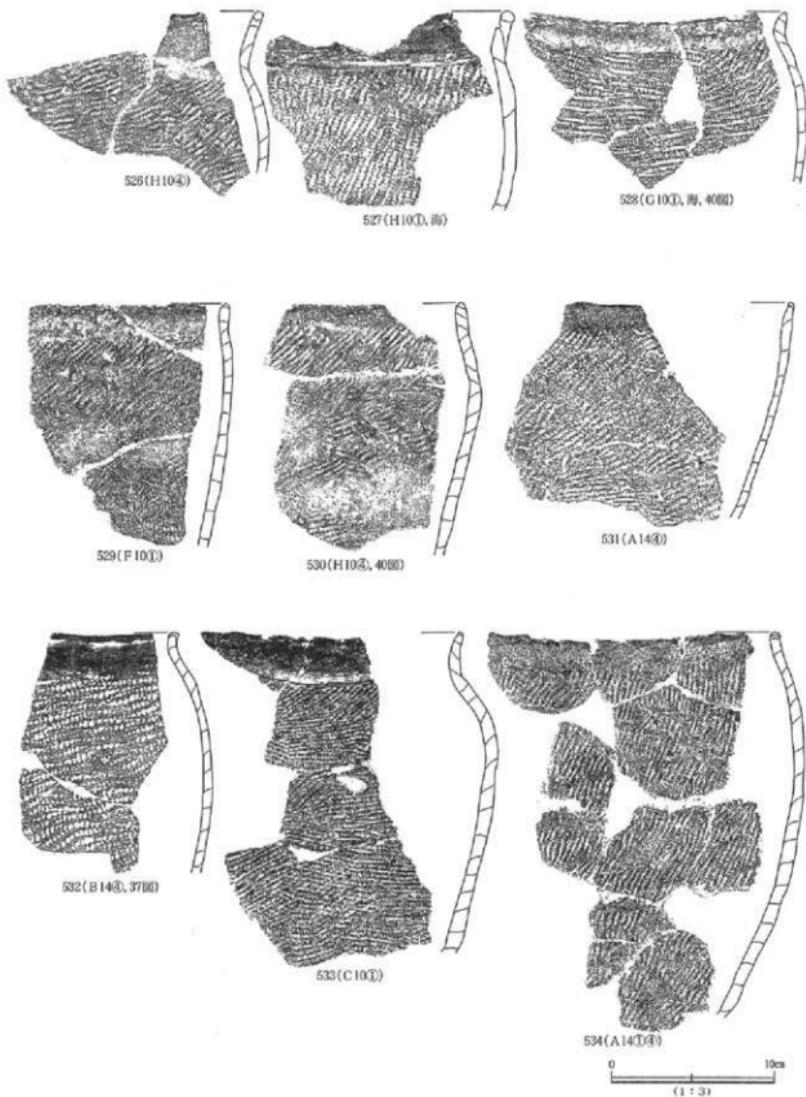
第168図 晩期土器実測図 (27)



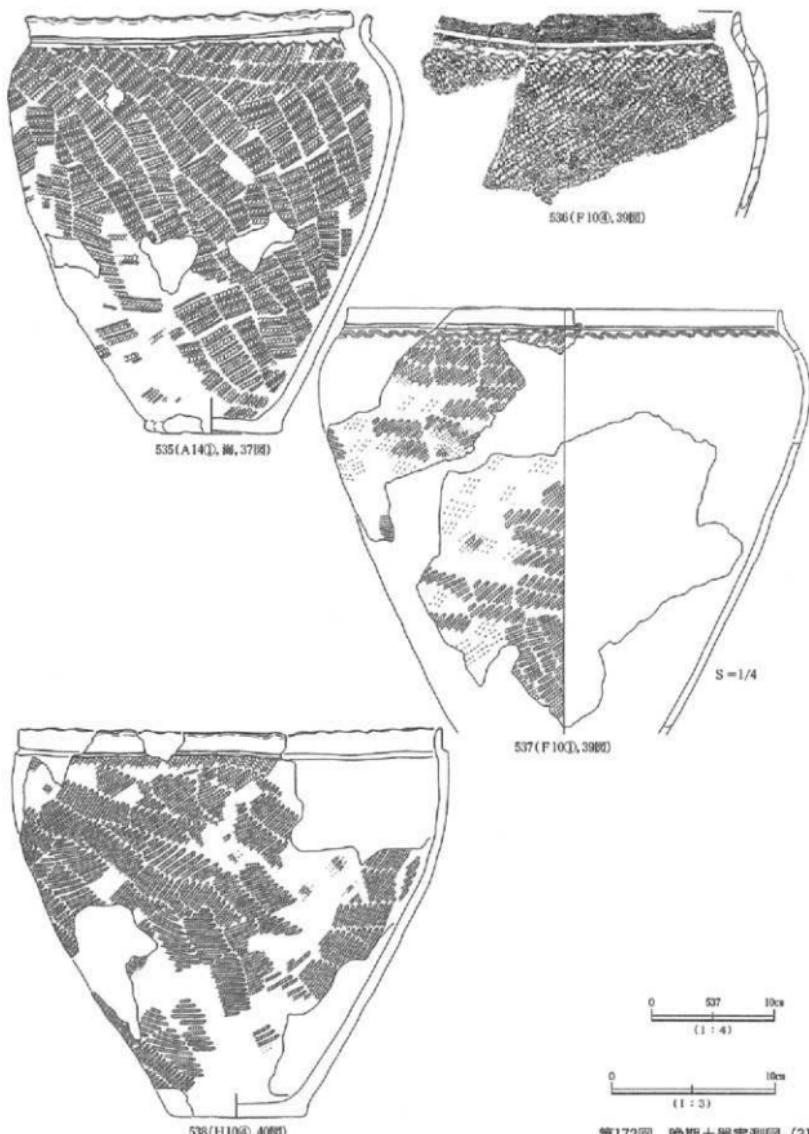
第169図 晩期土器実測図 (28)



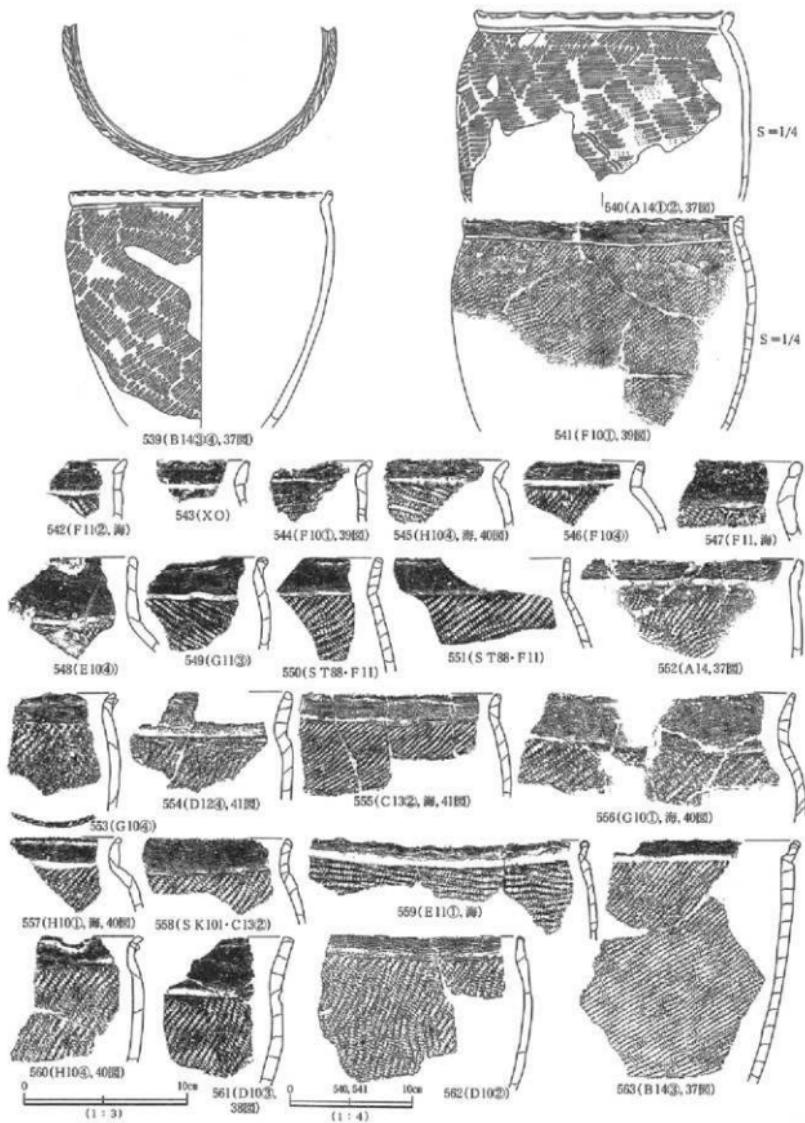
第170図 晩期土器実測図 (29)



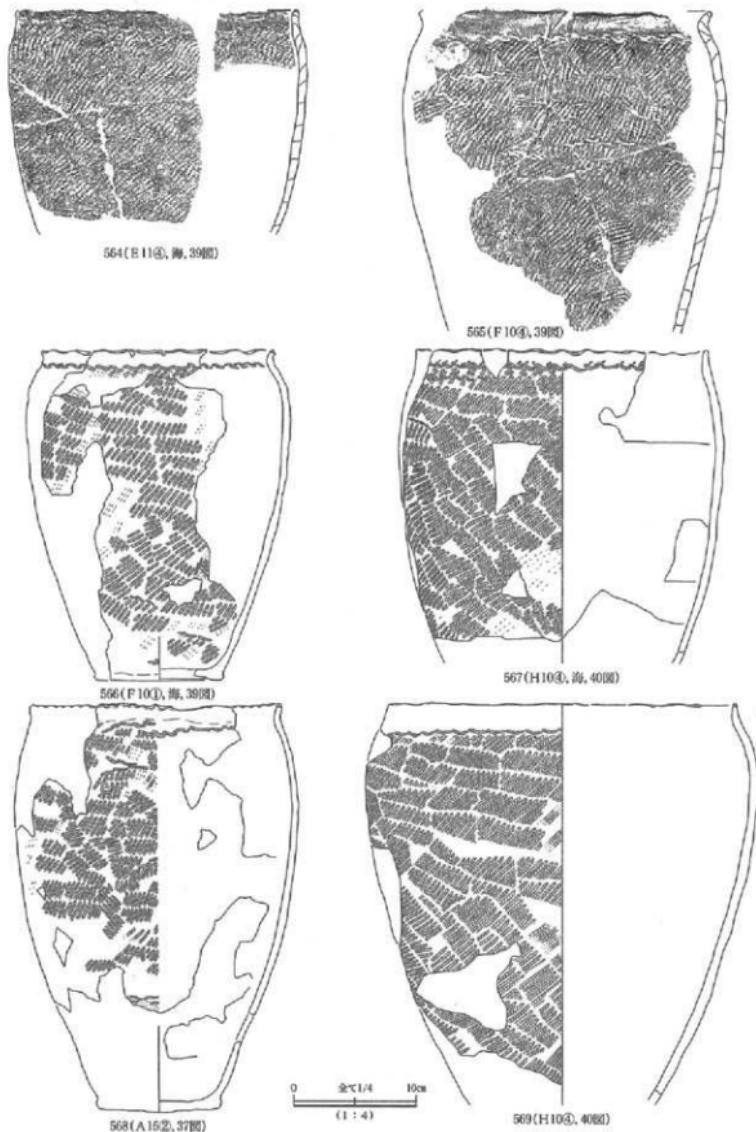
第171図 晩期土器実測図 (30)



第172図 晩期土器実測図(31)

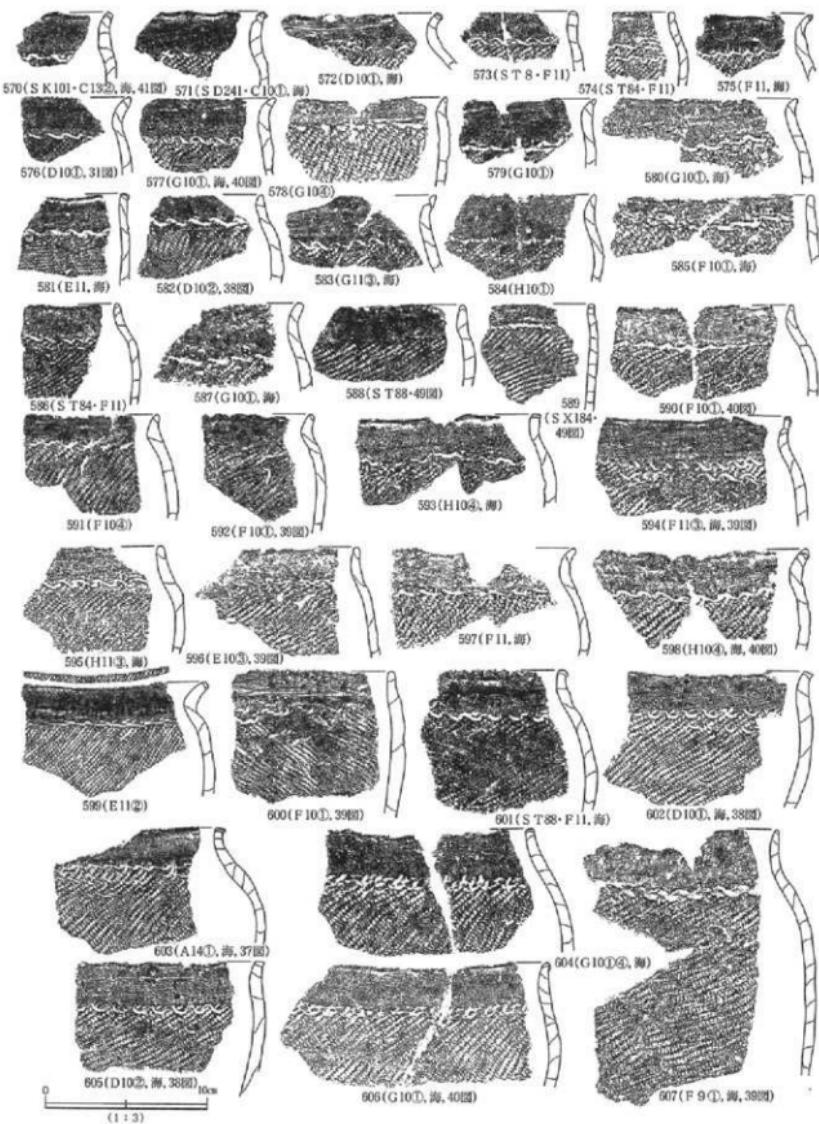


第173図 晩期土器実測図 (32)

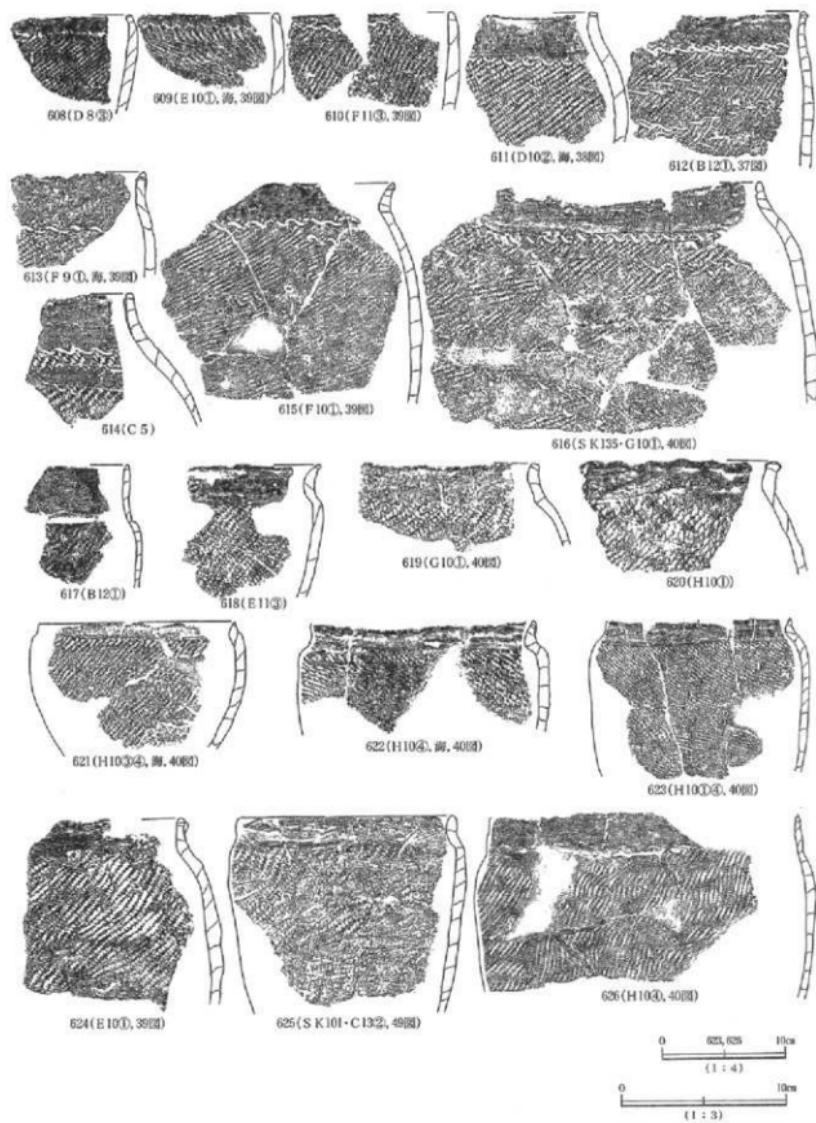


第174図 晩期土器実測図 (33)

出土した遺物

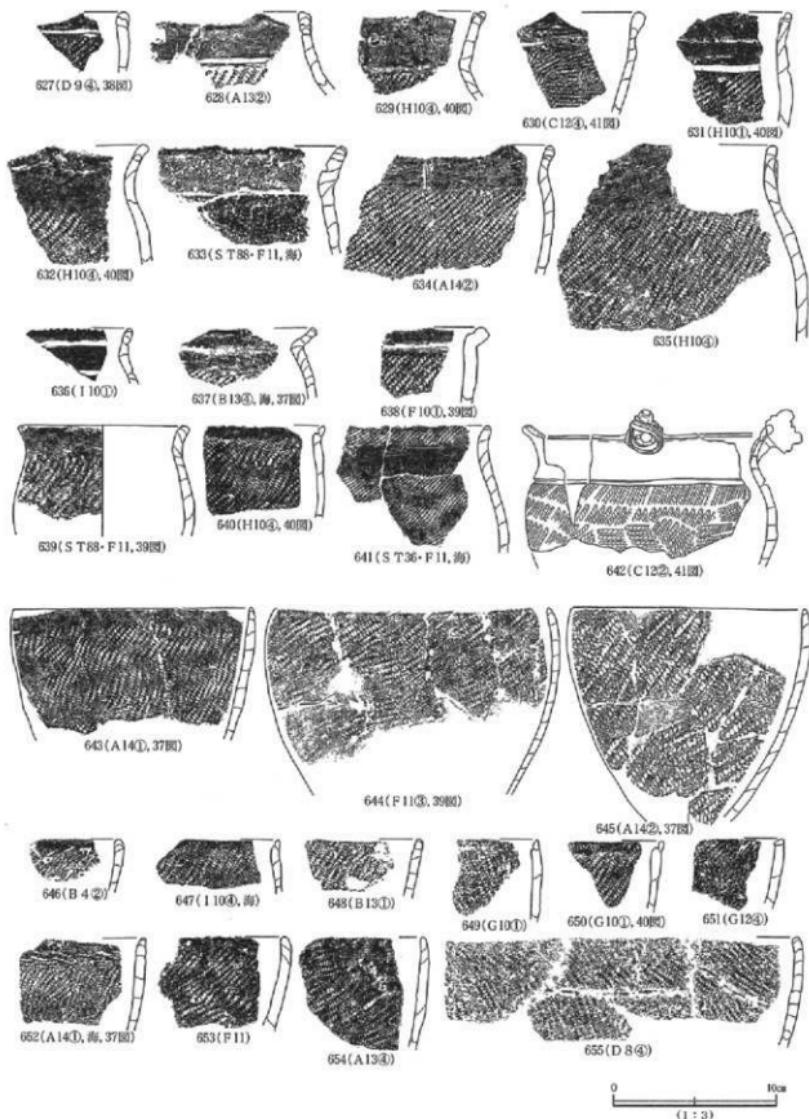


第175図 晩期土器実測図 (34)

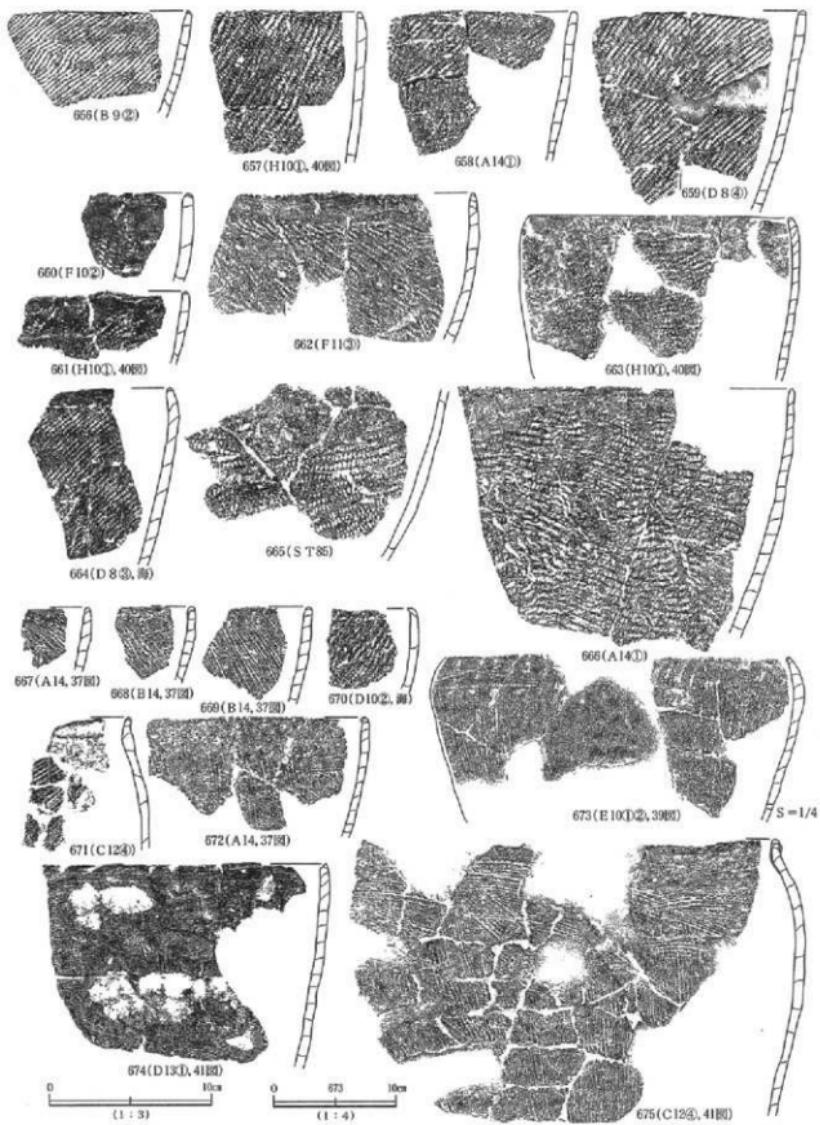


第176図 晩期土器実測図 (35)

出土した遺物

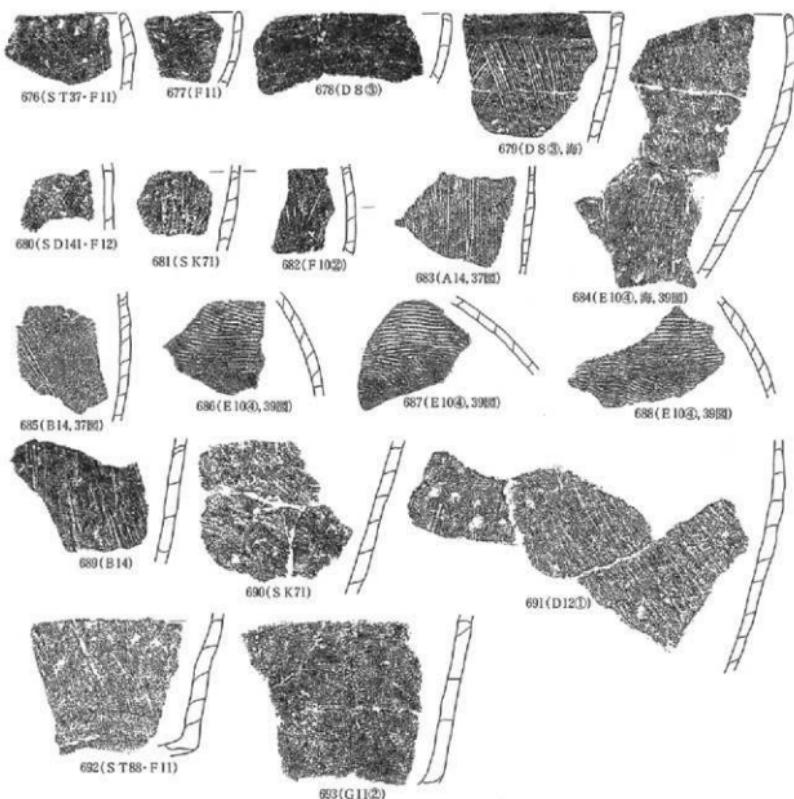


第177図 晩期土器実測図 (36)



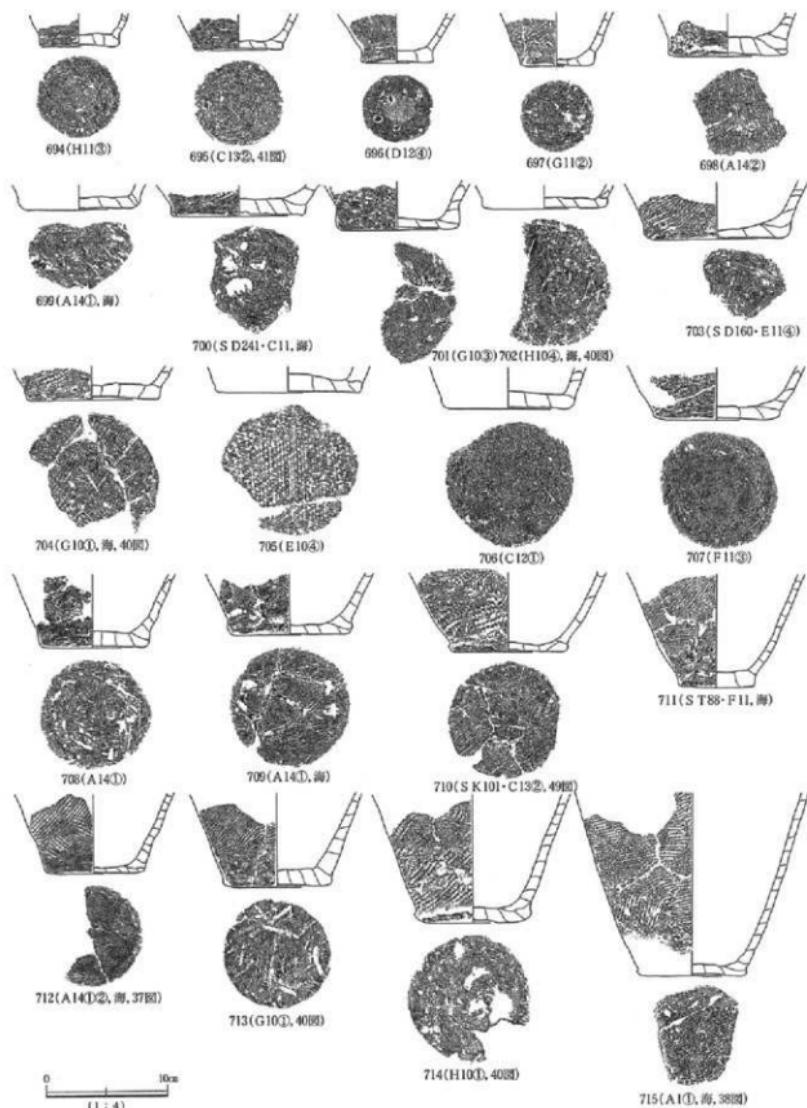
第178図 晩期土器実測図(37)

出土した遺物

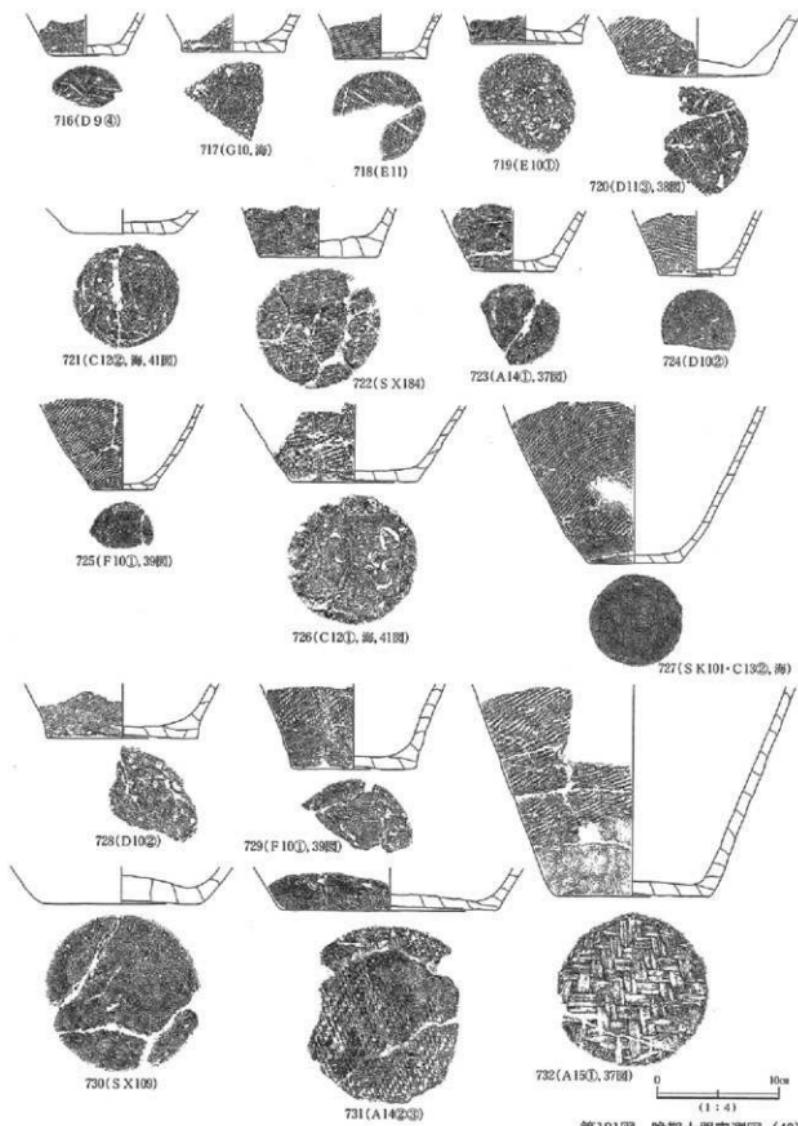


0  
1 cm  
(1 : 3)

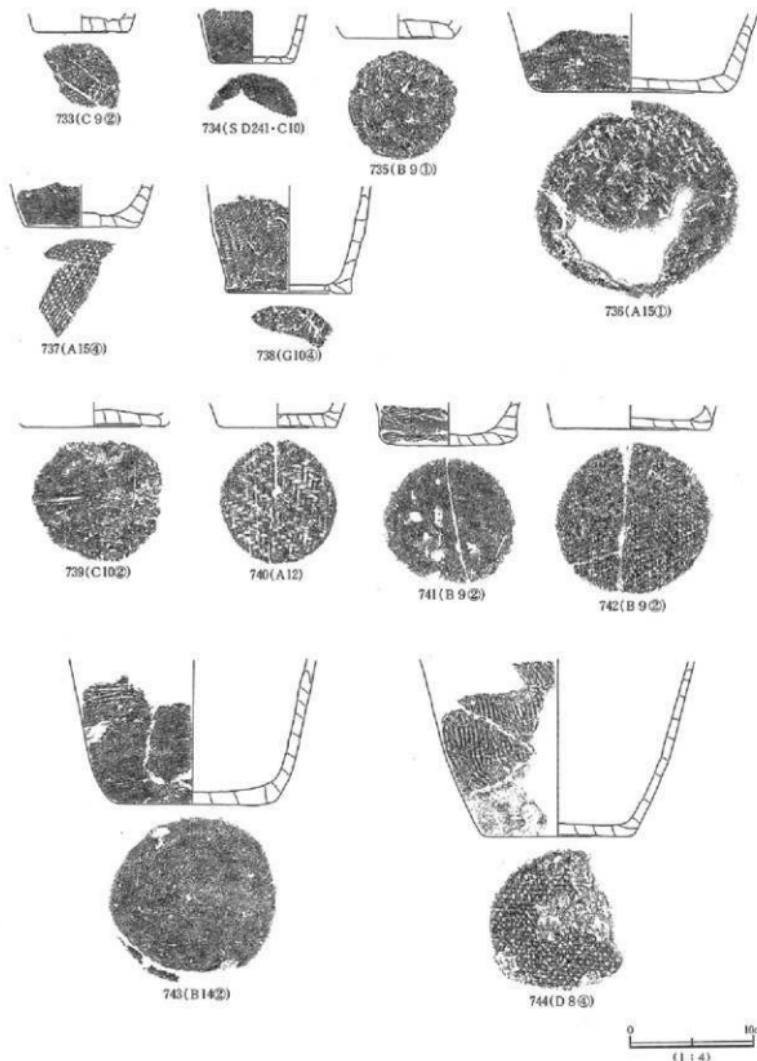
第179図 晩期土器実測図 (38)



第180図 晩期土器実測図 (39)



第181図 晩期土器実測図 (40)



第182図 晩期土器実測図(41)

#### 4 砂子田4群土器：第183図1～18

本土器群は弥生時代の土器を一括した。弥生時代の土器といつても時期幅もあり、数量も少ない。よって以下に個別的に注記を行い、特別の分類はしないこととする。

1～5・8は文様に磨消繩文を施すものである。小破片のみで器形も判然としないものが多いが、全てA区北側の晩期最終末期の土器が主体となる地点である。やや出土地点が離れるが同一個体の可能性も否定できない。特に3・5は同一個体と思われる。出土地点も3がSK142（第48図）、5がSP173（第48図）で、この二つの土壙・柱穴は一つの遺構を構成する可能性が高い。弥生時代中期の舟形圓式並行の土器である。

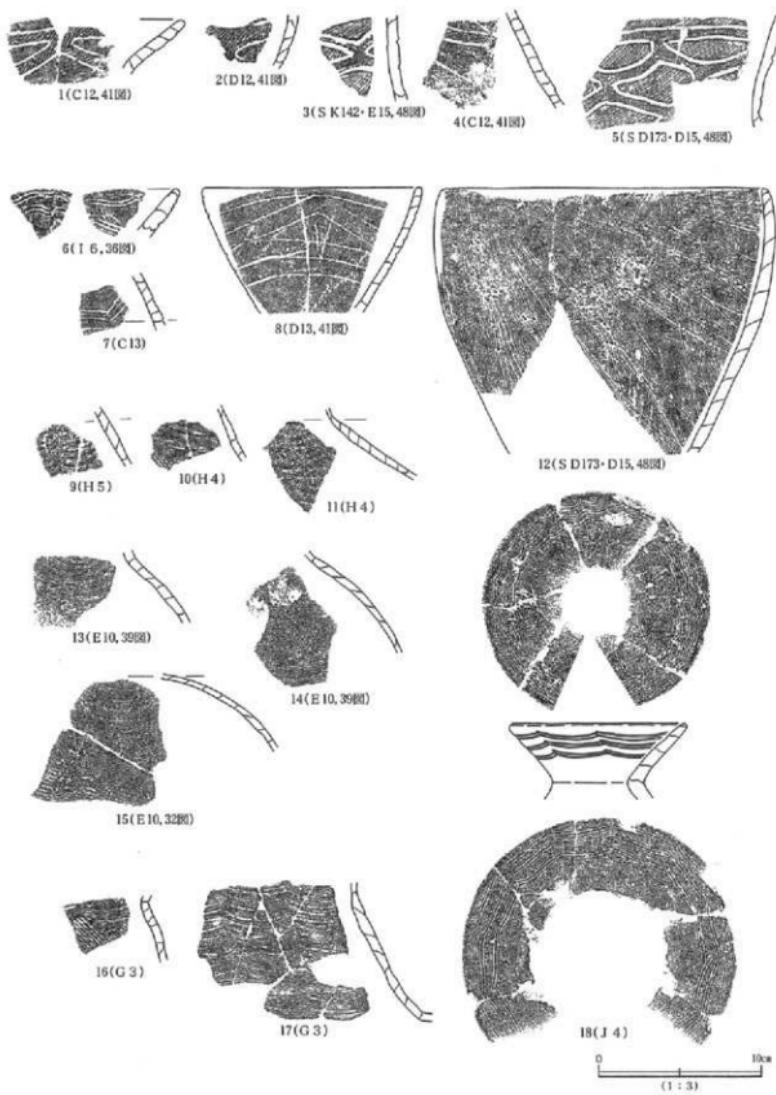
6・7は小破片で判然としない。

12は粗製の鉢である。底部から砲弾型に立ち上がり、体部上位で内湾するものである。口端は良く磨かれている。全面に条痕文が描かれる。条痕自体は砂子田2群土器（繩文時代後期）の櫛齒状条線文のように1単位あたりの条数が多いわけではなく、また砂子田3群土器（繩文時代晩期最終末期）の条痕文のように太くもない。特に条痕文の先端は鋭角で、鋭利な原体によって施文されている。12について更に重要な点は出土位置がSP173で5と同じ土壙（柱穴か）から出土している点である。同時期の遺物と考えている。ただし他の粗製土器が共伴していないことから、この共伴関係のみで土器組成をうかがうこととはできない。

9～18は弥生時代中期後半の桜井式並行の土器である。ほとんどが小破片で器形のわからぬいものが多い。出土位置はA区の中洲状微高地周辺から出土したものが多い。川跡からの出土もあるが、繩文時代後期の堅穴住居の覆土から出土したものもある。明確な遺構から出土したものはなく、おそらく流れ込みなどによるものと推測される。

18は壺型の口縁部である。おそらく体部が大きく、長頸のものであろう。長頸の先端で屈曲し短く外に開く部分である。口縁の内外に2条一組の平行沈線が3段、円弧を描くように施文されている。

弥生時代の遺物は極めて少ないが、こうした遺物の混入が認められることから、周辺に弥生時代の集落などがあってもおかしくはない。本遺跡の周辺には繩文時代後半から古墳時代の遺跡が集中するが、弥生時代のものは少ない。現在水田として利用されており、かなりの低湿地帯に位置する。こうした低湿地帯はこれまで遺跡はないとして等閑視されていた場所である。周辺への弥生時代の集落がないとはいえないでのある。



第183図 弥生土器実測図(1)

## 2 土製品：第184図1～第185図28

数量的に少ないため特に注記の必要なもののみを説明する。

1は釣鐘状の形態をしており土鉢とも考えたが、図の下端に破損部分があり、大波状につく突起と理解した。口縁部に2条の刻目帯を持つ。S T 86からの出土であるが混入である。

2～13は単体の土製品ではなく、注口土器の口の部分である。本来は土器実測図に掲載すべきだろうが、体部を欠損しており全形がつかめない。よって土製品に掲載した。注口土器の口の部分は欠損しやすいようで数多く出土している。時期的には施文される文様と出土位置から全て縄文時代後期中葉から後葉とした。縄文時代晩期最終末期の注口土器は出土していない。2～4は断面のみの掲載となった。3は器面に瘤がつく。6～8は注口部の根元に2個一対の瘤がつく。9はミミズ腫れ状微隆起線に刻目を施す。10は全面無文で注口部も短い。11は文様が沈線によって表出され、瘤がつく。12は注口部と土器本体との接合にアスファルトが使用されている。スクリーントーン部分がアスファルト部分である。13はB区北西の旧河川跡から出土したものである。全面が赤彩されていたようだが、一部は剥落している。

14～16は耳栓である。いずれもB区からの出土で、縄文時代後期の所産と考えられる。全面無文で、極小さい。

17～19・28は円盤淨状製品である。17・19は全面無文である。18は表面に櫛齒状状線文が施文される。28は沈線が3条引かれる。

20はスタンプ状土製品か。下端は球形を呈し、その上につまみがつく。全面にR L 単節縄文を回転押捺し、羽状を呈する。つまみの境界に穿孔されており、つまみを貫通している。穴は小さく、おそらく紐を通したのではないかと推測される。A区南西包含層から出土しており、縄文時代後期の所産と推測される。

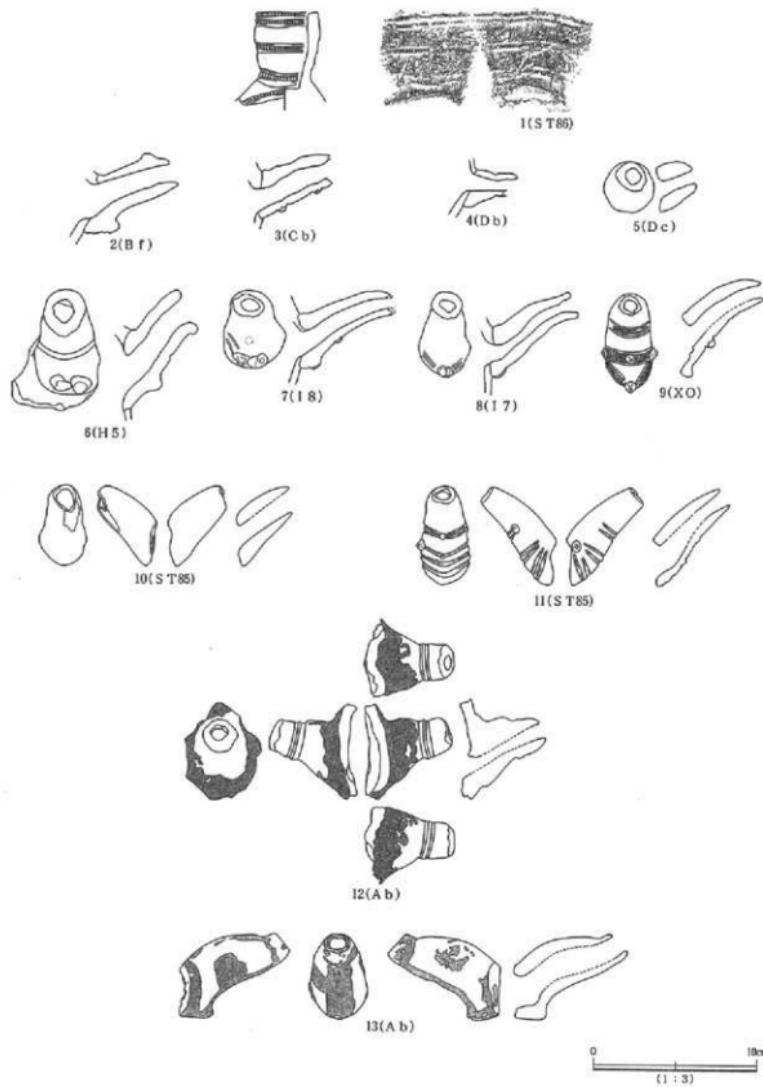
21は土錘である。1個体のみの出土でほかには確認できなかった。S T 3からの出土である。22は土偶の頭部である。A区北側の土器捨て場から出土している。縄文時代晩期最終末期の土器である砂子田3群土器に伴うものである。全形は不明だが頭頂部の左右両端に円柱状の突起がつく。おそらく髪を結った状態を表しているのであろう。突起の先端には小さな円文が6・7単位押捺される。また髪の毛をあらわしたものか、突起の側面に5・6上の沈線が引かれる。沈線は浅く細い。沈線は揺れて直線状ではない。また突起と頭頂部の境界付近には小さな穴があけられる。耳を模したものか。頭頂部には棒状のものを突き刺したような穴が一つ存在する。顔の部分では目の上下に縦位の沈線が存在する。また口と目の境界に段差が設けられている。

23は土偶の右の脚部である。沈線で文様が引かれるが詳細は不明である。B区南のS K1162から出土している。おそらく縄文時代後期の所産である。

24は土偶と理解した。S T 3の床面から出土している。欠損しているわけではないが、体部より上は無文である。腰から下が残存するがズボンもしくは腰巻のようなものが沈線で描がかれている。

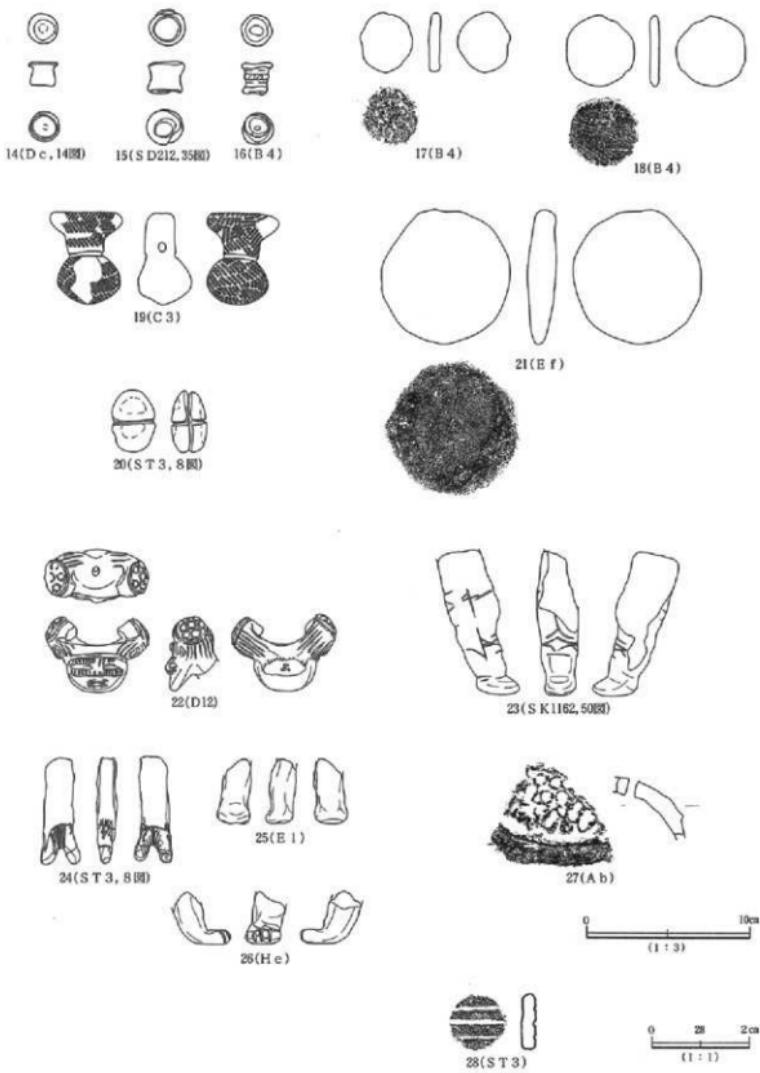
25・26は小破片で詳細は不明である。26の足の先端には指を表すような沈線が引かれる。

27は深鉢などの内部につけられたろ過のための穴を開いた仕切りである。詳細は不明である。



第184図 土製品実測図(1)

出土した遺物



第185図 土製品実測図(2)

### 3 石器・石製品：第186図1～第196図206

定型石器のほとんどを実測している。点数が206点にのぼるため別に表を付した。よって本文では分類の基準を述べるだけとする。なお表の備考欄に後期・晩期の別を示したが、出土地点により判断しており、実際の時期と異なる場合がある。例えばアメリカ式石鎌が1点出土しているが、出土地点がB区からで、表の備考欄には後期と記している。遺構・遺物集中域などの出土状況に石器・石製品も記載しているので時期の確認の参考にされたい。

#### 石鎌：第186図1～41

石鎌は41点出土している。石材はほとんどが珪質頁岩・玉髓で、鉄石英・黒曜石のものが1点づつ出土している。

1～6は有茎鎌で基部が短いもの。刃部は丸みを帯び、逆ハート形を呈する。厚さが厚い。

7～10・15は有茎鎌のうち基部が短いもの。刃部が丸みを帯びた菱形を呈し、基部が極短く、基部の判別が難しい。

11～14は有茎鎌のうち基部が短いもので、刃部の下端が外へ張り出すもの。

16～26・28・29は有茎鎌のうち基部が短く、刃部の比率が極端に大きいもの。厚さの薄い。

27・30～32は基部と刃部の境界が不明瞭で、刃部が凸形を呈するもの。

33・35～37は有茎鎌で基部と刃部の比率がほぼ同じもの。

38は基部にノッチを加え、基部の上端が方形に外へ張り出すもの。いわゆるアメリカ式石鎌。

39は基部が丸みを帯びるもの。いわゆる円基族。34は不明のもの。40・41は未製品である。

#### 尖頭器：第187図42・43

両面加工もしくは片面加工により尖った先端部を作り出したもの。42は円形を呈し、43は錐としてはあまりに巨大で、尖頭器と判断した。柳葉形を呈する。石材は共に珪質頁岩である。

#### 石錐：第187図44～64

剥片素材の縁辺に調整加工を施して、その一端もしくは両端に尖った先端部を作り出したもの。石材は1点だけ玉髓があるが、他は全て珪質頁岩もしくは頁岩である。

44～50は刃部の長いもの。刃部と基部の間にノッチが入る。左右対称のものと非対称のものがあり、50のように基部の上端につまみの付くものもある。

51～59は剥片の形を変えずに、一端に刃部を作り出すもの。さまざまな形状が存在する。

60～64は細長い棒状を呈し、両面加工により長い刃部を作り出すもの。

#### 石匙：第188図65～111

相対するノッチを入れることにより作り出されたつまみをもつもの。石材は玉髓・頁岩が1点づつ、他は全て珪質頁岩である。

65～67はつまみを上にしたとき刃部が側面につくられる縦形石匙で、刃部が尖頭のもの。

68～76は縦形石匙のうち、刃部が丸みを帯びて膨らみ尖頭になるもの。

77～81は縦形石匙のうち、刃部が直線的で長方形を呈するもの。

82～111はつまみを上にしたとき刃部が下端につくられる横長石匙。

#### 石箇：第191図112～127

剥片素材の背面と主要剥離面の両面が加工され、その長軸の末端が刃部となるもの。また背面だけの片面加工であっても、刃部の刃角が小さく搔器となり得ないものも含めた。石材は玉髓が2点、頁岩6点、他は全て珪質頁岩である。

112～118は短冊形のもの。刃部が片刃状のものと両刃状のものに細分される。

119～127は撥形のもの。刃部が片刃状のものと両刃状のものに細分される。

**削器：第192図128～177・179・182**

剥片の縁辺に連続的な調整加工を施して、刃部を作り出したもの。不定形なものが多い。石材は玉髓2点、他は珪質頁岩がほとんどで、頁岩が少數存在する。

128～160は縦長剥片を用いて側面に刃部を作り出すもの。

161～173は横長剥片を用いて下端に刃部を作り出すもの。

175～177は縦長剥片を用いて側面に刃部を作り出し、先端が尖るもの。尖頭削器。

179・182は刃部が鋸齒状を呈するもの。鋸齒状削器。

**搔器：第195図178**

急角度の調整加工によって刃部を作り出したもの。石材は珪質頁岩である。

**異形石器：第195図181**

特殊な形態を有し分類不能のもの。181は刃部に2箇所ノッチを入れている。

**両極石器：第195図184～185**

剥片素材の四方に刃部を作り出すもの。

**打製石斧：第195図186・187**

大形の礫の縁辺に連続的な調整加工を施し、縁辺または長軸の一端に刃部を作り出すもの。

**使用痕剥片：第195図188～197**

基本的には剥片だが、刃部に微細剥離痕が認められるもの。使用による刃こぼれか。

**二次加工剥片：第196図198～206**

剥片素材の側線に調整加工が認められるが、刃部を作り出すまでに至らなかったもの。

**磨製石斧：第198図214～216**

磨製石斧は土器や石器の出土量に比べて極めて少ない。ほとんど存在しない。実測図に表したもののが全てで、しかも砂質の礫を使用している。低湿地集落ゆえか。

**石棒：第198図217**

1点のみの出土である。B区の縄文時代後期の地点から出土している。

**石皿：第197図207・209・第200図233**

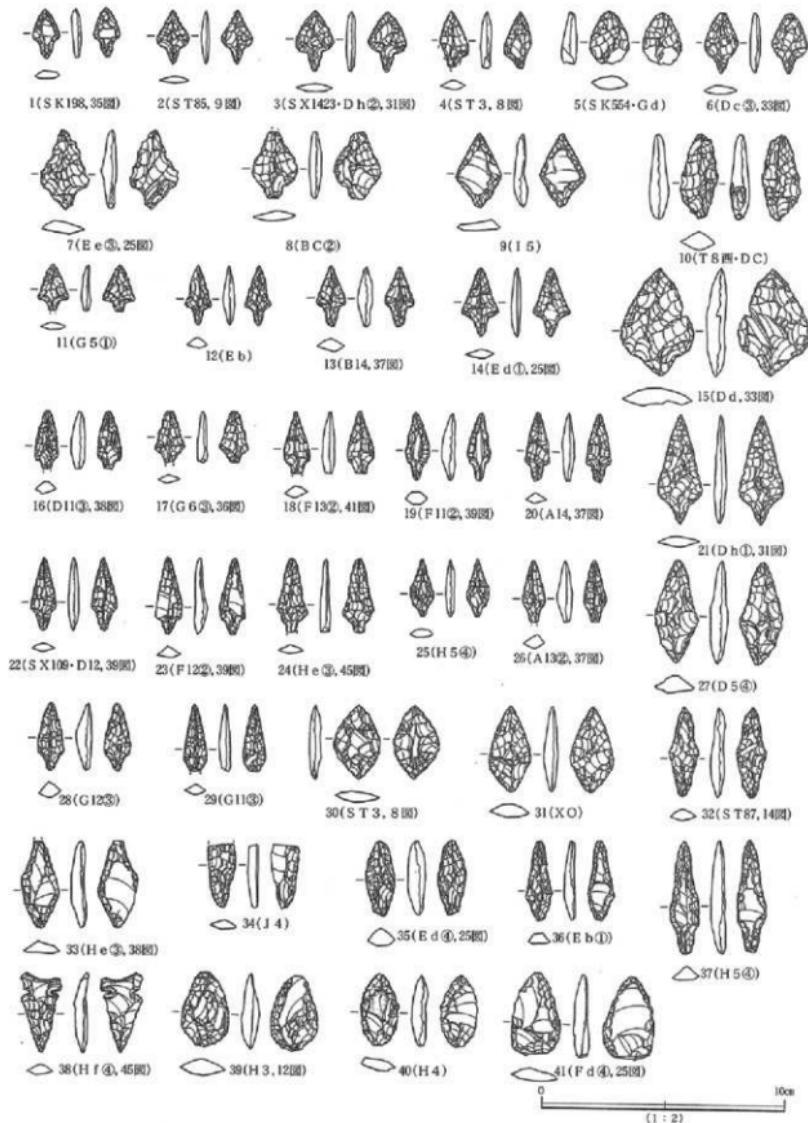
大型のものが出土している。数量はもっと多いが、選択して掲載した。

**磨石：第198図219～222**

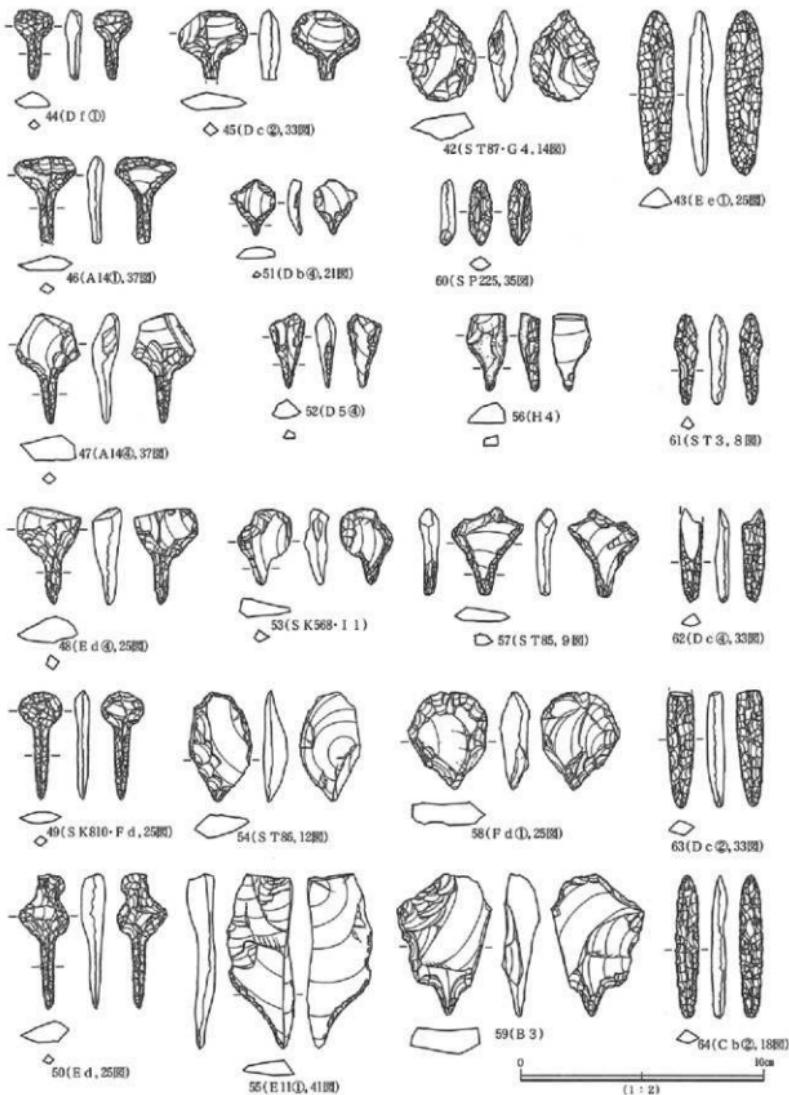
河原石の礫面に磨痕を有するもの。

**凹石：第197図208・210～213・第199図223～232**

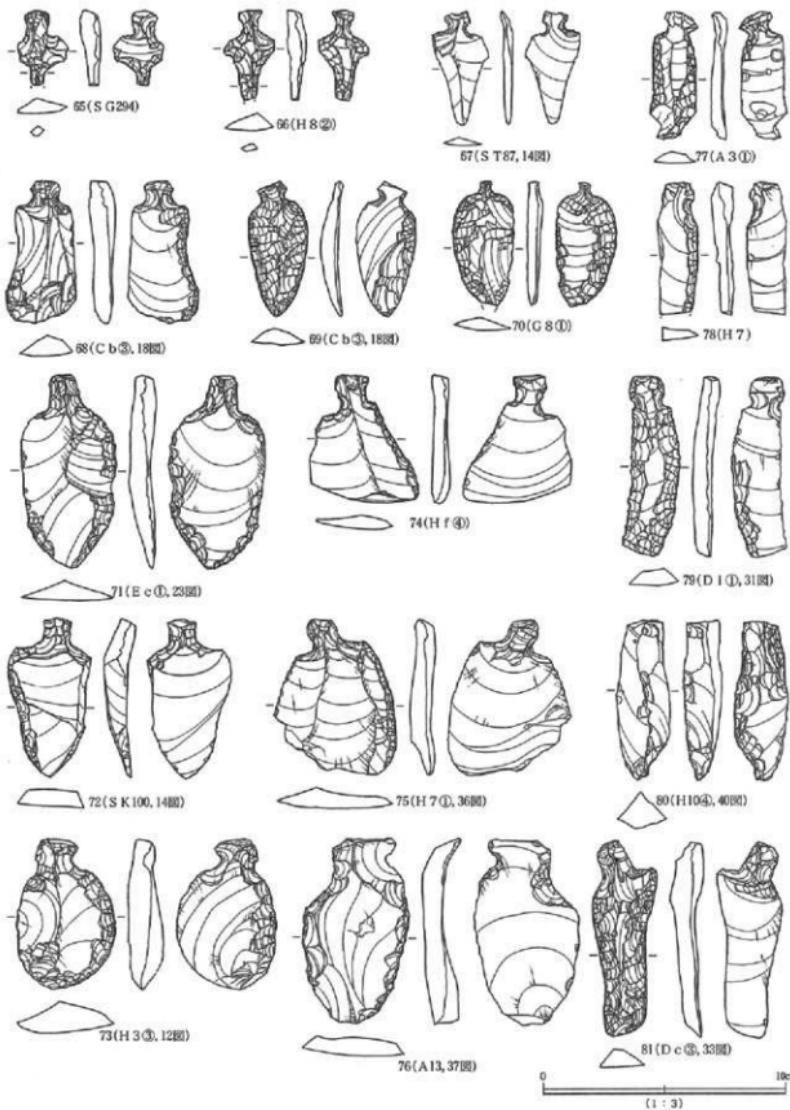
河原石の表面に敲打による凹痕を持つもの。



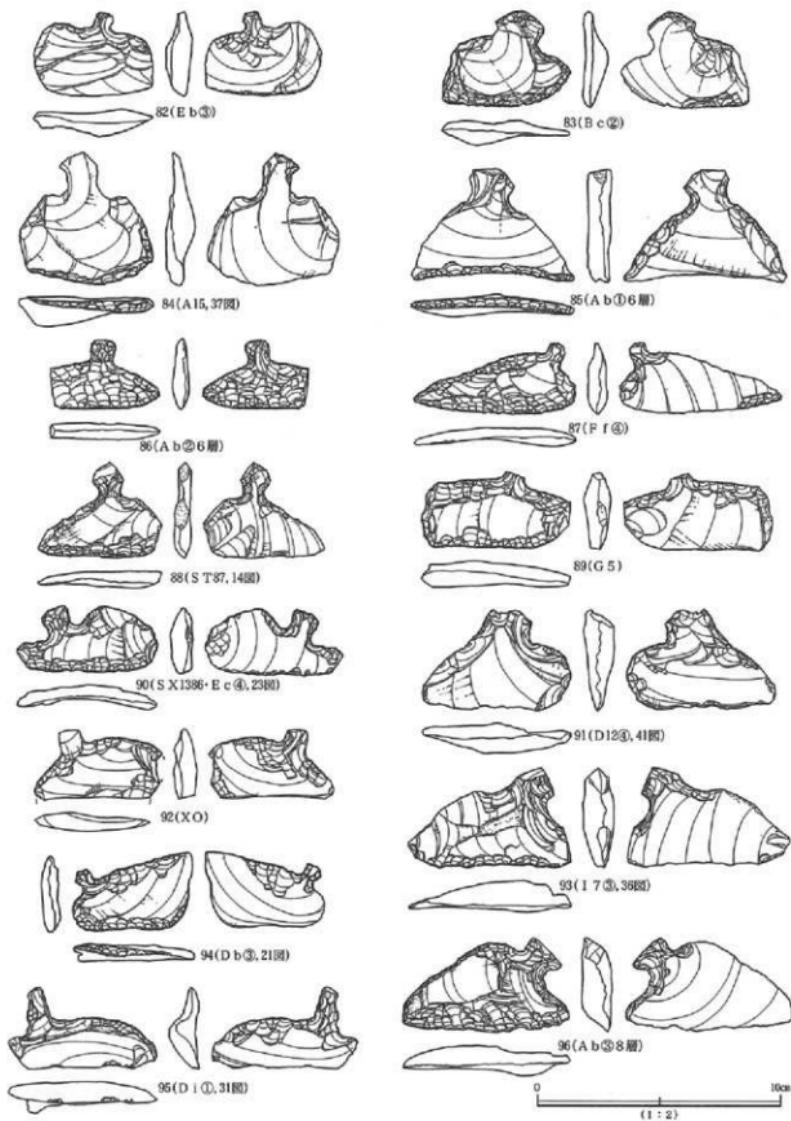
第186図 石器実測図(1)



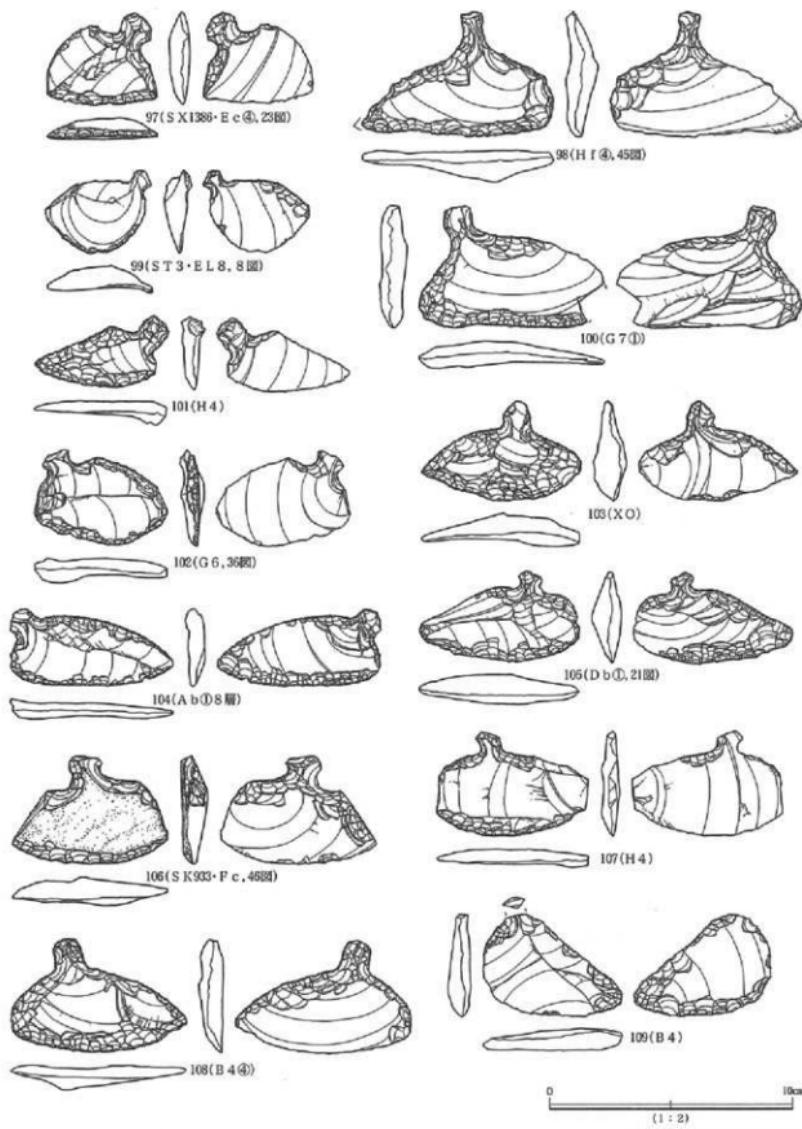
第187図 石器実測図 (2)



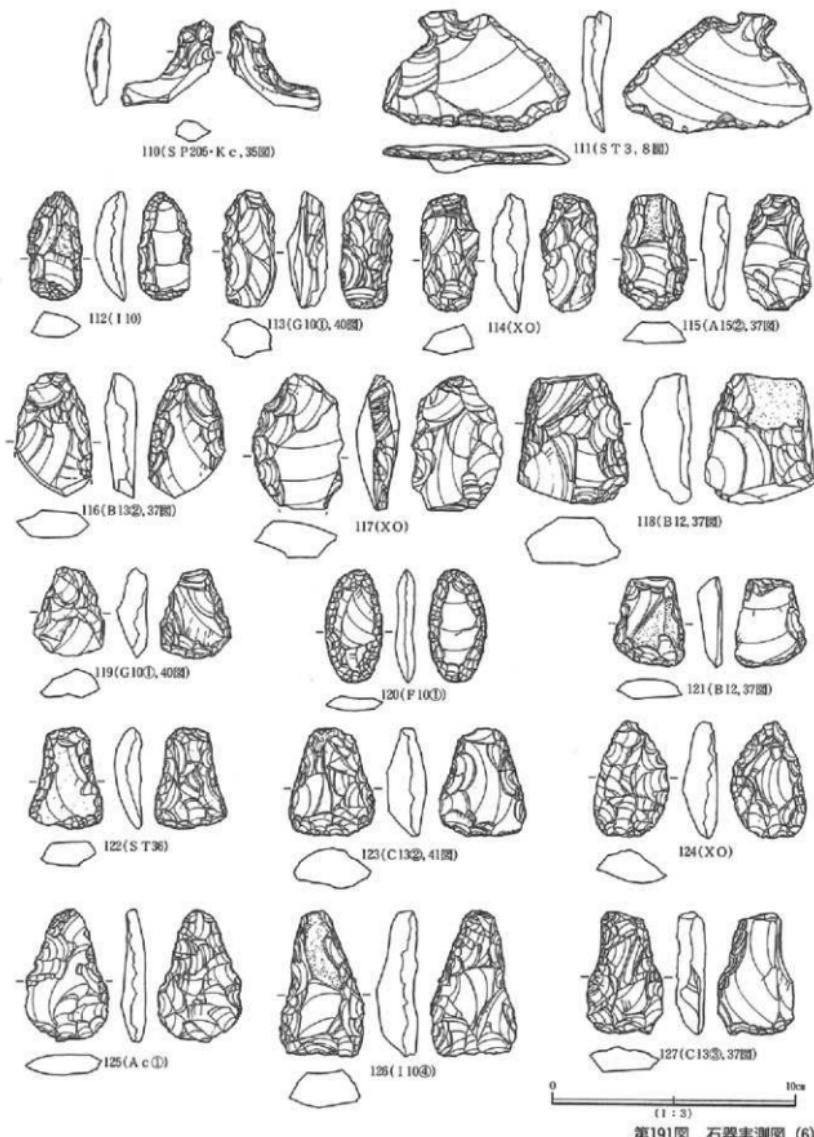
第188図 石器実測図(3)



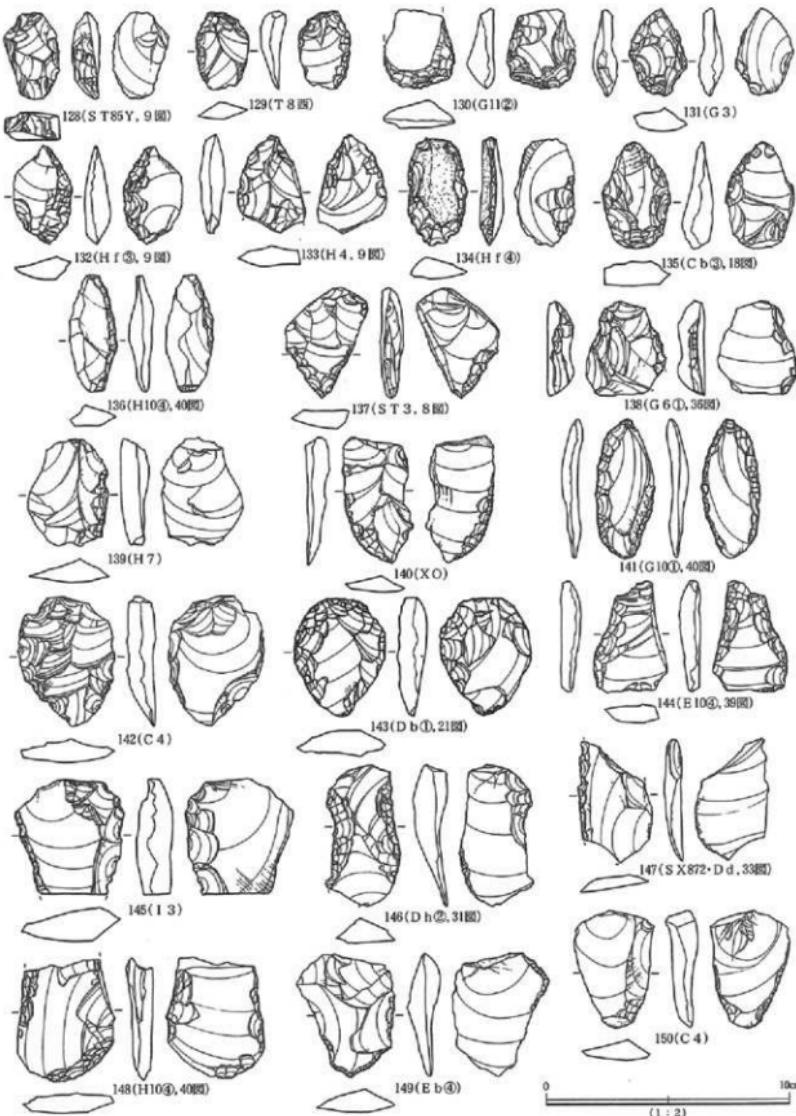
第189図 石器実測図 (4)



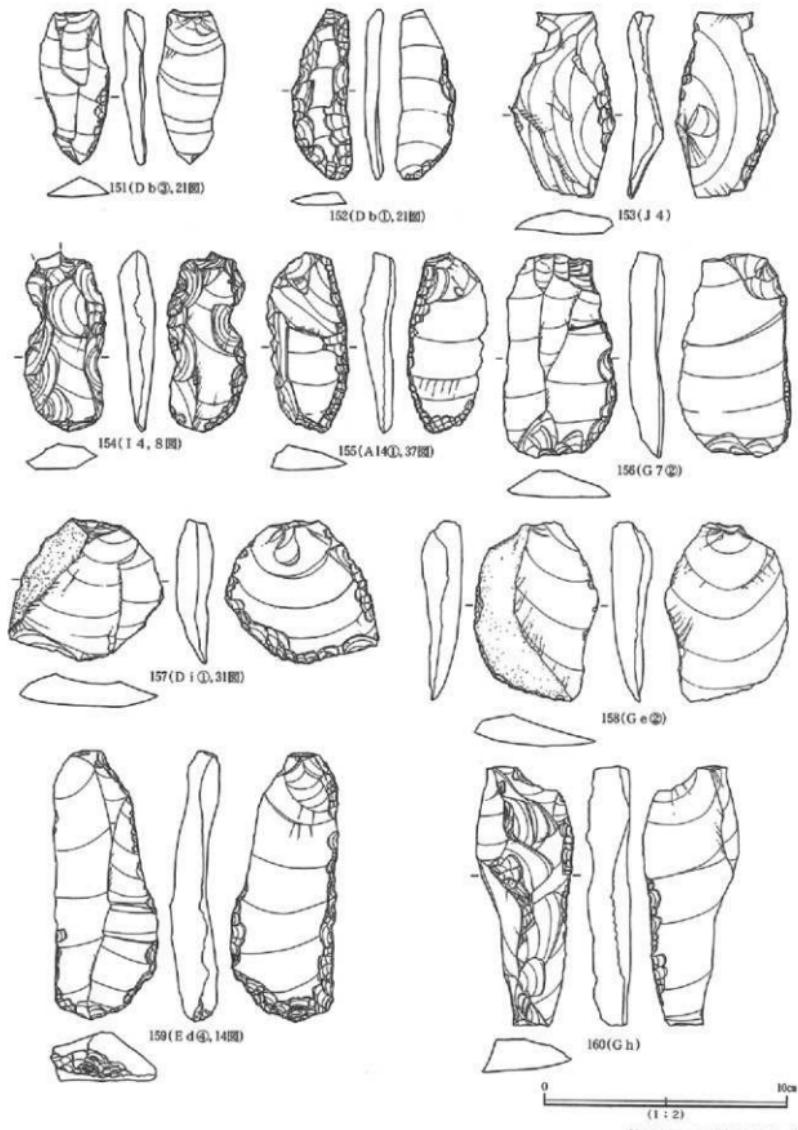
第190図 石器実測図 (5)



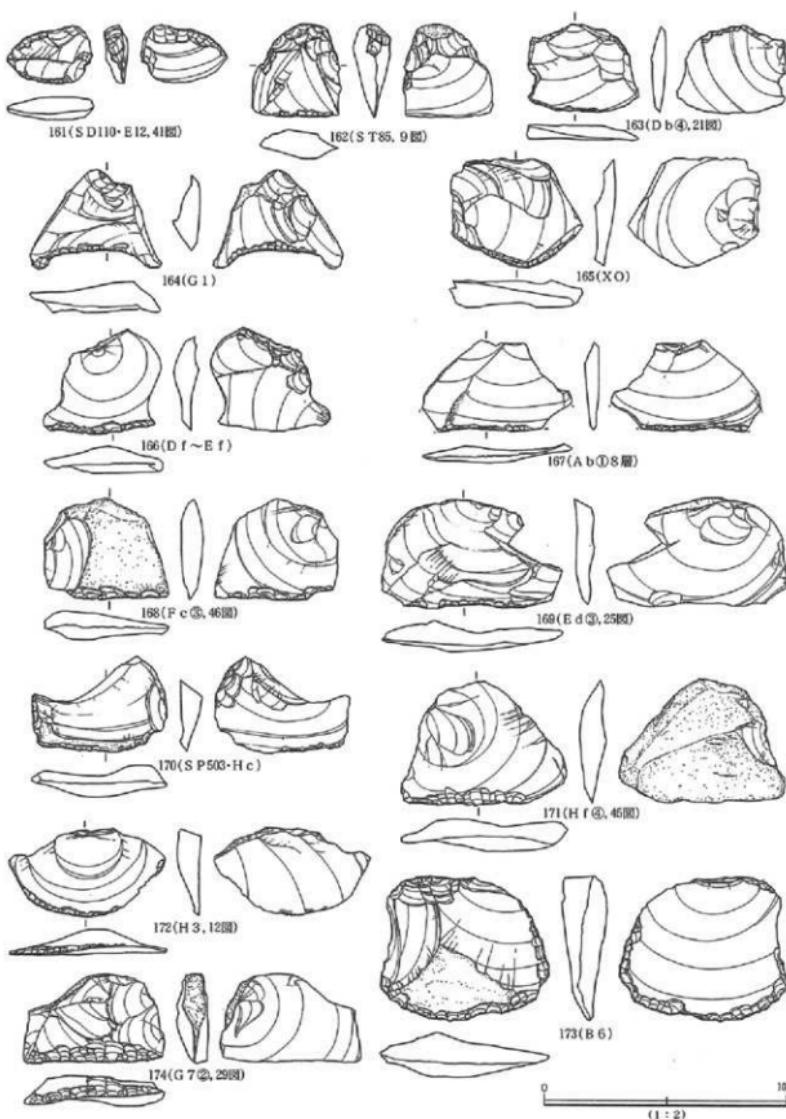
第191図 石器実測図 (6)



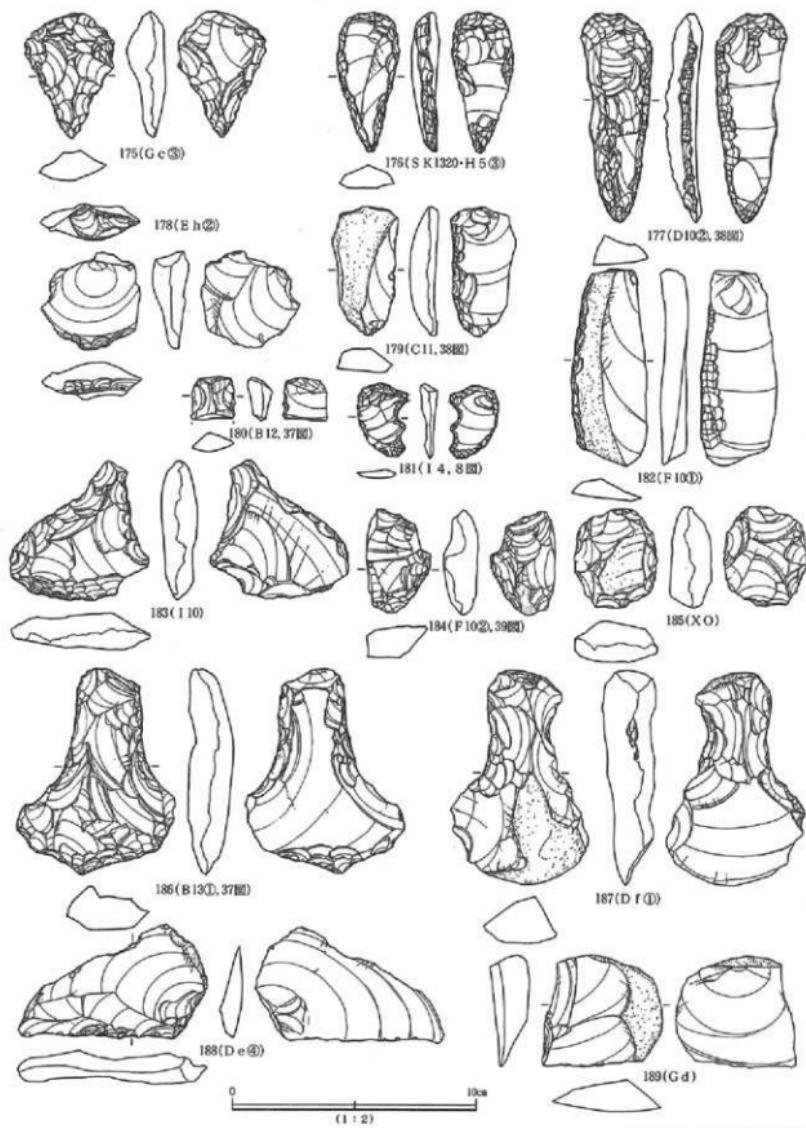
第192図 石器実測図 (7)



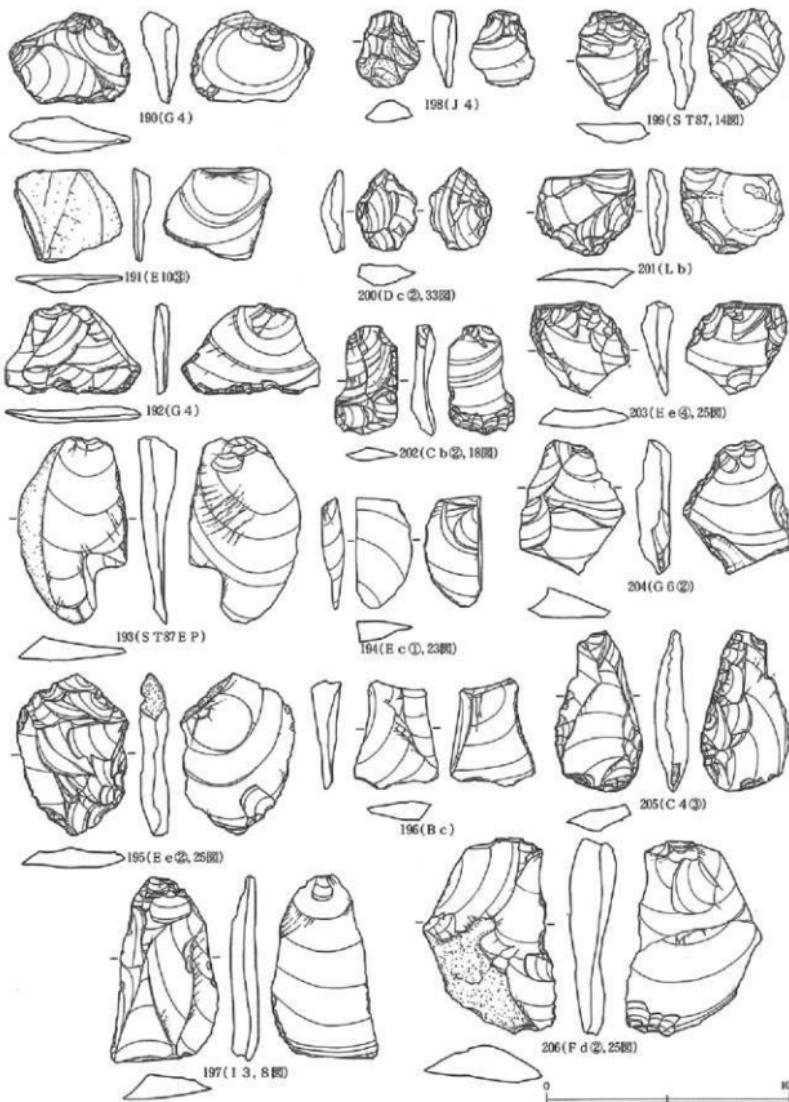
第193図 石器実測図 (8)



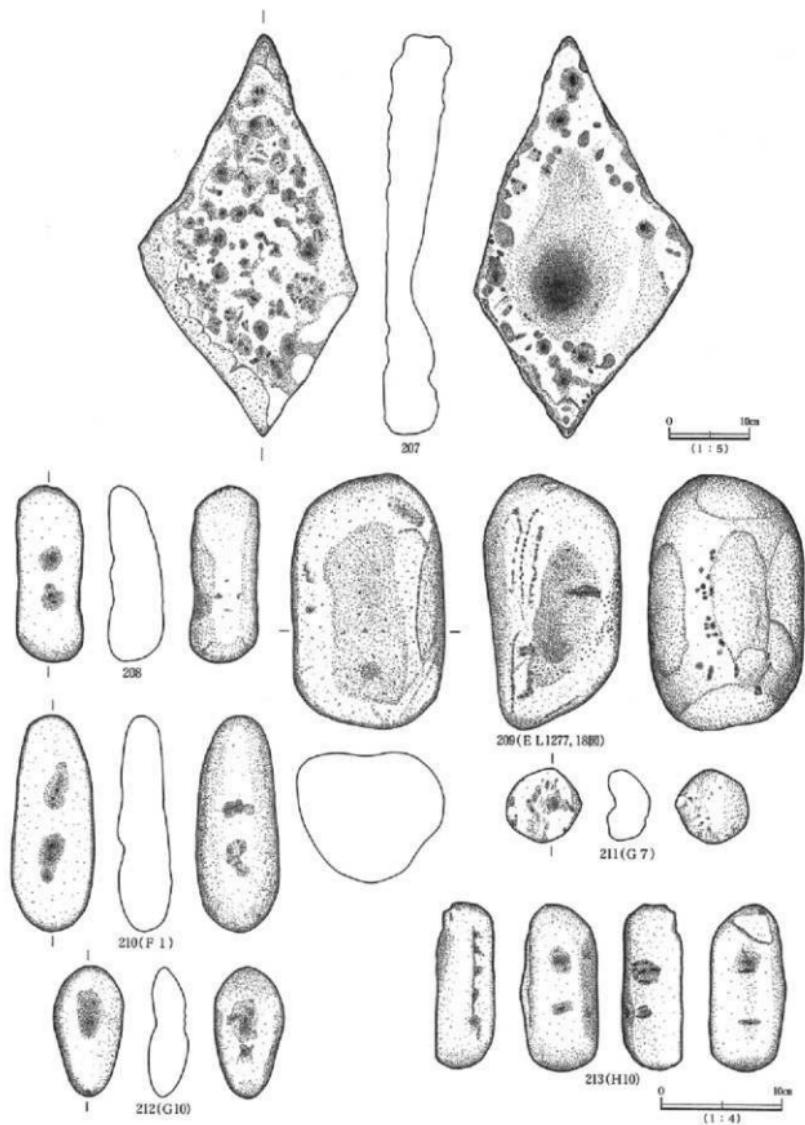
第194図 石器実測図 (9)



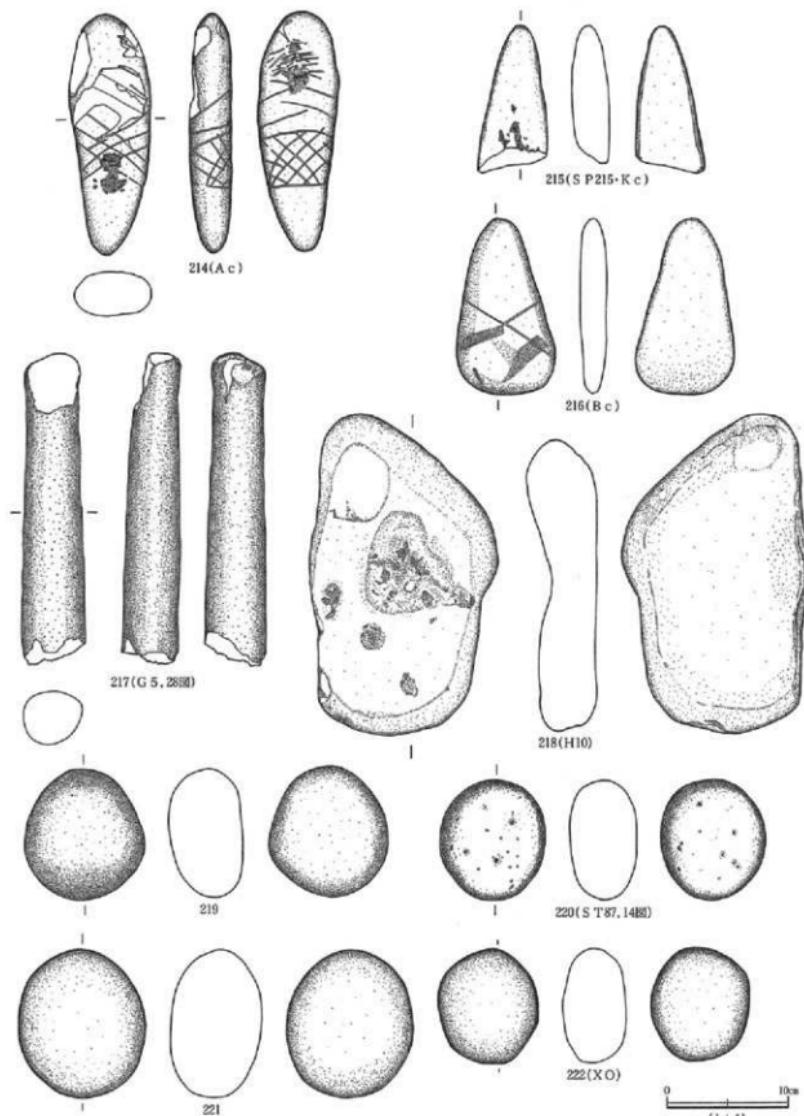
第195図 石器実測図 (10)



第196図 石器実測図 (11)

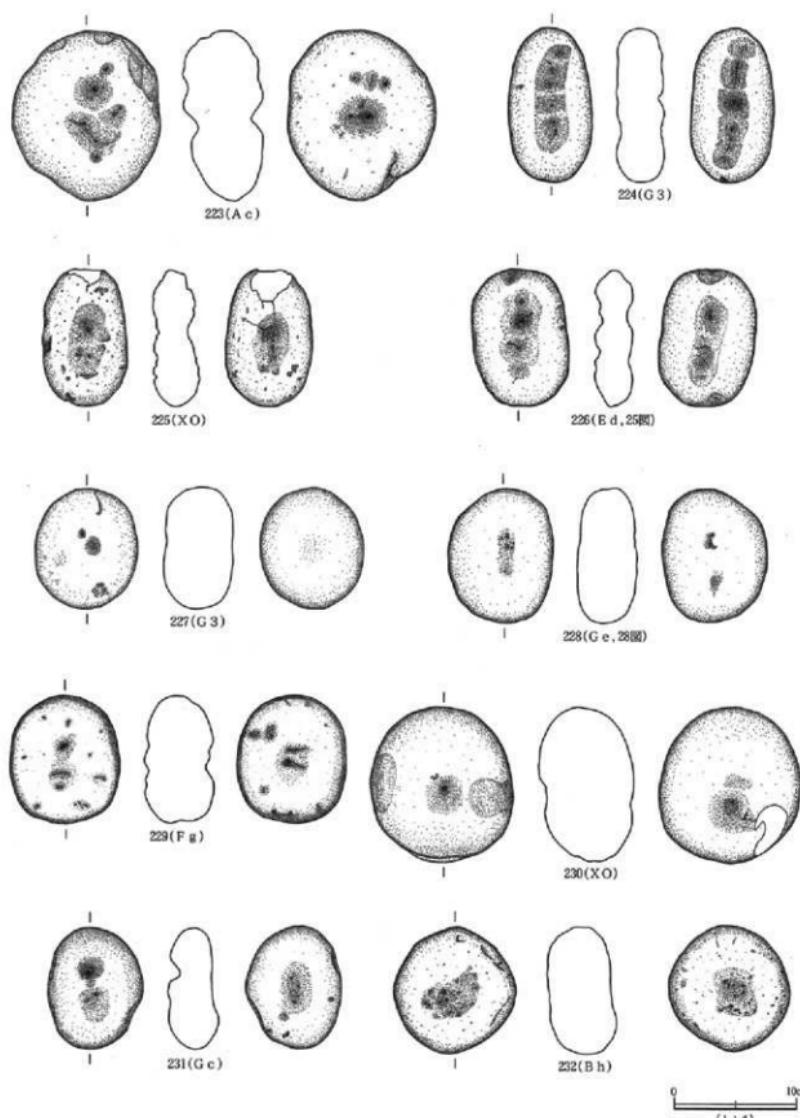


第197図 石製品実測図 (1)

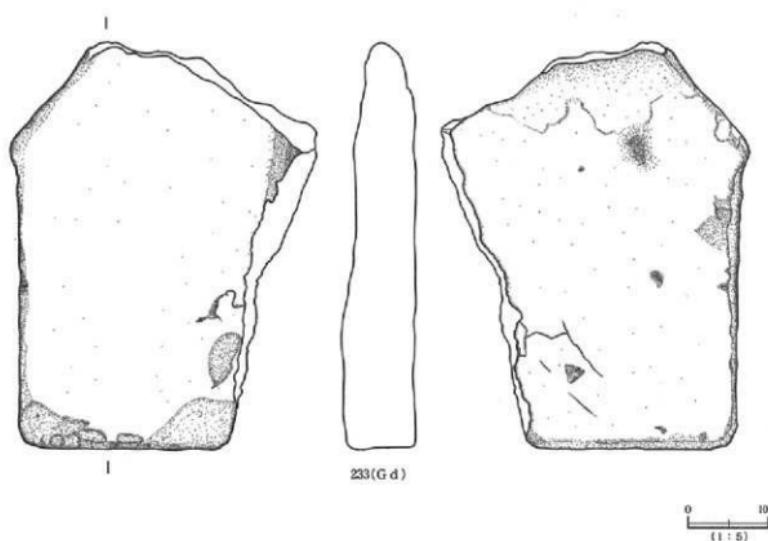


第196図 石製品実測図 (2)

出土した遺物



第199図 石製品実測図 (3)



第200図 石製品実測図 (4)

表3 砂子田遺跡石器・石製品属性表1

報告書 番号	災害 番号	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	細別	整形加工	成形加工	素材 技術	素材 形態	石材	出土 地点	特記事項	
1	12	石鏃	19.5	10.8	3.8	0.69	有茎	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	L b	SP198, BP1東、後期	
2	14	石鏃	21.6	12.9	3.5	0.56	有茎	HP	なし	不明	測片	玉髓	ST89、後期		
3	15	石鏃	24.3	15.2	3.9	0.96	有茎	nHP	なし	不明	測片	珪質頁岩	D h ②	Iベルト、後期	
4	22	石鏃	22.9	11.4	5	0.95	有茎	SP	なし	不明	測片	玉髓	I ④	ST3、後期	
5	31	石鏃	21.1	15.8	6.4	1.75	不明	SP	なし	不明	測片	珪質岩	G d	SI554、石材が特徴。風化が強く剥離技術不明。	
6	10	石鏃	24.2	14	4.4	1.06	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	D c ③	後期。基部にタール	
7	8	石鏃	31.9	19.2	6.5	2.19	有茎	SP	なし	なし	測片	玉髓	E e ⑤	後期	
8	13	石鏃	27.6	18.6	5.2	1.84	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	C c ②	後期	
9	38	石鏃	30	18.7	6.2	2.29	有茎	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	I 5	後期	
10	1	石鏃	34.7	15.5	8.4	3.44	有茎	SP	なし	不明	測片	玉髓	D c	SI58、後期	
11	7	石鏃	18.9	12.8	3.9	0.55	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	G 5 ①	後期	
12	17	石鏃	24.1	10.4	4.9	0.67	有茎	nHP	なし	不明	測片	玉髓	E b	Eベルト、後期	
13	21	石鏃	24.2	11.4	5.9	0.96	有茎	SP	なし	不明	測片	玉髓	B 14 ⑤	後期	
14	4	石鏃	28.2	15.3	4.5	1.02	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	E d ①	後期	
15	8	石鏃	43.8	29.7	8.6	7.87	有茎	こすり	SI	直接打撲	砾長圓片	珪質頁岩	D d	SB395内3区、後期	
16	27	石鏃	23.7	9.5	5.8	0.93	有茎	nHP	なし	不明	測片	珪質頁岩	D 11 ③	SG、晚期。玉髓のnHP工具を珪質頁岩に用いたときの典型	
17	3	石鏃	21	12	4.4	0.72	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	G 6 ⑤	後期	
18	26	石鏃	25.3	10.3	5.5	1.01	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	F 13 ②	SG、晚期	
19	24	石鏃	27.1	9.4	5.7	1.13	有茎	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	F 11 ②	SG、C-レンチ、晚期	
20	23	石鏃	27.6	9.7	5.4	0.89	有茎	SP	なし	不明	測片	玉髓	A 14	晚期	
21	19	石鏃	44.3	18.2	5.5	2.28	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	D h ①	後期	
22	16	石鏃	29.6	10.2	4.5	0.89	有茎	nSP	なし	不明	測片	珪質頁岩	S 1109、晚期		
23	25	石鏃	31	10.6	5.8	1.02	有茎	HP	なし	不明	測片	玉髓	F 12 ⑤	SG、晚期	
24	18	石鏃	30	12.2	4.4	0.75	有茎	SP	なし	不明	測片	頁岩	H e ③	後期。基部にタール付着。後期、H5から東へ2.0m、北	
25	11	石鏃	22.9	9.2	4	0.64	有茎	nHP	なし	不明	測片	珪質頁岩	H 5 ④	後期、H5から東へ2.0m、北	
26	20	石鏃	24.9	8.9	6.2	0.96	有茎	HP	なし	不明	測片	玉髓	A 13 ②	晚期	
27	36	石鏃	41.7	17.4	7.6	3.44	凸筋	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	D 5 ④	後期	
28	2	石鏃	27.3	10.4	6.6	1.22	有茎	HP	なし	不明	測片	黑曜石	G 12 ③	晚期	
29	40	石鏃	27.4	9.6	5.1	0.97	有茎	nSP	なし	不明	測片	鉄英石	G 11 ③	SG、F-レンチ、晚期	
30	41	石鏃	29.9	18.5	5.2	2.01	凸筋	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	I 4 ③	ST3、後期	
31	39	石鏃	34.6	17.6	6.3	2.64	凸筋	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	X O	XX、後期	
32	116	石鏃	37.1	12.5	6.1	1.80	凸筋	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	H 4	ST87	
33	37	石鏃	35.3	15.5	6.2	2.20	有茎	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	H e ③	後期	
34	118	石鏃	25.8	11.7	4.9	1.25	不明	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	J 4	後期、グリッド優先。場調は最弱のST4	
35	6	石鏃	30.7	11.6	7.6	2.48	有茎	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	E d ③	後期	
36	35	石鏃	32.2	10.4	5.1	1.25	有茎	nHP	なし	なし	測片	珪質頁岩	E b ①	後期	
37	5	石鏃	45.9	11.9	6.3	2.66	有茎	nHP	なし	間接打撲	砾長圓片	珪質頁岩	H 5 ④	後期、H5から東へ2.5m、北	
38	43	アメリカ式石鏃	32.8	17	5.9	1.68	なし	HP	RI	不明	測片	珪質頁岩	H f ④	後期	
39	34	石鏃	30.6	19.5	7.9	3.84	円錐	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	H 3	ST88、後期	
40	32	石鏃	29.3	15.3	6.8	2.50	未製品	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	H 4	ST4、後期	
41	33	石鏃	34	20.3	7.4	4.07	未製品	HP	なし	HD	砾長圓片	珪質頁岩	F d ③	F-ベルト、後期	
42	28	尖頭器	37.1	23.3	11.9	8.48	不明	なし	HD	砾長圓片	珪質頁岩	F 4	ST87、後期		
43	121	尖頭器	67.6	15.4	10.6	8.24	柳葉形	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	E e ①	後期	
44	113	石鏃	28.4	15.6	6.9	1.64	長い尖頭部	HP	/急角度	なし	不明	測片	珪質頁岩	D f ①	後期
45	109	石鏃	28.5	27.6	8.2	4.83	長い尖頭部	nSP	/急角度	なし	不明	測片	珪質頁岩	D c ②	後期
46	105	石鏃	35.5	25.2	6.6	2.56	長い尖頭部	HP	/急角度	なし	不明	測片	珪質頁岩	A 14 ①	晩期
47	108	石鏃	44.7	26	11.6	6.83	長い尖頭部	nSP	/急角度	なし	HD	砾長圓片	珪質頁岩	A 14 ④	晩期
48	110	石鏃	39.3	26.4	12	6.56	長い尖頭部	HP	/急角度	RI	砾長圓片	珪質頁岩	E d ③	後期	
49	112	石鏃	44	17.4	6.4	2.18	長い尖頭部	nSP	/急角度	なし	不明	測片	珪質頁岩	S 810、後期	
50	111	石鏃	55	20.4	10.1	5.04	長い尖頭部	nSP	/急角度	なし	不明	測片	珪質頁岩	E d	F-ベルト、後期
51	129	石鏃	22.6	17.8	5.7	1.47	長い尖頭部	SP	なし	HD	砾長圓片	珪質頁岩	D b ④	後期	
52	130	石鏃	30	13.7	8.3	2.10	長い尖頭部	nSP	/急角度	なし	HD	測片	珪質頁岩	D 5 ④	後期
53	114	石鏃	30.9	21.7	10.1	3.75	短い尖頭部	なし	なし	HD	砾長圓片	珪質頁岩	I 1	SK568、後期。細部は使用痕跡離で覆われている。	
54	125	石鏃	44.9	24.9	9.7	8.58	短い尖頭部	HP	なし	HD	砾長圓片	珪質頁岩	H 3	ST88、後期	
55	128	石鏃	71.1	27.1	11.6	13.89	短い尖頭部	HP	なし	HD	砾長圓片	珪質頁岩	E 11 ①	晩期	
56	124	石鏃	31.8	16	8.6	3.90	短い尖頭部	HP	/急角度	なし	不明	測片	頁岩	H 4	ST4、後期
57	107	石鏃	35.6	28.9	8.5	4.94	長い尖頭部	HP	/急角度	新取り?	HD	測片	珪質頁岩	H 4	ST85、後期
58	143	石鏃	39.9	24.2	12.1	12.97	なし	HD	測片	玉髓	F d ①	後期			
59	127	石鏃	58.1	38.3	15.1	19.14	短い尖頭部	SP	SD	SD	測片	珪質頁岩	B 3	東ベルト、後期	
60	115	石鏃	26.7	9.5	6.6	1.49	棒状	HP	なし	不明	測片	珪質頁岩	L d	SP225、東ベルト、後期	
61	119	石鏃	36.9	9.1	7.3	1.86	棒状	HP	/急角度	なし	不明	測片	珪質頁岩	I 4	ST3、後期
62	120	石鏃	38.1	9.6	5.5	1.48	棒状	SP	なし	不明	測片	珪質頁岩	D c ④	後期。被削資料。	

表4 砂子田遺跡石器・石製品属性表2

報告書 番号	実測 番号	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	細別	盤形加工	成形加工	素材 技術	素材 形態	石材	出土 地點	特記事項
63	117	石鏡	47.5	11.2	7	3.33	棒状	SP	なし	不明	鋸片	珪質頁岩	D c(2)	後期。先端部摩耗。
64	122	石鏡	58	9.3	6.4	2.90	棒形	HP	なし	不明	鋸片	頁岩	C b(2)	後期。
65	45	石匙	31.1	20.8	8.7	3.11	鍔形	SP	SI	HD	鋸片	地質頁岩	G 3	後期, SG294
66	44	石匙	37	20.6	8.2	3.06	鍔形	SP	SI	HD	鋸片	珪質頁岩	H 8(2)	後期。
67	42	石匙	46.6	23.1	4.9	2.09	鍔形	HP	なし	HD	鋸長鋸片	地質頁岩	G 4	SI87, 未製品、後期
68	56	石匙	58.6	29.1	11.2	13.87	鍔形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	C b(3)	後期。
69	57	石匙	55.4	24.8	9.5	7.84	鍔形	SP	SD	不明	鋸長鋸片	玉髓	C b(3)	後期。
70	54	石匙	51.1	25.4	6.9	7.03	鍔形	SP	SI	SvD	鋸長鋸片	珪質頁岩	G 8(1)	後期。
71	51	石匙	79.1	39.5	11.4	24.79	鍔形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	E c(1)	後期。
72	48	石匙	65.1	34.3	13.4	17.36	鍔形	HP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	G 4	SK100, 後期。タール付着。
73	55	石匙	61.5	41.1	15	29.15	鍔形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	H 3(3)	後期。
74	53	石匙	52.7	44.8	8.1	12.54	鍔形	HP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	H 4(4)	後期。
75	60	石匙	63.8	50.9	11.5	22.73	鍔形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	頁岩	H 7(1)	後期。
76	59	石匙	75.8	44	16.4	34.53	鍔形	HD	HD	HD	鋸長鋸片	頁岩	A 13	晩期。
77	47	石匙	52.5	19.4	7.3	4.94	鍔形	SP	なし	HI	鋸長鋸片	珪質頁岩	A 3(1)	後期。被熱資材。
78	158	石匙	54.1	16.4	9.4	7.26	なし	HP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	H 7	SK746, 後期。
79	49	石匙	73.7	23.2	11.2	12.41	鍔形	HP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	D 1(1)	後期。
80	160	石匙	65.3	22.3	16	19.26	なし	HP	HD	不明	鋸長鋸片	地質頁岩	H 10(4)	SG, 晩期。
81	50	石匙	80	25.9	14.1	17.14	鍔形	SP	SI	SD	鋸長鋸片	珪質頁岩	D 3(3)	後期。
82	63	石匙	35	48	11	11.39	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	E b(3)	後期。
83	62	石匙	39.6	52.8	10.5	11.03	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	頁岩	B c(2)	後期。
84	86	石匙	54	54.7	12.3	21.83	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	A 15	晩期。アスファルト付着。
85	75	石匙	45.2	67	10.2	19.00	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	A b(1)	SK46、後期。
86	66	石匙	28.7	44.3	7.7	6.19	横形	SP	なし	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	A b(2)	SGトレンチ6層、後期。アスファルト付着。
87	68	石匙	28.1	65.2	8.3	10.40	横形	SP	SI	SvD	鋸長鋸片	珪質頁岩	F 4(4)	後期。アスファルト付着。
88	61	石匙	39.2	50.1	7.3	8.61	横形	SP	SI	SD	鋸長鋸片	地質頁岩	G 4	SI87, 後期。
89	69	石匙	31.4	61.5	11.2	18.45	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	G 5	SI7, 後期。
90	81	石匙	27.2	57	9.7	9.92	横形	HP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	E c(4)	後期。
91	97	石匙	41.1	61.3	12.7	17.89	横形	HP	HD	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	D 12(4)	後期。
92	74	石匙	28.9	51.9	9.6	11.43	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	X O	XO、後期。
93	72	石匙	40.7	67.1	13	22.76	横形	HP	HD	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	I 7(3)	後期。
94	87	石匙	31.4	49.4	7.6	9.42	横形	SP	なし	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	D b(3)	後期。
95	84	石匙	33.5	60.5	12.9	13.00	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	D I (1)	後期。
96	58	石匙	38.6	68.8	12.8	23.25	鍔形	SP	SI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	A b(3)	後期、SG8層。刃部にBタイプの使用痕が見られる。
97	71	石匙	37.7	45	8.9	13.02	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	E c(4)	後期。
98	55	石匙	51.6	78.5	13.2	26.67	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	地質頁岩	H 4(4)	後期。
99	90	石匙	33.6	43.1	11.6	8.06	横形	HP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	I 4	STP内EL8、後期。
100	65	石匙	50.3	76	11.6	25.45	横形	SP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	G 7(1)	後期。
101	85	石匙	29.8	54.3	9.9	7.15	横形	SP	SI	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	H 4	SI4、後期。
102	73	石匙	39.2	54.2	10.4	13.41	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	G 6	後期。
103	88	石匙	40.8	65	13.9	20.49	横形	SP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	X O	RIP1403と同一地点出土の可能性もある。後期、刃部邊緣が磨耗している。
104	78	石匙	31.7	66.5	8.5	10.86	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	A b(1)	SG8層、後期。アスファルト付着。
105	64	石匙	37.2	65.3	12.4	21.25	横形	nSP	SI	SvD	鋸長鋸片	珪質頁岩	D b(1)	後期。
106	77	石匙	44.2	63.5	11.9	24.36	横形	HP	HI+HD	HD	短形鋸片	珪質頁岩	F c	SK933、後期。
107	70	石匙	42.7	62.1	7.8	14.53	横形	HP	なし	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	H 4	SI4、後期。
108	79	石匙	46.4	71.7	10.5	20.42	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	B 4(4)	後期。
109	180	石匙	41.8	56.9	9.2	17.65	横形	SP	なし	SD	鋸長鋸片	珪質頁岩	B 4	東西トレンチ、後期。つまみ部分が削れています。
110	205	石匙	35.9	38.3	10.2	6.13	なし	なし	HD	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	X O	SP205、B区東、後期。容器の可能性あり。
111	76	石匙	49.8	76.8	11.9	26.00	横形	HP	HI	HD	鋸長鋸片	珪質頁岩	I 4	SI3、後期。
112	95	石匙	44.4	22.6	13.1	11.33	短曲形	HP	HI	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	I 10	後期、SG。
113	96	石匙	47.9	21.7	16.3	16.45	短曲形	なし	HD	HD	鋸片	珪質頁岩	G 10(1)	晩期。石匙の未製品の可能性あり。
114	90	石鏡	48.6	24	15.2	13.68	短曲形	HP	HP	不明	鋸片	珪質頁岩	X O	B区西、後期。
115	92	石鏡	47.8	28.3	11.8	14.65	短曲形	HP	HP	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	A 15(2)	晩期。
116	94	石鏡	53.5	41	20	20.90	短曲形	なし	HD	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	B 15(2)	晩期、刃部欠損。
117	91	石鏡	55.4	37.4	18	31.33	短曲形	なし	HP	不明	鋸片	珪質頁岩	X O	予備調査トレンチII。未製品か。
118	93	石鏡	53.4	46.1	20.9	49.06	短曲形	なし	HD	不明	鋸長鋸片	珪質頁岩	B 12	晩期、基部欠損。
119	102	石鏡	36.6	29.3	13	10.68	短曲形	HP	HD	不明	鋸片	頁岩	G 10(2)	晩期。
120	100	石鏡	46.2	24	8.5	8.82	短曲形	SI	SI	SD	鋸長鋸片	頁岩	F 10(1)	晩期SG跡ステパCトレンチ。Dタイプ使用痕。
121	103	石鏡	36.9	29.4	10.1	10.30	短曲形	HP	HI	HD	鋸片	玉髓	B 12	晩期。

表5 砂子田遺跡石器・石製品属性表3

報告番 号	実測 番号	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	細別	整形加工	成形加工	素材 技術	素材 形態	石材	出土 地點	特記事項
122	105	石鑿	41.5	30.2	11.6	22.53	櫛形	なし	HD	HD	横長剥片	頁岩	C 13②	晚期
123	104	石鑿	44.5	35.4	16.5	13	櫛形	HP	Hf	HD	圓片	頁岩	ST36(西)	
124	101	石鑿	47.6	31.4	14.5	16.68	櫛形	HP	Hf	不明	圓片	玉髓	XO	SP出土だが、番号不明、後期
125	99	石鑿	54.3	34.5	10.6	14.97	櫛形	SI	SI	SD	圓片	頁岩	A c ①	後期
126	98	石鑿	59.7	35.2	12.2	20.30	櫛形	なし	HD	HD	横長剥片	頁岩	I 10④	
127	97	石鑿	50.1	31.7	11.7	19.78	櫛形	なし	HD	HD	横長剥片	頁岩	C 13③	晚期
128	144	削器	35.8	23.1	11.6	9.17	なし	HP	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	ST85床面、後期	
129	178	削器	32.1	21.6	10.7	5.11	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	XO	T85、後期
130	131	削器	32.4	28.6	11.4	8.13	なし	HP	HD	HD	圓片	珪岩	G 11②	晚期、被熱質料。
131	136	削器	35.6	23.4	10	6.67	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	G 3	ST4、後期
132	30	削器	40.1	24.2	10.9	7.39	なし	HP	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	H f ③	後期。成形加工でバブル除去。石鑿か石鑿の未製品の可能性あり。
133	170	削器	40.4	28.4	10.7	8.15	なし	HP	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	H 4	グリッド優先、彌縫は最初のST7、後期
134	155	削器	43.8	24.5	9.8	9.86	なし	HP	Hf	HD	横長剥片	珪質頁岩	H f ④	後期
135	140	削器	43.8	28	12.7	11.38	なし	HP	Hf	HD	圓片	珪質頁岩	b ③	後期
136	157	削器	48	19.5	9.7	6.44	なし	不明	なし	不明	圓片	珪質頁岩	H 10④	SG、晚期。被熱質料
137	197	削器	45	34	9.6	11.80	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	I 4	ST3、後期
138	147	削器	38.4	32.6	11.2	11.95	なし	HP	Hf	HD	横長剥片	玉髓	G 6①	後期
139	151	削器	43.8	33.2	11.6	10.81	なし	SP	なし	HD	横長剥片	玉髓	H 7	後期
140	175	削器	51.9	28.7	10.3	11.63	なし	SP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	XO	B区西、後期
141	159	削器	56.9	24.5	8.9	8.43	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	G 10③	後期
142	142	削器	53.3	39.6	12	21.16	なし	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	C 4	東西トレンチ、後期	
143	29	削器	48.3	37.8	12.3	17.01	なし	HD	HD	彫形片	珪質頁岩	D b ①	後期	
144	179	削器	45.5	30.5	8.7	11.20	なし	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	E 10④	後期	
145	174	削器	47.5	44.9	14.8	24.00	なし	HP	Hf	HD	横長剥片	珪質頁岩	I 3	グリッド優先、彌縫は最初のST4-5
146	186	削器	57.5	30.8	14.3	16.33	なし	HP	Hf	HD	横長剥片	珪質頁岩	b h ②	後期
147	188	削器	48.5	30.3	7.5	8.46	なし	なし	なし	不明	横長剥片	珪質頁岩	D d	ST3/2、後期
148	146	削器	49.5	40.2	11.1	20.54	なし	HP	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	H 10④	南北ベルト、後期
149	199	削器	49.8	40.3	13.6	17.55	なし	HP/刃つし	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	E b ④	後期
150	200	削器	47.9	32.6	13.5	12.06	なし	SP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	C 4	東西トレンチ、後期。縁辺の彌縫な溝離は使用痕。
151	152	削器	63.5	28.2	9.8	13.27	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	b d ⑤	後期
152	166	削器	69.8	24.7	7.6	11.47	なし	SP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	D b ①	後期
153	45	削器	76.2	42.3	15	23.77	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	J 4	後期、SG。
154	52	削器	73.7	33	15.5	29.55	彫形	HP	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	I 4	ST3、後期
155	156	削器	73.7	33.3	14	25.48	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	A 14①	後期
156	164	削器	84.3	45.6	15	54.35	なし	HP	なし	HD	横長剥片	頁岩	G 7②	後期。縁辺の不規則溝離は使用痕。
157	173	削器	59	63.5	15.1	42.99	なし	HD/断面	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	D 1①	後期
158	169	削器	73.5	50.9	17.1	43.69	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	G e ②	後期
159	161	削器	109.9	43.3	20.4	44.07	なし	なし	Hf	HD	横長剥片	珪質頁岩	D e ④	初期。先端に雷歎痕。
160	167	削器	106.2	39.5	18.3	60.97	なし	HP	なし	HD	横長剥片	頁岩	G h	中央ベルト、後期
161	168	削器	23.8	35.4	9.6	7.28	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	E 12	SD10、後期
162	181	削器	38.3	36.9	15.2	15.72	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	H 4	グリッド優先、彌縫は最初のST4、後期。刃部に微細な擦離痕あり。ST85
163	176	削器	36.1	45.6	6.6	10.54	なし	HP	なし	SD	横長剥片	珪質頁岩	D b ④	後期
164	205	削器	40.6	53.5	12.9	15.07	なし	HP	HD	彫形片	珪質頁岩	G 1	後期	
165	194	削器	45.1	54.5	11.3	22.78	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	後期。東西トレンチ	
166	185	削器	42.3	48.8	10.8	15.40	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	D f E f ④	木ハリット、後期
167	191	削器	37.7	62.1	7.5	11.61	なし	HP	HD	横長剥片	珪質頁岩	A b ①	SGB層、後期	
168	195	削器	41.2	51	11.9	21.29	なし	なし	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	F c ③	後期
169	196	削器	44.7	74.2	12.7	27.90	なし	HP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	E d ④	後期
170	199	削器	39.3	58.8	13.4	16.95	なし	HP	なし	HD	横長剥片	頁岩	H c	SPS3、後期
171	183	削器	50.7	68.5	13.6	36.44	なし	SP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	H f ④	後期
172	182	削器	36.1	64.7	10.4	14.80	なし	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	H 3	グリッド優先、彌縫は最初のST4、後期	
173	184	削器	58.2	69.5	18.4	63.05	なし	HP	HD	横長剥片	珪質頁岩	B 6	S66層、後期。粗碧石。	
174	145	削器	36.5	57.9	12.6	28.04	なし	SP	なし	HD	横長剥片	珪質頁岩	G 7②	後期
175	126	尖頭削器	51.8	36.3	16.2	19.72	なし	なし	HD	HD	横長剥片	珪質頁岩	C c ③	小ベルト
176	123	尖頭削器	57.5	25.4	11.5	13.34	無い尖頭部	HP/急角度	HP	HD	横長剥片	頁岩	H 5③	SK132D、後期
177	89	尖頭削器	35.8	29.3	15.6	29.35	丸形	HP	Hf	HD	横長剥片	珪質頁岩	D 10②	後期。被熱質料。
178	137	標器	38.9	40.5	15.1	16.17	なし	HP	なし	HD	彫形片	珪質頁岩	E h ②	後期
179	165	頭状彫器	52.8	26.8	11.6	16.33	なし	なし	HI	HD	横長剥片	珪質頁岩	C 11	SD241南側、後期
180	204	器種不明	17.8	18	9.8	2.79	なし	SP	なし	SD	横長剥片	鐵石英	B 12	後期

表6 砂子田遺跡石器・石製品属性表4

報告書番号	実測番号	器種	長mm	幅mm	厚mm	重量g	縦別	整形加工	成形加工	素材技術	素材形態	石材	出土地點	特記事項
181	203	異形石器	30.2	20.2	7.4	3.86	なし	HP	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	I 4	S13、後期
182	171	圓筒状削器	80.4	31.3	11.8	28.71	なし	HD/磨歯	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	F 10①	SG、後期
183	82	器種不明	56.7	56.8	15.3	33.56	横形	なし	HD	不明	不明	珪質頁岩	I 10	SG、後期。石器未認品の可能性あり。
184	138	両極石器	42.6	26.7	14.5	16.06	なし	なし	HvD	不明	調片	珪質頁岩	F 10②	晩期
185	135	両極石器	41	34.4	17.2	25.38	なし	なし	HD	鉗片	玉髓	XO	B区西、後期	
186	261	打削石斧	83.8	54.8	19.3	73.26	横形	なし	HD	縦長調片	無色頁岩	B 13②	晩期	
187	202	打削石斧	87.3	56.8	22.2	98.88	横形	なし	HD	縦長調片	頁岩	D f①	後期	
188	159	使用痕調片	46.7	77.6	13.5	27.38	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	D e④	cベルト、後期	
189	188	使用痕調片	45.5	49.7	16.5	31.81	なし	なし	HD	縦長調片	頁岩	G d	SK54、後期。刃部に微細調節痕あり。	
190	139	使用痕調片	37.1	49.4	15.2	21.16	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	G 4	SP132、後期	
191	187	使用痕調片	37.9	43.7	7.5	8.25	なし	なし	HD	矩形調片	珪質頁岩	E 10③	晩期。刃部に微細調節痕あり。	
192	149	使用痕調片	37	56.1	6.7	10.84	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	G 4	SP138	
193	189	使用痕調片	76.6	44.8	15.7	31.46	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	H 4	ST87内EP1345、石器の注記はEP1296となっている。刃部に微細調節痕あり。	
194	193	使用痕調片	45.3	23.3	9.2	8.45	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	E c①	後期	
195	154	使用痕調片	65	45.1	12.3	32.55	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	E e②	後期	
196	192	使用痕調片	44.2	34.3	12.5	12.00	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	B c	サブトレチ、後期。刃部に微細調節痕あり。	
197	153	使用痕調片	75.3	44.4	11.3	34.39	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	I 3	SI131、後期	
198	141	二次加工調片	31.7	25.2	9.9	5.58	なし	なし	HD	鉤形調片	珪質頁岩	J 4	SG、後期。未認品か。	
199	132	二次加工調片	40.6	31.2	12.6	11.09	なし	なし	HD	調片	珪質頁岩	G 4	ST87、後期	
200	134	二次加工調片	33.5	25.1	9.8	6.60	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	D c②	後期	
201	133	二次加工調片	35.4	41.4	8.6	10.22	なし	なし	HD	調片	珪質頁岩	L b	SP188、B区東、後期。被磨資料。	
202	163	二次加工調片	45	29.8	10	8.57	なし	なし	HD	縦長調片	珪質頁岩	C b②	後期。	
203	162	二次加工調片	38.3	41	13.2	13.01	なし	なし	HD	矩形調片	珪質頁岩	E e④	後期	
204	172	二次加工調片	54.8	43.7	14.1	24.22	なし	なし	HD	鉤形調片	珪質頁岩	G 6②	後期	
205	177	二次加工調片	65	35.3	13.6	20.91	なし	なし	HD	横長調片	珪質頁岩	C 4③	後期	
206	148	二次加工調片	80.1	54.9	19	58.40	なし	なし	HD	縦長調片	頁岩	F d②	後期	
207	10	石皿	410	210	64	4240								
208	76	四石	141	56	42	480							A 13②	2075
209	43	石皿	220	131	11	2920								BL1277
210	77	四石	174	69	47	660								BL126
211	65	門石	59	56	35	120								BL1383
212	72	四石	107	58	30	180								G 10①
213	75	門石	133	62	43	540								H 10②、南北ベルト両
214	1	磨製石斧	196	65	34	379								A c②
215	2	磨製石斧	122	53	28	290								SP215, RO495
216	3	磨製石斧	141	79	19	218								B c④
217	4	石柳	254	51	45	900								BL158
218	6	石皿	325	189	72	6660								H 10④
219	36	磨石	106	95	69	919								H 10④
220	37	磨石	97	86	55	710								ST87
221	42	磨石	121	105	74	1440								
222	38	磨石	94	83	47	520								南西
223	79	円石	138	120	64	1320								A c②③
224	82	円石	125	66	39	530								G 3②
225	83	円石	111	70	35	400								ST87
226	85	円石	110	78	40	400								RO462
227	89	円石	98	86	57	790								G 3②
228	94	円石	106	86	50	65								G e②
229	95	円石	130	89	52	730								BL1163
230	98	円石	127	114	76	1400								BL357
231	100	円石	99	80	41	390								BL228
232	102	円石	130	99	47	680								B h
233	7	石圓	415	305	65	11600								G b④

#### IV まとめ

今回の調査は、日本道路公団による東北中央自動車道相馬～尾花沢線にかかる緊急発掘調査である。調査の結果を以下に列挙する。

- 1 遺跡の立地は立谷川扇状地の先端部の低湿地帯である。本遺跡からは縄文時代中期の遺物も出土しており、低湿地への進出は縄文時代中期から行われていたと推測できる。これまで縄文時代の集落の立地としては等閑視されてきたところであり注目される。
- 2 遺構は竪穴住居7棟、掘立柱建物跡1棟、遺物集中域15箇所、土器捨て場3箇所、土壌・溝跡が多数が検出された。遺構の時期はA区北側が縄文時代晚期最終末期、A区南側及びB区が縄文時代後期中葉から後葉である。他に縄文時代中期・弥生時代の遺構・遺物が出土する。
- 3 遺跡の中央を東西南北に長大な旧河川跡が蛇行している。最大幅で20mをこえる。立谷川もしくはその支流の旧河道と思われる。立谷川は暴れ川で流路をしばしば変えている。旧河道の流路はかなり蛇行しており、そうした流れの弱い場所に集落を築いたのかもしれない。また河川跡からは多量のトチの実が出土しているが、晒し場は確認できなかった。
- 4 A区北側のS K244から縄文時代後期中葉の土器が5個体ほぼ完形で出土した。東北地方南部の土器群の様相とは異なるが、一時期を画する資料として注目される。
- 5 B区の北西角の旧河川跡の土器捨て場から縄文時代後期中葉から後葉にかけての良好な資料が出土した。特にこれまで完形品の出土に恵まれなかつた西ノ浜式段階の土器が多量に出土し、器形や文様構成が発わるようになった。
- 6 A区南側の中洲状微高地状には縄文時代後期後葉の瘤付土器2段階の竪穴住居が6棟確認されている。これまで瘤付土器第2段階の竪穴住居跡の検出例はほとんど確認できなかつたが、本遺跡での調査例により、瘤付土器第2段階が編年的に古新の2期に分割されることが明らかとなつた。以後の土器編年における基準資料となるものである。
- 7 A区のS G 2以北からは縄文時代晚期最終末期にあたる大洞A式新段階若しくは大洞A'式古段階の土器が多量に出土している。遺構からの出土は少なかつたが、土器捨て場や包含層などから多量に出土し、しかも文様や器形が極めて齊一的で、単純遺跡と考えることができる。これまで北柳1遺跡などで単純地点が確認されているが、今回の砂子田遺跡の出土例は質・量ともに極めて優れたものである。これまで混乱していた縄文時代最終末期の土器編年研究の基準資料の一つとなる。
- 8 本遺跡出土の石匙の刃部の使用痕分析の結果、Bタイプの使用痕が検出された。これはイネ科の植物を切断する際につく使用痕である。本遺跡のような低湿地の遺跡ではカヤなどの植物を切断する必要があり、こうした使用痕がつくものと推測される。

## 報告書抄録

ふりがな	すなごだいせきだい2じ・だい3じはくつちょうきほうこくしょ
書名	砂子田遺跡第2次・第3次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第113集
編著者名	森谷昌央 佐竹圭一 黒坂広美
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すなごだいせき 砂子田遺跡	やまがたけんてんどうし 山形県天童市 おもろがたかずま 大字高齢 おおさまでこじ 字砂子田	6201	平成9年度 登録	38度 17分 46秒	140度 20分 59秒	第1次 19980818 ～ 19981209  第2次 19990419 ～ 19990716	7,400	東北中央 自動車道 (相馬～尾花沢線)

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代 中期、後期 中葉・後葉、 晩期、最終 末期	竪穴住居 性格不明遺構 土壤 遺物集中域	縄文土器 石器 石製品	縄文時代後期から晩期の 竪穴住居跡及び土器捨て 場から多量の土器が出 した。 (総出土箱数:300箱)
	弥生時代 (中期)	柱穴、土壤	弥生土器	

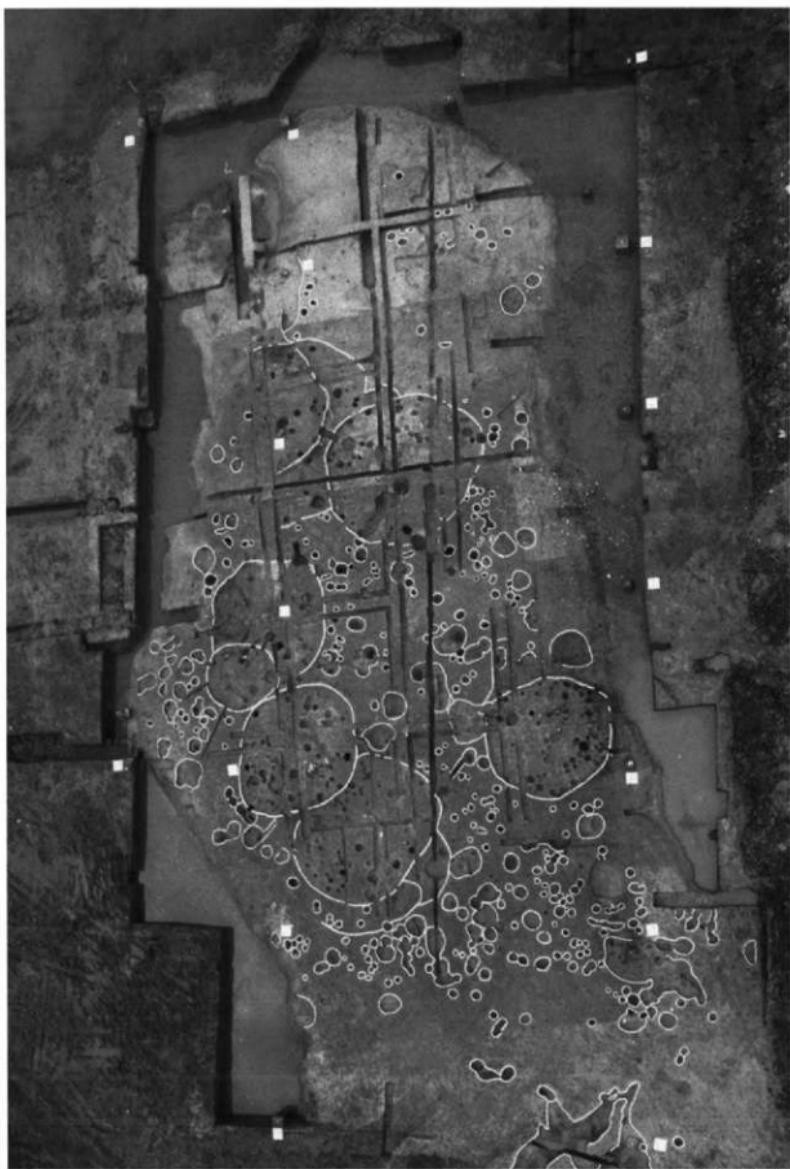


図 版



H10年度 遺跡全景(南から)

图版2



A区 中洲状微高地全景



H10年度 A区北全景(南から)



A区 南西包含層(西から)

図版4



H11年度 道路全景(南から)



A区 中洲状微高地 完掘状況(南東から)



S T 85-87(南から)



S T 85-87 遺物出土状況(南から)



S K 100 遺物出土状況(南から)



S K 100 完整状況(南から)



後期528 出土状況(南から)



S T 87全景(南から)



ST 3(南から)



ST 3 EK 1 RP431(後期)(東から)

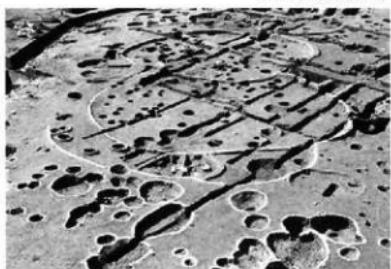
図版6



S T 731(北西から)



A区 後期 穹穴住居群(北西から)



S T 86-86 完掘状況(南から)



S T 86 RP 336 出土状況(南東から)



S K 90-91 完掘状況(南から)



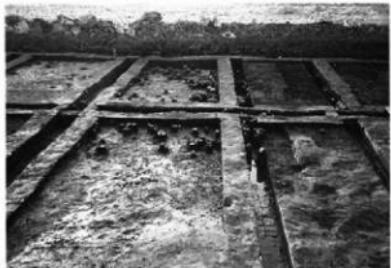
S T 88-89 全景(南から)



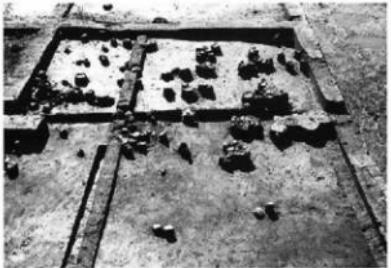
S T 1276 (E L1277) 石組炉出土(東から)



A区 後期土器捨て場(東から)



A区 A14 遺物集中域(西から)



A区 C12-C13 遺物出土状況(北から)



北口トレンチ土層断面(北東から)



中央Bトレンチ出土状況(南から)



中央Fトレンチ 遺物出土状況(南から)



中央Cトレンチ全景(南から)



中央Cトレンチ全景(南から)



中央H10(南から)

図版8



中央トレンチ遺物出土状況(南から)



A区 河跡、土層断面(南東から)



晩期304遺物出土状況(南西から)



C13④ 晩期197出土状況(南西から)



A区 462遺物出土状況(南西から)



晩期462遺物出土状況(南西から)



(晩期199)出土状況(南西から)



C12① RP250(晩期112)出土状況(南から)



晩期391出土状況(南から)



晩期207出土状況(南から)



晩期242出土状況(南から)



南西包含層(B 3)土層断面(南から)



南西包含層(B 3)遺物出土状況(東から)



南西包含層(C 4 及び S G)土層断面(南から)



南西包含層(C 3)土層断面



南西包含層(B 5)土層断面(南東から)

図版10



南西包含層510出土状況(南から)



後期795出土状況(東から)



南西包含層(A 3)遺物出土状況



B区東側道部分 完壠状況(北から)



B区東側道部分 遺構検出



S K 237半載状況(東から)



B区東 S K 280 半載状況(南から)



B区東 S K 280後期529出土状況(西から)



SP 236 晩期127出土状況(南から)



SK 1214 後期290.306出土状況(西から)



A区北側 SK 101遺物出土状況



SK 1214 遺物出土状況(西から)



SK 1218 半載状況(南から)



SK 1218 後期1121出土状況(南から)



RP 532(土製品13)出土状況(南から)



RP 549 石棒(石製品217)出土状況

図版12



B区西側道部分 SG全景(北から)



B区西 SG壳烟状况(北から)



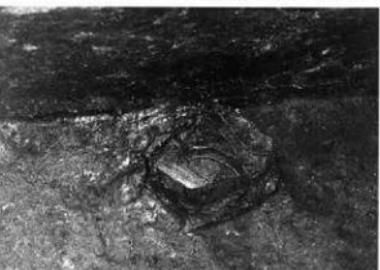
B区 SG 土層断面(南から)



B区 SG 土層断面(南から)



SK142(弥生5)半截状況(南から)



A区 SK142(弥生5)出土状況(南から)



B区中期1 出土状況(東から)



R P 388(後期1186)出土状況



E U 後期929半截状況(南から)



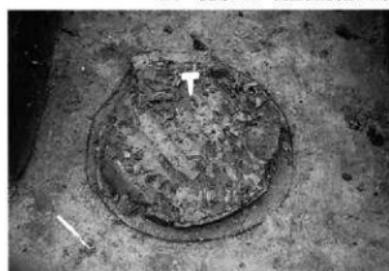
E U 後期823半截状況(南から)



E U 後期944 出土状況(北から)



E U 後期941出土状況(南から)



E U 後期833検出状況(西から)



E U 後期833半截状況(西から)



E U 後期833半截状況(西から)



E U 後期833完堀状況(西から)

図版14





EU 後期233半截状況



EU 後期233完堀状況



EU 後期771半截状況(北から)



EU 後期771半截状況(北から)



EU 後期771完堀状況(北から)



A区 SG 土層断面(北東から)



A区 SG 土層断面(北から)



A区北側 SD等 完堀状況(南から)

図版16



中期1



中期2



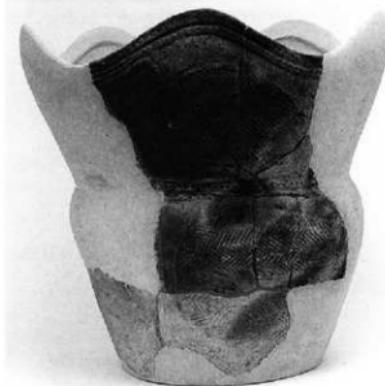
後期1



後期3



後期60



後期164



後期191



後期229

圖版18



後期196



後期231



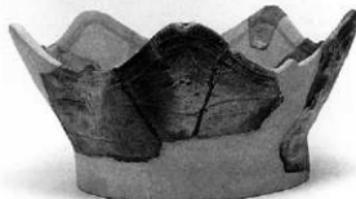
後期237



後期252



後期256



後期297



後期230



後期232



後期233



後期236

図版20



後期239

後期319



後期344

後期374



後期413



後期457



後期461



後期462

圖版22



後期477



後期523



後期525



後期527



後期529



後期592



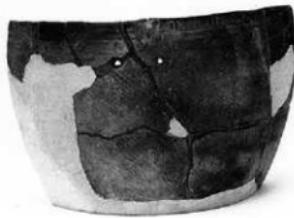
後期684



後期685



後期686



後期709

図版24



後期528

後期702



後期703

後期712



後期713

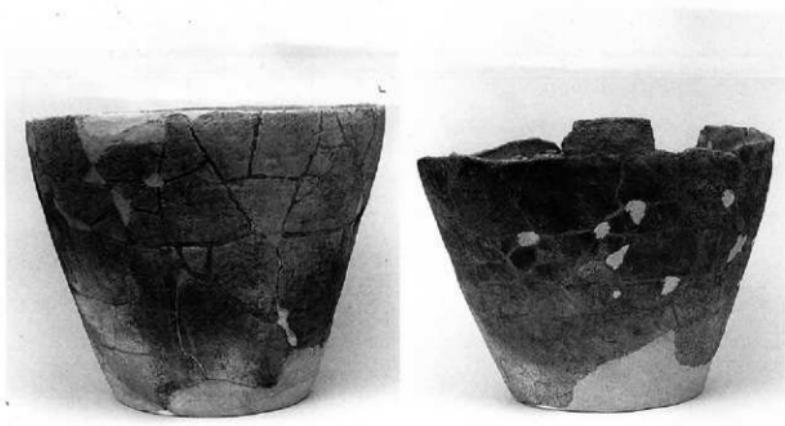
後期721



後期749

後期750

圖版26



後期771

後期791



後期823

後期828



後期850



後期853



後期868



後期944

图版28



後期820



後期933



後期937



後期942



後期957



後期1092



後期947



後期954



後期1109



後期1184

図版30



後期2



後期1028



後期1054 a



後期1054 b



後期1042



後期935



後期1104



後期1062



後期1103



後期1106



後期1107



後期1183



後期1186 a



後期1186 b

図版32



後期1121 a



後期1121 b



後期1185 a



後期1185 b



後期1090 a



後期1090 b



後期1181 a



後期1181 b

圖版34



後期1187 a



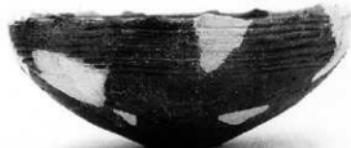
後期1187 a



後期1187 c



晚期6



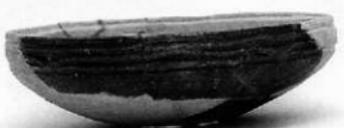
晚期45



晚期1



晚期2



晚期3



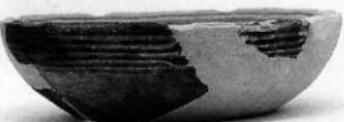
晚期5



晚期7



晚期46



晚期47



晚期49

図版36



晩期50



晩期112



晩期122



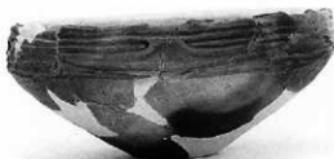
晩期124



晩期126



晩期127



晩期128



晩期129



晚期51



晚期134



晚期141



晚期165



晚期166



晚期167

图版38



晚期130



晚期160



晚期168



晚期172



晚期197



晚期199



晚期200



晚期201



晚期169



晚期171



晚期192



晚期193



晚期194



晚期289

图版40



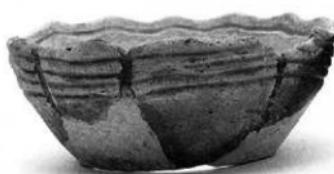
晚期203



晚期204



晚期205



晚期206



晚期207



晚期208



晚期209



晚期228



晚期229 a



晚期229 b



晚期230



晚期231



晚期233 a



晚期233 b



晚期232



晚期234

图版42



晚期235



晚期236



晚期237



晚期238



晚期239



晚期240



晚期242



晚期307



晚期290



晚期291



晚期292



晚期299



晚期300



晚期301

图版44



晚期302



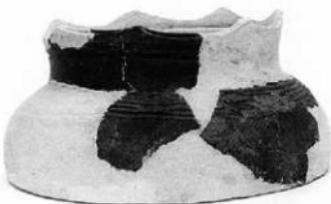
晚期303



晚期304a



晚期304b



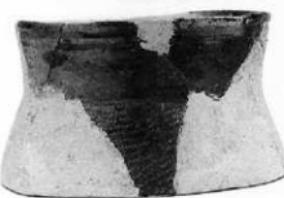
晚期306



晚期309



晚期310



晚期371



晚期385



晚期386



晚期391



晚期393

図版46



晩期406



晩期412



晩期413



晩期418



晩期419



晩期423



晚期422a



晚期422b



晚期466

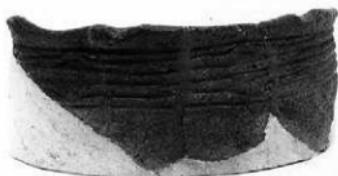


晚期467

図版48



晩期424



晩期425



晩期462



晩期463



晩期464



晩期469



晚期470



晚期471



晚期539



晚期540



晚期567



晚期626



晚期535



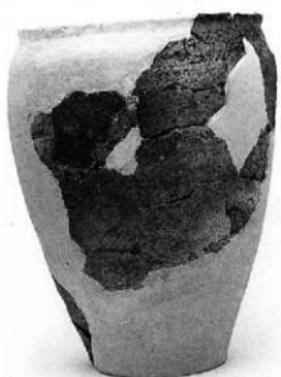
晚期537



晚期538



晚期541

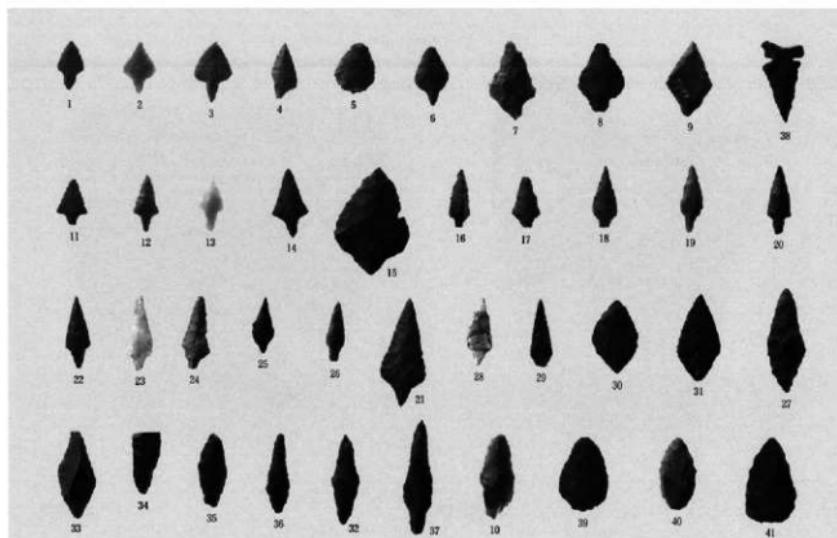


晚期566

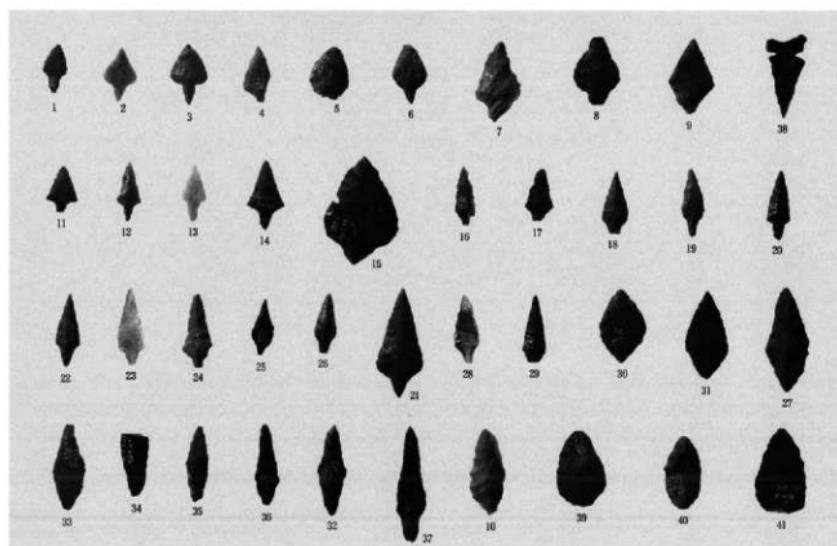


晚期569

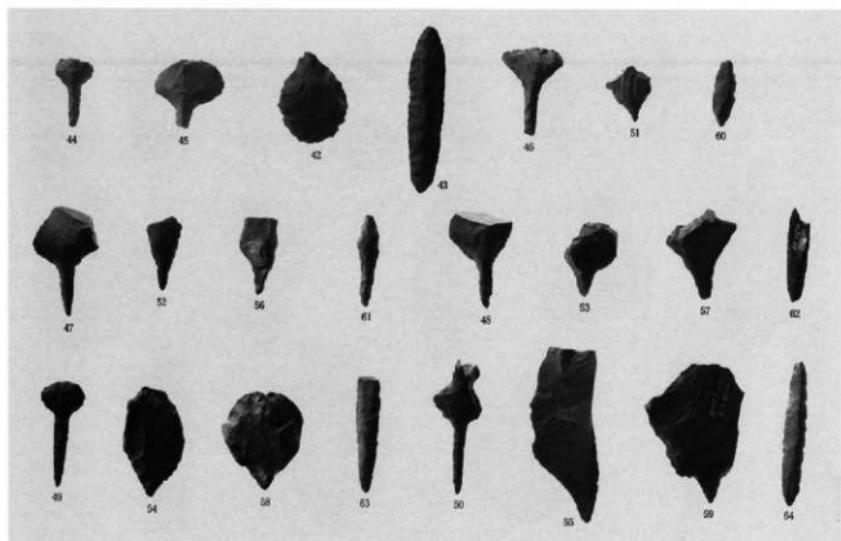
図版52



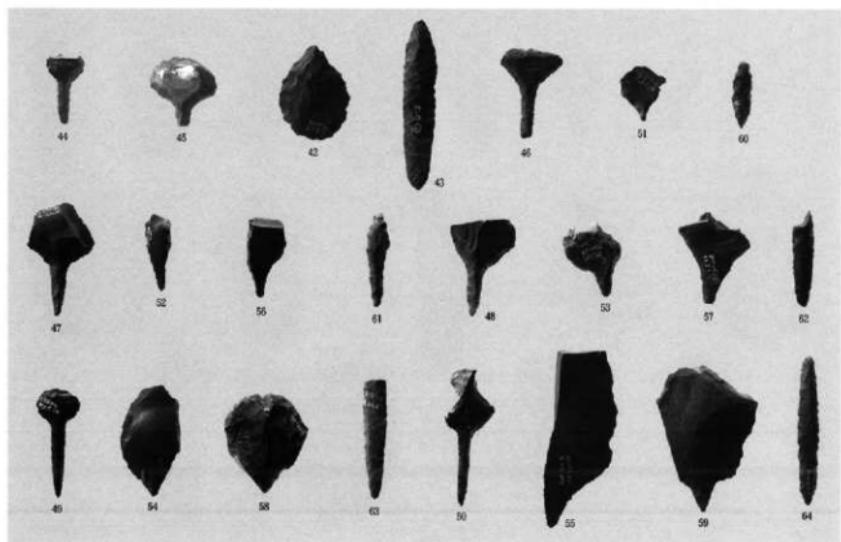
石器



石器（裏）

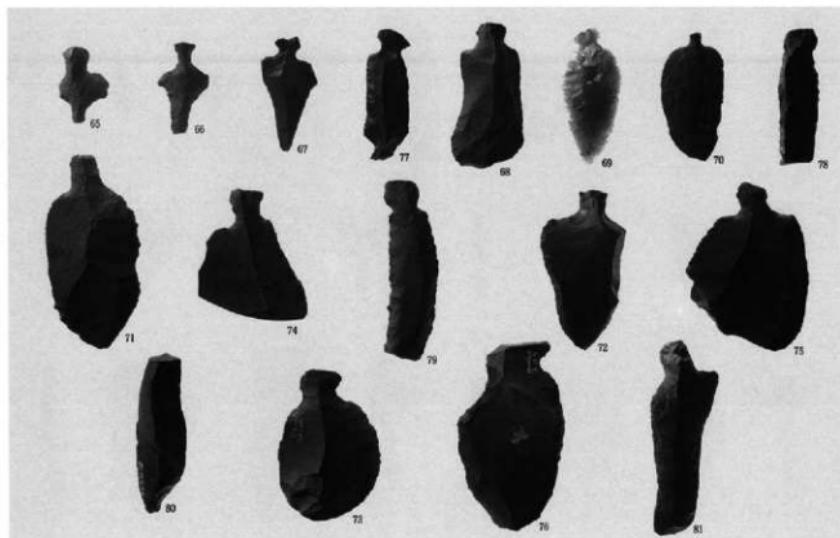


石錐

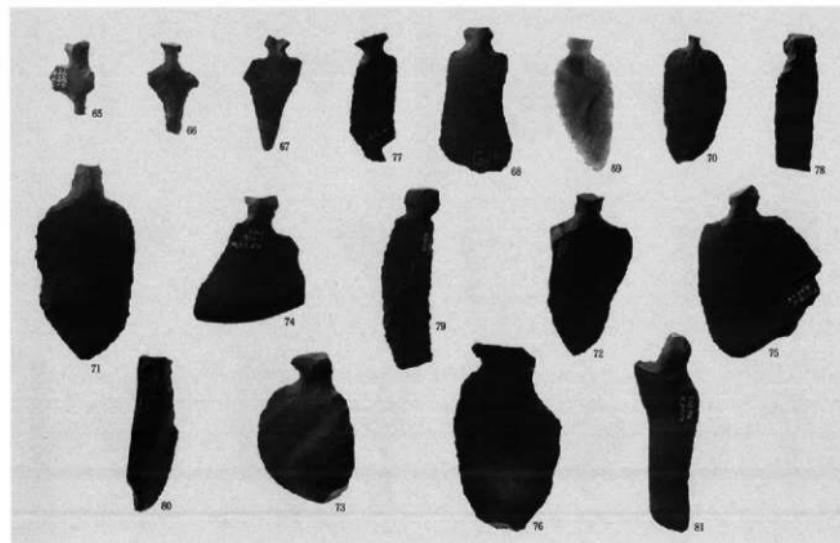


石錐（裏）

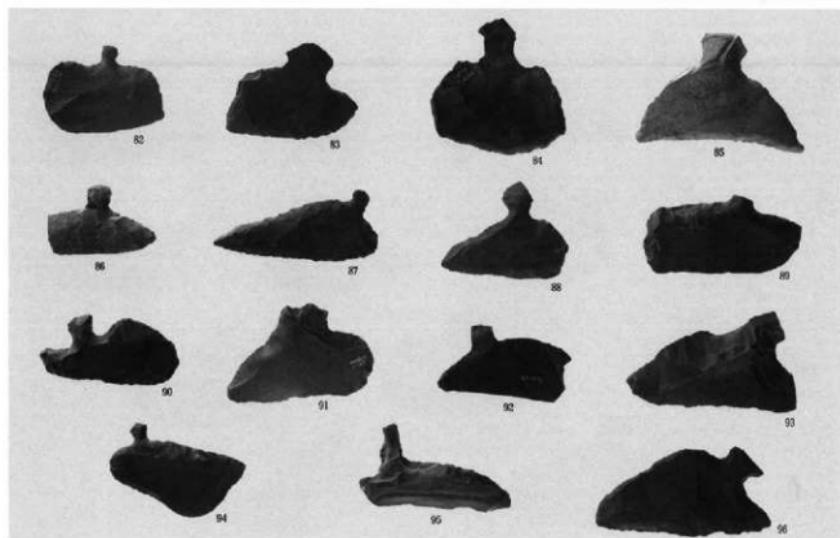
図版54



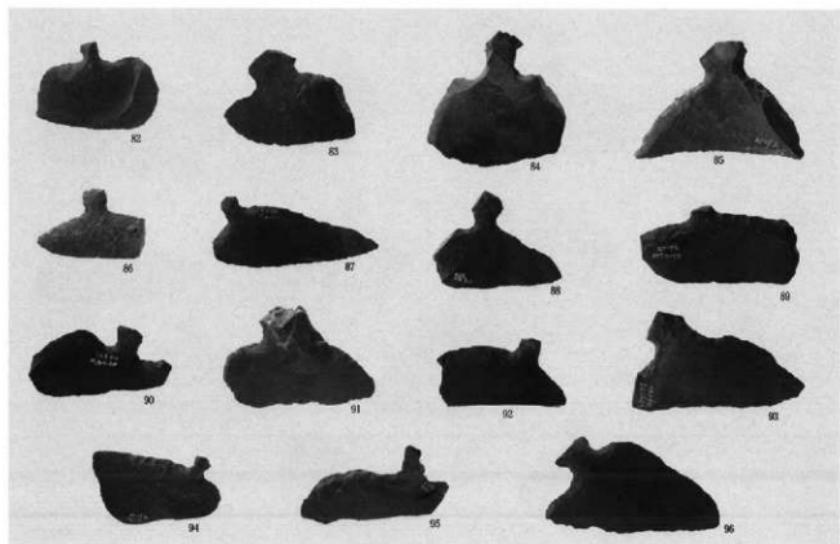
縦形石匙



縦形石匙（裏）

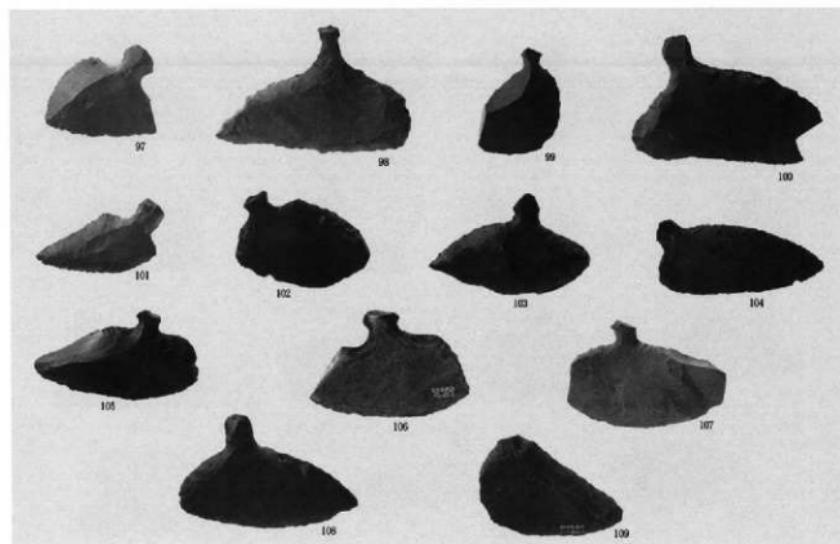


横形石匙 1

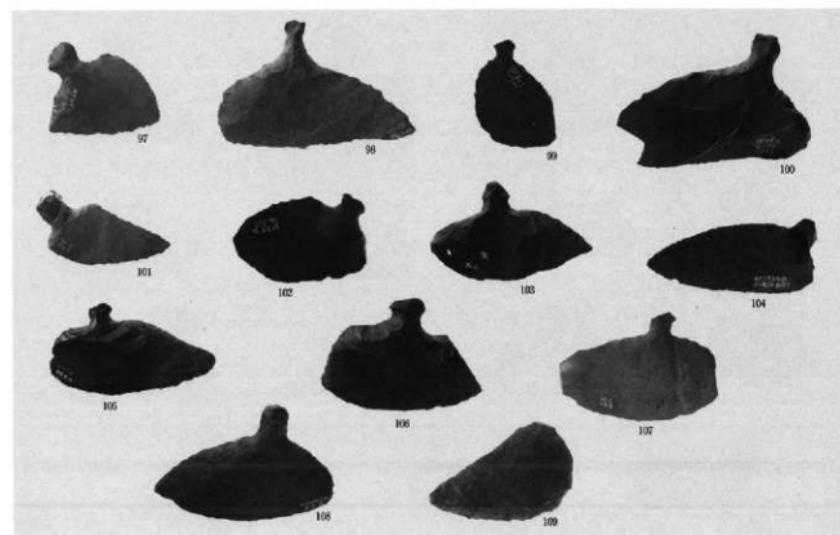


横形石匙 1 (裏)

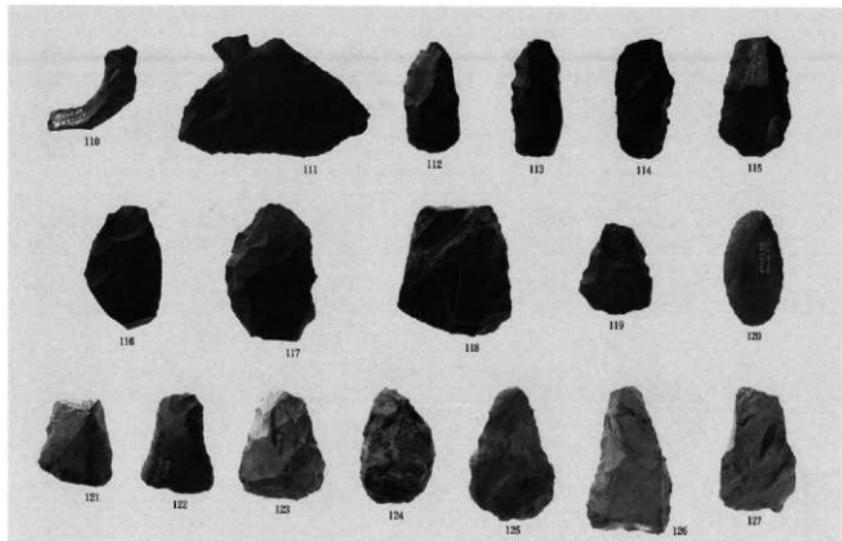
图版56



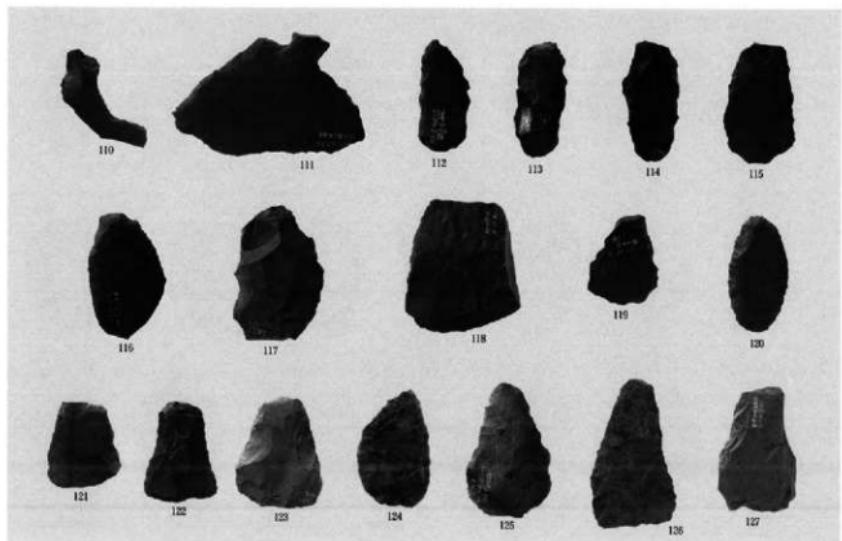
横形石匙 2



横形石匙 2 (裏)

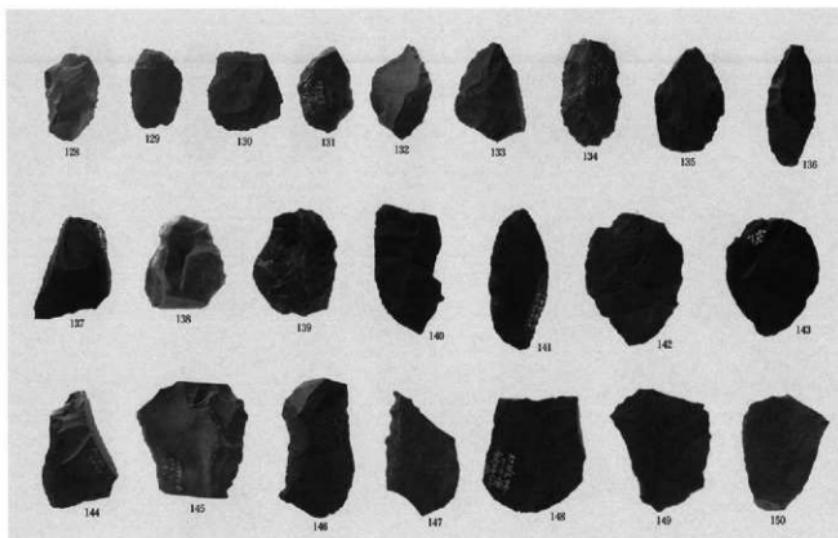


石器

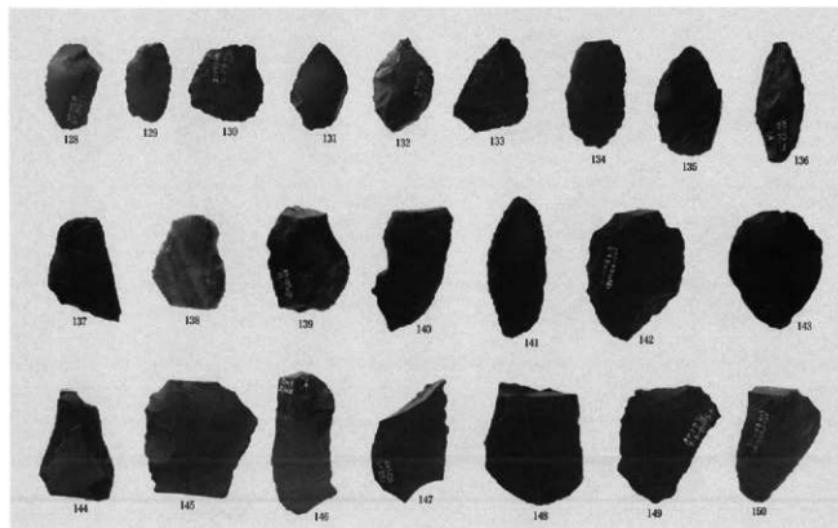


石器 (裏)

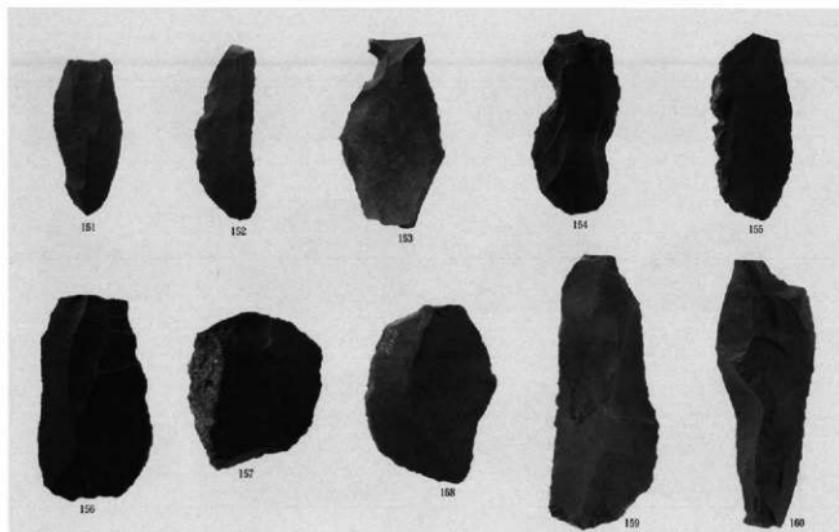
图版58



削器 1



削器 1 (裏)

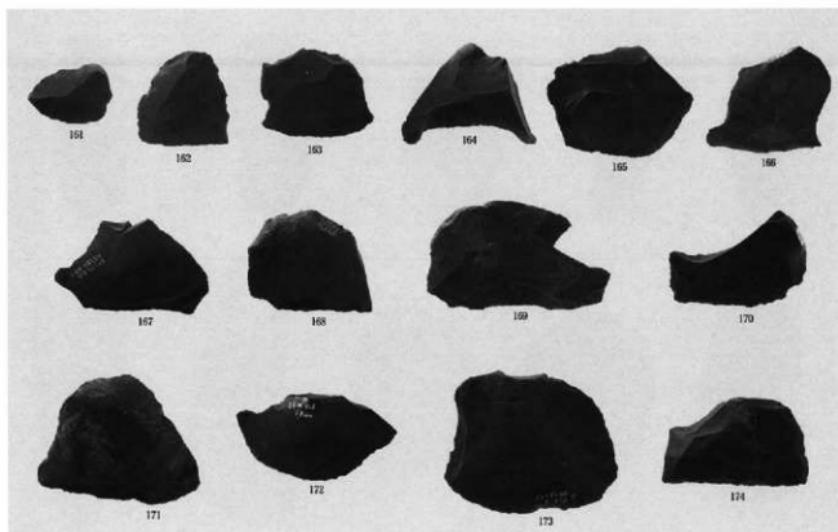


削器 2

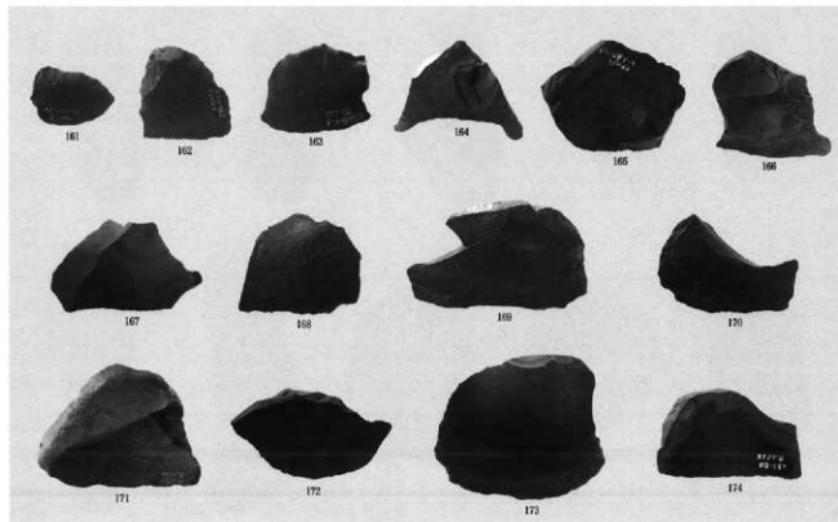


削器 2 (裏)

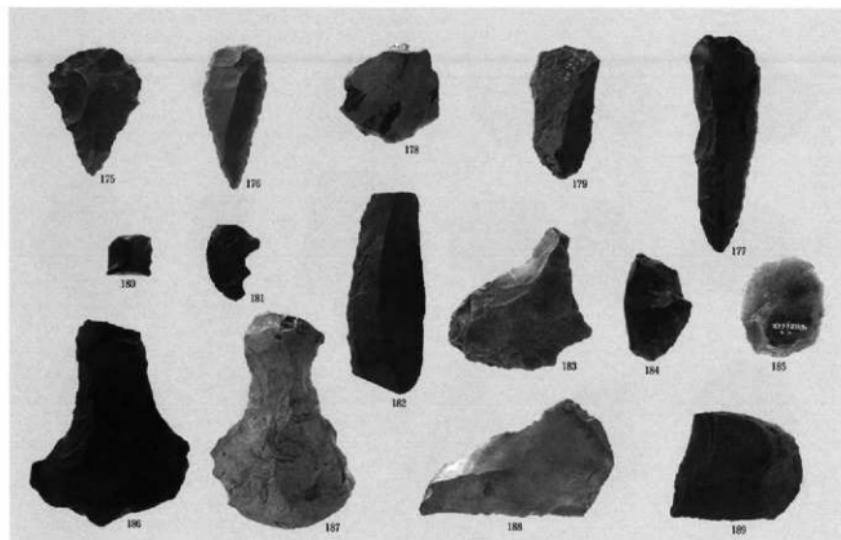
図版60



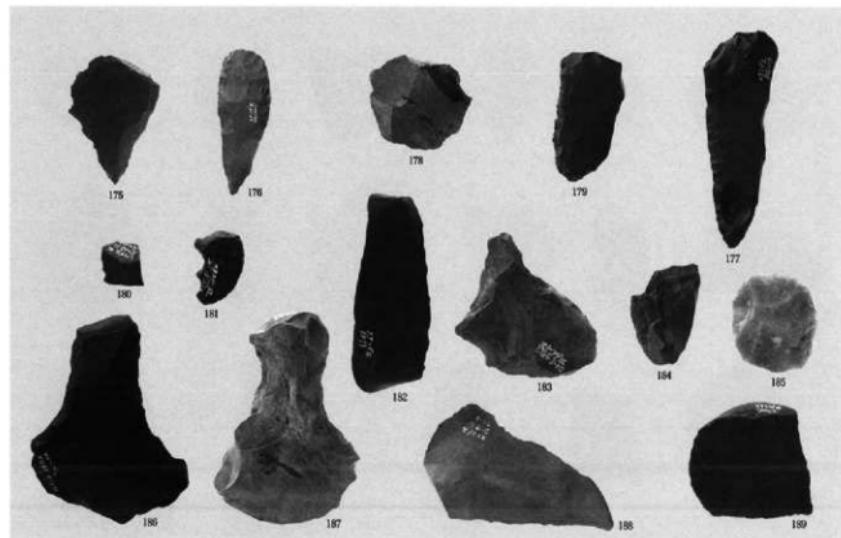
削器 3



削器 3 (裏)

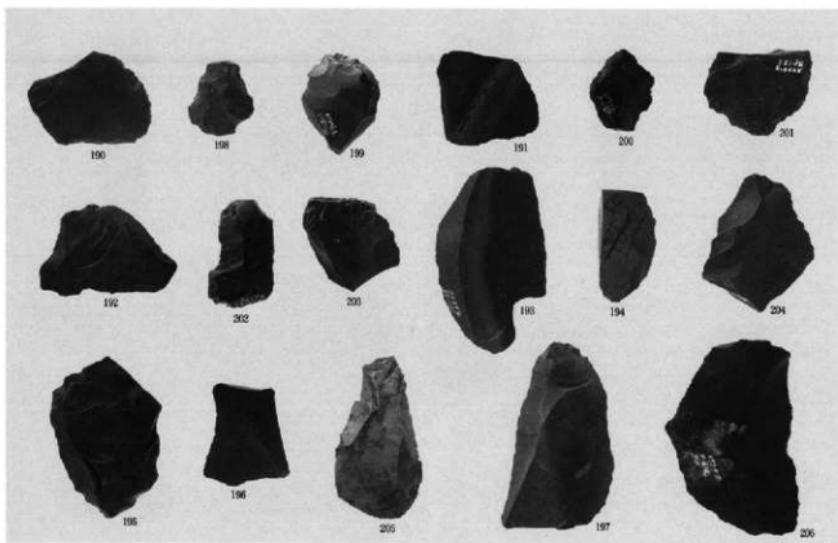


削器・搔器・打製石斧他



削器・搔器・打製石斧他（裏）

図版62



使用痕剥片



使用痕剥片（裏）

付 編

# 砂子田遺跡・石匙の使用痕分析

株式会社アルカ・池谷勝典

## はじめに

砂子田遺跡から出土した石匙10点について高倍率の使用痕分析を行った。今回の分析資料は、縄文時代後期に所属する石器である。これらの石器がいったいどのような対象物にどのような使い方をしていたのか、使用痕分析から明らかにすることが今回の目的である。

## 観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察を行った。観察倍率は、450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で從来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄を行い、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定を行った。使用痕光沢分類は東北大学の分類基準によっている（梶原・阿子島1981、阿子島1989）。

## 分析資料について

### 資料No. 72（第1図）

石材は珪質頁岩である。石器は縦長剥片を素材として打面側に摘みを作出している。摘み部にはタール状の付着物が帶状にみられる。刃部は左側辺を押圧剥離で整形して作られている。その押圧剥離は背面側に施され、刃部は片刃状になる。右側辺には加工は見られない。使用痕については、背面側の刃部に微細剥離が顕著に観察される。主要剥離面側の刃部には肉眼で光沢が観察される。高倍率の使用痕観察では、Aタイプ（写真2）とBタイプの使用痕光沢が観察される（写真1）。光沢の形成方向と光沢上にみられる線状痕の方向は、ほぼ刃部に平行するものである。使用痕光沢から推定される被加工物は、イネ科植物あるいは木である。石器の操作方法は、切断あるいは鋸引きである。

### 資料No. 74（第1図）

石材は珪質頁岩である。石器は縦長剥片を素材として打面側に摘みを作出している。刃部は右側辺を押圧剥離で整形し、その押圧剥離は背面側にだけ施されているため片刃状である。左側辺には加工はみられない。使用痕については、刃部の背面側に微細剥離が顕著にみられる。主要剥離面側の刃部には、肉眼でも観察できる光沢がみられる。高倍率の使用痕観察では、右側辺の刃部にBタイプの使用痕光沢が観察される（写真1、2）。光沢の形成方向と光沢上にみられる線状痕の方向は、ほぼ刃部に平行するものである。使用痕光沢から推定される被加工

物は、イネ科植物あるいは木である。石器の操作方法は、切断あるいは鋸引きである。また、左側辺には、右側辺とは違う使用痕光沢が観察され、おそらくDタイプの使用痕光沢である（写真3）。推定される被加工物は、骨あるいは鹿角である。線状痕の方向は、辺に対してほぼ直交するものである。以上、この石器には二つの辺にそれぞれ異なる使用痕光沢、線状痕の方向と光沢形成の方向が観察される。

#### 資料No. 68（第2図）

石材は珪質頁岩である。石器は縦長剥片を素材として打面側に摘みを作出している。摘み部にはわずかにタール状の付着物が残存している。左側辺は押圧剥離で整形され、その押圧剥離は主要剥離面側にだけ施されている。左側辺には加工はみられない。使用痕については、両側辺に微細剥離がわずかにみられる。高倍率の使用痕観察では、両側辺の縁辺に微弱な光沢が観察される（写真1、2）。写真3は、側辺からやや奥にはいったところを観察したもので、光沢は見られない。この微弱な光沢は、両側辺の縁辺に沿って観察されるため、使用痕光沢の可能性が高いが、光沢が未発達のため被加工物の推定はできない。

#### 資料No. 96（第2図）

石材は珪質頁岩である。石器は縦長剥片を素材として打面側に摘み部を作出している。刃部は、素材剥片の右側辺に平坦な押圧剥離で整形される。左側辺は、右側辺とは異なり急角度の細かな押圧剥離で整形される。刃部の裏面側には、肉眼でも光沢が観察される（写真1、2、3）。高倍率の使用痕観察では、裏面側の光沢部にBタイプの使用痕光沢が観察される。Bタイプの使用痕光沢は、対象物がイネ科植物や木の場合に特徴的に見られる使用痕光沢である。また、光沢の分布は主要剥離面側の刃部を主体に石器の内部まで広がっているのが特徴である。線状痕や光沢の形成方向は、刃部にはほぼ平行するものである。このような光沢の分布と線状痕の方向からイネ科植物の切断に用いられた可能性が高いと考えられる。背面側の刃部にはほとんど光沢が観察されないため、刃部再生による結果ではないかと考えられる。

#### 資料No. 82（第3図）

石材は、珪質頁岩である。石器は、横長剥片を素材として打面側に摘みを作出している。加工は、摘み部を作出するのみで刃部である素材末端辺には加工は認められない。使用痕については、刃部に微細剥離が見られ、主要剥離面側にだけ顕著に見られる。高倍率の使用痕観察では、刃部の両面にCタイプに非常に近似する使用痕が観察される。Cタイプの使用痕光沢は、主に骨や鹿角などの鋸引き作業に用いられたときに特徴的に見られる光沢タイプである。本資料も線状痕は刃部にはほぼ平行してみられ、刃部の表裏に観察されることから、操作方法は鋸引きの可能性が高いと考えられる。しかしながら、刃部の微細剥離の方向は一方向であることから、この微細剥離は使用痕ではなく加工の可能性も考えられる。

#### 資料100（第3図）

石材は珪質頁岩である。石器は横長剥片を素材として打面側に摘みを作出している。素材剥片の末端辺には主要剥離面側に押圧剥離が施され刃部が形成されている。そのために刃部は片刃状になっている。使用痕については、刃部の押圧剥離の部分に微細剥離がみられ、背面側の刃部には極わずかに微細剥離が見られるだけである。しかし、背面側の刃部には肉眼でも光沢が観察される。高倍率の使用痕観察では、刃部にD2タイプと考えられる使用痕光沢がみられる（写真1、2）。D2タイプの使用痕光沢から推定される被加工物は、骨あるいは鹿角である。写真2は、刃部にはほぼ平行する線状痕も観察され。石器の操作方法は鋸引きか削りが考えられる。また写真3は、摘み部の観察であるがE2タイプの使用痕光沢が観察される。E2タイプの使用痕光沢から推定される被加工物は乾燥皮であり、摘み部に観察されることから皮製品などを摘み部に装着していた可能性がある。

#### 資料No. 91（第4図）

石材は珪質頁岩である。石器は横長剥片を素材として打面側に摘みを作出している。加工は摘み部を作出するのみで、刃部である素材末端辺には加工は認められない。使用痕については、刃部に微細剥離がみられ、主要剥離面側に顕著に見られる。また、刃部には肉眼でも光沢が観察される。高倍率の使用痕観察では、Bタイプの使用痕光沢が観察される（写真1、2、3）。Bタイプの使用痕光沢から推定される被加工物は、イネ科植物あるいは木である。石器の操作方法については、明瞭な線状痕は観察されないが、使用痕光沢の形成方向が刃部にはほぼ平行するものであることから鋸引き、削り、切断が考えられる。

#### 資料No. 89（第4図）

石材は珪質頁岩である。石器は縦長剥片を素材として素材剥片の左側辺に摘みを作出している。刃部は素材剥片の右側辺に平坦な押圧剥離で整形される。刃部には、主要剥離面側に肉眼でも観察できる光沢が見られる。高倍率の使用痕観察では、Bタイプが見られる。Bタイプの光沢から推定される被加工物はイネ科植物か木である。その光沢の分布は刃部を主体に石器内部の表裏に広がっている。石器の操作方法は、このような光沢分布の広がり方からイネ科植物の切断あるいは摘み取りに用いられた可能性が高い。

#### 資料No. 106（第5図）

石材は珪質頁岩である。石器は横長剥片を素材として打面側に摘みを作出している。刃部は素材剥片の末端辺に押圧剥離で整形されている。剥離は背面側に施され片刃状の刃部になる。刃部には表裏に微細剥離が観察される。高倍率の使用痕観察では、Bタイプの使用痕光沢がみられる。Bタイプの使用痕光沢から推定される被加工物は、イネ科植物か木である。使用痕光沢の分布は、主要剥離面側の刃部から内部にかけて広がっており、資料69と同じ状況であるが背面側にはほとんどみられない。石器の操作方法は、光沢分布から切断あるいは摘み取りが考

えられる。

#### 資料No. 84 (第5図)

石材は珪質頁岩である。石器は横長剥片を素材として打面側に摘みを作らず打面から右側にはずれた側辺に作出している。刃部は、素材剥片の末端辺から側辺にかけて背面側に急角度の押圧剥離で整形されている。刃部には背面側にのみ微細剥離が顕著に見られる。高倍率の使用痕観察では、主要剥離面側の刃部縁辺にE1タイプの使用痕光沢が観察される(写真1、3)。E1タイプの使用痕光沢から推定される被加工物は、生皮である。石器の操作方法は、線状痕は明瞭ではないが微細剥離の状態と使用痕光沢の形成方向から搔き取りが考えられる。

#### 総合所見

石匙の中には、形態的に摘みの位置と刃部の位置で大きく縦形石匙と横形石匙に分けることができる。

縦形石匙は、摘みの対称軸に対して石器の対称軸がほぼ平行するものである。それに対して横形石匙は、摘みの対称軸が石器の対称軸にほぼ直交するものである。今回の分析資料では、大半が横形石匙の範疇に入るものである。また、使用痕の特徴としては、Bタイプが見られる石匙が多く、その線状痕と光沢形成の方向がほぼ刃部に平行すること、使用痕剥離と考えられる微細剥離が刃部のどちらか一方の面に偏ってみられること、光沢分布が刃部から石器内部に広がっているものが多く、石器の操作方法が切断あるいは摘み取りなどが考えられることが挙げられる。また、資料86のようにEタイプの使用痕光沢がみられるものもあり、その石匙については刃部の形態(やや円刃)や加工方法(急角度の押圧剥離)などが他の石器と違っており、作り方、使い方の違いが一致しており当時の石器製作者の意図が読みとれる資料である。

以上のように、石器の平面形態、摘みの位置と刃部の位置、刃部形態など多様であるが使用痕光沢については、Bタイプを主体としてE1タイプ、D2タイプが観察され、ある程度限定されるようである。注目すべきはBタイプの使用痕光沢をもつ石匙の存在で、使用痕光沢の分布状況からイネ科植物の切断あるいは摘み取り使用された可能性が高いもので、線状痕と光沢分布の特徴からどのような保持の仕方をしてどのような動作で対象物を扱っていたか検討が必要である。

今後は、分析資料数を増やし、作り方と使い方の共通点と相違点を定量的に分析することで砂子田遺跡の石匙の実態が明らかになるものと考えられる。

#### 参考文献

- 阿子島香 1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー-56 ニューサイエンス社  
梶原洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究-ボリッシュを中心とした機能推定の試みー」『考古学雑誌』67-1  
梶原洋 1982 「石匙の使用痕分析-仙台市三神峯遺跡出土資料を使って-」  
『考古学雑誌』68-2  
角張淳一 2000 「統・石器研究についての感想」『東京考古』18 東京考古講話会

## 使用痕光沢の特徴

	輝 度	度	度	平 滑 度	平 滑 度	き め	ま る さ	軽 度	高 低 差	連 接 度	そ の 他	指定される被加工物
光沢タイプ	外 部 コントラスト	内 部 コントラスト	薄	き め	ま る さ	内部まで一層	内部まで一層から塗り余量を 残す	一面おおいつくす	細められた繊状感、繊層状の凹み が残る	細められた繊状感、繊層状の凹み が残る	細められた繊状感、繊層状の凹み が残る	イキ料算本 (付)
A	きわめて明るい (状に残る)	強い (表面感 ある)	なめらか (状の光沢感)	なめらか (状の光沢感)	まるい	内部まで一層 から塗る	内部まで一層から塗り余量を 残す	ドーム状ハッチが運搬 係所まで良ぶののが 係所の凹部をのこして 係所に一層にが る	ドーム状ハッチが運搬 係所まで良ぶののが 係所の凹部をのこして 係所に一層にが る	ドーム状ハッチが運搬 係所まで良ぶののが 係所の凹部をのこして 係所に一層にが る	木、竹、イネ科本の形成 初期 (付)	
B	明るい	強い (ハッチ 状の光沢感)	なめらか (状の光沢感)	なめらか (状の光沢感)	広い	凹凸感、(そ いだよ)	広い	バッヂが繊状に運搬	バッヂとして先進せず はじめから繊状につな がる	バッヂが繊状に運搬	木づけ頭角 (付)	
C	やや明るい	やや明るい (相 状の光沢感)	なめらか (状の光沢感)	なめらか (状の光沢感)	いたよう	平用 (はり)	平用 (はり)	繊維性の高低がなくな る	繊維性の高低がなくな る	繊維性の高低がなくな る	骨、頭角 (付)	
D 1	明るい	弱い (一種)	なめらか (状)	なめらか (状)	いたよう	繊維が運搬される	繊維が運搬される	繊維に繊状に嵌い面が できる	繊維の繊状感、ヒットが多い	繊維の繊状感、ヒットが多い	骨、頭角、木 (付)	
D 2	明るい	弱い (平行滑 れ)	やや想い (状)	やや想い (状)	いたよう	繊状で抱い	繊状で抱い	繊維に繊状に嵌い面が できる	繊維の繊状感、ヒットが多い	繊維の繊状感、ヒットが多い	骨、頭角、木 (付)	
E 1	やや明るい	強い (小ハッ チ状)	みなもらか (状)	みなもらか (状)	やまとい	小ハッチ上 の	小ハッチはや い分布	繊維のみの状 況 (低所と高所) のまま現る	小ハッチが独立して してしまる	繊維のみの状 況 (低所と高所) のまま現る	皮 (付) [alcite-pol110]	
E 2	弱い	やや弱い (状)	こく強いて い	こく強いて い	広い	光沢感全体が 狭狭してまる	光沢感全体が 狭狭してまる	光沢感全体が 狭狭してまる	多様な繊状感が多い な (高所と低所) のまま現る	多様な繊状感が多い な (高所と低所) のまま現る	化粧頭角、骨、頭、肉、木 皮	
F 1	弱い	弱い	相 い	相 い	多様	角張つている	角張つている	原面の繊維をえぐ る	原面の繊維をえぐ る	原面の繊維をえぐ る	頭角をえぐる	各加工方法の構成初期、 皮、肉
F 2	きわめて弱い (弱)	弱い	弱い	弱い	多様	原面をえぐな い	原面をえぐな い	多様	未完成なハッチ	頭角をえがない	頭角をえがない	各加工方法の構成初期、 皮、肉

### 各項目の説明

細胞：明るさとは相対的なもので、光沢を放っている部分と未光澤部との差で定義される。

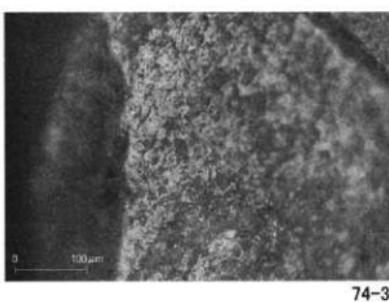
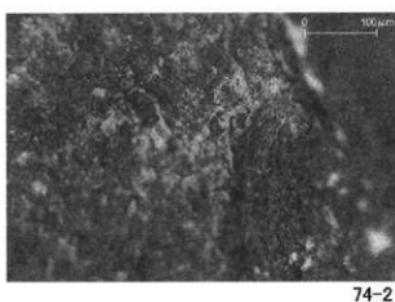
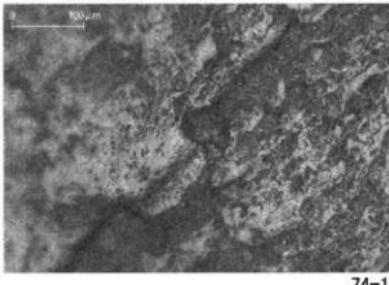
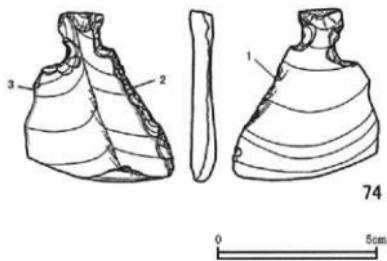
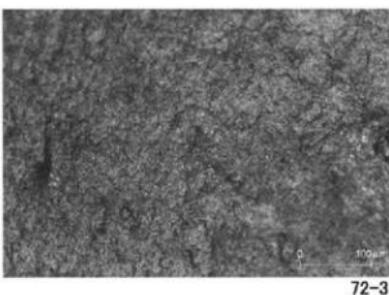
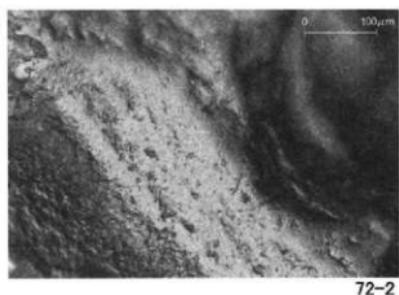
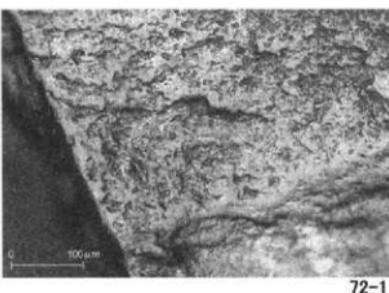
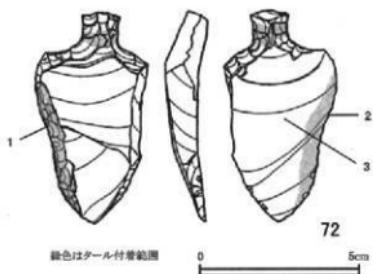
外層コントラスト：

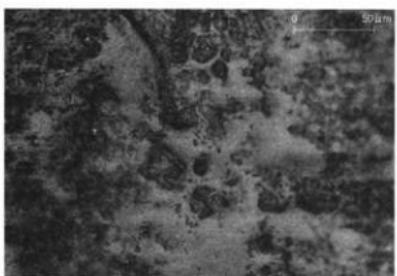
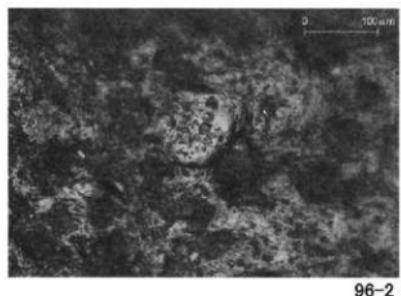
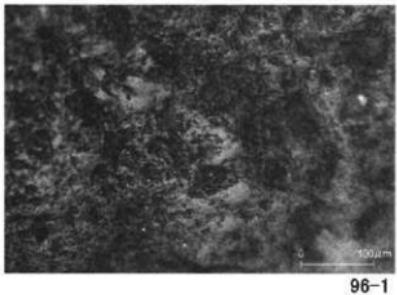
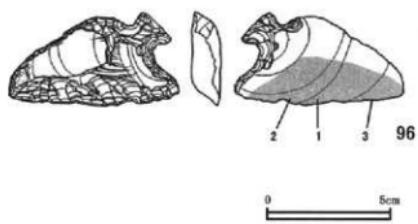
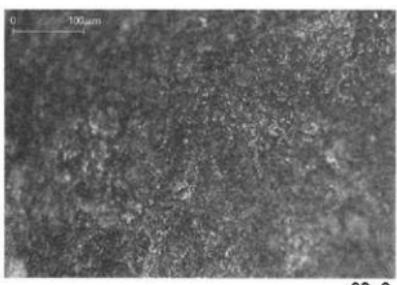
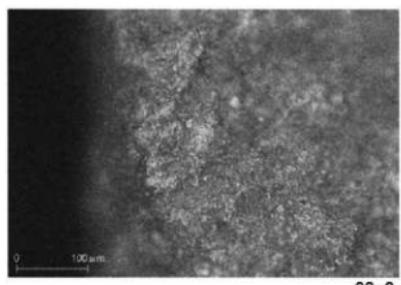
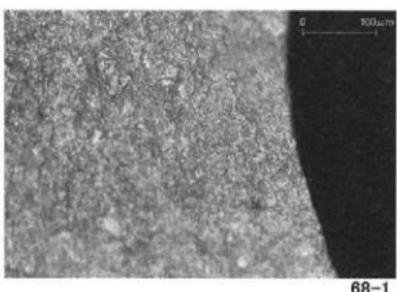
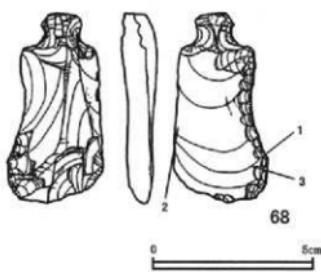
外層コントラスト：

内層コントラスト：

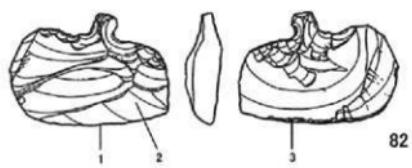
&lt;p

第1図

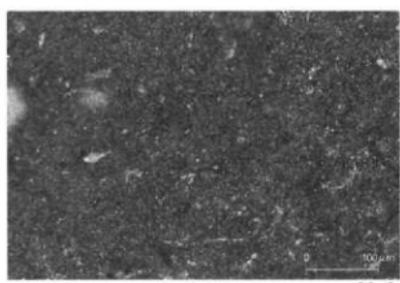




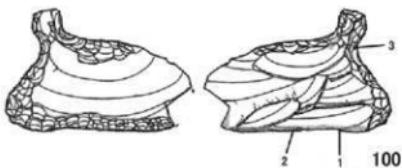
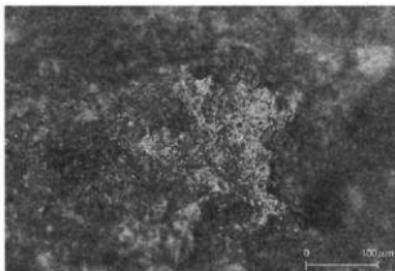
第3図



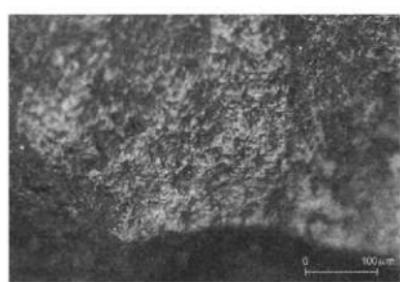
0 5cm



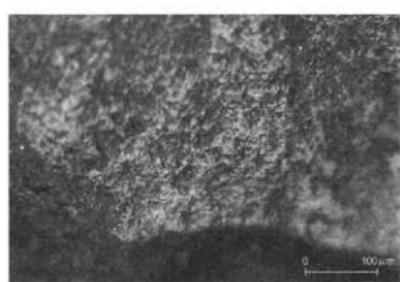
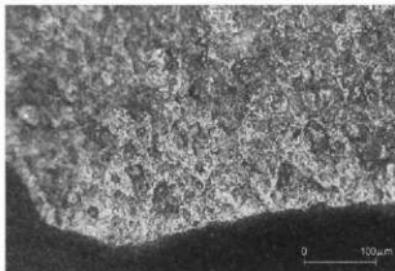
82-1



0 5cm



100-1



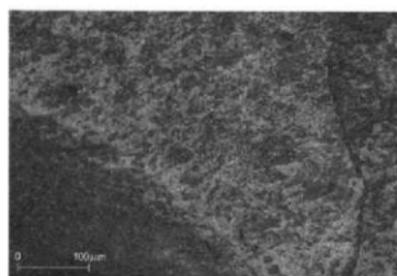
100-3

第4図



91

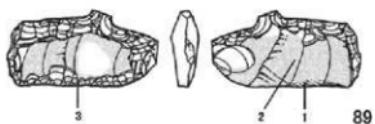
0 5cm



91-2

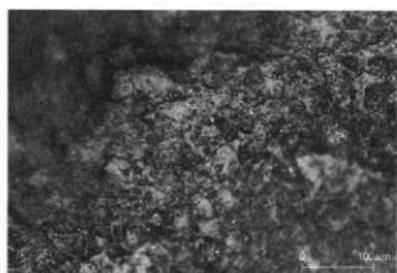


91-1

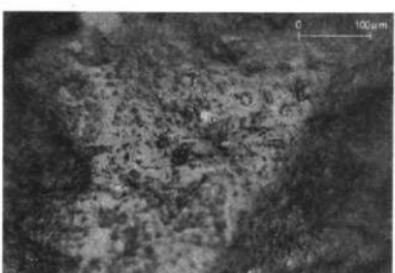


89

0 5cm

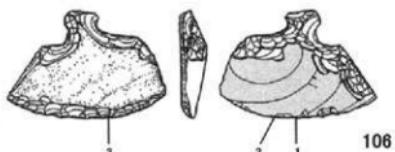


89-2

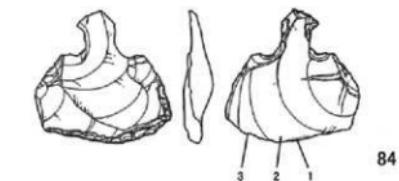
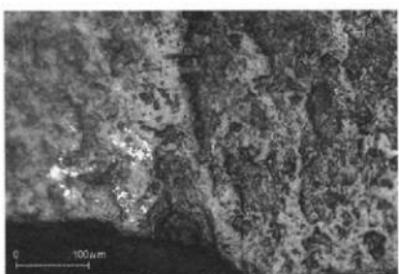


89-3

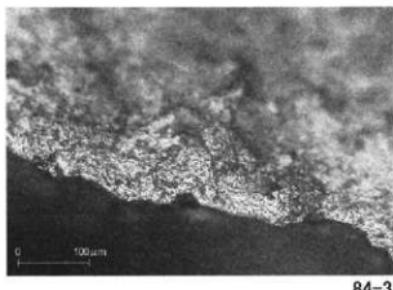
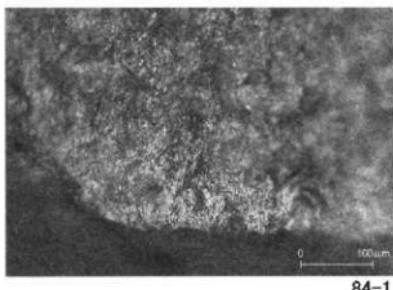
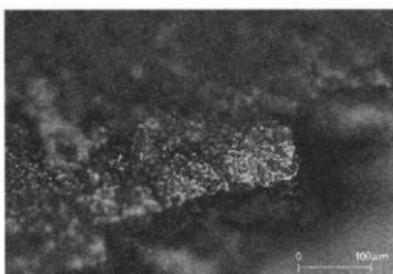
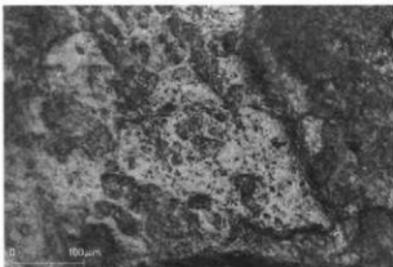
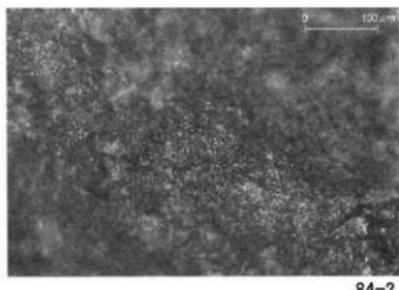
第5図



0 5cm



0 5cm



---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第113集

砂子田遺跡  
第2・3次発掘調査報告書

2003年3月28日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒990-3127

山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社

---